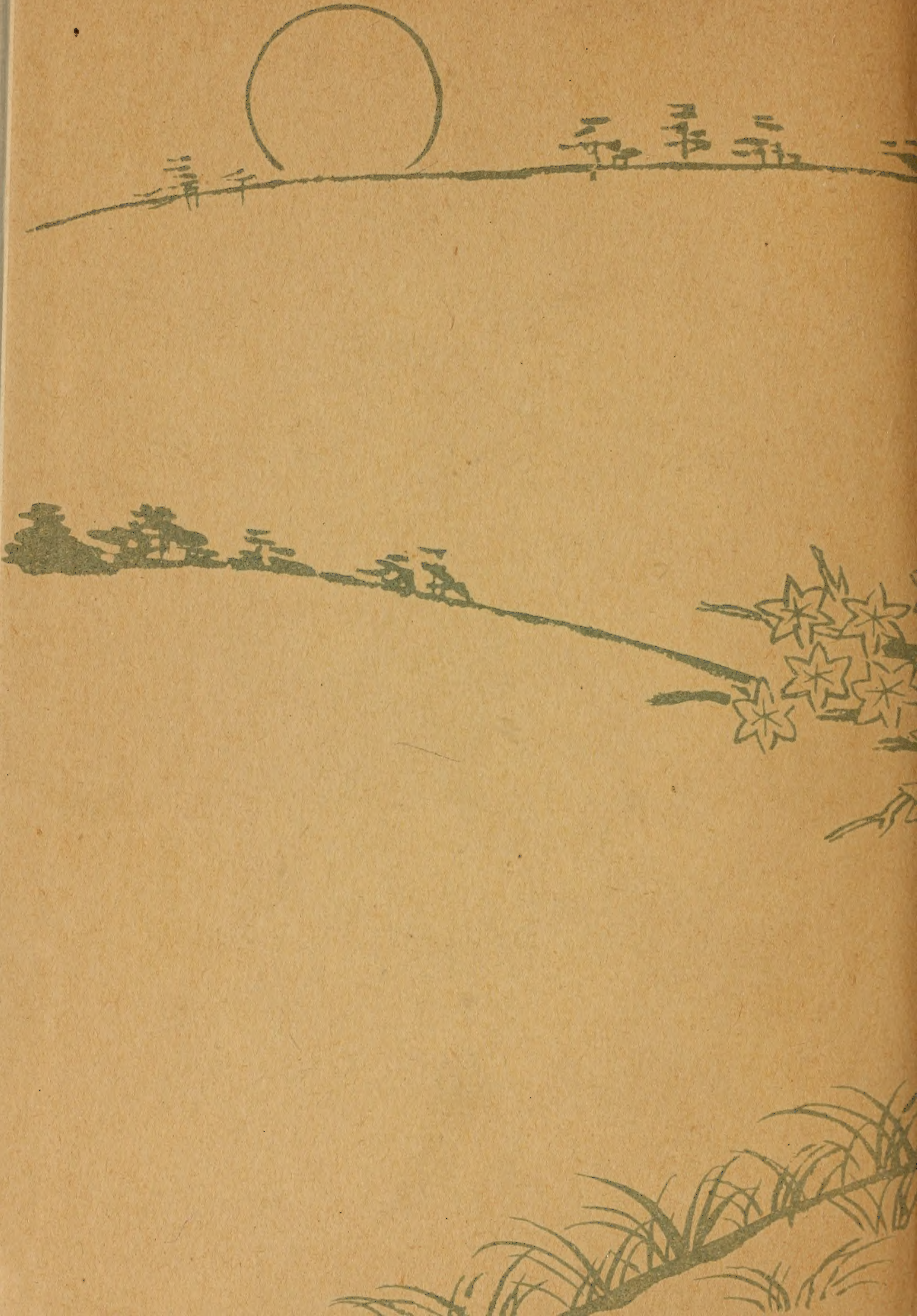

VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

Mr. E. Tamaki

生長の家聖典全集

生命の實相

第五巻

靈界と死後の救ひ

東京 光明思想普及會發行

爾のうちの神を生かせ——

貴方はもっと深切にならなければならない。
何事にももっと行屆いた愛を有たなければならない。
小さなことでも愼まねばならない。
貴方の性格上の缺點は
常にこれ位のことは善からうと
何でも好い加減の所で濟まして置く所にあるのだ。
ちよつとぐらゐどうでも好い。
ちよつとぐらゐ穢れても好い。
ちよつとぐらゐ皺がよつてゐても好い。
ちよつと位亂暴でも好い。
私は、此のちよつと位が嫌ひなのだ。

神は愛であるから、
神は深切であるから、
貴方がほんとに神を信ずるならば、
何をするにも、その仕事を愛しなければならぬ。
何をするにも、その仕事を深切にしなければならぬ。
行屆いた愛で仕事をするとき、
深切な心で仕事をするとき、
貴方の内にある神が生きて來る。
『ちよつとぐらゐどうでも好い。』
毎日貴方はかう云つて
貴方の内にある神を殺してゐはしないか。

——月刊「生長の家」卷頭の歌より——

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5
LIBRARY
1994
UNIVERSITY OF TORONTO

『生命の實相』第五巻目次

第一章　差別心より觀たる靈界の消息……三
靈魂及び靈界の研究法……三
靈魂の幻影化の實證の蒐集……三
靈媒による靈界通信の蒐集……六
靈視能力による靈界探檢……四
水晶體凝視法（クリスタルゲージング）……八
生命磁氣……一〇、一七、二三、三三
叩音、敲音、拍音（タップ又はラップ）……三
卓子傾斜現象（テーブルターニング）……九
無痛刺針現象……一三、一七
催眠術……一三、一三、一七
暗示感應（事實に反する）一四、一七九、一八〇
靈魂遊離による千里眼現象……一四、一八、一九—二三
純粹透視現象（其の差異）……一五
暗示不感應（事實に反する）……一七
催眠狀態と降靈狀態との區別……一八
靈界人（スピリット）の出現……二三
死體搜査現象……二六
靈能養成法（靈魂の訓練）……二八、四五
テーブル通信……三一
靈聽筆記現象……三一、三三
送靈法、鎭魂法の諸樣式……二四、三〇、三三、三六
複體・幽體……三八、四〇
靈魂の色澤……四〇、四一、一二八、一五一、一六八
靈魂の形態……四三、六八、一九五、二一〇
動物の幽體……四三
物理的心靈現象と高級靈……六四
靈覺養成と斷食及び減食の關係……五〇
天眼通（靈眼）……五一
天耳通（靈耳）……五一
直覺及び直感……五一
悟道と苦行……五一
天理敎祖大本敎祖等の神懸り……五一
靈界遊行……三六、三七、四二、四七、四九、五二、五三
神足通……五二
他心通……五二
善靈、惡靈、低級靈……五三
極樂淨土……五四
靈界の言語……五四
靈魂は雨に濡れるか……五六
靈媒力の養成……六三
物理的心靈現象と高級靈……六四
靈魂の服裝……六九
透視と精神感應との區別……七五
出生と受胎の神祕……七三
受胎の進行中の透視……七六
性交の心靈學的意義……七六
不完全な肉體發生の原因（先天的不具者等）……七八、一三一
前世の罪障消滅法……七九
受胎と生殖細胞の分裂……八〇、八一

雙生兒發生の原理……八二
胎兒の性別の決定……八二
流產、半產の原因……八四
動物の受胎……八七
死期(とその修正)……八八、一〇二、一三二
死の恐怖と靈魂の高下……八八
靈魂の再生(生れ更り)……八九、三九—一三七、一八五、一八六、一八九
死後の審判……九一
臨終の平和又は不安は死後生活の豫感を現はす……九四
死の自覺なき靈界移轉……九七、一九六
急激死の攝理……九八、一〇七
自殺……一〇六
普通死……一〇八
偶然の死……一一六
運命と業運の神祕……一〇三、一〇四、一〇五
靈界通信に現はれたる靈界の狀態の眞僞……一〇七
神……一〇九—一一三
苦痛の生命に於ける意義……一一三—一二〇
苦痛の身代り……一一四
罪障の消滅……一一六
招靈の現場、光景……一一六—一一七
靈魂の階級、品等……一二〇
若い靈魂……一二一
靈體の進化……九九、一七六、一七九
肉體の進化……一〇〇
肉體のカルチュアと靈魂の高下……一二一
藝術……一三三—一三七
地上の藝術……一三三
靈界の藝術……一三三、一三四
音樂……一三五—一三七
繪畫……一三七、一七四
靈魂の友情、親和……一三四、一四七、一五七
嬰兒死と靈魂……一二九
死產の意義……一二九
子宮內生活の意義……一三〇
早產兒の靈魂……一三五
不具出產の意義……一三一
個性の存續と價値……一三七
前生の記憶……一五九
靈魂と微生物……一六二
靈魂と疲勞と休息……一七〇
天人の五衰……一六五
善き靈的放射は靈魂の進化を助く……一五〇
靈魂の攝取する榮養素……一六五
地上の運命の修正……一六六、一六八、一六九、二一一
靈魂の創造數……一六七
個性の發揮と全體の調和……一七一
宗教の價値……一七三
佛教の價値……一七三
物理的心靈現象の說明……一七五—一七八
念寫現象の機構……一七五—一七七
心靈寫眞の機構……一七八
念傳(思想傳達、遠感現象、讀心術)……一七九、一八〇
靈媒的能力の正體……一八二
幽體遊離の難易と靈魂の高下……一八二
火葬と埋葬とが靈魂に及ぼす影響……一八五、一八六、一八八、一八九

進化と死體……一九〇
木乃伊（ミイラ）の靈魂……一九一
物質主義者の靈魂……一九三
靈界通信に錯誤の起る原因 一九八、一九九
歐洲大戰の豫言……二〇〇
靈界會議の光景……二一〇
靈魂の國籍……二一三
世の終りの豫言……二一七、二三三
豫言の誤る原因……二二六—二三一
將來の事件に關する靈示……二三三
政治的覇權は白人種より黃人種へ……二三七
人間靈魂の更生及進化の週期……二三八
第二章　平等心より觀たる靈界の消息……二三〇
靈魂と外國語……二四二、二四三
自働書記現象の光景……二五一
靈界の神祕……二六七
靈の超時空性……二六九
テーブル通信の光景……二三九、二六九、二七四、二八五
人間の地上の使命……二七六
人間の本質……二八一
智慧と神祕……二八三
生命の本源……二八三
神性……二八四
法悅と奇蹟……二八四
靈魂論者と無靈魂論者……二八五
心靈現象の起る目的……二八七
心靈現象の缺陷……二八九
靈媒現象の解說……二九一—二九六
恍惚狀態（トランス狀態）……二九二
靈言現象の機構……二九三
靈界通信の目的……二九五
靈媒が靈魂の思想を混信する……二九六
神懸りの音樂演奏……三〇七—三一六
使命のための死期の訂正……三二五
靈魂自身自己の死の刹那を語る　三三二
人間は神の子……三三七
惡の非實在……三三八
靈魂自身、自己の埋葬を語る……三三九
苦痛は非實在……三四一
第三章　個性生命の存續と其の物質化……三五〇
第四章　悟らぬ靈魂を救ふ道……三六三
第五章　幽明境を超ゆる念の感應……三九二
引導を渡す……三九二
彌陀の四十八願……三九三
絕對他力……三九四
至心信樂……三九五
臨終の一念……三九七
肉體の無意識と靈魂の無意識……四〇三
夢の現象……四〇五
念の世界が現實に映る……四〇九
まじなひ……四一三
物質無の說明……四一七
萬教歸一……四二八
目次及び索引（終）

生命の行方

LIBRARY
7 1996
UNIVERSITY OF TORONTO

第一章　差別心より觀たる靈界の消息

一

生命は何處より來り、何處へ往くかは、心靈現象から材料を得て研究することが出來る。一つは或人の死の瞬間に起つた精神交感現象又は幻影の現象や、生前に約束した事項を死後に於て果したと見える現象や、更に一層客觀的な現象としては心靈寫眞の現象や……を蒐集して、その各々の場合に於て充分な調査を行ひ、そこにあり得べき考へ違ひや、詐術等を除き去つてのち、純粹に現象を現象として何等の偏見なく肯定し、斯かる考へ違ひにも詐術にもあらざる純粹なる現象を數多く蒐積し、以つて現世以外の人間靈魂の生活を肯定せんとする方法である。此の方法は靈魂の死後存續を科學的に立證せんとする多くの心靈學者の採用せるところであるが、此れには證據の豐富と云ふことが有力なる立證の要素となるのである。例へばAの死の瞬間にAの幻影が友人Bのところに現れたと云ふ現象も、唯一たび、又は數たびかゝる現象が起つたと云ふだけでは、この現象は宇宙無限の現象中あり得る偶然の符合だと駁撃されても仕方がないであらう。また實際此の幻影がAの靈魂の物質化（Materialize）したものであると云ふ確證が或る理由で摑めたに

しても、類似の現象を數多くあげ得ない場合には、Aの靈魂の『死後存續』の理由をもつてB、C、D……等、さては人間全體の靈魂の『死後存續』を結論するための材料とはなり得ないのである。此の理由によつて最も豐富に實例を擧げたのは先年物故せる佛蘭西の天文學者にして又心靈研究家たるフラマリオン氏の三部論作『死と其の神祕』*である。

*第一部 "Death and its Mystery." 第二部 "At The Moment of Death." 第三部 "After Death."

此の著は、短かき相類似せる無數の材料を多數に繰返して、一定の結論に導き出すべく努力した浩瀚な大著であつて、研究者が天文學者だけに、事實を事實として公平に列記してゐるけれども、餘りに多數類似の事實を列記してあるので、本書にそのすべてを紹介することは不適當であり、實例が少なければ權威がないので、一部分の紹介では意義を成さない。で原著に興味のある人は原著を讀んで貰ふとして此處には人間の靈魂の死後存續は斯う云ふ科學的方法からも、現代では信ぜねばならない程度に立證されてゐると云ふことを附言して置くだけにする。

生命の行方の心靈學的の研究の第二の方法は、研究者自身が靈的能力を有して、自己の靈視（Clairvoyance）又は靈魂遊離の方法に依て『靈界』を探見する方法である。古くはスヱーデンボルグが此の方法によつて『靈界』を見てゐる。近くは、數年前まで生きてゐた倫敦心靈大學の名

譽學長J・H・マッケンジイ氏の『幽明の交通』（"Spirit Intercourse"）と、オックスフォード大學出身のワード氏の"Gone West"とである。前者は私の著述『心靈現象と宗教思想』中にその概略を紹介したことがあるが、後者は淺野和三郎氏の譯で『死後の世界』と題して出版されてゐる。共に靈界は七層にわかれてゐると云ふ點に於て一致してゐるが、マッケンジイ氏が動物の靈界は別として人靈の棲む『靈界』の最下層を吾等の住む地上よりも上圏にありとしてゐるに反して、ワード氏は最下層の『靈界』を此の地上の世界よりも下層にありとしてゐる。斯かる場合、冷靜なる讀者はいづれの靈界記をも信じ難くなるであらう。元來此の研究者自身の『靈魂遊離』による靈界探見なるものは、主觀的價値は兎も角、客觀的には價値乏しきものなのである。眞にその人の靈魂が肉體を遊離して『靈界』を探見したものであるか、唯一種の恍惚狀態にゐて幻覺を見たものであるかの區別が何人にもつかない。靈能者が教養ある學者であり迷信に陷る如き人物でないと云ふことは決して彼が靈視したところの『靈界』が眞實であるといふ證據にはならない。却つて彼の教養は、彼が今迄研究した靈界に就いての學説が脚色されて彼の幻覺に視覺化したのであるかも知れぬと云ふ抗議に答ふる何等の辯護もたないであらう。されば斯かる靈界探見記を紹介することも本書に於ては差控へることにする。

生命の行方の心靈學的研究の第三方法は優良なる靈媒を得て、そのひとりの靈媒について起るところの現象を冷靜なる實驗者が忠實に記錄すると云ふ方法である。吾等の心靈現象研究の目的は人間に出生前及び死後の生活があり得るか、肉體の死後、靈魂は存續するか、存續するとせば、死後の生活は如何なる狀態にて存續するかについて正しい知識を得ることである。從つて玆に云ふ優良なる靈媒とは、單に物理的心靈現象卽ち肢體を觸れずして卓子を浮揚せしめ得る靈能があるとか、密閉せる箱の中の物體を透視する靈能があるとか、讀心術が出來るとか『物品引寄』が出來るとか……等の如き一種の異常能力を有するだけでは、その資格にハマらないのである。その靈媒は『靈界』に就ての先入觀念を有たないために出來るだけ無學なのが好い。少くとも心靈現象に就ての何等の素養も豫備知識をも有しないのが好い。浮世の經驗や色々の學說に觸れる機會の少ない爲に出來るだけ若い方が好い。要するに靈媒の潛在意識が『靈魂問題』に就て白紙に近い方が好いのである。而も『靈魂問題』に就て殆ど知らない靈媒が憑依狀態、恍惚狀態又は二重人格狀態になる時、靈界の狀態や、靈魂のさまざまの階級や、その修業狀態や、その進化狀態について、心靈學者と雖も着想し能はざる程に合理的な說明が出來る時、始めてその靈媒は吾等の研究にとつて優良な靈媒だと云ふことが出來るのである。自分は斯かる靈媒を多數の

心靈研究書を讀破した中で、佛蘭西の畫家コルニリエ氏の實驗した少女レイヌに見出した。而もその實驗者たるコルニリエ氏が職業心靈研究家ではなくして心靈研究のアマチュアであることが自分には却つて喜ばしいのである。職業心靈學者は動もすると現象を肯定したがり過ぎて失敗する。職業心理學者は兎もすれば現象を否定し過ぎて失敗する。どちらも自身の在來奉ずる學說の興廢について潛在意識的に無關心ではゐられないからである。然るにコルニリエ氏は美術家であつて靈魂の死後存續を肯定する心靈學說が勝利を得ようと、一切を潛在意識說で片附けようとする心理學的說明が勝利を得ようと、自分の學說が辱かしめられると云ふことはないのである。此の點に於て氏は最も公平な觀察者としての資格をもつてゐる。氏は此の現象の記錄を公表したのはスペンサーの『賢者は自己に宿る信仰をば偶然なるものとは認めない。彼は自己の目擊せる眞理を恐れもなく發表する。彼は自己のその大膽なる發表が何を惹起さうとも、かくして彼が此の世界に演ずべき役割を果しつゝあることを知るのである』と云ふ言葉によつて激勵されたためであり、此の發表によつて、自己に、またその現象に、何んな判斷が下されようとも意に介する所でないと云つてゐる。さて、事件の起りを紹介しよう。

二

一九一二年のはじめである。かねてから一人のモデルが欲しいと話してあつた彫塑家D氏を仲介として、まだうら若い少女が畫家のコルニリエ氏を訪れた。彼女の名はレイヌと云つて、年齢は十八歳であつたが、まだ十五歳位の少女の風丰をもつてゐた。畫家は彼女に興味を感じた。彼女はまた眞面目らしい少女だつたので、畫家は彼女を雇ふことにした。

レイヌはかうしてコルニリエ氏の畫室へその數ケ月間モデルとして通ふことになつてゐた。ところが彼女は或る日畫家の寫字机の上に水晶體凝視法につかふ直徑二吋位の硝子球があるのを見て、それは何に使ふものであるかとたづねた。その硝子球を數分間凝視してゐると、精神が統一して來て一種の恍惚狀態に陷る人も出來れば不思議な幻覺を見るやうな人さへも出來るのだと畫家は簡單に說明した。彼女はそれに極めて興味を覺えたらしかつた。で、畫家は彼女にそれを持つて歸つて、自分で實驗して好いと云つた。三四日たつて彼女はまたモデルになりに來たが、非常に失望したらしくその硝子球を畫家に返した。彼女はまつたく何等の幻覺をも見ることが出來なかつたのである。

彼女は氣をくさらしてゐた。と云ふのは彼女は大變幻覺を見たがつてゐたからである。まるで彼女は自身には幻覺が見えるべき筈のものだとでも考へてゐた樣子であつた。もつとつゞけて實

驗したら或は幻覺を見ることが出來るだらうと畫家は内心に何となしに思つたのであらう?……『もし面白いと思ふなら暑中休暇ぢゆうその球を持つて歸つて、時々十分か十五分位づつ凝視して御覽なさい』と彼女に云つた。そして彼は彼自身だけの經驗では他の心靈現象の實驗には成功したことがあるが、水晶凝視には少しも好い結果が得られなかつたことを附け加へて云つた。

心靈現象のことについて、レイヌは殆ど貪るやうに畫家にたづねた。『彼女は全く心靈現象と云ふものを知らなかつたのである』彼女は何らの豫備知識をもつてゐなかつた。が、コルニリエ氏の說明が彼女の裡に眠つてゐる强い神祕に對する憧憬を呼び覺ました。彼女は何麼實驗でも好い――テーブルを動かすだけでも好い――實驗に加はりたいと繰返して云つた。

『冬になつて仕事に餘り暗すぎる日があつたら時々「卓子傾斜」の實驗をして見よう』と畫家は答へた。コルニリエ氏はその當時の自身の感じをかう述懷してゐる――『自分はその實驗が可能であると考へたからであらうか? その心理は自分ながら不思議である』と。

夏は過ぎた。九月になるとコルニリエ氏は巴里に引返して來たが、着くとすぐレイヌを相手として勞作をはじめた。此の可愛い少女は試みても思はく通り幻覺を見ることの出來なかつたあの硝子球を畫家に返した。彼女は此の硝子球を幾度も凝視して見たけれど、自分の眼がつかれて流

れ出る涙のほかには何物も見えなかつたと云ふのである。畫家は球架の上に凝視球を再び按置して、その問題にはもう餘計な考をめぐらさないことにきめてその當時書きかけてゐた油繪を描くためにモデルに向つた。……

が、或る十一月の午後二時半頃、日光があまりに弱くなつて描かうと云ふ考を全く棄てゝしまはねばならぬ時が來たのである。レイヌは畫家が與へた約束を忘れずにゐてそれを云ひ出した。コルニリエ氏はいちじるしく面喰つた。氏は『彼女の申出に抗ふべき相當の言葉を見出し得なかつた。が、……みづから嘲笑ひたいやうな感じが抑へても抑へても心のうちに湧き起つた。』併しながら氏はたうとう彼女の申出を承諾した。

で、氏は冷淡な態度で一箇のテブールの上を拭いて、それを隔てゝ『羅馬法皇』のやうに眞面目くさつた彼女と、心の底で馬鹿らしさを感じながら對坐した。兩人は兩手をテーブルの上に置いて、兩手から出る生命磁氣をテーブルに傳へつゝテーブルの動き出すのを待つてゐた。

……十分……二十分と兩人は待つてゐた、が、テーブルにはたゞの顫動すらも起らなかつた。此の失敗はコルニリエ氏にとつても寧ろ極りの惡いものであつた。と云ふのは氏は彼女にテーブルの實驗は常に成功するものだと確言したことがあつたからである。氏は少女の或る種の兆候か

ら見て、ことによつたらレイヌが靈媒的能力をもつてゐるかも知れぬと判斷してゐたのである。ところが今、どんな小さな現象さへも起らないのだ。氏は四十分間辛抱して見よう、もうそれでも駄目なら此の實驗を拋棄しようと決心した。と、その時間の終り頃、氏は何かコトコトと云ふ音が聞えるやうな氣がして卓子傾斜の實驗に經驗のある誰もが知つてゐるやうな變な感じがテーブルの木材から傳はつて來るやうに思つた。しかし何ごともハツキリした現象は起らないで約束の時間が來た。畫家は心中、自分の陷つてゐた實に馬鹿らしい破目からゆるされでもするやうな歡びをひそかに感じながらテーブルから離れた。

かうしてコルニリエ氏が硬ばつた兩手を擦りながら何か釋明めいたことを言はうと思つてテーブルに目をやつた時、氏の頭に突然『テーブルに返れ』と云ふ不思議な道理に合はない感が閃いた。『もう一度……十分間だけやつて見よう』と氏は遽だしくレイヌに云つた。兩人はまたテーブルに對坐した。

と、ほとんど直ちにコトコトと云ふ音が起つた。テーブルは右に傾斜した。やがて左に。そしてたうとう合圖の叩音がはつきりと數度聞えた。畫家はレイヌをしげしげと視つめた。同時に彼女もまじまじと探るがやうに畫家の方を注視してゐた。彼女の身體や兩足の位置から觀察して、

氏は、テーブルを運動させたのは彼女でないことを知つた。で、叩音の數幾つはA・B・C・Dの何に相當すると云ふことを書き錄して通信をもとめた。すると、眞先に畫家の名『コルニリエ』と通信して來た。そして續けて『レイヌ、眠らす』との數語が來た。オヤ！と思つてコルニリエ氏はもう一度はつきりした意味を繰り返して欲しいと求めた。『コルニリエ君、レイヌを催眠させて下さい。』と今度は前よりも丁寧な、前よりも文法にかなつた通信が來た。

此れはコルニリエ氏を驚かした。氏は催眠術のことについては、本を讀んだことがあるのと、催眠術をかけるのを二回見たことがあるのに過ぎなかつた。氏は茫然として少女を見詰めた——『奇妙だ……僕にやらせて見ますか。可怖かありませんか？』『いゝえ、可怖かありませんわ、催眠術をかけて下さい。』

そこで氏は、うろ覺えの催眠術のバラバラになつた記憶を組立てながら、それを實際にこゝろみはじめた。たちまち——コルニリエ氏は殆ど呆れて了つた——レイヌの眼は赤く潤んで、やがて瞼をまたゝいた。そしてしまひに閉ぢて了つた。見たところ彼女は眠つて了つた。

コルニリエ氏は、自分の此の成功に面して却つて困惑して了つた。氏は生來用心深いたちなので、先づ覺醒さす能力が自分にあるかどうかを試さねばならないと思つた。氏は彼女の兩眼を吹

き、彼女を覺醒狀態にするために按手を行つた。レイヌは都合よく覺醒狀態に立ち復つた。畫家は催眠狀態の說明を與へたのちに又次の機會に實驗をやることを約した。彼女は全く有頂天になつてゐた。

三

數日のち、繪の仕事が終つたとき、兩人は例のテーブルに對ひあつて坐つた。今度はテーブルはすぐ動き出して、叩音で『レイヌを眠らせよ』と通信が來た。

　またしても同じことを通信して來るので、それには譯があらう、その譯を知りたいとコルニリエ氏は決心した。氏は少女を安樂椅子に倚りかゝらせて法式通りに、そしてきはめて愼重に催眠術をかけはじめた。十五分間の後彼女は深き〳〵眠りに入つたやうに見えた。しかし、またしても氏の心の裡には不安が頭を擡げて來た。――これが果して催眠狀態と云ふものであらうか？彼女は唯の美睡を貪つてゐるのではなからうか？　それとも彼女は自分を愚弄してゐるのではあるまいか？　――かうした不安を靜めるために氏は留針をとつて彼女の腕の筋肉に刺し徹した。睫毛ひとつまたゝかなかつた。息づかひもすや〳〵と續いてゐる。苦痛をあらはす些の徵候だも見えなかつた。氏は彼女の眼瞼を押上げて眼球の反應をしらべて見た。それ以上疑ふことは不可

能だと思はれた。結局これこそ催眠狀態に相違なかつた。氏は彼女に或る問を發したが、答へる言葉の調子が代つて、奇妙に子供らしい抑揚をもつてゐることに氣づいた。その時氏は二三の暗示を試みた。テレピン油の小瓶を香水だと云つて嗅がせれば、如何にも芳香に醉ふやうな表情をしたり、白墨の一片を菫の花束だと暗示すれば、暗示に從つて愛撫した。それからまだ色いろの暗示が感應した。

それにも拘らずコルニリエ氏は更にまた重ねて彼女が催眠狀態になつたかの如く裝つてゐるのではあるまいかと反省した。何か一層氏を確信せしめるものが必要であつた。で、氏は權威ある語調で彼女がまだ這入つたことのない階下の一室へ、靈魂だけで往つて來いと命じた。(コルニリエ氏の畫室は第六階にあつたのであるが、此室は六階とは全く交通がないので、レイヌはその部屋の狀態を知る筈がなかつたのである。)

と、レイヌは階下へ出掛けるやうな身振りをした。やがて低い聲で『畫室の下の部屋まで來ました』と云つた。『充分あたりを見てその室に何があるか詳しく云つて御覽』と畫家は云つた。彼女はまるで周圍の光景をまのあたり見てゐるかのやうな精確さで話した――先づテーブルの上に象牙細工の柄のついた刷毛やその他の化粧品があることを指摘した。それから楕圓形の姿見、

煖爐棚の上にある氏の二個の肖像畫、それから他の室のと何うしても紛れることの出來ない數種の物品を言ひあてた。

右はコルニリエ氏がその著で發表した言葉を殆ど其儘に紹介したものである。此れを單に『透視』の實驗錄として見ても價値があるであらう。また單なる『透視』ではなくして、畫家の意識にある五階の一室の狀態が讀心術的に催眠中のレイヌの意識に感應したのだと解釋することも出來よう。併し實驗の回數が進むに從つて恍惚狀態中のレイヌ自身が――心靈現象に就て殆ど全く豫備知識を有つてゐないレイヌ自身が――此の二つの解釋とは全然別な而も合理的に思はれる解釋を與へることによつて、心靈現象に素養のあるコルニリエ氏を却つて驚かしたのである。併し今自分はレイヌの與へたその解釋を其の時の實驗錄を紹介する時まで保留して語らないことにする。兎も角、自分が茲で心靈現象を紹介するのは、人間の異常能力――透視や、遠感力や、讀心力――そのものに興味を有つためではないのである。

コルニリエ氏は尚二三の實驗をつゞいて行つた後、少女を覺醒狀態に誘導した。彼女はいとやすらかに覺醒した。氏は彼女に要らぬ智慧づけすることによつて今後の現象に不純なことが起つてはならないと警戒してゐた。氏は彼女が催眠狀態になつたと云ふこと、彼女が實驗向きに好い

身體だと云ふこと、若しよければ時々晝の仕事の後に試みても好いことなどを話したに過ぎなかつた。

また氏は彼女が辭し去る時、モデルとしての報酬のほか何ものをも與へなかつた。氏は云ふ、『彼女がもし報酬を目的として詐術を弄するものであつたならば斯かる望みを拋棄させるのが好いと思つたからである。』

此の現象の研究を續行したいと云ふコルニリエ氏の興味は著しくたかまつた。氏は自己のほかに此の種の現象に一層冷然たる態度をとり得る立會人が欲しかつたので、氏はその妻女に實驗の立會人となつて貰ふことにした。氏の云ふところによるとコルニリエ夫人はアングロサクソン系の積極的な性質を有つた女で、その大部分の生活を物質主義の影響のもとに送つて來てゐた。彼女は此れまでも氏の心靈現象研究に反對をとなへはしなかつたけれども、その仲間に入る事は避けてゐた。彼女は外面では靜かに良人の云ふことを聞いてゐたが、心のうちでは常に反對をとなへてゐたのである。次回以後の實驗はコルニリエ夫人の立會の下に行はれるのであるが、成るべく自分はコルニリエ氏自身の手記どほり紹介することによつて『事實』自體をして、一切の問題を解決せしめたいと思ふ。次には事實と、その忠實なる手記とが提供せられる。此の事實によつ

て『靈魂』の肉體死後の存續を信ずるものは信ずるが好いであらう。『靈魂』を否定して、靈媒レイヌの潛在意識がコルニリエ氏の心靈學上の先入的知識を讀心して色いろな自動現象を起したのだと解釋する者にはさう解釋せしむるも好いであらう。併し玆に事實が語る。——

四

　コルニリエ氏はコルニリエ夫人の前でレイヌに催眠術を施すと云ふ瞬間になると馬鹿に逆上せてしまつたのである。と云ふのは、氏は夫人があまり面白い感情をもつてゐないことをそれとなく感じてゐたし、はじめて立會人の前で公開的な催眠術をかけるとなると、生命磁氣を送るために手を翳す自分の手つきが如何にも傍から見たら不細工に見えやしないかと云ふ懸念で胸のうちがどぎまぎしてゐたからである。かうした狀況の下に於て被術者が催眠狀態に急に這入らないのは別に不思議なことではなかつた。無痛刺針の實驗を試みても好からうと思はれるやうな狀態になるまでには殆ど三十分近くもかゝつたのである。で、レイヌの肌に針を刺して見る。やはり彼女は痛さを感じない。コルニリエ氏の自信は恢復して來た。氏は鉛筆を被術者に手渡して菫だと暗示する。併し、どうしたことであらう、レイヌはその暗示に感應しないのである。どんな物品でもそれが他のものに變じたと云ふ暗示は受け容れられなくなつて了つた。彼女は手渡された

物品を手で檢査し、閉ぢたまゝの目でじつと見た。そしてしづかに『だつてそれは桃ぢやありません。コルクです』……等々と主張した。

(紹介者註)稍々深い催眠狀態に於ては暗示感應狀態にゐるのが普通で、被術者に手渡された物品は暗示された名稱の物品に變じた如く被術者には感じられる。例へば、蠟燭を與へて卷鮨であると暗示すれば、被術者はさも美味しさうに蠟燭を食べるが如き類である。然るに、催眠狀態が降靈狀態に變ずると、被術者は事實に符合しない暗示には感應しない。被術者は『肉の眼』のほかに『靈の眼』をもつてゐる。此の『靈の眼』は欺くことが出來ない。この『靈の眼』の出現を心理學者は潛在意識の底に横はる『二重人格』の出現だと云つてゐる。心靈學者はこれを靈界のスピリットが靈媒に憑つて來たのだと云ふ。卽ち催眠術の被術者が靈媒に變じたのだと云ふのである。自分は此處には心理學者の『二重人格』說にも、心靈學者のスピリット說にも、いづれにも團扇をあげないことにして、忠實に事實を紹介しよう。事實そのものが、その學說のいづれかに加擔するであらう。

で、コルニリエ氏は別の實驗を試みることにしたが何だかまた不安でもあつた。——氏はコルニリエ夫人に自分の仕事机の上にある一通の手紙を持つて來るやうに命じて、この手紙をレイヌの手に握らせて、額にそれを當てゝその差出人が誰であるかを知り、その差出人なる人の家へ往

つて、彼は何麽人であるか、その瞬間何をしてゐるかを見て來るやうに彼女に云つた、……と、彼女は歩いて行くやうな樣子を示しながら時々吐息をついたが、やがて『その人が見えます』と云つた。『その人は今自身の家にゐます。技術室のやうなところです。彫塑家の技術室です。その人は灰色の寛衣を着てスリッパを穿いて、そして粘土で男の像をつくつてゐます。』とゝまで云つて彼女は突然叫んだ、『わたし此の人なら知つてゐる。貴方のところへわたしを寄越したからですわ。Dさんだわ。』これは正確に的中した。彼女のお喋りは長々とつゞいた。益々興味が加はつた――と云ふのはレイヌの音調が變つたのである。

彼女は荒つぽい男の聲で明晰な音調で話してゐた。彼女のその語調は急速でまるで斧のやうな鋭さを帶びて來たのである。コルニリエ氏はDがつくつてゐる像の大きさはどれ位あるかと云ふことを尋ねた。するとその言葉の終らぬうちに『七呎二吋』だと撥ね返すやうな答が來た。

コルニリエ夫人も、もういつまでも無關心な態度を示してはゐられなかつた。夫人は靈媒を注意深く觀察しながら、ごく間近い所に立つてゐた。……

コルニリエ氏はレイヌの此の透視的な實驗について次のやうにその著書の中で書いてゐる。

『翌日自分が彫塑家Dを訪れたと茲に書き添へておいても好いであらう。自分はDには春以來一

度も會はなかつたのである。話をまじへてゐるうちに、前日レイヌの催眠中と同じ時刻に彼が何んな仕事をしてゐたかゞ判るやうな點まで自分は漕ぎつけた。やはりレイヌの云つたやうな服を彼は着てゐたのである……レイヌの云つた點は細かいところまで云ひ當つてゐた――像の大いさ、彫塑家の心理狀態、Dの感じた失望と云つた風のものまでも。ギューエネグロー通にある自分の家から、彼女はモンマルツルの小さい町で行はれてゐる出來事の詳細を完全精確に見たのだつた。』

Dに關する質問を悉く終つたとき、コルニリエ氏はレイヌに自分の畫室へ歸つて來るやうに命じた。おまけに氏は此の成功を更に光榮あるものとするために、彼女に第五階へ降りて往くやうに、そして其の後ろ側の室へ這入つて行くやうに命じた。

『そこに何があるか?』とコルニリエ氏はたづねた。

其處は浴室であると云ふこと、何處其處にかういふ附屬品があると云ふこと等を、彼女は忽ち見たばかりでなく、彼女の說明の仕方が、如何にも彼女自身が其の現場に行つて見てゐる言葉であつて、自分の心の中にある觀念を讀みさとつて云ふのではないと云ふことが明かになつた。驚いたことには、彼女は其處に窓があるとは云はないのである。コルニリエ氏は彼女にその浴室に

は窓があると答へるやうな問をそれとなくし向けた。併し彼女はどうしても窓があるとは云はないのである。コルニリエ氏は面倒くさくなつて、おしまひには

『よし、よし――が、そこには窓があるのだ、見えないのか？』とハツキリ云つた。

彼女はしばし默つてゐる。そして、どうやら注意深く周圍を見廻してゐるやうな樣子を示したが、

『いゝえ、窓は見えない。カーテンが懸つてゐる』と答へた。

これは、もう日も暮れて其の部屋に灯が點いてゐたので、部厚いカーテンが窓を押隱すやうに垂れ下つてゐたからであつた。――これはコルニリエ氏が實驗後、此の室へ行つて見て眞相を知つたのである。同樣のことがストーヴの火についても起つた。レイヌは執拗く火が見えないと云ひ張つた――彼女は『竈の火熱は感じられはしますけれど』と云つた。すぐ後にコルニリエ氏は階下へ降りて往つたが、そのとき實際火の耀きはストーヴにはもう見えなかつた。そして火熱だけが發散してゐた。

此の實驗でレイヌの不思議な能力が單に物を透視して視る種類の『透視』でもなければ、術者又は實驗者の心の中の觀念を讀心して、見て來たやうに答へるのでもないことが判るであらう。

それが單なる『透視』であるならば、カーテンを透して窓の存在がわからない筈もないし、又それが單なる『讀心術』であるならばレイヌは寧ろコルニリエ氏が「かうあるべき筈だ」と思つてゐた通りにのみ室の有樣を述べたであらう。しかしレイヌの能力は單なる透視でも讀心術でもなかつたのである。それでは何か。その答は實驗錄それ自身が答へるであらう。自分は依然としてコルニリエ氏の記錄のまゝに事實を示さう。

次いでコルニリエ氏は、レイヌを彼女自身の未來の狀態にまで轉換させて見た。彼女は第一回の實驗の時に叙べたやうな狀態を云ひあらはしたほか、別に新しいことは何も起らなかつた。が、其うちに彼女はこんなことを喋り出した――

『靈界人が見えます、あのスピリツトはわたしを導かうと欲つてゐるのです……荒々しい聲で答へて出て來たのは此のスピリツトです。わたしを催眠させるやうに貴方に云つたのも此のスピリツトです。……』(註―スピリツトとは靈界に棲息する靈魂人のことである。)

實驗會の終りに近づいた頃レイヌの喋り出したこの言葉は、コルニリエ氏に不安な感じを與へた。併し此の第二回目の實驗會が可成りな好成績を收めたのでコルニリエ氏はレイヌについて心靈現象の實驗をつゞけてゆく勇氣が出來た。コルニリエ夫人もそれには贊成した。

コルニリエ氏は次回以後の實驗には一層驚異に値ひするやうな現象を待ち受けてゐた。併し、氏は別の音色で笛を吹かねばならなかつた。第三、第四、第五の實驗會では何ら價値ある現象は起らなかつた。レイヌは以前のやうに催眠はしたが、精神の鮮明さをすつかり失つて了つてゐるやうに見えた。スピリツトと稱する現世を去つた人靈が彼女の心を占領してゐるやうに見えた。彼女の實驗中喋る言葉は、靈界通信に普通見られるやうなものであつた。無論そのうちには興味のある色んなことを云ひはした――例へば、自分の身體から脫出して行くらしい煙のやうな姿を自身の靈眼でながめては『椅子の上に眠つてゐる妾自身の肉體よりは、この幽體の方が一層ほんたうに自分自身なんです』と云つた。またコルニリエ氏が手を翳して生命磁氣を送る(Magnetizeする)時に、氏の指先からは細い青い焰のやうなものが放出されるのが見えるとも云つた。しかし一箇の好奇心を唆るやうな興味深い答を聞かうとするには十箇の馬鹿話を聞くことをコルニリエ氏は忍ばねばならなかつたのである。

『小さな卑しいスピリツトがわたしを取り捲いてゐて色いろ馬鹿な嘘をつくのです。わたしを瞞すのです』などとレイヌは恍惚狀態のうちに獨り言を云つたりした。

コルニリエ氏はがつかりした。此麼ことではいつまでたつても同じことだと失望した。が、第

六回目の實驗會になつて局面が轉回した。私は第六回目以後の實驗の模樣をコルニリエ氏自身の手記によらうと思ふ。手記そのものゝ眞實さと事件の變化の作爲的でない所に權威があるのだからである。以後『自分』とあるのはコルニリエ氏自身のことである。

五

一九一二年十二月二十三日。

卓子は最初はなかく動き出さない。動き出すまでに吾々は大分辛抱が必要だつた。が、たうとうそれはいつもより急速な、ずつと喧燥な拍音をたてゝ、通信をはじめた。拍音の調子から察すると、それはフエルナン(第五回の實驗會までに通信を寄越したスピリツトの名)である筈がない。

『フエルナンぢやない。』とテーブルは通信する。『フエルナンは他の交靈會へ往つてゐて、今日は來ないだらうが、レイヌは例もと同じやうに催眠する。』

自分は前會の交靈會で、靈界棲息者ルーシヤンから敎へられた方法に從つて、水晶球を凝視せしめて彼女を催眠狀態に誘導しはじめ、やがて送靈してその催眠狀態を深度にみちびいた——斯うすると力の節約になるのださうである。

レイヌは深く催眠してゐるやうに見えてはゐたが、一種の恍惚狀態に陷つてゐるに過ぎなかつた。――吸ひ込まれて行くやうな感じがします。濃い黑い霧のほかには何も見えません――と彼女は云ふのである。が、ごく纔かの後、彼女は一人の婦人の靈魂が姿をあらはしたのを見とめた――このスピリツトも卓子通信にあらはれたスピリツトの一人である。

『あらフエルナンヅが來ましてよ。フエルナンヅ・レーモンと云ふ名だと云ひましたわ。……だけどわたしには本當にその姿がレーモンに相違ないとは自分にもわかりません。』

フエルナンヅ・レーモンとは誰のことかと自分は尋ねた。彼女をレイヌはまだ子供であつた時分に知つてゐたが、ずつと以前に死んだのだとレイヌは答へる。――『彼のかたは大變かはつちまつてるんですもの。もう見別けがつかない程なんですわ。彼のかた、わたしに會ひたいと思つて、自分の意志で此處へ來たのだと云つてゐます。』

自分はレイヌに、そのレーモンと云ふスピリツトが吾々に助力を與へてくれるかどうか訊いて吳れと賴んだ。――助力すると云つてゐますわ――とレイヌが答へたので、行方不明になつてゐる若い裁縫師について確かな報告を聞かして貰ひたいと自分は賴んだ。

レイヌはレーモンの言葉を晦澁なたど〳〵しい調子で移牒した。

フエルナンヅの言ふには此の裁縫師は或る男と駈落して、その或る男に捨てられて、ボルドーでローヌ河に身を投げて死んだのださうである。

ローヌ河とボルドーとは調和しませんね――と自分は詰つた。暫くレイヌと靈魂界の人間フエルナンヅとが云ひ爭つてゐるやうだつた。自分はレイヌが謝罪つてゐるのを傍から聞いた。彼女は自分の方へ振返つて――『間違つてゐたのはわたしでしたわ、聞き違へたのです。ローヌ河ぢやありませんでした。ガロンヌ河です。が、やつぱりボルドーで身を投げたのです。その婦人は日のとつぷり暮れた頃そこへ着いたのですつて。ステーションから出て來て街の右側にある一軒の旅館へいつて一晩泊りました。旅館の名は「オーテル・ド・ラガール」。小さいハンド・バツグをもつてゐたきりです。彼女が身投げしたのは街の丁度はづれのところです。身體はずん／＼おし流されて行きました。足跡のほかに殘つたものとてはありません。彼女の死體はどうしても上らないでせう。……』

自分はもつと詳しく知りたいと思つたが、返事の來るのが實に遲いし、あまり明瞭な返答でもない樣だ。で、飽き／＼した自分は、問題を變更して或る手紙の内容を分析して呉れるやうに要求した。

――何も彼も眞暗に見えます――と彼女は云つた。彼女は何も見ることが出來ないで無性に身體が重くなつて起き上ることすらも出來なくなつて了つたさうである。(此處に云ふ身體は彼女の幽體即ち靈魂體を意味する。)

レイヌの今日の狀態は自分を失望させた。彼女は次第々々に第一回目の實驗會の時のやうな潛在意識の明瞭さを失つて行きつゝあるやうに思はれた。彼女は眞に重くるしげに、ものうげに、殆ど打ち挫がれた人のやうな樣子で、厚ぼつたい濁み聲を出した。云はゞ吾々の交靈會はただだどしく跛を引いてゐる……時間の浪費だ。こんなことなら何もはじめから行らないに若かずなのだ。自分は殆ど將に彼女を覺醒狀態に引もどさうとした。と、そのとき、突然彼女は自分の魂の上を蔽つてゐる昏濛の狀態をふりはらつたやうな態度を示した、そして何か第三者から强制して云はしめられるやうな語調で云つた。實に突然彼女の言葉の調子には全然豫期しないハキハキしさと明瞭さとが表れた。――

『コルニリエさん。貴方が眞に興味ある現象を欲しいと思はれますならば、貴方は今迄のやり方を全然お變へにならなければなりません。わたくしはまだ本當の訓練が足りません。此れが好い結果の得られない譯なんです。わたしはわたし切りではまだ何も出來る程に强くなり切つてゐま

せん。わたしの靈魂はまだ肉體から、自分だけで離れることが出來ません。だからハッキリ物を見ることが出來ないのです。好い結果をお望みでしたら、貴方は一切わたしに質問することを止めなければなりません。そして强烈に長い間わたしに生命磁氣を送つて、それと同時に、一切外界の事物は何も見えもせねば聞えもせぬと暗示して下さらねばなりません。そしてわたしをたつた一人、何等の現象も起さうとはせずに、少くとも四十五分間は放つておいて下さらなければなりません。それから徐かにわたしを覺醒させて下さい。わたしの催眠中を利用して高級なスピリツトが來てわたしを訓練して下さいますの。その訓練によつて、わたしは高級なスピリツトの機關として仕へることも出來るやうになります。また、自分きりで何でも見ることが出來るやうにもなります。五十回はかうして放つて置いて下さらなければなりません。それからのちは、又あなたは質問をおはじめになつても差支ありません。』

自分は彼女の權威ある語調にギクリとした。

彼女はまたつゞけた。『わたしの申上げたことをお忘れになつてはなりません。非常に重大なことなんです。かうして下さらないならば、吾々は一つとして價値ある結果を得ることは出來ないでせう。もつと後になれば、あなたは私を催眠さすのにもつと有效な方法を教へられます。だ

けど今は水晶球を凝視させて下さつて、それから長時間マグネタイズして下されば好いのです。あとは靈界の人の方で好くして下さいます。』

彼女の指圖するやうな思上つた樣子に自分は著しく興味を覺えた。自分は暫くの間は彼女の要求通りにやつて見ようと答へた。もう質問は斷じてすまい。指定された條件に從はう。そして好い結果が得られるまで辛抱強く待つことだ。好矣。

自分は彼女を覺醒させた。彼女は著しく疲れてゐた。

六

一九一二年十二月二十五日(自分のほかに立會人なし。)

此の日自分に與へられた指定通りの條件を嚴重に守つた。最初は卓子通信で始めたが、自分はテーブルが動き出すまでに長いあひだ、だまつてゐた。卓子は動き出したが『レイヌを眠らせしよ』とそれは簡單に通信した切りであつた。自分は彼女を肘掛椅子に坐らせて水晶球を凝視せしめた。そして最後にマグネタイズした。自分は彼女から離れて、四十五分のあひだ、どちらかと云ふと不安な氣分で待つてゐた。そして所定の時間がすむと、徐かに彼女を覺醒させた。彼女はきはめて自然に何の心の動搖も疲勞もなしに意識を囘復して來た。そして云つた――今日の催眠

狀態は今迄の實驗の時とはまるきり異ふ感じがしましたわ――と。

テーブルはついそこにあつた。自分はレイヌにその兩手をテーブルの上に置くやうに云つて、自分も同時にその上に手を置いた。そして自分は、今日の交靈會はこれで好いのかとたづねた。卓子通信は『然うだ、これで好い。金曜日まで。』と答へた。では金曜日まで――

七

一九一二年十二月二十七日。

興味ある豫期以上に面白い交靈會だつた。吾々はテーブルの前に先づ坐つた。それで徐かに常とはちがふ動き方をした。たしかにテーブルをうごかす靈力者は代つたに相違ない。卓子通信は催眠を喚起する新らしい方法を示した――特殊の印契を結んで自分の拇指を相手の前額に接し、右手だけで生命磁氣を送る(マグネタイズする)と同時に、間斷なく低い聲で靈媒に話しかけ、靈媒がもう答へなくなると、彼女を自然に覺醒するまで放置せよと云ふのである。

自分は施法をはじめた。今日はレイヌは十五分間で催眠狀態に這入つた。自分は彼女をぐつたり椅子に凭りかゝらせた。そして彼女から少し隔れた處へ繪を描きに往つてゐた。

二十五分經過した。突然肘掛椅子に物音が聞えた――囁くやうな、物の動くやうな。自分は彼

女がどうしてゐるか觀ようとして近づいた。彼女は昂奮して、身振りをして、何か喋つて……と思ふと、熱心に聞くやうな振りをして、やがて又手眞似をはげしくして、たうとう解りましたと打ち頷くやうな樣子を示した。その樣子は恰も彼女の身の廻りに誰かゞ遣つて來てゐて、それと談話をまじへてゐたやうなのである……それとも彼女は夢を見てゐるのか知ら?……此の時、彼女はたしかに何物かを搜すらしく兩手を突出した。手はテーブルに觸れる。彼女はその上に自分の右手を按いて、丁度叩音の起るのを待ちかまへてゞもゐるやうなのである。と、たちまち彼女はもう一方の手をテーブルに按いた。テーブルはコトコトと音をたてゝ搖り動く。が、テーブルの位置は餘りよくなかつた。それは一方の端に片寄り過ぎてゐたので、自分は便宜上それを靈媒の正面に持つて往つた。彼女は深睡狀態に陷つたまゝで卓子に凭つて自分と靈界の人とを通話させようとしてゐるのである。拍音は規則正しく起つた。自分は拍音を綴り合はせながら讀みはじめた。それは自分に對する用向であつた。が、馬鹿にながいもので、自分は綴りそこねて意味がゴタゴタして了つた……その時、自分は充分愼重の態度で立ち上つて紙と鉛筆とを持つて來た。そして一語も發せずにそれをレイヌの手に握らせた。彼女は鉛筆を指先でさぐつて見……紙を又さぐつて見た……やがて彼女は書きはじめた……書く……書く……彼女は今度は紙を裏へ返して

表の續きを書きはじめた。裏が文字で一杯になると、それを自分に手渡して手眞似で紙を更に請求した。自分は紙を與へた……たうとう、もう三枚彼女に與へた。彼女の樣子は筆記をしてゐるやうに思はれた。最初は傾聽してゐるやうな容子で、やがてそれを書き下すのである。一度などは顏を振向けて、横柄な調子で『そんなに早く云つては可けない』と彼女は云つた。終に彼女は署名して最後の紙を自分に手渡しすると、立上つてテーブルを持ち上げて、それがもと置かれてゐたとほりの片隅の位置に置きなほした。そして再び椅子へもどつて來ると、どつかりと腰を下ろした――もう動かない。

深いしづかな眠りを數瞬間つゞけたと思ふと彼女は自然に覺醒した。

自分はレイヌが催眠中に書いたものを手にとつて見た。最初は靈媒へ對する注意書きと、今度から自分が用ひねばならぬ彼女をマグネタイズする方法とが書かれてゐた。その次にはレイヌの靈媒的能力を養成するために自分の現在とりつゝある勞力の價値をあげて、それに感謝の言葉が添へてあり、久しからずして價値ある結果が得られるに相違ないと云ふ斷案が下してあつた。そして、その項の最後には『フェルナンは善靈ではない。余等はレイヌを余等の管理の下に置く。此の最初の機會にさへ彼女は余等と言葉を交へることの出來たことを多とする。今日は彼女

は覺醒後何も記憶してゐない。しかし次の時には記憶するであらう』の語で終つてゐた。終りのページには彼女をマグネタイズする際に、催眠中彼女の見たところを記憶してゐて覺醒後すぐ自分にそれを話して聞かすやうに暗示を與へよと云ふことが勸めてあつた。

署名には『フランク・フェルマン』と書かれてゐた。

（註）Magnetize すると云ふ言葉は、催眠狀態が起るのは術者より被術者へ生命磁氣が傳はるに由ると云ふ催眠學說から來た言葉で『生命磁氣を傳へる』と云ふ意味であるが、日本の靈術家たちは概ね『靈を送る』と云ふ術語を使ふ。蓋し『靈的流動體』(Spiritual fluid)を送ると云ふ意味である。適當な語をもとめて見たが好い思ひつきがないので、結局『マグネタイズする』といふ原語を使つた。マグネタイズする方法には種々あるが、普通用ひられてゐるのは、術者が精神を統一して臍下丹田に力を籠めながら、印契を結んだ指先又は、單に開いた手掌を被術者へ指し向け、念力を集注して被術者へ靈氣を注ぎ込む如く手を翳し動かす(方法)Passである。俗に鎭魂するとも云ふ。此の際靈視家が見れば術者の指先より青白い靈光の放射してゐるのが見える。(谷口註)

八

一九一二年十二月三十日（靈媒と自分だけ。）

吾々は例によつてテーブルに對つた。（が、これは一寸吾々の精神統一の助けになつたに過ぎない。）すぐ吾々はテーブルを拋棄してフランク・フェルマンによつて敎へられた新方法によつて靈媒をマグネタイズし始めた。レイヌは二十分のうちに催眠狀態に移り行いた。が彼女は當然あるべき筈の深い狀態に入つてゐないやうに自分には感じられた。彼女はいつも示す子供らしい表情を今日は顏にあらはさなかつた。それにも拘らず彼女は自分が尋ねかけても默つてゐるし、皮膚の感覺を失つてしまつてゐたので、自分は彼女のところから離れることにし、その間に見たところのものを覺えてゐて、覺めてからそれを自分に話すやうに暗示した。

およそ半時間の後、彼女は覺醒狀態に立ちかへつた。で、自分は彼女が催眠中にどんなことを經驗したかをたづねて見たが、彼女は何んにも事變は起らなかつたと答へるのである。彼女は一種の焰と蝶々のやうなものとだけを見るには見たが、それは普通の夢を見るのとまつたく同じやうな狀態で別に特異な性質をもつてゐなかつた。彼女は此の催眠中決して異常な體驗も感覺も經驗しなかつたことは確かだつた。

稍ゝ失望の面持で、自分は彼女にテーブルのところへ來いと云つた――何故こんなに失敗つたのかテーブル通信によつて說明が聞きたかつたのである。テーブルは例のとほり動き出して文字

をつゞり出したが、緩るつこくて仕方がない。じれ〳〵して來る…紛糾つて來る……で、自分はレイヌに今の覺醒狀態のまゝで自働書記は出來ないかと尋ねた。卓子通信は『出來ない』と答へる。で、自分は、もう一度彼女を催眠狀態にしたら、此の失敗の原因の說明を彼女の手で書くことが出來るかとたづねた。テーブルは『出來る』と答へる。彼女も勇氣を出してもう一度催眠狀態に這入つた。自分は紙と鉛筆とを彼女に手渡した。彼女は五六枚も書いた――明かに聽き書きをする樣子であつた。彼女は丁度好い刻限に自然に目覺めた……稍〻疲れた樣子である。

今度の筆者の署名には『ヴェッテリニ』と書いてあつたが、自分の失敗の原因と、そして如何にして自分の靈力を發達せしむべきかと云ふことについての注意が書きつらねてあつた。全文、明晰な文體で全く合理的に書かれてゐた。

自分は此の注意條項に從つて根氣よくやるより仕方はあるまい。

次の日の交靈會が待たるゝ。

九

一九一三年一月一日。

吾々は四時にテーブルの前に坐つた――テーブルは床の上を滑り動いた。拍音も起らないし、

卓子の脚も持ち上らない。自分はすぐにレイヌを催眠狀態にする方が好いのだなとその瞬間直覺した。彼女は凝視球をもつて來ることを忘れて來たので、自分は彼女に白い陶器製の物體を見詰めさせて、彼女が瞼の赤く重ぼつたく垂れて來た時、先日敎へられたとほりの方法で、彼女に靈的流動體を送つた。――此の方法は先づ自分の左の手で自分の兩脚及び兩手のエーテル質を一方に追ひあつめて、右の手で靈的流動體を送るのである。彼女が恍惚狀態に這入つた時、自分は權威ある語調で――お前の靈魂は肉體を離れることが出來る、さうして其間に見聞したことを覺えてゐて、覺醒後それを自分に話すんだ――と暗示して彼女を離れた。

十五分間たつて、自分は動くやうな物の氣勢を耳にしたので、彼女のところへ戻つて行つた。と驚いた――彼女は恐怖と苦惱の表情をしてゐるのである。彼女は最初、自身の身邊をぐるりと見廻したかと思ふと、やがて下を瞰下した。そして物に恐れたやうな驚愕の叫び聲をあげた――『あら、あら、巴里です、巴里に違ひありません、おゝ！ おゝ！』此れ切りで默つて了ふ。彼女は身體を少しばかり左右にゆら／＼動搖させてゐる。緩徐な身振り。軈てたうとう椅子に凭れかゝつて動かない。

自分は再び十分か十五分のあひだ彼女をそのまゝに放置した。と、突如として彼女は身體を眞

直に起き上つて叫んだ――『コルニリエさん、お聽きなさい!』から云つて彼女は自分を捉へようとする風に兩手を突出しながら、『わたしは皆な貴方に云つて了はなければなりません。すぐ貴方に話すやうに命令されましたの――覺めないうちに――わたしの見ましたことを。覺めてから忘れつちまつてはなんにもならないんですもの……』

から彼女は口達者に、それでも幾分不安氣な調子で說明した――彼女の靈魂が身體から少しづつ離れて往つたこと、今度の催眠狀態は深かつたこと、彼女の靈魂は身體から離れてらく〳〵と遙かまでのぼつて行けたことなどを。

彼女の云ふところによれば、一體何事が起つたのか、彼女自身にも解らなかつたので、自分の靈體が家よりも遙か上にゐることに氣がついたとき、彼女は自身の最後が來たのだ!と人間的な恐怖に捉はれた。しかし彼女の周圍には靈界の人々がとりまいてゐて、彼女に力を添へ、彼女を支へ、彼女を一層高い――實に高い――巴里の上空へ伴つて行つた。そして巴里全體の上空にぐる〳〵彼女を引廻しながら、下を瞰下して觀察するやうに、しかし一語も發してはならないと命令した。

『不審の點を尋ねて見るやうな餘裕なんかありませんわ。わたしはまだ力が足りないんです。自

分の身體から拔け出して上空へ飛翔するのが勢一杯だつたのです。わたしはかうして靈魂だけで飛翔することを教はりました。靈界の人々が力を添へて引上げて呉れなかつたら、わたしは直ぐ肉體に引返さなければならなかつたのですわ』

かう云つて彼女はやがて、彼女をとり卷いてゐた靈界の人々のことを稍〻しばらく事こまかに述べるのであつた――

『彼らには身體がありません……はじめわたしはチラ〳〵する光が往つたり來たりするのを見ました。と、この光は――輝きを帶びた雲のやうなものですが――次第に形をなして來ました。此等の靈界の人々が次第に數をまして、次第にわたしに近づいて、わたしを四方八方から上へ〳〵と浮上らせて呉れました。と、わたしの目の下に巴里の街が――家々、大通、群衆、それから何も彼もが見え出しました！　おゝ――だけど目がまふやうでしたわ。誰もこの感じは知ることは出來ない。……何よりも先づ、誰にも彼にも複體(double)があるんでございますよ。ちよこ〳〵動きまはつてゐる人々、右往左往する人々の複體は大抵、身體の外へ一寸ばかりハミ出して肉體を包んだやうになつてゐますが、時としては――そんなに度々ではありませんが――半ば肉體の外に出て、身體の上にあらはれてゐます。此の複體が思想なのです、意識なのです……いえ意識

ぢやありません。意識の座をなしてゐるものなのです。』

此の問題に關して彼女が云つたところをすべて此處に書かうとは思はない。そのうへ、かくの如き事項は、心靈問題を少しく研究したものにとつては何ら珍らしきことではないからである。しかしこれに特殊の情趣を與へるものは、彼女がそれを話す際の、誠實と情緒の匂ひとなのである。それから又、その話し手が此の小さいレイヌ——覺醒狀態に於ては何の素養もない單なる少女の口から話されたと云ふところにも——

彼女は催眠狀態のまゝで云ふ——二三回も此の種の靈魂出遊の經驗をつんだ後には、彼女の靈魂は全然單獨で、何でも見たり觀察したり出來るやうになるだらう。そしてまた生きてゐる人々の複體と意志を交換することさへ出來るやうになるであらう——と。

彼女はまた附け加へた——いよ／＼進んで彼女の靈魂が完全に肉體から遊離するやうになり、その幽體が誰の助力もなしに自分で出遊し得るやうな狀態になつたら、彼女の肉體は外見生きてゐるやうな徵候は全くなくなるだらう。『貴方はわたしが靑褪めて、まつたく冷たくなつて、手なんぞ氷のやうになり、息もしてゐないかのやうになるのを御覽になるでせう。』で、自分が彼女の健康を氣遣ふやうに云ふと、彼女はかう云つて遮つた——『いえ／＼、心配なすつてはいけま

せん。何の危險もないんです。危險に遭遇するやうだつたらわたしの複體はすぐ、此のやうに歸つて來るんですもの。』

彼女は自身をこれから守護しようとしてゐるスピリツトがヴェツテリニと稱する靈界の人だと信じてゐるのである。そしてヴエツテリニはやがて誰だとハツキリわかる姿を現して自分の前に出て來るさうである。レイヌに自分が質問することを禁止したのも彼であつたし、催眠狀態から覺める前に何事も自分に話しておくやうに命令したのも彼であつた。自分はヴエツテリニによろしく云つて吳れるやうに彼女に云つて、それから彼女を自然的に覺醒するまで、放置しておいても好いかとたづねた。『いけません。だつてわたしは疲れ切つてゐるんですもの。覺まして下さい。』と彼女は云つた。で、自分はさうした。覺醒後彼女は何も覺えてゐなかつたが、何だか非常に遠い處へ散步でもして來たやうな氣持がします、と彼女は云つた。

*　　　*　　　*

彼女が人間の幽體について述べたことのうちで、尙二三の事項を記錄しておかねばならないであらう。彼女は人間の幽體（アスツラル・ボディ）（複體（ダブル・ボディ））にも各々人格が異るに從つて、密度、色合、態度などに區別相異があることを見たと云つてゐる。レイヌにとつて赤く見えた幽體は重濁した物質に近

い劣等のものであるが、これに反して青みがかつたり、白味がかつたりして一層稀薄に見えたのは高級の幽體であるさうである。幽體が肉體から遊離する難易はその進化の程度によるのださうである。幽體の態度にも靜肅なのもあれば、輕卒らしいのもあると云ふ。また時としてはその肉體の行動に反抗してそれと戰を挑むやうに見えるのもあると云ふ。

十

一九一三年一月三日。

今日の實驗會は豫期したとほり、前囘の繰り返しに過ぎなかつた。しかし少々變つた色合を有つてゐる。

レイヌの催眠狀態は長いあひだ——ほとんど四十五分間——靜かに、何の言葉も身振りも示さないでつゞいた。やがて彼女はすつくと立ち上つて、盲人のやうな手附で自分の手を求めた。そして自分の手に觸れると、それを、その樣子では、たしかめて見るらしい。

彼女はその時自分に云ふ——『コルニリエさん? あゝさうだ! やつとわたし歸つて來ました。わたしながい間往つてゐましたんです。これからその間に起つた出來事をお話し申しますわ。』

彼女は、今日の靈界遊行と前回のそれとの相異について、注意を與へながら語りはじめた。今日の靈界遊行は彼女の靈魂が自發的に行つたのである。そして窓から出て行つたと云ふのであつた。今日出て來たスピリツトのなかでは、唯ヴエツテリニだけが、彼女の前から知つてゐる靈界人であつたが、多くのスピリツトが彼女を護送し、訓練して呉れたと云ふのである。前回の靈界出遊よりも、今度のそれは成績がよかつた。或る刹那になるとヴエツテリニは彼女に云つた。

『レイヌ、今度は自分きり獨りでやつてご覽なさい、誰の助けも借りないで――』

彼は峻嚴な權威ある語調で命じたのであつた。

彼女は驚いた――驚いて昏倒しさうであつた。彼女はたつた一人で靈界を遊行するほど强力の靈にはなり切つてゐないと感じたのであつた。

自分はたづねた――貴女ひとり切りになつて了つて强さが足りないで、恐怖心が起つた場合にはどうなるのか――と。彼女は答へた――『わたし、そんな時には直ぐ自分の肉體に歸つて來なくちやなりませんわ。すると、わたしは覺醒狀態になります。今日はあなたも此の前よりも好成績でございましたわ』と彼女はつけ加へた。『貴方がわたしの遊魂中に送つて下さいました貴方か

らの靈的流動體は絶えまなくわたしに力を添へて呉れましたわ。』

實際自分は彼女の催眠中に彼女のところへ往つて、彼女にマグネタイズしたのである。

『だつて、あなた怖ろしうございますわ……わたしは決して臆病ものぢやありませんけれども、だけど、頭部ばかりの胴體のない靈人たちに伴れられて行くさまを御想像なすつて下さい。そして時には頭すらない人もあるんですもの。スピリットたちは本當は輝いてゐる一片の煙のやうなものに過ぎませんわ。しかし彼等はわたしがスピリットと云ふものに恐れないで、喜んで彼等について行くために頭部を裝つて見せるのですわ。ヴエツテリニは灰色の髯と長い髪をつけたいかつい顏付の老人です。此の方は善靈です。決してわたしを惡い方に導くやうなことはないのです。』から云つて彼女はその幽界旅行の話をはじめた。

自分は幽體についての細かい點を尚一層くはしく訊いて見て、今迄彼女が云つた所のものを更に確めてみた――自分は不作法に彼女の言葉を遮つた。

『それで動物には――幽體があるんですか――複體があるんですか？』と。

彼女は一寸ためらつて『えゝ』と云つた。その樣子は靈界へ往つた時の記憶を呼び起してゐると云ふ風であつた。――

『えゝ――だけどそれは人間と同じものぢやありませんわ。馬や犬のぐるりには或る種の光が漂つてゐます……さうですけれど、それは人間のとは比較にはなりませんわ。それは別物です――全く別物です。』

彼女は催眠狀態に陷りつゝあるとき、無數の極微の線條が彼女を引張り、伴れて行かうとしてゐるやうに感じられたと云つた。(註、その極微の線條が牽引すると感じられたのは、靈界人から送られた念の牽引力であつたのだらう。)

彼女の話が終つた時、自分はスピリツトのヴエツテリニは來てゐるか、その姿は見えるかと訊いた。彼女は肯定的に答へたので、ヴエツテリニは自分の思想を讀知することが出來るか、此の實驗をつゞけて行くやうに自分を強ひる動機は何であるか、自分が目指す目的は何であるかを知ることが出來るかと訊いた。

レイヌは一瞬間、靈人ヴエツテリニの囁きに聞き耳を立てゝゐるやうな樣子であつた。そして叫んだ。

『たしかにあの人は知つてゐます! でなければあの人は來なかつたでせう! 靈界では最初つまらないスピリツトを――低級スピリツトを寄越して、貴方がわたしの實驗で何をもとめてゐら

つしやるか、貴方の好奇心が正しい好奇心であるかを視させたのです。しかし貴方の目的が何であるかゞ明瞭になつたとき、ヴエツテリニが遣つて來たのです。彼は高級のスピリツトです。今後はこの人が交靈會を司會して呉れます。そしてあなたを導いてくれます。彼はあなたが「靈魂の死後存續」を信じてゐることを知つてゐます。だから貴方に對しては何も證據の要らないことを知つてゐます。しかし他の人たちのために證據が必要なのです……そして彼はその證據を得るために貴方を導くのだと云つてゐます。』

最後に彼女の靈魂は彼女の肉體が覺醒したとき、繰返しその肉體に命ずべき事柄を自分に托した。毎日彼女は水晶凝視球によつて自己催眠しなければならぬと云ふのである。此れはたゞ純粹に肉體的の訓練に過ぎない。彼女は自己催眠によつて何等の現象も起すことは出來ないであらう。併しそれは自分が彼女をマグネタイズする時に、はやく自分の靈的流動體に感じて、統一狀態に入りやすからしめると云ふのである。又彼女は常に手許に紙と鉛筆とを用意しておいて、そしてその用紙は彼女が自働書記狀態になつた時に自由に書き得るやうに木板にシツカリ貼りつけて置かねばならないと云ふのである。

今度の交靈會は月曜日だと云ふことを告げて、それから彼女はもう覺醒狀態に導いて下さらな

いと可けませんと、もとめた。

十一

一九一三年一月八日。

自分はインフルエンザに罹つたので、次の月曜の交靈會を放棄しなければならなかつた。自分はレイヌにこの事を通知して、この日の交靈會には彼女は自分の部屋に一人坐して、次の水曜日に自分が彼女を實驗することが出來るかどうかを、彼女の守護靈に尋ねて見て呉れるやうに頼んだ。今日（水曜日）彼女は前記の月曜日にまつたく無意識狀態に於て自働書記した二ページの紙片を自分に見せた。彼女は水晶凝視球によつて自己催眠を行ひ、その催眠中、木板に留めて置いた留針をはづして紙を裏返しにし、一枚の紙片の裏おもてを文字で埋めたのであつた。この靈界通信を――彼女は讀まなかつたのであるが――それによると交靈會を今日まで延ばすことを承認してあり、それと共に次の晩にレイヌの幽體が幽界に出遊すること――『それを彼女は夢を見たと思ふであらう。それについて彼女は何も理解しないであらう。しかし貴方は彼女を吾々スピリツトが導いてゐることを認めてくれるであらう』と自分に宛てゝ書いてあつた。

レイヌがやつて來て話すところによれば、彼女の幽體の出遊したところは巴里街上空の靈界の

もう一つの遊歩場であつた。其處へ彼女は午後十一時頃に往つたのである——これを彼女は不思議に印象の強烈な夢であつたとして、今でもそのさまがあり〳〵と思ひ浮ぶと語るのである。此の時以來、自分は彼女が自働書記した靈書について、彼女が履行すると約束した注意を實によく嚴守して吳れると云ふことを信ずるやうになつたのである。——彼女は目が覺めるとすぐ、催眠中に自働書記した通信を疊んで、自分の所へもつて來るために封筒にをさめておいたのである。

＊　　＊　　＊

吾々は實驗會をはじめた。レイヌは容易に催眠して平常よりも長い間眠つてゐた。彼女はやがて報告をはじめた。それによると、今彼女は前よりも一層獨立性を帶びた靈界遊行を强ひられたのである。そこには規則的な進步がみとめられる。今度彼女が出遊したのは一層高い靈圈であつた。その靈圈内には平均度まで進步したスピリツトが一杯棲んでゐたのである。彼女の勇氣を訓練し、彼女の自信力を增さしむるために、ヴエツテリニは、彼女が或る距離まで歸つて來た時に彼女ひとりで放置して、誰にも助けられずに歸つて來るやうに强ひたのである。彼女の靈體はセイヌ河をひとり渡らねばならなかつた。彼女はセイヌ河を渡るとき、流れに落ちこみはしないかと云ふ恐怖と不安とで一杯になつたと云つてゐる。

歸途の出來事については彼女は何等の說明も與へなかつた。その理由は彼女は一人ぽつちで歸つたからと云ふのである。自分の問に對して、彼女は『あゝそんなこと、わたしは存じません』と極めて簡單に答へた――『ヴェッテリニが此處にゐません。だから尋ねる譯にまゐりません。』

* * *

新事項一つ――月曜日以來、彼女が自己催眠するために水晶球を凝視してゐると、彼女は水晶球面に、輝く鋭い眼光で彼女を凝視してゐる一箇の老人の顏を認めた。この鋭い眼光が、水晶球を見詰めてゐると彼女を催眠せしむるのであつた。この老人はヴェッテリニであらう？

十二

一九一三年一月十日。

最も興味ある實驗會の一つであつたが、その興味の大部分は彼女の聲の調子、誠實の充ちあふれたその抑揚、その態度、――詳しく云へばレイヌが言葉を出す時に伴つたその始終のこまかな一擧一動にあるのだから、それを記錄することは困難である。彼女の靈能の進歩は規則正しく法外に秩序だつたものであつた。指導靈(guide)が心に一定の目的をいだいてゐて、その目的に到達するのに餘程手馴れたものであるに違ひない。

レイヌは自分のところへ着くと、昨日彼女が此處へ來なかつたのは、テーブルの通信が、まだ彼女の健康狀態がよくないので、彼女に來てはならないと云つたからだと云つた。又彼女はテーブルの通信で今日此處へ來る前、ホンのぽつちりしか食べてはならないと命じられたのだつた。此の事は彼女にとつては喜ばしいことではなかつた。併しそれにも拘らず、彼女はこの命令に從つた。彼女の朝飯としてとつたものは薄いスープ一杯と鷄卵一箇に過ぎなかつた。（1）

自分は彼女を普段の方法で催眠させて、そして待つてゐた……勿論私の手掌からは間斷なく靈的流動體を送りながらである。彼女は稍ゝ興奮したやうな、また苦しさうな容子を見せた。と突然彼女は苦痛の叫び聲を發した。自分はこの言葉を小耳にはさんだ……『いえ、いえ……駄目です。それはあまり高すぎます！　あゝ寒い！　あゝ！……』此の狀態は凡そ三十分間ばかり續いた。その後彼女はつひに實驗室へ歸つて來て、何かスピリツトと談話をまじへてゐるやうな樣子であつた。誰かゞそこにゐて確かに彼女に、彼女を催眠さす新らしい方法を教へてゐるやうな樣子であつた――彼女の態度や手振りがもつともハツキリと此のことをあらはしてゐた。

この無言の光景はいちじるしく興味深いものであつた。やがて彼女はそれをすつかり會得したのであらう、彼女の兩手は自分の手を探してゐた。そしてすぐさま今敎へられた事項を自分に對

して話しはじめた。彼女の語るところは彼女の身振を裏書したところのものであつた――それは一層深い催眠狀態に導くために用ふる一新方法、九種類の動作を連續して行ふ一種の方法であつた。（自分は此れを書きとめた）此の方式によると彼女の靈的流動體を一層完全に遊離さすことが出來、それが殆ど全部肉體から遊離して了つたならば、肉體はその瞬間死骸のやうになつて了ふだらうと云ふのである。

彼女はそれでも亦朝飯を食ひ過ぎたのだつた。彼女が覺醒狀態になつた時、自分は、彼女が次の月曜に來る時には唯一箇の鷄卵だけしか食べてはならないと彼女に命じねばならないとの事であつた。（1）彼女はこのことを大變結構な命令だとは思つてゐない。併しまだ此の命令を彼女は守るだらう。

（1）何故レイヌの指導靈がレイヌに減食を命ずるのであるかについて、自分の考へを附記しておきたいと思ふ。斷食、又は少量の淡白な食事は古來から或は靈力又は神通力を發揮するため、或は大覺を得るための修行として常に行はれたところである。釋迦は成道するまでに、尼蓮禪河畔の一菩提樹下に端坐しつつ久しき間の斷食をなしたのである。耶蘇も『四十日四十夜、斷食して後に飢ゑたまふ』と馬太傳に書いてある。今でも禪宗の僧侶の食事は一種の減食に近きものである。その他神道諸派の人々が靈媒的能力を

發揮するために行ふ『身禊』は一種の減食水行である。兎も角、斷食又は淡白なる少食は靈媒的能力を發揮し、スピリットと交通するために何等かの肉體的條件を備へるものであることは事實である。その理由に就て或るスピリットは、斷食中に人間の組織體中にある重濁せる成分が分解放散してその幽體は輕くなつて、幽體の遊離に便利となるのだと云つてゐる。本人の幽體の遊離を利用してスピリットがその肉體に入込み或は天言通（靈言現象）を發せしめ、或は自働書記現象を起さしめる時、その肉體は靈媒となつたのであつて、神道ではこれを神懸りとなつたと稱する。靈媒現象は靈言又は自働書記現象の如き客觀的現象となつてあらはれる他、天眼通、天耳通及び一種不可説の直覺直感の如き主觀的現象となつても現れる。つまりスピリットが人の腦髓に作用して内面的に或る默示をあたへるのである。靈的修行に淡白なる少食が適するのはこの爲ではなからうか？。スピリットが目的とする或る人間をとらへてこれに靈媒現象を起さしめようとする場合に、本人が自發的に斷食をすゝんでしないならば、スピリットは或る方法で本人を病氣にし、或は貧苦に陷れて斷食を強ひた後に靈媒現象を起さしめる。天理教祖の如きは前者であつて、彼女はのどけを患つて一週間ばかりも食事がとれなかつた後に神懸りとなつたのであるし、大本教祖は貧苦のために長期間、慢性的に斷食をとつた後神懸りとなつたのである。併し神懸りと悟道とは異ふ。神懸りは靈界人の憑依であるし、悟道は自己の本性を大覺することである。悟道には斷食は不要である。

（谷口註）

＊　　＊　　＊

やがて、彼女は自身の靈界遊行のことについて話しはじめた。それは全く新らしいものであつた。彼女は今迄よりも一層高い靈圈に遊行したのであつた。そして二つの新しい能力を獲得したのであつた。第一は或る場所へ行きたいと念ずることのみで直ちにその場所へ自己の靈體が遊行し得ること（註2）。第二は思想の波動によつて直接にヴェッテリニの思想を理解し得て言葉の仲介の要らないこと（註3）。此の方法を授けたのは彼——ヴェッテリニである。レイヌはヴェッテリニの命令に從つてモンマルツのサクル・クールにゐながらパルク・モンソーに行きたいな、と念じたのである。（彼女が此の場所を選んだのは、其處が常に大好きなからであつた）と、どうして其麼ことが起つたのか彼女にはわからなかつた。その行きたいと云ふねがひが心の中で描かれた其の瞬間、もう彼女は自分の靈體がパルク・モンソーにあることがわかつたのだつた。（これは神足通である。）彼女が無言の思想を理解しようと試みたのも、亦ヴェッテリニの敎に從つた結果であつた。（これは他心通である。）——『ねえ、それは小さい事ぢやないでせう。……わたしはその能力をたうとう得ましたが、ずゐぶん辛い目をしましたのよ。それで今ではあの方が一言も被仰らないでもあの方のお考へをすつかり知ることが出來ますのよ』と彼女は云ふのだ。

ヴェツテリニは大滿悦だ。

彼女の云ふところによると、彼女の靈體はヴェツテリニの姿を見ずに二度靈界へ遊行したのであつた。が、ヴェツテリニは始終彼女の靈體の側についてゐたが、姿を見せないで彼女を見まもつてゐたのであつた。彼は彼女の勇氣を試して見たいのだつた。一度目の時は彼女は臆病であつた。が、二度目の時はずつと遠くまで出掛けて往つた。二人のスピリットに出遇つたが、彼等は彼女を保護して附いて往つてやらうかと申出でた。レイヌは彼等が善靈だか惡靈だかについて自信がなかつた。で彼女は彼等に自分はうちへ歸らうと思つてゐるのだと答へた。かう答へたことをヴェツテリニは非常に讃めた。そして此等の低級靈は唯彼女に道を迷はせようとするのみであつて、それにうつかり瞞されでもしようものなら、覺醒狀態になつてからひどい頭痛にくるしめられるだらうと云つたのださうである。

彼女は自分の見たところの靈界の色いろの狀態を非常に精確なハツキリした姿で物語つた——多くの奇怪な狀態を細かい點まで物語つた。そこに速記者がゐてくれたならば——否それよりも言葉の抑揚や、情緒の表現をも寫し得る蓄音機があつたならば一層よかつたであらう。

ヴェツテリニは彼女に今晩眠つてゐるうちにもう一度靈界に伴れて行くやうに云つた。そして

土曜日と日曜日の晩にもだ。

月曜日が來ると、此處で吾々は又實驗會を催ほすことになるであらう――かの新しい精神統一誘導法によつて。

（2）此の種の心靈現象は佛典にある「神足通」の解釋や、彼岸極樂の世界に於て唯念ずるだけで欲するものが集つて來ると云ふやうな境地の可能性に就て吾等に興味深き暗示を與へる。（谷口註）

（3）マッケンヂィ氏はその著“Spirit Intercourse”中で、靈界に於て異人種の靈魂たちが相會した場合には、別段異國語を知らなくとも、語らんとする觀念の波動によつて、互ひに思想を通じ得ると云つてゐる。他の多くの靈界通信もこれに一致してゐる。（谷口註）

十三

一九一三年一月十三日。

レイヌには特に何らの通知も與へなかつた。けれども彼女は遣つて來た。各晩とも常とはかはつたことは何も起らなかつたさうである。彼女はすこしも夢をみなかつたし、自動書記を試みたり、自己催眠を試みたりしたが何らの效果もなかつたのである。唯、彼女は每朝目が覺めると非常な疲れを感ずるのであつた――あたかも終夜はしりまはつてゐたかのやうな疲れ具合だ。

彼女に施法するに就ては自分は周到綿密に教へられた方法に從つた。しかしその結果は豫期したやうにはならなかつた。そして幾度も自分はその方法を繰返して新しく按手の手を撫でおろした。自分は彼女を仔細にうち見まもつた。彼女の兩手、兩腕に觸つてみたが、彼女は豫期したやうに冷たくなつてゐなかつた。間斷なく彼女は無作法な動作をし、獨語し、苛々してゐるやうに見えた。『だつて駄目ですわ。』と自分は彼女が云ふのを聞いた。『雨が降つてるんですもの。實に濕つぽい天氣だ。寒い！』それから彼女はぐつたりとなつて十五分間ばかり靜かに眠りつゞけた。

やがて彼女の態度や表情がぐらりとかはつた。その身振りの或るものは、彼女の遊行してゐた幽體が歸つて來たのであることをあらはしてゐた。彼女は自分の袖や裾が濡れてやしないかと調べて見るらしく、それをパタパタ叩いてゐる。と、突然彼女は無言の會話をはじめた――表情のある溜息をし、頭を打ちふり、論爭し、反抗し、つかみかゝるやうな態度までした。吾々は彼女の默劇と、その時々洩れる言葉の斷片とから、その不快な會話の內容をたやすく想像することが出來た。それは食事の問題である。彼女は、なほ餘りに食べすぎたのである。彼女は朝飯には斷食、否斷食にちかいものを食べものとしなければならないのだ。それで彼女は反抗したのであつた。それはあまりな要求です。（斯う叫んだ彼女の聲はあら〳〵しかつた。）しかし權威あるヴェツ

テリニは如何にしてこの苦行を彼女に課すべきかについてよく知つてゐた。それで自分はレイヌが降服して、何者もこれほど從順にはなれないやうな容子で服從を約してゐる言葉を聞いた。

それから實驗會について、今度試みた新らしい施法について、そして彼女が自分に對して繰返して云はねばならぬ事項……等について談話がはじまつた。これらは隨分長時間つゞいたが、すこぶる生彩ある光景であつた。

つひに自分にそれらのことを移牒すべき瞬間がやつて來た。

彼女は兩手を突きだして自分のゐどころを探つた。そして自分の手に接觸すると滿足してすぐ言葉で報告しはじめた。（彼女の手はこの時きはめて冷たかつた。）

彼女の云ふところによると、彼女は今日は容易に、その幽體が出遊することが出來たのであつた。それは彼女の催眠狀態が深かつたからであつた。が、彼女は雨が降つてゐると云ふ理由ですぐ歸つて來た。（雨が降つてゐると云ふことは本當であつた。）二度目に彼女はすこしばかり遠くまで、ラ・モンネエの上空まで出かけて往つた。……併し何處もかしこも雨が降つてゐた。彼女はぐしよ濡れになるのが恐ろしくて、もう出掛けないつもりで歸つて來た。ヴェッテリニはその時突然姿をあらはした。そして再び出掛けるやうに命令した。『濡れるんですもの。』『雨が降つて

ゐますわ。』などの抗言(この言葉を自分達は聞いた)に對しては、彼はきはめて激しい調子で——靈は雨を恐れる必要はない。彼女のしなければならないことは一言で彼の命令に從ふことだ——と答へたのであつた。それから兩者は伴れだつて出掛けて行つた……。

それから玆で彼女は稍ゝ微妙な點に話し及んだ。彼女は云ふ——前の靈界出遊には彼女は誰の助けもなしに、まるきり自分ひとりで出掛けるやうに命令されたのであるが、併し實はさうではなかつたのである。彼に自信力を與へるためにヴェツテリニは彼女にひとり出掛けたのだと信ぜしめてゐたのである。しかし彼は彼女に見えない姿でたえず彼女に助力を與へてゐたのである。今日になつて、はじめて彼はこのことを彼女に話した。で、彼女は自尊心を刺戟されて、決然として云つたのであつた。『では放つておいて下さい。わたしひとりで往つて見ますわ。』彼女は最初失敗するには極つてゐると思つてゐた。が、自尊心を揮ひ起してその努力をつゞけた……そして撓まず進んで往つた。ヴェツテリニは滿足した。

自分は玆に特に興味ある二三の點を記錄しておくために靈界遊行の詳細な叙述を切り縮めた。ヴェツテリニは前回に云つた通りの晩に彼女を靈界に伴れて往つたのであつた。併し彼は彼女が覺めたときに此の實に奇怪な出遊の記憶を有つて來ることを妨げたのであつた。何故なら彼女の

普通生活がそれによつて掻き亂されるからであつた。彼女は云つた――『もし憶えてゐたら、わたしは其のほかのことは何ごとも考へることは出來ないでせうよ。わたしは自分を變梃子な異常な人間だと思つて、氣が顚倒して了つたでせうよ。それでヴエツテリニはその記憶を切りとつて了つたのです。』

彼女は言葉をつゞけた――『あの方は時々わたしを訓練するために、わたしが仕事をしてゐない時に來られます。(彼女の手は痙攣してゐた)併しそれを知ることは許されないのです。今晩あの方はわたしの眠つてゐる時に來られるでせう。そして明日の晩は寢床に行く前に來て、わたしに書きものを命ぜられます。わたしが覺醒狀態になつた時に、明日の晩わたしは、水晶球と紙と鉛筆とをもつて、テーブルの前に坐らねばならないとわたしに云つて下さい。忘れては可けません。あの方は直ぐこれから起らうとする事件を何かわたしに書かせようと云ふんです。それは豫言です。書いたものは貴方のところへ持つて來ますわ。次の三度の實驗會には、わたしはヴエツテリニと再び出掛ける筈になつてゐます。しかし四回目の水曜日には、わたしは出掛けはしないのださうです。あの方はその時わたしに、此の周圍にあるあらゆるものを見ることを敎へて下さる筈です。いろ〳〵の物、人間、貴方とコルニリエ夫人、あなた方のポケツトに何があるかと云

ふこと、机の抽斗に這入つてゐるもの、箱の中に這入つてゐるものなどを透視してそれを詳くことを教へて下さるのだと云ひます。まあ、なんてむつかしい仕事でせうね。さうはお思ひなさらない？　無論わたしは幾度も失敗するでせうよ。だつてヴエツテリニはわたしが失敗するのを待つてゐて教へようと被仰るんですもの。あの方は貴方にわたしの姿を――わたしの幽體があらはれてゐるのを――見せたいと被仰つてゐますわ。貴方は何か貴方にさはつたやうに感じなさいますでせうよ。また小さなものが置いた處にないことにお氣が着きなさいませうよ……部屋のなかは、此の現象を起すために暗くしておかなければなりません。暗くしてあるとわたしの力が非常に出やすいのです。』

二三の説明があつてのち、彼女は覺醒狀態に導いて呉れと云つた。が、自分は彼女を覺醒狀態に誘導するための施法を行ふ前に、目が覺めても決して頭は痛まないと強い暗示を與へるやうに註文せられた。と云ふのはヴエツテリニがもう彼女に言葉でものを云はないために、彼女は非常に努力してヴエツテリニの思考を透覺しなければならなかつたからである。

自分はその註文どほりを行つた。そして彼女は安らかに靜かに目を覺ました。

十四

一九一三年一月十五日。
昨日レイヌは自宅で何を書いたのだらう。それを知りたくて自分は首をのばすやうな氣持で待つてゐた。それに彼女は何も持つて來なかつたのでまつたく失望してしまつた。それは兎に角、彼女は自己催眠の命令のまゝに催眠狀態にはいつたのだつた。が、あらかじめ用意した紙の上には無意味ななぐり書きと『貴君』の一語が書いてあるのに過ぎなかつたのだつた。
彼女は今日は速に統一狀態にはいつた。彼女の兩手と前腕とは全く冷却して了つた。併し頭部は依然として溫く生々としてゐた。
三十分近く經つたと思ふ頃、彼女は一寸うごいた。耳をすましてゐるやうな樣子である。……と突然起ち上つた。彼女はつか〳〵と自分の仕事机の方へ步いて行き、二本の鉛筆を取り上げ、手でさぐつて普通の畫板と紙とを見着け、それをもつて自分の椅子に立ち歸り、たしかにディクテーションをはじめるやうな樣子で、鉛筆と畫板とを筆記しやすいやうにとゝのへた。
彼女はつひに書きはじめた。時々書く手がとまつて無言の會話が行はれる。たうとう彼女は書いた紙を自分に手渡しゝ、鉛筆と畫板とをもとあつたところへ返しに行き、自身の席にふたゝび歸つて、探すやうに自分の方へ兩手をさしのばした。

何はさておき彼女の云ふところによれば、彼女が昨日自宅で何も書かなかつたのはヴェッテリニの意嚮によるので、何人にも彼女が靈界通信を受けたことを疑はれる餘地のないやうに自分の目の前で書き取りさせようと彼が決心したからであつた。自分は直ぐそれを讀んで見なければならない。

それによると斯う云ふことが明らかに書かれてゐるのである。――彼ヴェッテリニと、彼等靈界の教導職たちはこの可憐なレイヌをつかつて『死』と『出生』と『靈界』との神祕を啓示した重要な書物を完成せしめようとしてゐるのである。此のことを成就するために彼等は彼女を特殊の鋭い神經狀態におかうとしてゐるのである。今後數日間彼女は不安な昂奮的な狀態を示すであらう。そして彼女が自分ひとりきりでゐる時には、紙片の上に何か書きたくて堪らないやうな壓倒的な衝動に驅られるだらう。しかし彼女はそれを羞かしく思つて、敢て誰にも見せようとは思はないであらう。彼女は隱し切れる限りは隱してゐるが、しまひにはそれを包み切れないで自分に告白する時が來るであらう。そして此の時が來たら、自分は何が爲しとげられてゐるか、彼女に知らさないやうに嚴重に注意しなければならない。自分はその時冷淡に答へなければならないのである。此れは、或る書物を書くのだと云ふ考へが彼女に惹き起す暗示がさういふことを書く

に到らしめたのだと云ふ恐らく起りさうな非難や、推論を避けるために必要なのである。此の手記による靈界通信について、自分がハツキリ理解することが出來なかつたならば、ヴェツテリニは一層よくわかるやうに説明の言葉を準備してゐると言ひ足した。

自分は白状するが、此の計畫を餘りたいして喜ばなかつた。第一、此の種の靈界通信――スピリツトの啓示――は決して價値あるものではなかつた。何故なら、たとひその內容が眞に價値あるものであるにしても、何の證據もそれにはないのである。それは容易に靈媒自身の想像力に歸することが出來るのである。*第二に、また此の計畫のために彼女の人格の獨立が著しく侵害せられ、健康が著しく害せられる。此のことは自分には正當なことだとは思はれないのである。此のために彼女はどんな償ひを受けるであらうか。そして吾々の此の實驗會にそれが何の役に立つのだらうか?

*コルニリエ氏の實驗的態度が如何に科學的であらうとしてゐるかゞ判るであらう。(谷口註)

ヴェツテリニがレイヌをして云はしめたところによれば、吾々の實驗會は既に決つた方向にむかつて繼續して行はるゝのださうである。その方向とは死後存續する靈魂についての證據を得ようとする非常に精かい點に注意を拂つた努力である。彼はどうしてもなくてはならぬ實證の必要

さを知つてゐたかのやうに思はれる。で、彼はみづから進んで次の實驗を行はうと申出でた――吾々及び靈媒の少しも知らない死者の誰かの靈魂を呼び出して、證據をあげ得る方法でその眞實をあかししようと云ふのである。ヴェッテリニ達の目論んでゐる書物はそれとは離れた一つの仕事であつて、それは決して自分の研究を妨げはしないとのことである。

レイヌはから云ひ足した――『しかしわたしは肉體死後の靈魂たちのところへ行つて、彼らを此處へ伴れて來て、彼等の語るところを貴方に取りつぎ得るところまで修行が出來なくてはなりません。ヴェッテリニは此のためにわたしを訓練してゐるのです。この狀態にはたしかにわたしは成り得るでせう。此の次からはヴェッテリニがわたしの肉體をつかつて貴方に直接話し得るやうになります。』彼女は噴出すやうに笑ひだして『あの方がわたしの肉體をつかつて談し出したらさぞ可笑しいでせうよ。だつてあの方ときたら嚴めしい底力のある聲で、重々しい身振をなさるんですもの……此のわたしの小さい身體、わたしの聲、わたしの手をつかつて、あの方が談し出す樣子つたら、とても想像も出來ませんわ！』

この一時的憑依のきはめて面白い說明が續いたのち此の實驗は終つた。覺めるに臨んでレイヌは云つた――ヴェッテリニのやうに著しく進化をとげたスピリットは物理的心靈現象（註１）を引

起すことはできないのである。『そんな現象をあらはすことが出來るのは低級靈ばかりです。低級靈にそれが出來るのは、その幽體が一層物質的で一層濃厚だからです。高級靈は吾々の感覺機關でみとめられないやうな全くわれ〳〵とは實質のちがつた靈體を有つてゐます。高級靈がわれわれの感覺機關にみとめられようとする時には、低級靈を中介的道具としてつかふのです。』

（註1）物理的心靈現象とは、物體浮揚、幽靈現象、物品引寄等の心靈現象を云ふ。（谷口）

レイヌはやすやすときはめて晴々とした氣持で覺醒狀態にかへつた。

此の事を書いておかなくてはならない。ヴェッテリニはかう云つた――レイヌはあの書物の內容をすつかり書くであらう。默示がしめされるのはレイヌを通じてゞあるが、彼女はそれを部類別けすることが出來ないであらう。それを修正して出版することは自分の仕事となる譯である。

十五

一九一三年一月十七日。

長時間にわたる交靈會だ。言葉の調子、態度及び身振り、それから靈媒の言ひ違ひ、その訂正（これらは此の場合の價値をいちじるしく高めるものである。）などに到るまで、その詳細を書きとめておくべきであつたが、不幸にして自分が書きとめ得たのはその主要な部分のみに過ぎない。

一瞬間吾等はテーブルに對坐した。(そのテーブル通信は極めて淡い光の射し込むのをゆるすやうに、すべての窓掛を垂れておくやうに自分にすゝめた。)自分は敎へられたやうに兩手の手首に壓力をこめながら生命磁氣をレイヌに放送した。

三十分ばかりすると彼女は大聲で喋りはじめた。彼女が見たところのものを物語つてゐるのである。その樣子では彼女の幽體は此の畫室にゐてヴェツテリニ及びその他の靈魂人を見てゐるのである。彼女は此の室の空中に昇つたり降りたりしてうごいてゐる數人のスピリツトをしげ〳〵打ち眺めて調べて見ようとしてゐるのである。彼女は彼らにさはつて見ようとし、摑んで見ようとし、そしてうまく行かないので弱つてゐる。

暫しの後、彼女は靜かになつた。そして直に談話を交へる樣な姿勢をとつた。彼女が對話してゐる相手はヴェツテリニである。そして今度は彼女の疑問も、その答へも、その又應答も大聲で話されてゐた。＊それ故自分達は容易にその對話をきゝとることが出來たのである。彼女はすぐに了解し切れない時には疑問を繰返すか、與へられた說明を鸚鵡返しに投げかけて、一層わかりやすい說明をしてくれるやうに請求した。彼女は、單なる名辭を與へられるだけで滿足してゐなかつた。その名辭は何を意味するかを知らうとつとめてゐた。そして彼女は自分の心に得心の

ゆくまでヴェッテリニに議論を吹きかけたり、愚痴を零したりしてゐた。此の小娘の執拗さは見てゐても實に驚くべきものがあつた。或る言葉又は觀念を理解することが自身に出來ないと意識したとき、彼女は自分自身でそれを類推さすやうな姿のものを考へついて巧みにそれを理解する困難さに打ち克つたのであつた。

＊かゝる現象は傍觀者から見れば靈媒自身が二つの異る音聲をもつて自問自答してゐるやうに見えるのである。(谷口註)

此の光景はたつぷり四十五分間もつゞいた。自分たちは彼女の發する面白い語句を聞いてまつたく間斷なく笑ひ通してゐた。彼女はヴェッテリニに對して前よりも親しらしうなつてゐた。そして彼女はヴェッテリニに直接むかつて――最初わたしは貴方を非常に可怖い方だと思つてゐましたわ。だけど今日わたしは貴方の笑ひ顏を二度見ましたわ。それでいまは貴方が好い方だとわかりました――と打ちあけてゐた。彼等はそれから友人として色いろのことを對談してゐた。それはたしかに同じ仲間の者同志の對話のやうに思はれた。時々彼女ははにかに後へすさつて『まあ、怒つては可けませんわ。わたしの態度があまり執拗くつてもそれはわたしの罪ぢやありません。そら、貴方も知つてゐらつしやる通り、それはわたしのたゞの好奇心からぢやないんですも

の。コルニリエにもまた話してあげなくちやならないんですもの……』こんなことを云つて彼女は如才なく自身の知りたいと思ふことに突進して往つた。長時間に亙る此の光景を見てゐるのは實に興味深いものであつた。が、たうとう此の場面も終りに近づいた。彼女はヴェッテリニに御禮を云つて『おさらば』を告げてゐる。と、彼女は自分の方へ手を差しのべた。そして直ちに彼女の經驗した一切のことを自分に語りはじめた。その語る模樣で見ると、自分たちが彼女の對話を側から聞くことが出來たと云ふことを知らないものらしい。

* * *

唯要點のみを茲に控へておかう。自分の感興をもつとも惹いたのは、靈魂人が自分でとゝのへる衣類や、その附屬品の說明である――其の說明は次第に明瞭に論理的になつて來た。レイヌが此れについて執拗に質問してくれたことに自分は感謝する。貴女は今すぐに貴女の祖父さんにお會ひになることが出來ますよ――とヴェッテリニが云つたとき、此の問題が始まつたのである。――『本當ですか。あれが本當にわたしの祖父さんでせうか。祖父さんだとわたしに判るか知ら。祖父さんがあんな帽子を冠つてゐるか知ら。あんな寬衣を着てゐるか知ら。』とレイヌは叫ぶ。ヴェッテリニは然うだと答へる。レイヌは追つかけるやうに云つた――『だつて違ひます。

ヴェツテリニさん。あれ御覽なさい。そんな筈はありません。祖父さんがあんな大きな帽子を有つてゐる筈はありません。買ふ所がないぢやありませんか。あの人は死んで了つてゐるのです。死んでゐる人に帽子が買へる筈はありません。死んだ人に帽子を賣る店は何處にもないぢやありませんか。だから、そんな筈はありません。』が、ヴェツテリニは、彼女の祖父はたしかに大きな帽子を有つてゐることを繰返し肯定した。そしてレイヌに對つて、それがどうして可能であるかと云ふことを詳論して、たうとう次の如き說明を與へたのである――

靈魂人が靈界にゐるときの正規の狀態(少くとも催眠狀態中のレイヌの觀るところでは)燦として輝く中心――これは心靈の中核なのである――を備へた輝く光體である。併し彼等が現實の世の人々に姿を現はさうとする時には、それが自己であることを認められんがために、彼らが地上にゐたときの物質的外貌を裝ふのである。それで彼等は地上で常に着てゐた衣裳とその附屬品とをつけて姿をあらはすことが出來るのである。衣裳及び附屬品は實質的に存在するのではないのである。それはスピリツトの思念及び意志によつて創造せられた實質なき影像であるに過ぎないのである。それで現世の人々の腦髓に印象をあたへるのは此の單なる主觀的影像に過ぎない。此れは第一の場合であるが、又他の場合もあるのである。曰く、

特殊の條件の下に於ては、卽ち靈媒を使用する交靈會に於ては、客觀的に存在する像が創造せられる――此れ心靈の物質化である。そしてこれは前者とは全然異る現象である。自己の姿をあらはさうと欲する靈魂人は、靈媒の肉體から、顯はさうとする形象に必要なる要素を抽き出すものであるが、それと全然同じやうに、若しスピリツトが織物や、衣裳や、その附屬品を身に纏つて顯れようと欲する時には彼は其のすぐ周圍に實際存在する類似の織物や、衣裳や、附屬品を必要とするのである。此れらの附近に存在する物體から、靈魂人は自分があらはさうと欲する衣裳をつくるべき要素を抽出することが出來るのである。而して、此のスピリツトが顯現した衣服等の確實性の程度は、その現存する物體から借用したる實質の量に比例するのである。

此の事は完く明瞭で、論理的であり、恐らく此の方面の進んだ研究に一致してゐるのである。が、レイヌの如き少女がかくの如き精確さと權威とをもつて、此れを說明したところに、その敍述は殊さらに印象が深いのである……。

* * *

コルニリエ氏がどんなに用心深い態度で此の實驗會にのぞんでゐたかと云ふことは此迄の氏の手記で明かになつたであらう。またレイヌの心靈現象がどんな性質のものであるかといふことも

略々明瞭になつて來たであらう。併し心靈問題に何等の素養もないレイヌが此の方面の最も進んだ研究と一致し得ることを云ひ得たからと云つてまだ〳〵感心してはならないのである。コルニリエ氏が心靈問題研究家である限り、かゝる知識はコルニリエ氏の潛在意識に横たはる。それを催眠狀態のレイヌの潛在意識が讀心術的に感知してコルニリエ氏の得心の行くやうに說明したのかも知れないとも云ひ得るだらう。そしてヴェッテリニと稱する別人格の出現も、潛在意識の創造作用がそれを創作したものに過ぎないとも云へるだらう。しかし斯く潛在意識の神祕力を擴張して行くとき、吾等は肉體死後の靈魂存續として心靈學者の呈出せるものを悉く潛在意識の神祕作用に歸してしまふことも出來るのである。曰く、

（1）死の刹那また死の前後に親戚知己の見せられた幻影は、死に臨める人の强烈な感情の波動が海を渡り丘を越えて親戚知己に達して自己の幻影を髣髴せしめたのであつて、死後の靈魂殘存には何の關係もない。

（2）多人數同時に見える幽靈の現象は、そのうちの誰かの潛在意識が無意識のうちに放散した精神波動に、多人數が感應したのであつて、所謂生者の集合暗示の結果であつて死者には何の關係もない。

（3）寫眞機は暗示に感應しない――と云ふ理由で幽靈存在の確證として提出せられたる幽靈寫眞は、誰かの潛在意識が無意識のうちに放射した念力波動が寫眞の感光板に感じたのであつて、それは生者の念力

寫眞の一種であつて、死者には何の關係もない。誰だか立會人ではない誰か生者の潛在意識波動が感光板の藥品に感じたのである。

（４）靈媒にのりうつゝて死者の靈なりと云ひ、その死者本人でなければ知り得ないことを言ひ當てゝ、生前の自身なることを認められようとする場合にも、亡靈の存續の證據とはならない。何故なら一旦存在した生者の印象は宇宙內から消滅しはしないから（卽、業の存續）、その印象は靈媒の潛在意識が感知して、潛在意識の創造作用によつてそれを劇化して靈媒の口からそれらしい科白を云ふのである……等々。

生者の潛在意識の能力をかくの如く廣汎な程度に認めて、死者の靈魂の個性的存續を否定しようと云ふ人々にとつては如何なる證據も、死者の靈魂の個性的存續を證明する材料とはならないのである。外から材料は與へられる。しかしそれを生者の潛在意識作用に歸するのと、亡靈の他界よりの干涉に歸するのとの相異は、解釋者の氣質の相異と、內からなる體驗の相異によるのである。亡靈の個性的存在をみとむるのは、神の存在をみとむるのとひとしく、結局は內からなる體驗によらなくてはならないであらう。神の存在には、所謂る證據らしい證據はないのである。

ショーペンハウエルは天體の運行の整然たることにより神の存在を證明しようとした神學者に對して、「この世界は存在し得る世界のうちで最惡の世界である。何故なら、もう少しでもこの世界

が餘計に惡ければ、天體は互ひに衝突して此の世界は存在し得ないが故に』と有神論の材料となつた其の同じ材料を無神論の材料としたのである。それは證據ではなく材料に過ぎない。氣質が無神論的であるものに、及び『內からなる體驗』が神をみとめるべく熟して來ないものに、有神論者が論戰するのは如何に愚かしきことであらう。それと同じく氣質が靈魂論者でないものに、及び『內ヽヽヽからなる體驗』が死後の靈魂の存續をみとめるべく熟して來ないものに、靈魂論者が材料を提供して論戰したとて何にならう。恐らく氣質が靈魂論者であるものと、內からなる體驗がおのづから熟して來たものにとつては、今迄引用したコルニリエ氏の手記ですらも靈界の存在を信ずるには旣に充分であると信ずる。今迄は、交靈會とはどんなものか、スピリツトの啓示は如何なる狀態にて靈媒を通じて來るかを知らない人々への參考として、こまかい叙景的部分までも一語も漏らさずコルニリエ氏の手記を紹介する必要があつたのであるが、是からはさうしたシーンの描寫の部分を除いて同氏の手記から『生』と『死』とそして『靈魂進化』の神祕等にふれた部分だけを分類して抄記する。以下は謂はゞスピリツト自身の語れる生物學であり、生死觀であり、宗教である。それは最新の學說に或る點は一致し、或る點は超越してゐる。超越しながらもその說く生物學的說明の眞實さに或る專門の醫者は頭をさげたのである。ある人にとつては、そ

れは潛在意識の錄せる驚くべき靈感錄とも見られるであらう。それは素養少ない一少女の說明としては、またあまりにも深遠ではないだらうか。では、先づ『出生と受胎の神祕』についてヴェツテリニの說明を聽かう。——

十六

スピリツト自身は如何に出生と受胎の神祕について語るか

自分は『靈魂の受胎』の問題について、何時靈魂は肉體のうちに宿るのであるか、精確に聞きたいとヴェツテリニにもとめた。と云ふのは、多くの靈媒によつて行はれた數多くの研究の結果によれば、靈魂は四五歲に到るまでも、又時には七歲になつてさへも充分その肉體に宿り切つてゐないと云ふ結論の推定に導くやうな事實があるからである。此れは何處まで眞理であるか？靈魂の宿る時期が相異することがあるなら、それは何う云ふ理由によつてさうであるか？

ヴェツテリニの答へによれば——靈魂が肉體に完全に宿るのは、普通は出產の刹那である。併し懷姙の瞬間から、姙娠の全期を通じて、間歇的に靈魂は形成中の肉體に入り來るのである。靈魂は自分の住居に、謂はゞ自分獨自の個性の判を押すためにやつて來る。そして其處に進行してゐる生理的營みや肉體的遺傳を修正して自己獨自の陰影を附與する。そして彼は出產の時に、自

己のそれ迄の狀態に就いての記憶を全然忘失して、肉體に宿り切るのである。これが一般的法則である。しかし心靈研究家（靈能者）の觀察せるところも眞理である。何故なら、幼くして死すべく定められた小兒――かゝる運命は其の靈魂が既に高き進化をとげ、意識狀態のクリーヤであることを示す――に於ては、靈魂は決して全然は肉體に宿り切らない。これで此迄自分の疑問に思つてゐた點が氷解した。（一九一三年二月二十一日の實驗會）

○

得る處の多い實驗會だつた。

自分はレイヌの靈魂を或る產院へ行かせて、其の觀察したところを詳しく說明させようと決心した。此の實驗は成功した。レイヌの靈體は實際の光景を目擊したやうに思はれる。そして母の胎內に受胎しつゝある靈魂とその母との關係についてハツキリと自分に回答した。彼女は決定的な權威ある調子で答へたので、指導靈が手傳つてゐるのだと自分は推測した位である。しかし、然うでない――彼女は現在の光景を目擊して報告しつゝあるのは彼女自身の靈體のみ全然ひとり切りであると主張した。彼女は云ふ――『わたしは誰から聞いたことを傳へるよりも――ヴェツテリニをどれだけわたしが信じてゐるか貴方はそれを知つてゐる――併しあの方の話よりも、今

話してゐることには、わたしは自信があるのです。それはわたし自身で見て知つてゐるのです。それは眞理そのものゝやうに眞實です。』

彼女の統一狀態は正常である。身體が冷たくなる。自分はレイヌを三度呼ぶ。三度目に呼んだときに彼女は一寸呻いて、『貴方のおのぞみの所へゆく準備が出來ました』とかすかに云ふのである。自分は實驗のために "Refuge Maternel" を選んで、此處がどう云ふ性質の家であるか、そこへ行く目的が何であるかを話さないで、レイヌの靈魂に其處へ行くやうに命じた。

二三秒ののち、彼女は云ふ――わたしは或る家へ來ました。室のなかです。多勢の女の人が腰かけたり、働いたり、縫物をしたりなどしてゐます。みんなお腹の大きい人ばかりですが、姙娠の月かずはいろ〳〵です。自分は彼女の言葉に驚いた。何故なら、自分は多分彼女は出產前後にベツドの中に橫はつてゐる婦人がズラリと列んでゐる大病室を見るだらうと想像してゐたからである(1)。レイヌが間違つたのでないといふことを自分が納得したのは、それから大分のちのことであつた。自分はその後、出產は此の "Refuge" で行はれるのでないと云ふことを知つた。婦人はそこで先づ入院して、そこで裁縫とか產兒の支度とかの輕い仕事をあてがはれる。そして出產が起るであらうと豫測された日の二日前に別の建物に送られ、愈ゝ臨產と云ふことになるので

ある。この點、興味がある。

（1）この點で、この現象が術者と被術者との間におこつた精神交感現象でないことがわかる。（谷口註）

自分はレイヌに充分落ちついて觀察して、受胎の進行中に宿つて來る靈魂のすがたを見るやうに命じた。暫時のあひだ見戍つてゐたが彼女は話しはじめる。彼女の報告は一寸混雜しながら出て來る——その大部分の理由は彼女自身が見てゐる光景にうち驚いたのと、自分が思ひがけない質問を發して彼女を追求したのとによるのである。自分は此のとき行はれた奇妙な對話を茲にそのまゝ再現しようとは思はない。たゞこの對話から得られたところの結論の受胎の過程の一說として書いて置かう。

性交は實際、靈魂がそれに捕へられるところの罠である。（此の言ひ現し方は、絕對的には精確だと云ふことは出來ないが、その精しい訂正は後の實驗錄にゆづることにして、此處にはその當時了解したまゝの行文を保存しておく——コ氏後記）それが低級な靈魂の場合に於けるが如く無意識的であるにしろ、高級な靈魂の場合に於けるが如く意識的であるにしろ、兎も角もこの罠に捕へられて以後は其靈魂は地上生活に屬するものとなるのである。受胎後二三ケ月間は比較的自

由であつて、その靈魂が母の胎内につくられつゝある自己の『肉の宮』を訪れて來ることはホンの時々に過ぎない、併し時が經ち、『肉の宮』の建設が進捗するにつれて、その靈魂は一層頻繁にやつて來る。彼はつくられつゝある自己の肉體に自分自身の特徴を與へ、自分の希望をそれとなく鑄込むために——即ち自己の人格の烙印を押すために來るのである。姙娠七ケ月の頃になつて彼はその小さい肉體に宿つてそこに定住し、その肉體を自己のものとするのである。それから後は靈魂が脱出することは極めて稀となる。そして出産の刹那にその靈魂は完全に肉體内に幽閉される。彼が完全に肉體に幽閉されるのは啻にその肉體なる器官との結合が親密になつたからのみではなく、靈魂自身の意識、記憶……等が自分の這入つて來た心靈化學的條件によつて全く忘失されるに因るのである。

これは一般的法則である。併しこの法則には種々の適用の相異と、樣式の變化とがあるのである。その原因を吾らは研究しなければならない。

低級な靈魂——それはその靈魂自身にとつては偶然に捕へられる。(換言すれば寧ろその靈魂自身には不明なより高き力に支配されて宿り來る)——は、なまくらに胎内の幽閉狀態に滿足してゐる場合もあれば、その反對に罠の中の革紐にしばられた獸のやうに踠きながら、出來るだけ屡

屡、また出來るだけ遙かに其肉體の外へ逃れ出てゐようとして、唯、出産前二三ケ月間だけその肉體に歸つて來るのもある。かうした相異が起るのはその靈魂獨特の反動作用――個性卽ち性格によるのである。併し若し彼が自己の『肉の宮』を整へ準備するために適當の時期にやつて來ないならば、自己の要求に不適當な『肉の宮』を見出す危險がある――卽ちその構造にとゝのはぬ點がある、換言すれば『肉の宮』とその居住者との間に調和の缺乏が生ずるのである。(靈魂とその『肉の宮』との間にピツタリしないところが生ずるのは低級靈の懶惰狀態やその反抗狀態に起因するのであるが、これは贖罪のため、又は精神生活を洗錬し發達させるために、殊更不完全な親の胎に宿つた場合と混淆してはならないのである。)

高級の發達をとげた靈魂は時として意識的に自己の祖先とすべきものを選んで受胎し來るのである。彼は宇宙に『生れ更り』の法則のあることを知り、その法則が攝理の慈手より出づることを知り、我意を放棄して甘んじてそれに從ふのである。何故甘んじてであるかと云へば、スピリツトが物質に同化せられ、意識が無意識の中に徐々に吸收せられて行くのは苦痛であるからである。靈魂が物質の中に同化されるのは、たゞそれだけでも試煉の火であり、たゞそれだけでも時としては或る靈魂は一段高き進化に價ひするのである。

既に述べたことがあるやうに、死産せる小兒の靈魂は、半産して死せる胎兒の靈魂と同樣に高き進化をとげたスピリツトなのである。（レイヌは云ふ――『懷姙七ケ月以後の胎兒には個性が出來上つてゐる。そんな胎兒を殺すことは罪惡です。これを殺したものは報いを受けます。』）

幼くして死する兒童の靈魂もまた高級なスピリツトである。かゝる場合にはその靈魂は全然その肉體の器官に宿り切らないことが屢ゝある。彼らは自己の運命をあらかじめ知つてゐるので、自己の『肉の宮』を造るのにみづから骨を折らうとしないで、その肉體をしてたゞ動物的營みをなすまゝに放置する。（かゝる場合、その生涯が極めて短かすぎて進化の試煉とならないこともある。）

然しながら、玆に極めて稀な場合がある――生れてもその肉體が少しも發達しないで、痴呆の狀態で老齡に入るのである。これなどは前世に於ける非常な過失の贖ひ――恐ろしい罪障消滅法――と解すべきであらうか？ レイヌは答へる。『多分それは罪障消滅法中でも最も辛いものなのです――何故なら此等の靈魂はスピリツトとしての意識が殘つてゐるからです。此等の靈魂は完全に肉體中に這入り切つてゐないで、靈界にゐながらその肉體につながつてゐるがために、スピリツトそれ自身としての意識の一部が存してゐて、そのために鋭い苦痛を感ずるのです。わ

たしたちは此等の人たちに愛を感じ、これらの人たちの爲になることをしてあげなければなりません。併しこれ等の人たちを憫れんではなりません――それはその靈魂の苦痛を増すばかりですから。』

自分は尋ねた――自分がレイヌの靈魂に命じて行かしめたやうな産院、多數の婦人が相前後して出産するやうな産院に於て、出産の途上にあるやうな靈魂は互に出會つて話を交へるものだらうかと。

レイヌは答へる――

『いゝえ、肉體に宿つたといふ事實が彼らを相隔てゝゐます。幽界に屬する感覺が痲痺されて了つてゐます。それで彼らは互ひを認めることは出來ません。』（一九一三年三月二十一日の實驗（言））

○

自分はヴェッテリニの同意を經たので出生の神祕に就ての要點を繰返したづねることにした。自分は秩序整然と問を發して、精密な答へを得たのである。その要點は次の通りである――

最初に注意すべき點は、最初の生命の萠芽に於て、生殖細胞の分裂を惹きおこすのは、自分が此迄想像してゐたやうに『生命の原理』――すなはち靈魂がそれに宿ることによつて起るのでは

なかつたと云ふことである。細胞の分裂をおこす原因は、細胞それ自身の化學的構成に依るのである。細胞の形状に變化がおこつて來るのは、物質の化學的反應によるのであつて、此の點に於てはなほ受胎せんとする靈魂の干渉はないのである。

性的結合は、靈魂が地上の世界へ招かれるための信號旗である——その最も明瞭にして緊要な條件は、精蟲が卵子を貫穿するといふ事である(1)。此の精蟲の貫穿が起るのは交合の刹那に子宮の内に於てするのを正常とするのであるが(2)、各人の體溫、健康狀態その他に起因して、此の現象には非常の差異があるのである。

(1) 或る下等生物に於ては、自然的受精作用に代ふるに化學的藥品を人工的に導入して之を行ふことが出來るが、高級なる動物に於いてはこの方法は何の價値もない。此等微生物の卵は單性生殖的に發育し得るものであつて、導入された化學藥品は發育するための方法を單に左右するのみである。それは卵の進化力を決定しない。それは單に卵に内藏されてゐる發育力の開展に機會を與へるに過ぎない。(コ氏註)

(2) 或る專門家の説に從へば、受精作用は常には交合の刹那に起るものではない。精蟲の貫穿作用は性交後數時間、時としては數日後にさへ起るものであると云ふ。此の駁論に對する回答は備考として後に掲げる。(コ氏註)

肉體なき靈魂が、生れ更つて此の世に來ようとするには、それが意識的であるにせよ、無意識

的であるにせよ、精蟲と卵子との結合によつて引起された震動によつて誘引され來つて、これに捕へられるのである。靈魂が卵子と接觸した後には、ひとたび宿つた靈魂は再び自由に卵子から離れて靈界で活動する。併し此の刹那以後その靈魂は靈的流動體で出來た條線によつて卵に繋がれてゐるのである。

自分は二人乃至それ以上の靈魂が同時に懷姙し來り得るものであると考へてゐたが、それは自分の想像に反してゐた。一回の交接は唯一兒を儲け得るのみである。此の法則は絶對的のものである。受精期間は數日間にまたがるものであつて、第二人目の靈魂が捕へられるのはたゞ交合の反復によつてのみである。即ち再びその卵子に次回の交接によつて他の一つの精蟲が貫き入る。(1)此の際の卵子は前回と同一の卵子である――何故なら一度に受精卵は唯一個しか存在し得ないからである。數個の精蟲が同時に一個の卵子に入ることがあるけれども受精作用を決定するのは唯一個のみである。他の精蟲は自然的に卵子の外へ出て消滅して了ふのである。從つて受精作用を起した精蟲のみが其處に存在する。そして男女いづれかの性別の決定は、懷姙の際の此の精蟲のヴアイブレーションの性質――振動のインテンシティーの強弱――によるのであるが、此の振動の性質は親たるものゝ特殊の狀態に起因するのである。

高き進化をとげた靈魂は、みづから意識して此の世に生れかはつて出るのであるが、丁度好都合と認むべき親たるもの丶生理狀態を利用して、若くは豫め親たるもの丶狀態を都合の好いやうに修正しておいて、自己の希望する性別を選擇して生れ出ることが出來るのである……

（1）ドクトルG氏は自分の此の記錄を讀んで、此の靈示こそ其の現象を說明すべきものだと云ふやうな場合に近頃出會したと云はれた——一婦人、それは勞働者の細君であつたが以前に黴毒にかゝつてG氏の治療を受けたことがあつた。彼女は最近懷姙して双生兒を產んだのである。その中の一兒は出產後二三日にして全身黴毒性の腫物に蔽はれて了つた。G氏はこれに隨分烈しい治療を施したが、出產後七日目に死んで了つた。双生兒中の他の一兒は黴毒の徵候を全然あらはさずに健かな幼兒に成長したのである。ドクトルG氏の想像によれば、此の健かな子供は、その細君が黴毒の良人と交合したほかに、その前か後かいづれかに交合した健康な情夫の子であらうと云ふのである。（コ氏註）

受精後、八日乃至十日頃までは卵の懷姙狀態を變化することが可能である。ヴエツテリニの確言するところによれば、卵は更に行はれた性交または何か他のシヨツクによつて（後の場合は稀である。）收縮し然るのち開口して既に受精せる精蟲を放出することもあれば、それとは反對に一個乃至數個の精蟲の侵入を受くることもあるのである（2）。併しながら更に他の精蟲が卵に受精し來るまでに、一定の胎兒形成の基礎——卵中に獨立せる細胞の區劃が出來上つてゐることが絕

對に必要である。同一卵に第二の受精が起るまでに卵中に獨立せる胎兒となるべき細胞の區劃が出來上るだけの時間の餘裕がない時には畸形兒――例へば頭が二つある子供――が生れるのである。

（２）專門家の說くところに從へば受精後直ちに卵の表面には凝結物が出來て、精蟲を放出することも多數受精を起すことも不可能となるのであるが、此の說はそれと全然反對である。（コ氏註）

受胎に適する生殖細胞の最大活力を有する時期は何時であるかと自分は尋ねた。ヴェッテリニは月經期のうち一二日がその時であると答へる――この時期には卵子は子宮内の充分下部まで下つて來てゐて、精蟲は直ぐそこへ到達することが出來るのである。精蟲は喇叭管中へ進入し、例外的には卵巢内へさへも進み行くことも出來るが、その進行する距離に比例してそれは次第にその活力を失ふ、從つてそれだけ姙娠の效果に影響するのである。

胎兒が形成せられながら、靈魂がそれに入り來らないこともあり得るのである。かゝる狀態に於ては、その胎兒は半産する。（レイヌの云ふところによれば、かゝる場合は、進化を早めるために運命が母に課したる一種の負荷であり、苦役であると。）普通、卵子は月經期の後にのみ子宮へおりて來るのであるが、月經中に受精することもあり得るのである。併しこの場合には、性交そ

のものが強烈なヴアイブレーションを惹起して、卵子が突如として子宮内へ降り來り、姙娠を可能とするのである。但し、此の瞬間に於ける受精は、月經中の生理狀態に固有な不純物を卵中に導き入れる恐れがある。

ヴエツテリニは此の問題についての自身の教示が、多くの點に於てなほ現代の科學上の學說と一致してゐないことは承知の上であると云つてゐる。自分が反對論を提起すると、ヴエツテリニは『科學上の學說は常に改變をこととしてゐる、此の問題についての學說も次第にみづからを修正して吾が說に追隨して來るだらう。それに就て何等心配する必要はない。』と、簡單に答へるのである。茲に揭げた彼の說明は或る一部の專門家には此の問題の解決に却つて其の緒を與へるであらう。（一九一三年五月二十三日の實驗會）

〔コ氏の備考〕

ドクトルN氏（此の人はみづから靈魂の生れ更り說の信者であることを認めてゐられる）は自分の手記を通讀して、その讀過中に起つた氏の反對意見を深切にも書いて下さつた。

すべて自分の手記にあらはれたる報告又は敎へは、スピリット自身の意見若くはレイヌと云ふ靈媒に起つた心靈現象の忠實な筆記であつて、自分自身に責任はない。それでN氏の批評に對して自身は少しも論爭

する意志は起らなかつた。それで自分はたゞ交靈狀態にある靈媒にN氏の反對論を讀んで聞かせて、彼女の答ふるところを筆記したのである。それを自分は次にかゝげる。何故なら彼女の答へはヴェッテリニの教への或る點を完成することになり、又それを釋明することになるからである。自分がN氏の反對意見を催眠中のレイヌに讀んで聞かせると、レイヌは一瞬間それを傾聽してゐるやうな樣子をし、そして直ちに明瞭に精しく答へるのである。

（駁論）受精の瞬間について——或る實驗の結果、受精は性交のとき常には直ぐに行はれるときまつてゐないやうである。精蟲は數日間生存することが出來、性交後若干時間後に卵と結合することも出來るのである。（N氏）

レイヌは直ぐさま答へる——『尤も、それは精蟲は數日間生きてゐて、隨分とのちに卵と結合することもございますわ。併しそんな場合にはスピリットが來てゐませんから、靈魂が宿るといふことはないのです。性交は受精作用の原因ではありません。しかしそれはスピリットを招び靈魂を捕捉して宿らせる誘引となるのです。スピリットが來てゐなくつても、精蟲は卵と結合することが出來ます。併しそれでは靈魂が宿つて來ることは出來ないのです。或る場合には胎兒まで形づくられます——併しこんな胎兒は生活不能です——そして半産又は死産して了ふのです。』

今度は自分(コ氏)が異論をとなへた――それでも人工受精が成功した例があるではないかと。

レイヌは答へる――『えゝそんな場合は、意識してこの世に生れ出て來ようとして態々やつて來た靈魂が宿つて呉れるのです。それは熟慮して畫策された行爲です。靈魂みづからの選擇です――偉大なスピリットにありがちな意識的受胎です。しかしそれは極めて稀です。若し人工受精を一般に盛んにやるやうになれば、生きた子供の生れる割合が極めて少ないでせう。』

自分は今丁度、『出生』問題に關するノートを寫し直してゐる時なので、人間の『靈魂の受胎』の法則は動物にも當て嵌まるか――即ち動物の場合にも一度の交合に受胎し來る靈魂はたゞ一つだけであるかと訊いた。

(答)――動物に就ては法則は別である。唯一回の交合にもそのクラスの數個の靈魂が宿つて來るのである。(一九一三年十二月十日の實驗會)

十七

スピリット自身は如何に『死の神秘』に就て語るか

ヴェッテリニは語る――死期はあらかじめ定められてゐる。

病氣及び災厄は、あらかじめ定められたる運命を成就せんがために、靈界の不可視の使（スピリツト）が其の人を導くところの手段である。『生』は、時として臨んで來る『死』に對して極力爭はうとする。此事は死の神祕を恐怖する未發達靈魂の人々に於て特にさうである。併しながら靈界の使者が靈魂の脱出するのを待つてゐる。そして此の世の終焉が來たときには、そのメツセンヂヤーが助けてくれる。若し必要な場合には、彼は強ひて靈魂を脱出せしむることもあるのである。

肉體をはなれたる靈魂は、高級なスピリツト――白色のスピリツトである――の集會の前に伴れて行かれる。高級なスピリツトは此の新參の靈魂の進化の程度を鑑別ける。若し進化の程度が低ければ、その靈魂は或る長期間、或は短期間、地上の雰圍氣内を彷徨しまはり、自己が肉體的生活を營んでゐたところの生活を囘顧し、他界より人生の爭鬪を觀察して自己の責任を自覺せしめられ、自己の意識を發達せしむることを學ぶのである。此らのことは、先づ新參の靈魂が高級のスピリツトに引廻されてするのであるが、やがて唯ひとり、或は同じ程度の進化にゐる靈魂たちと一緒に、或は無關心な氣持で、或は悲嘆にくれながら、或は愉快な心持で（此れらの氣持の相異は靈魂そのものゝ進化の高さで決まる）空間を迂路つきまはる。そしてやがて時が來る――そ

れは多少とも長き期間の後である。靈界の司配役のスピリツトが、彼を再び地上に送る――それは新しく生れかはつて、尚一層その靈魂を向上せしむるための經驗を受けしめんが爲である。若し、肉體をはなれた靈魂が既に秀れた進化をとげた靈魂である場合には、みづから進んで、或る一定の目的のために更にもう一度地上の世界に生れかはつて出る事もあるのである。その一定の目的とは、自己犠牲の行爲によつて、自己を一層高き進化の圏内に運ばんがためである。

ヴェツテリニの如きスピリツトは、たゞ斯くの如き目的のために、此の地上に歸り來るのである。併し、標準としては、此處まで高き階級に達したる靈魂が更に一層高き進化をとげるのはその靈界に於ける活動によつてゞある。彼等は白色のスピリツト(註、參照)となる――地上の世界に關するあらゆる事件の比較的最上權を有する審判き役となるのである。白色のスピリツトは更に進化をつゞけて他の『靈圈』に入るのであるが、この『靈圈』のことは人間にとつては知り難く了解し難きものである。ヴェツテリニはそれについて(少くともその瞬間)は語ることを拒んだのである。しかしながら、自分は此の一段進んだ『靈圈』否むしろ一段進んだ狀態に於ては――自分が茲に狀態と云ふのは、彼等がより高き地圏に生れかはつて來るのではないやうに思はれるからである――スピリツトは凡ゆる地上的な興味を全然超越して了つてゐる。かゝる興味は彼等

にとつては全然無意義である。彼等は地上的なるものより一段高く生長して了つてゐる――と云ふことを言葉の端より綜合し得た。(1)――(一九一三年二月十九日)

(1) 靈界は何處にあるかの問題は今なほ論議の盡きない問題である。併し地上に浮浪する階級の靈魂の住む世界が吾々の住んでゐる此の地上と同じ圏にあると云ふことはたしかである。空氣とエーテルとは同じ場所に共在してゐるであらう。それと同じやうにスピリットと吾等生者とも同じ場所に共在し得るのである。吾等は死せば『空氣の世界』から出て『スピリット質の世界』に移行する。『スピリット質の世界』は科學者の所謂るエーテルとは別ものゝやうである。が、『空氣の世界』と共在し得ることエーテルと同樣である。この地上に浮浪する階級の靈魂の世界は所謂る『浮浪靈の世界』であつて、靈魂の落着くべき純粹の『靈圏』ではないやうである。靈圏の最下層は、地獄乃至煉獄的狀態であつて、既に『浮浪靈の世界』ではない。最下層の上層即ち第二層靈圏には常人即ち極めて普通の靈魂が住み、地上に指導のために神懸りして來るスピリットの世界は、此の第二『靈圏』の上層に住むものが多いとのことである。元英國心靈科學大學の學長マッケンヂー氏が自ら靈魂出遊の方法を用ひて探檢したと稱するところによれば、靈界は七圏にわかれて地上の靈魂を教育するために降つてくるのは、概ね第二靈圏の上層にゐるスピリットであつて(これが青色のスピリットである。此のスピリットが一段の進化を遂げれば、其の青色が愈々冴

えて白色のスピリットになると云ふ）それ以上の階級の靈界人は滅多に地上の世界のことには關係しないと云つてゐる。靈媒に憑りて人間を惑はせるのは『浮浪の靈』が最も多く、人間界指導の爲に神懸りする第二層の靈界人はこれに亞ぎ、白色スピリットに至つては極めて稀である。マッケンヂー氏は靈界の各圈と各圈との距離までも計つたと稱して其の數字を發表してゐるが、距離は相對的認識の尺度の一種であつて、境を異にするとき、（即ち靈界に於ては）その數字が地上の吾々にとつて何を意味するか頗る不明瞭である。併し靈能力者が靈魂を出遊さすとき、上昇又は下降の感覺を味ふのは事實である。『浮浪靈の世界』は現世的地上雰圍氣内に共存し得るが、靈圈の第一層は或る靈魂の通信によれば、地表よりも低しと云ひ、或る靈魂の通信によれば地表よりも高しと云ふが、位置の高下や、距離の感覺が『思念と殆ど同時に、その念ずる場所に到達し得るやうな靈魂』にとつて何を意味するかは、吾らの地上的感覺を以て類推することは出來ない。又或る靈魂は肉體死後、無意識狀態のまゝ、自己に割當てられた靈魂に伴れ行かれて其處で目覺めるから、その靈魂が地表よりも上層であるか下層であるかを知らないことは吾らが睡眠中にビルディングの幾階目かに運ばれて目覺めた時に自分が何階にゐるかが判らないのと同樣であらう。（谷口註）

自分は歸幽せる靈魂が白色のスピリットの審判廷に連れ行かれて審判きを受けると云ふ問題に復つて往つた――それは吾等の地上の社會的秩序の觀念にあまり似てゐるので面白くない氣がす

ることを自分は告白したのである。何故、靈魂の階級別けが自動的に行はれないのであらうか。一つの靈魂は其の前生に於て、他の人間の批判には關係なしに一定の進化を遂げる。所謂る審判廷なるものがある時は、必然に人間的要素が入り込むのである。では、此の靈界の審判廷――スピリツトの設立した法院――スピリツトたち自身の考案で設けられた裁判廷――は從つて辯論に付せられるものであらうか？　それとも、それは一層高い法則の機能であらうか？

ヴェツテリニの答へる所によれば――何よりも先づ吾々は、地上の世界の關係を云ひ表はす言葉で靈界の生活狀態を說明しなければならぬのだといふ事を念頭に置いて貰はなくてはならないのである。現世の人間の言葉で靈界の生活を言ひあらはさうとするとき、混雜や間違の起るのは已むを得ない。さて靈界の審判は、吾々の言葉の意味するやうな意味では、白色のスピリツトの宣告する判決でも、有罪無罪の宣告でもないのである――それは全くちがふ。死後肉體をはなれて歸幽せる靈魂は、此ら高級なるスピリツトの前に、生前如何なる生活をなせしかについての責任を自覺せしめられるために連れて行かれる。歸幽の靈魂の階級別けを生ずるのは、此時生ずる靈魂自身の良心の審判によるのである。換言すれば、新參の靈魂が白色のスピリツトの前を通過することは、丁度吾らが鏡の前を通過するに等しいのである。彼はその時、自己自身の本當の

姿を自覺するのである。

地上の生活とは全然異なる狀態を吾々は理解することは不可能であるがために、靈界の生活の祕密を闡明することは困難なる問題である。併しヴェッテリニは尙一層充分なる說明を後の機會に與へることを約束した。吾等は待たねばならない。（一九一三年二月二十一日）

○

……『死』の一般的問題について自分は又たづねた。ヴェッテリニは說明を單純化するために進化の程度を四段階に分けて、此等の各段階の靈魂が地上の生活から靈界へうつり行く狀態を說明してくれた。

第一階級――最低級――この階級の靈魂は自己の宿つてゐる肉體を最後の極度まで使ふのである。その靈魂は自己の機關とする肉體に言葉通りしがみついてゐるのであつて、此の階級の靈魂を肉體から引離すためには、時として靈界のスピリットの干渉が必要であるのである。此の階級に於ては、死後少しも意識をもつてゐない。かゝる靈魂は地球の低い雰圍氣内を謂はゞ『昏睡』の狀態でなまくらに彷徨しながら、次なる生れ更りの時期を待つのである。

第二階級――に於ては肉體を去つて歸幽せる靈魂は靈界のスピリットの群によつて迎へられ

る。これらのスピリット達は歸幽の靈魂の意識を目覺めしめ、その責任の觀念を呼び起さうとするのである。彼等は歸幽の靈魂の能力に應じて死の現象の何たるかを理會せしめようとするのである。かゝる歸幽の靈魂が今度生れかはつて此の世に出る場合には、前なる生涯に於てしたところの生活――それが善であらうと惡であらうと――の反動的生活を營まうとするのである。そして此の反動的生活を通じて彼は自己の責任感の幾分をあらはにするであらう。

第三階級――の歸幽の靈魂に於ては、既に或る程度の意識を發達させてゐる。彼は責任を知つてゐる。それは歸幽の前に於てさへも、睡眠又は昏睡狀態中既に、自己を待つてゐるところの靈界の狀態を豫見することが出來るのである。死に面してその人が一定の態度――恐怖乃至平安――を示すのは此の豫見に因るのである。卽ち睡眠又は昏睡中の豫見にもとづいて意識が昏睡から覺めたときに漠然たるそれとなき豫感におそはれるのである。かゝる靈魂が愈〻肉體をはなれて、靈界の案內者に導かれて白色のスピリットの居列ぶ前に伴れ行かれゝば、彼は自己の過去の生活をスッカリまざまざと意識せしめられ、その責任を感ずるのである。此の程度の進化狀態に於ては、歸幽の靈魂は自己の未來の生活に橫はつてゐる試錬の火を理會と諦念とをもつて受けることが出來る――何故なら彼みづから試錬の火の必要をさとつてゐるからである。

第四階級――最後に此の階級の進化を遂げた靈魂に於ては、臨終に臨んで運命の修正を申出ることも出來るのである――これは今日、青色スピリツトがレイヌに說いたところであるが、ヴエツテリニはそれを次の如く說明した――運命によつて定められた死期が近づいて來たときに或る程度まで發達した靈魂は、肉體の睡眠中又は無意識狀態中に肉體を脫出して、司配級のスピリツトの處へ相談に行くことが出來る。此らの司配級のスピリツトに助けられて彼は自己の生活について負ふべき責任とその結果とを完全に意識する。このとき、若しその靈魂が――既に高き進化をとげてゐるのではあるが、――尙暫くの間この世に生れ代つて來る必要がある場合には、彼は豫め定まつた時刻に死なゝいで、その瞬間まで耐へしのんで來たところの同じ苦痛の狀態を、數年間乃至數ケ月間繼續して、普通ならば受けるべき筈のもう一度此の世への『生れ更りの』緩徐な過程を踏まないで、地上に於ける最後の進化を、生れ更りを省略して、高速度に完了するのである。

此れは白色のスピリツトの非常な恩惠的取計らひのやうに思はれるのである。(一九一三年四月十四日)

○

（此の日G氏夫人も實驗會に立會つて下さつた。）

靈媒レイヌの不健康にも拘らず實驗會は旨く往つた、靈媒の靈魂の出遊を試みたが鮮かに行かなかつた。彼女の靈視は緩慢で混雜してをり――彼女の靈魂はたゞその肉體に歸りたいの一念をもつてゐた。これに反してスピリツトの言葉を取りつぐのはハツキリしてゐた。

彼女は發熱してゐたのにかゝはらず速かに統一狀態に這入つた。が彼女は冷たくはならなかつた。自分が問ひかけたとき、彼女は云ふ――わたしは何も見てゐません。わたしは此處にゐるのです。肉體を離れてはゐないのです。何かわたしに爲せて下さるだらうと待つてゐるのです……

自分は自分の亡父の所持品を彼女に渡して、此の品物の持主をさがして此處へ伴れて來るやうにもとめた。（自分は自分の父自身から死んで幽界へ往つたときの話を聞きたかつた。父から詳細の研究的な話が出來るかどうかは疑問であつた。しかし自分は實驗して見たかつたのである。）

數瞬間ののち、レイヌは自分の父は此處に來てゐると云つて知らせた。自分は自分の希望をレイヌに說明して、父の死の經驗を精しく話して吳れることが自分にとつて、又自分の從事してゐる仕事についてどんなに興味深いことであるかを亡父にとりついで吳れるやうにもとめた。

レイヌは取りつがうとする話を長い間傾聽してゐた。自分は待ち遠しくなつて、早く話してく

れと促がす。今あの人が憶えてゐられるだけを話してゐる最中です、默つてゐて下さいとレイヌは云ふ。最後に自分は、彼女が取り繼いだ言葉の端々から、父が『死の自覺』なしに靈界へ往つたものであることを察した。父は何も意識しなかつた。何らのショックも受けなかつたのである。父は突然、それは丁度夢でも見るやうに、自身を案内して吳れつゝあるスピリットの群にとりまかれて、遙かに高く、極めて高く、またほかのスピリット（これが司配級の靈であることが後でわかつた）達が集つてゐるところへ伴れて行かれる自分自身に氣がついた。司配級のスピリットは父に對してその過去の生活を語らしめ、過去生活のうちにある善惡をさとらしめようとしたけれども、それは無駄であつた。父は何にも理會しなかつた。すべてが父にとつては混惑の種子であり、非現實的なものに思はれた。かうして父が過去の生涯の責任を理會しないので、案內者たるスピリットは彼をもと居た下層の地球の雰圍氣へ送りかへして全然無意識の狀態で放置したのである。父にとつて自身の境涯がはつきり判つて來たのはそれからズツと後の事であつた。彼が現世と幽界との差別や意識をつかむことが出來たのは、實に近頃――吾々の交靈會に出て來るやうになつてからである。今や光が彼の意識をつらぬきつゝある。彼の記憶は一層ハツキリとなり、彼は眞に理解しつゝあるのである。（父が自身の狀態について云へるところはヴェッテリニ

が第二層に屬すると云つたところに符合するのである。)なほ色いろ話したのちに自分は父にその勞を感謝し……それからレイヌに靈魂遊離の實驗をするやうにもとめた。(一九一三年四月十六日)

○

自分はヴェッテリニに話したいと申出た。彼はそこにゐなかつた。來るのにながくかゝつた。レイヌはその理由を知つてゐる――今迄吾等と一緒にゐたスピリットが此の邊りの雰圍氣を汚して了つたのである。彼が此處へ來るまでに前のスピリット達から放射したヴァイブレーションが發散して了はねばならないのである、謂はゞ屍臭を脫しないスピリットの雰圍氣は彼にとつて毒素のやうなものであると。

たうとうヴェッテリニは遣つて來て自分の問に答へようと云ふ。

自分は先づ尋ねる――突如と見舞ふ急激の死は靈魂の進化に何の意義があるか。

答――急激の死と雖も豫定されたるものである。それは決して偶然ではない。それは正常の進化の道程を進んでゐないで、永久に此の世への輪廻を繰返さねばならないやうな或る人々の靈魂の進化を早めるために『攝理』によつて決定されたものである。急激の死によつて起されたるショックはその人の靈魂に強き反動を惹き起して直に進化の正道を進ませはじめる。その人の靈魂

は反逆せんとし、理解せんと試みる。『理解せんと試みることは進化することである。』此の急激の死が自己犧牲の行爲(例へば他を救助せんが爲の死)に原因するといふ如き場合には、彼のヒロイズムまたは自己犧牲の功德は、機械的なショックの上に追加され、その靈魂は進化の階梯をたしかに大蹈步でのぼるのである。

此れまでの交靈會に於て、レイヌが云つたところに據れば、同一家族の人員はその靈的流動體が同一であるべき筈なのは明瞭である。で自分は此の第二の疑問を發する――靈魂はすべて自分自身の靈的流動體を創造するのではないか？　それではどの部分が世襲的であるのか。

簡單にするために長い答の要點のみを摘記して置く。――

學理的に云へば、此處に、今迄一度も肉體に宿つては此の世に出たことのない靈魂があるとする。この靈魂の靈的流動體(幽體)は特殊の震動をもつてゐない謂はゞ白紙的又は非晶的實質のものである。ところが此の靈的流動體が受胎作用の渦卷のなかにとらへられ、胎兒形成中母胎のなかに養はれ、父母の有するヴァイブレーションの印象を強くうける。父母は自己自身より抽出した實質で器官をつくつて子に與へるので、子の靈的流動體は消し拭ふことの出來ない印象を與へられてそれを永遠に擔ふのである。生後になつて本當に個性的な生活がはじまるとき、その

靈魂が自己の靈的流動體のヴアイブレーションに更に他のヴアイブレーションを加へようとするのはその反動である。併し父母より承けついだヴアイブレーションを破壞するのではないのである。

肉體が死するとき、此の靈魂は再び靈界に入るのではあるが、そのとき彼は最初父母のヴアイブレーションに影響され、次いで現世の生活中、自己靈魂の反動的改造によつて影響された靈的流動體を有するのである。

此の靈魂が、再び現世に生れかはつて出る場合には、前にまつたく同じ過程を繰返すのである――第一、父母より受くる拭ひ難き印象、第二、靈的流動體に加ふる自己自身の反動的改造、此等の二つの影響が、以前に存するヴアイブレーションの上に接ぎ木せられる。併しながら先在するヴアイブレーションは決して破壞されて了ひはしないで、此の靈魂が幾度うまれ代らうともつづくのである。これらの相影響するヴアイブレーションは相合して、その靈魂にのみ獨特な配合の靈的流動體を形づくる。併しその配合狀態は獨特であるとは云へ、彼の祖先全體の震動的影響は依然として存續するので、これを見別けることが出來るのである。

上述せるところによつて論理を趁うて行けば『體そのもの』の進化と云ふ問題に觸れるのであ

る。現世に生れ出た靈魂は、その靈的流動體を仲介として肉體そのものを支配する反動力を有する。肉體（卽ち地上の器官）が一層デリケートにせられ、精妙にせられ、約言すれば洗錬されるのは靈魂の有するこの傾向、卽ち向上の熱望、及び意志が靈的流動體を介して肉體に影響を與へるのである。そして此の肉體の器官の進化洗錬は遺傳によつて繼承せられて、次第に子孫は一層進化せる器官を有するに到るのである。

子孫を有たない人々も、肉體器官の進化に、それでも幾分は助けをなすのである。と云ふのは死後彼らの肉體を構成する諸要素は空間に放散して、それが利用されて新らしき肉體の組織がつくられる上に、その獲たる價値だけの貢獻をなすのである。（一九一三年四月二十一日）

○

吾等は『死』の問題について既に敎へられた事項につき繰返し質問することを許された。自分は自分のノートに書いておいたことを極度の注意を以て確めた。そしてつひに、進化の各段階に應じて靈界へ移行する狀態を詳細に說明して貰つた。既に此の問題について自分が記錄しておいたところは正しい。玆にはわづかばかりの補正をノートして置かう。――

人間の生涯は攝理――『不可知の手』――によつて定められてゐる。恒星と遊星との運行の影

響の下に一定の姙娠を遂げ、出産し、そして一定の時日に死すると云ふことは攝理の手で極められてゐる。が、この運命は修正を受くるのである。審判階級のスピリツトが干渉するのは茲である。若し運命の修正によつて個體靈魂の進化がたすけられるならば、星の運行によつてあらかじめ定められたる死の時期を早めたり遲らせたりするのである。(例を云へば、レイヌの父系の祖母は最近に死んだのである。これについてエグエンツオリニの語るところによれば、彼女の死は星の影響に從ふならばもつと遲く來るべきであつたのである。然るにその保護のスピリツトが彼女の受苦を最早や充分なりとみとめて直ぐ彼女の靈魂を釋放したのである。これと反對に受苦の期間を延ばして死期を遲らせることも起り得るのである——彼女の母系の祖母は本來なら此の四月に死んでゐた筈であると。)

『死の使者』(Messengers of Death)は此の仕事にばかり從事してゐる特殊階級のスピリツトではないのである。彼等は新たに歸幽せる靈魂の世話をする役目の一群のスピリツトに屬するものである。『死の使者』は數人のこともあれば唯ひとりのこともある。

自己の責任を知ることが出來るだけに意識の發達した靈魂は幽界へ移行するや否や、彼の生前のあらゆる行爲をまざまざと見る。そして自己の行爲を精査して生じた悲嘆と悔恨の情とは、彼が次

に此の世に生を受けたとき一段高き進歩を遂げるための努力を喚起するのである。併しながら自責の意識の發達してゐない靈魂も、時として靈界の審判廷の前に伴れて行かれると云ふのは彼は其時は何もハッキリ自覺しなくとも、漠然と或る執拗な印象を受け、やがて時が來ると此の印象が彼に反省と省察との機會を與へるからである。

充分發達せる靈魂は、自身が次の世に受くべき運命を選擇する特權をもつてゐる。彼は、最早輪廻の波動にたゞ受動的のみには從はないのである。彼は自己が欲するならば靈界にそのまゝ止まつて其處で自己の進化をつゞけることも出來る。また彼は他の人間の進化をたすけるために、周到なる考慮の後に相當な位置に生れかはり出て、他を利することによつて自己を一層利するのである。靈界に於ける進化は一層速かなれども一層困難なのである。それで多くの靈魂はおそくとも苦痛少き現世の修業を選んでゐる。地上の人間にとつては此の靈界における進化が何より成立つてゐるかを知る事は出來ない。吾等人間の摑むことの出來る唯ひとつの點は、先づ自己自身をあらゆる現世的な繫縛、あらゆる地的な興味から絶ち切つて了ふことである。徐々に、彼は與へられた運命を修正し得るまで進化をとげる——彼は斯やうにして『運命』そのものゝ王座に近づく。併し『運命』そのものゝ本質は依然として不可知である……高級のスピリットは『運命

の神祕』に就いてその眞相を穿たうとその一部の努力を捧げてゐる。此等のスピリツトは運命が不可抗的に各人の生活の上にそれ自身を課してゐることを知つてゐる。或る事件――幸福もあれば不幸もある――は避くべからざるものである。『不可知の手』――神祕な謎の手が豫めそれを用意しておくのである。

ヴエツテリニは說いて曰く、或る『生命』が受ける諸種の境遇の凡そ一半は業運の法則によつて決定せられてゐるのである。殘餘のうち半分は個體の自由になし得るところで他の半分は高級なるスピリツトの修正の手に在るのである。各人の生命を支配する此等諸種の影響要因の區分は明瞭で、規則的で、權威ある語調でレイヌの口を通じて語られた――ライフの半分は業運によつて決定せられる。四分の一は各人の自由意志に屬する。他の四分の一は高級靈の手に委ねられてゐる。

スピリツトの修正の手が必要なことは明かである。然らざれば業運のみが絕對なものとなり、道德は覆され、進化も何もあつたものではないからである。*

*『神の子』なる人間の實相を現象世界(現界、幽界、靈界等を通じて)に實現するのが人生の目的である。そして人間の運命とは『神の子』なる人間の實相(因子)が、現象界に投影する時、時間的空間的に展開す

るのに、おのづから一定の順序を追うて展開して行くやうに大體定められてゐるのを云ふ。それは譬へば朝顔の種子の中には既に『花』の因子が包藏されてゐるが、それが現象界に『花』となつて完成するまでには、日光に逢ひ、濕氣に遇ひ、芽を出し、蔓を生じ、つひに花を開くと云ふやうに大體一定の順序を追つて展開するが如きである。斯くの如く『神の子』なる實相人間もその投影の現象界に完成するのには大體一定の時間を要し、植物が日光に逢ひ、雨露に遇ふが如く、或は幸福に惠まれ、或は逆運と戰ふことによつて、つひに實相人間の現象界への投影を完成するのである。併し、その投影が完成するには、その投影は『念波の集積』で成立つてゐるし、人間は心の自由を有ち、自由に實相の悟りによつて念波を淨め得もすれば、迷ひによつて念波を汚すことも出來るのであるから、現象世界に實相人間を顯現する過程（進化の過程）を心次第で縮めることも長くすることも出來るのである。靈魂進化の過程を短縮するのは念の淨化による。念の淨化には實相を悟ることが第一であり、物質慾に捉はれざることが第二である。物質慾に捉はれざるためには『物質本來無し』の眞理を悟るが第一である。『物質本來無し』の眞理を悟る程度に達せざる者には、物質の快に捉はれざるために自ら進んで苦を求めて喜ぶか、物質の快を求めて却つて苦難を得る體驗を通してつひに物質慾に捉はれざるに到るかの二途しかない。前者は自ら進んで嘗める苦行であり、後者は他動的に業運として來る苦難である。その他に過去の宿業の自壞する過程として、靈的流動體に擾亂を起す病苦もある。苦難がみだりに取去られず、多くの靈魂が苦行の價値を力說してゐるのは

此らの色々の理由によつてゞある。(谷口註)

自分は自殺の意義を尋ねた。

答――結果から言へば、自殺も『運命』*が或る人の前に置いたところの『定め』である。併し彼は四分の一だけの自由意志をもつてその運命を拒むことが出來る。彼は遺傳的傾向に抗ふことが出來る。そして、場合と、彼自身との價値とに據つて、保護のスピリツトが助けてくれたり、助けて呉れなかつたりするのである。

*此場合の運命とは業運卽ち『業の流轉』である。惡念波の集積が自壞する必須の過程である。(谷口註)

他に興味ある點一つ――高級の發達をとげたるスピリツトは自己が今迄多大の努力を經て贏ち得たる優越な地位を利己的に濫用して靈界に懶惰の生活を送らうと思へば送ることも出來るさうである。併し此の僭上な行爲はいつまでも續かない。或る時期がくれば強力な磁力の流れが宇宙をかすめて走る。この磁力の流れに打たれて斯かるスピリツトは地上に落される。かやうにして懶け者のスピリツトは其の無活動の狀態を嫌でも拋棄せしめられると云ふ。(一九一三年五月七日)

○

自分はステツド氏のことに話をもどした――彼の生活――かくの如き寛大な生活――と其の死

のことを語つた。ステッド氏よりの靈界通信によれば、氏は死すると直ぐ完全に意識をもつてゐたのである。氏の悦びの深さが覗はれる。氏はその靈界通信で言葉につくしがたき幸福……等を數々のべて已まない。ヴエツテリニはステッド氏の事に就ては何も知らなかつた。が、『そんなに速かに幸福を經驗することが出來るのは非常に高級な靈魂に相違ありません。……そのことについては、貴方の被仰る彼の生前の行爲が、彼の靈魂の偉大な進化を證明してゐます』と附け加へた。

ステッド氏の靈界通信にあらはれる荒誕無稽のやうな奇怪な靈界の光景を、如何に解すべきであらうかと自分はたづねた。(ステッド氏は自己が前生に爲した善行を描いた引幕を壁に飾つた靈界の宮殿や、驚くべき其の立派な自分の休息所のことなどを書いてゐるのである。)ヴエツテリニは曰ふ――『此れらは地上の人間にとつて不可解な靈界の感じや感覺を人間の知識に判るやうに飜譯したものである』と。(一九一三年十一月二十八日)

〔備考〕急激の死は何故に、進化の本道を進まず地上の生活に執着せる靈魂に進化を强制する結果となるか。(此の理由は地震、洪水、戰爭等による數百數千の人間の慘死の場合にも無論適用せられるのである。)

普通の死の場合には、靈魂は徐々に靜かに肉體の全表面よりたちのぼる霧のやうに脫出する――そして靈的流動體(複體)全體の分離が完全に行はれる。

急激の死の場合には靈魂は突如として口より逃れ出る。恰も蒸汽が汽罐の破裂口より逸出する如く靈魂が急遽逸出する際、地上により多く牽引されてゐる靈的流動體の重濁せる部分が取殘され、精妙な念波的存在なる靈的流動體のみが靈界に移るのである。この取殘された重濁せる靈的流動體こそ、彼の地的繋縛――彼の今迄の惡しき傾向、趣味、習慣等――を構成してゐた部分なので、かゝる部分は通常死の場合には靈界まで持ち越され、再び此の世に生れ代る際にもその念波的存在が執念く附き纏うて惡傾向を持續するものである。

これを喩ふれば、普通の死は、ゆつくり構へた引越しのやうなものである。彼は充分時間を費して、もとの住居の例にならつて、もとの住居を飾つたところの品物で矢張り今度の住居をも飾らうとして、家具調度、美術品、骨董品、記念品などを念入りに運ぶのである。それで彼は再び住居はかはつても從前の習慣に從つて生活し始める。ところが急激の死は、喩へば火災の際に已むを得ず立ち退かねばならないやうなものなのである。彼は取るものも取り敢ず手と身とで逃れるべく強ひられる。彼は新生活を營み、新しい財寶を得るために、スッカリ新規播き直しをやらなければならないのである。(コ氏註)

十八　スピリット自身は如何に『神』に就て語るか

自分は午後四時に彼女をマグネタイズし始めたが、レイヌは直ぐに神秘の郷へと出發した。彼女は冷たくならなかつた。病氣で熱が出てゐた。併し、統一狀態はやすらかに長いあひだつゞいた。つひに五時近くなつて、レイヌは話しはじめた。初めは言葉が不明瞭であつたが、次第々々に明晰の度を加へて來た。彼女自身の問を繰返して、又自身の口で指導靈の答を鮮かな語調で繰返すのである――吾らが一切を明瞭に了會することが出來るやうに彼女がさうさせられてゐるのだと云ふことを自分はさとつた。

ヴェッテリニがレイヌに與へてゐるところは『生』と『死』との問題についての靈示である。潑剌として生彩ある其の對話は、速記によらなければ捉へることが出來ない。自分は彼女が傳へて呉れた要點のみを次に誌す――

現世(地上への出生)は吾々の進化のために課せられたる試錬(ordeal)である。現世の生活中、吾々は自己自身の傾向及び渇仰の如何に從つて、高級又は低級のスピリットの影響乃至干渉を受けることがある。吾等は自己がある狀態及び思考によつて善靈または惡靈を惹きつけた

り拒斥したりする、約言すれば各人の靈魂は現世にゐながら幽界の同僚をもつのである。

(註)クリスチャン・サイエンスの一派や『新思想』等の『想念の科學』(Science of Thought)が、自己の思念若しくは思想の力によつて運命を支配し得ると云ふのは、世界は唯心の所現であるからと云ふ哲學的解釋も正しい。が、同時に、唯心の現す過程の一部として、善思念が善靈を呼びむかへ、善靈の運命の修正力を利用するに據ると云ふ心靈學的解釋をも追加することが適當であらう。(谷口註)

各人の守護靈(Spirit Protector)は、尙彼等よりも一層進化せるスピリツト(吾々人間の運命を修正する或る程度の力を有つものらしい)の指揮の下にある。而も此の高級のスピリツトは尙それ以上のスピリツトに支配されてゐるのである。(すると幽界には嚴重な階級的教職政治が存在するものらしい……?)數回レイヌが『神』と云ふ言葉をつかはうとしたのは注目に値ひする。併し彼女はそのたび毎にそれを取消した* ――明かに、それはヴエツテリニの訂正によるものである。吾等はレイヌがかういふのを聞いた――『え〻……ぢやあ、吾等を支配してゐるもの……吾吾の上にあるもの。』そして或る瞬間なんかはレイヌはヴエツテリニの方を振向いて云つた――『では、あなたは、貴方は高級の靈界人でせう。神さまを御覽になつたことがおありですか?』しばらく傾聽したのち彼女は呟く――『あ〻、さう、さう……成る程、極めて高級なスピリツト

の上にもまだ――白色のスピリットの上にもまだ――その上にもまだ――そしてまだその高いスピリットさへも其の上のスピリットに支配されてゐますの、まあ!』(一九一三年二月十九日)

*私は『生命の實相』全集光明篇(第七〇頁)に『本當の神は靈媒にかゝらない』と書いた。それは此の靈界通信でも判るとほり、高級靈の上にまだ〳〵高級靈があり、それが如何に高級であつても、それは『靈』即ち第三義の幽身であつて、本當の意味で絶對神ではないからである。(谷口註)

價値ある靈界通信――高き道德性がそれに表現されてゐるばかりでなく、哲學的興味さへも見出されるやうな靈界通信に『神』の名が極めて巧みに使用され、神意だとか神の御旨だとか如何にも馴れた使ひ方がしてあるのが見出されるのは如何に解すべきであらうか。かうした靈界通信を齎せるスピリットは身みづから親しく神を知つてゐるのであらうか。神が彼を召し、神が彼に使命を委托したのであらうか。ヴェッテリニは此の邊の事情を說明し得るだらうか? ヴェッテリニが吾々に靈界通信を始めて以來、如何なる助言のうちにも、如何なる示教のうちにも、未だ嘗て『神』なる言葉も觀念も見出されないのである。この點より見るときはスピリチュアリズム(Spiritualism)と稱する近代宗教の宣道者は中等程度の進化しかとげないスピリットに屬するものであるか。これらの靈界通信のうちには價値卓れたるものがあるのに、どうして斯かることが

ありようぞ？

このコルニリエ氏の疑問にヴェッテリニは意見を述べる――スピリチュアリズムと稱する宗教を宣傳するために活動してゐるスピリットの多くは極めて高級の進化をとげたものである。それ故彼等は如何にして靈界通信の讀者に近づくべきか、如何なる手段が讀者の心理狀態に適當であるかを知つてゐるのである。スピリットの存在やスピリットの通信で宗教に赴くやうな人々は常に『神』――人格的『神』を信ずべき强烈な內的要求を備へてゐる。『王』であると共に『父』であるやうな神なき宗教は彼らにとつては無意義である。彼らは體現者なき理想をつかむことは出來ない。此の理由によつて、スピリットは高き見地より觀察して、彼らに必要な心的滋養劑――彼らの消化し得る唯一のもの――從つて彼等を養ひ得る唯一のもの――神*を與へるのである。

（一九一三年四月十四日）

*神は絕對的存在であり、內在的若しくは本質的存在であるから、外在的に又は比較級的存在としてヨリ一層高き靈、その又一層高き靈と遡つて往つても、結局それは比較級的世界には存在しないのである。一轉して內在の絕對界を見るとき其處に吾らの實相としての神を見る。この神を知ることが唯一の心的滋養劑となるのである。（谷口註）

十九

スピリツト自身は如何に『苦痛の意義』に就て語るか

スピリツトが現世に在る靈魂を助けると云ふ問題に吾々は言及した――第一、一般的には、進化のときをはやめるために。第二、特殊な場合としては、各個人の苦痛を緩和するために。レイヌは第二の場合を説明して云ふ――『守護の靈』は苦痛を自身の上に引受ける、この事實によつてスピリツト自身の進化が進められるのであると。

此の説明には合點の行かぬ點がある。自分にはどうも理會出來ない。何ゆゑスピリツトは苦痛を緩和してそれを癒やす醫者の如き自然なる道に出でないのか。何ゆゑスピリツトは癒やさるべくもとめられた呼吸器病や窒扶斯などを癒さないで自身の上に引受けるのか。自分は此の點についてレイヌと議論して、事情をつかむまでに夥しい時間を費した。彼女の理會せるところは大體次の如くである――

假に、スピリツトが道途に於いて憐れなる者(現世の人)が重荷を背負ひてこけつ轉びつしてゐるのに出會つたとする。彼等のうちの或るものは、疲勞困憊に耐へかねて將に倒れようとしてゐる。スピリツトはそのうちの因緣ある者に近づき其の者の重荷をみづから代りに背負つて數哩歩

んで呉れる。そして憐れなる人間が息をついて精力を恢復したとき、再び彼本來の重荷は彼の背に返されるのである。正しきスピリットはその人本來の負ふべきものを取去つては了はない。憐れなる人間が困難なる仕事を成就しようとして惡戰苦鬪せるさまを眼のあたりに見て、チョイと其の荷をあげてやり、ほんの暫く息休みをさせるだけである。仕事それ自身を削除する力はスピリットには許されない。何故なら仕事を削除するとき進化も削除されて了ふからである。(一九一三年四月十一日)

健康の問題がまたしても持ちあがつて來た。そしてレイヌは憐れや、またしても色々のことを背かなければならなかつた。彼女はひそかに自身の痛む齒をぬきたいと考へてゐたのであるが、ヴェツテリニは斷然これを禁じてしまつた。若し背かねばひどいぞよとその威嚇は鋭どかつた。ヴェツテリニは交靈會の間だけ彼女の苦痛をとつて呉れたが、彼女が覺醒狀態に復すると苦痛を又彼女の背に返すであらう。ヴェツテリニは何時までも苦痛を背負つてゐて呉れる筈はない。レイヌは強く強く彼にその苦痛を握つてゐて呉れるやうに云つた――『だつて、貴方はスピリットです。貴方の齒が痛む道理がないぢやありませんか。貴方の身體はどこも痛まない！　だけど、わたしのことを考へて下さい。こんな痛みを、もう此の上どうしたら耐へられませう……』彼女

は齒痛で弱り果てゝゐたのである――それで彼女は彼に切願する、憐れなる少女は泣きながら同時に笑ひながらである。其の光景は悲劇であると同時に喜劇である。ヴェツテリニは恰も母のやうに彼女をなぐさめる。併し交靈會の終りが來たときには彼女は依然として甚だしい神經の痛みをば忍ばねばならないのであつた。（一九一三年十二月五日）

○

……吾々は現世の人の肉體的苦しみを、靈界のスピリツトが代つて背負ふ問題に就て話した。ヴェツテリニは屢々レイヌを襲ふ鋭い肉體的苦痛を自分自身が代り受けて彼女の苦しみを救つたことがあるのである。此のはたらきは何麼手續によつて出來るか？ 又スピリツトは如何にして肉體的苦痛を意識することが出來るか？――これが吾々の問である。ヴェツテリニの說明によれば苦痛なるものは靈的流動體の不調和な震動及び靈的波動の攪亂なのである。スピリツトは此の不快な靈的波動を自分自身へ引寄せ、その靈波の衝擊を自分に受けるのである。此らの靈的波動は須臾の間には消滅せしむることが出來ない。それは耐へられなければならない。受けることによつてそれは漸次消滅するのである。（一九一三年八月十八日）

○

問――災難によつて突如變死するやうな場合があるが、常にこれは豫め決定されてゐることであるか？　時には偶然の死と云ふやうなことはないか？

ヴェッテリニの答――『偶然の死は一つもない。死は常に定められた事情の下に、豫め定められた日時におこる。』（無論、死期の修正のあることは前掲の通りである。）

問――その人の生涯が打ちつゞく肉體的苦痛であるやうな人は、その肉體的苦痛によつて前生に犯した罪障を消滅させてゐるのか？

ヴェッテリニの答――『常にさうである。それは贖ひである（1）。――時として自己の罪障消滅法として靈魂がみづから選んで不健康の肉體に宿つてゐるのもある。（一九一三年二月二十四日）

（1）無意識の贖罪とは業の自壞作用である。それは病氣の自壞作用として發熱疼痛が來るやうなものである。罪本來存在せず、病氣本來存在せず、されば逆波動を立てながら消え行くのである。自ら進んで逆波動を立てるのが苦行である。（谷口註）

○

レイヌは何も知らないのであつたが、實際自分は妻の舊友の一人の靈魂を招び出さうと云ふ意向をもつてゐたのである。妻の舊友の一人といふのは立派な人物であつたらしいが、妻がまだ子

供であつた頃に、妻にとつては無くてはならぬ小父さんで、彼女は此の小父さんを崇拜してゐたのださうである。彼は恐怖すべき變災の犧牲となつて、長き苦痛を嘗めた後死んだのだつた。若し此の實驗が成功するならば、新らしい豫期以上の興味ある事項が恐らく發見できるであらう。

自分の妻は彼の所持品も何も持つてゐなかつたので、此の小父さんの靈魂を搜し出すのは容易なことではない。併しヴェッテリニが交靈會に來てゐるので、レイヌを導いて呉れるのはヴェッテリニであつた。彼の敎へに從つて吾等夫妻は靈媒の兩手と握り合つて、これからその靈魂を招び出さうと云ふ人のことに自分たちの心を集中した。それと同時に自分は、レイヌに『行け！』と激しく命令して、その人が住んでゐたアメリカの町を心に描いて、思念でレイヌの靈魂にその町へ出遊するやうに導いた。……

一瞬間のちにレイヌは一寸ぶる〱慄へて、それから云ふ――『來ました。わたしは今X……にゐるのです。』

彼女は詳しい事項を說明しはじめる。と、突然、彼女は自身の椅子にドシンと背をもたらせて、あわたゞしく右方に振向いた。そして、顏をしかめ、眉をひそめながら上方の空間をじつと見つめる。彼女は何やら譯のわからぬ低聲でつぶやく。そしてたうとう自分の方へ凭りかゝる。

『コルニリエさん。貴方の招んでいらつしやる人は來られました。そこにゐられます。此の方は御自分で來られました。わたしが此の方を搜しにズツとズツと遠くまで往つてゐたら、行きむかひに來られました……アハ！』

から云つて彼女は自身の靈魂の出遊を突然はげしく遮られたのを嘆息するやうに長い溜息を吐いた。その後此の交靈會のつゞきで、彼女は『あまりに猛烈に投げ返されるやうに此のスピリツトの希望で、謂はゞ一息にグツと吸ひ返されたやうなものでしたわ。』と云つた。

レイヌは其處へ新たに到着したスピリツトの言葉に傾聽してゐる。彼女は忙がはしく右方へ頭を向けてそのスピリツトに丁寧に傳へるべき言葉をたづねると、たちまち自分の方を向いて話しはじめた。――自分は一語を挿む餘裕もない。

たしかに其處に來たスピリツトは自分を招ばうとした人の靈魂であつた。このスピリツトが交靈會に遣つて來たそのこと自身が極めて妙に特色のあることであつた。が、スピリツトの名前をレイヌは正しい發音と、精確な抑揚とで發言したほか、色いろの點で、その人そのものゝスピリツトが出現したのであることが確められた。(此のスピリツトの希望を尊重して暫く彼の名前を書かないことにして、唯舊友と云ふことにする。)

このスピリツトが話すに隨つて、そのまゝをレイヌは傳へるのである。彼は幸福である。彼は高き進化に到達してゐる。で、吾等が特に彼を呼ばなかつたならば、吾等は彼に到底接見することが不可能なほど、遙かに吾等と懸隔してゐるのであつた。彼は自分に非常になついてゐた子供だつたものゝことを決して忘れてゐなかつた。そして妻自身にはわからなかつたが、常に彼女の生活につき纒うてゐた。彼は以前此處へ來たことがあつたが、その時は何のたすけもなすことが出來ず、又自身の來てゐることを知らせることも出來なかつた。今日吾々がそのスピリツトを招んだのと、靈媒がゐるのとが相合して有力な力となり、終に明かに彼を此處へ吾々のわかるやうに來らしめたのだつた。これからは度々來ると云ふ。唯吾々が彼を呼ぶか、レイヌが靑色のスピリツトの棲む靈圈まで彼を探しに行けばよいのである。彼は時々ヴエツテリニの代りをするかも知れないと云ふ意を漏した。ヴエツテリニの仕事は最も大切なものであると云ふ。――『あなた達はヴエツテリニを御信賴になるのがよろしい』と彼は叫ぶ――『ヴエツテリニは極めて偉大なスピリツトです。あのスピリツトに御懸念は御無用です。わたしは時々あのスピリツトの代りにあなた方の御質問に答へるために遣つて來て、あのスピリツトの手數を省いてあげることにします。』から云つてから、彼は自身の受けた災難のことや、その晩年のことを話し出した。『實に辛

い苦みでした。しかしそれは苦しむだけの値打はあつたのです。それは私の向上でした……。そのために得たものは、私の苦しんだ苦しみなどの迚も比べものにならないものです。』＊（一九一三年四月十八日）

＊此處にも業が聚積の末自壞して、實相の一層自由な相が顯はれる眞理が出てゐる。自壞過程が『苦しみ』であつて、向上とはわが實相の一層自由な相の顯現することを云ふ。（谷口註）

二十

スピリット自身は『靈魂の品等』に就て斯く語る

自分は第五十一回目の交靈會に招ばうとして慘めな失敗に歸したスピリットを今日も亦再び招んで見ようと決心した。自分の考へでは前回には自分の友人のR（招ばうと云ふスピリットの息子である）が交靈會席上に出席してゐて、Rの靈的波動が多少とも靈媒に不快な感じを與へつゝあつたゝめにあんな失敗に歸したのだらうと思つたのである。で自分は今度の目的のためにRに請うて、死者生前の捲髮を貰つて置いたのである。自分はこの捲髮の包をレイヌの手に置いた。と、七ケ月前に試みた實驗の結果と全然同じであつたのを見て實に驚いた――

レイヌは云ふ――『私はこの靈的波動を知つてゐます……以前に觸れたことがあります。わた

しは此の靈魂を好きません。……それはわるい靈魂ではありません、靈魂がまだ若いのです……とも角わたしは此の靈魂を好くことは出來ません。』

この時ヴェッテリニが口をはさんで『此の靈魂をさがしにレイヌを遣ることは無駄である。今日此の靈魂について知られるところの事實は、否今年の末になつて知られるところの事實さへも前回のときに得られた報告と何等異るところはないであらう。彼は、今後も無意識の狀態でゐるであらう』と云つた。

が、自分は此の實驗を繰返したい理由を說明した。――地上に於て彼は優れたるカルチュアある人だつたと信ずべき理由がある。それ故、かゝる人が――それが男にせよ女にせよ――死後三十年の今日尚その靈魂が昏睡狀態であると云ふことは不可能のことに思はれるのだ！

併しヴェッテリニは、自分が想像するやうには、こんな例は異狀でも何でもないと斷言した。『三十年と云へば地上の人間にとつては重要な期間ではある。併しスピリットにとつては短くもないが、長くもないのである。此の靈魂がその昏睡狀態から覺めない理由は頗る簡單である――彼は今始めつゝあるのだからである。彼はそのうち自身の屬する輪廻胎生の波にさらはれて盲目的に此の世に出生するであらう。彼はまだ人間としては二三度生れて出たゞけである。併し彼が

最近此の世に生をうけた肉體は可成り完全な人間であつて、今少し向上すれば彼自身だけで進化の本道を辿ることが出來るであらう。彼は靈界のことを何も知らないし、自己の靈魂の進化について何が此の世で必要であるか少しも知らないのである。

『誰でも始めねばならないのです。わたし達も皆それと同じやうにやつて來たのです。各人すべて自分自身の順番があるんですわ。』レイヌは言葉を添へた。

さうした靈界的見地から各個人を判斷せねばならぬとしたら、吾々の社會的秩序は全然覆されて了ふのである。兎も角吾らの地上に於て靈魂の進化の程度を測定する標準はあるのであらうか？ 此世に出生した靈魂の高さを示す徴候と云ふものはあるのであらうか――と自分は云つた。

ヴエツテリニは答へる――『直覺的認識――靈魂による靈魂の認識のほかに、外より見える徴證も澤山ある。そのうちの一二を此處に云つて見よう――第一、雅量である。しかし此處に云ふところの雅量は人間靈魂の深き認識より出發したる他に對する赦しである。それは聰明なる雅量であつて寛大と峻嚴との必要を知るところの雅量である。Bonte-severite(寛大なる峻嚴)こそ向上せる靈魂の特徴として記憶すべき一つである。第二、卑しき者、世に出でざる者、弱きものに對する愛――社會的成功、名譽、地位等に對する無關心によつて伴はるゝ愛である。第三、哲學的

思索の傾向、靈界の神祕を知らんとする熱望、その神祕に貫き入らうとする努力――此れ等は靈魂の進化そのものである。』（同年十二月廿九日）

二十一

スピリツト自身は『藝術』に就て斯く語る

自分は更に他の問題――藝術――に話題を轉じた。靈界の生活には、自分たちが現世で、音樂や繪畫や彫刻や詩歌によつて得るやうな歡喜に相應するものがあるか？――とたづねた。

『何のことはない！　あらゆる藝術の發生する根元の世界は靈界なのだ！』とヴェツテリニは叫んだ。『藝術の精髓は靈界で創造せられる。地上の藝術的表現はその貧弱な寫しに過ぎない。余の言はんと欲する所をよく理會せよ。若しある作品にして、高く貴き熱ある作品であるならば、それを心に描き出したのはスピリツトであり、その美を認めたものもスピリツトである。それで、人の靈魂がその物質的肉體より脫離した時には、彼れ靈魂は肉體の枷鎖の中にある時よりも藝術創作の眞髓に一層容易に貫き入るのである。彼れ靈魂は最早や物質的條件によつて煩はされたり束縛せられたりすることはない。明かに靈界人は彈ずべき樂器をもつてゐない。併し彼等は種々無數のヴアイブレーションを組合はせて、最も靈妙なる感じの音樂詩歌を創作することが出來る

のである。君たち、現世の人々は靈界(眞に存在するもの)から、たゞ暗示を、たゞかすかな反響を受けるに過ぎない!』

自分は此の時大自然に就いて、そして大自然に就いて鑑賞する際の精妙な幽遠な歡喜に就いて語つた。するとヴエツテリニは茲でも亦、同じ論鋒をすゝめて云つた。『君が大自然の美の前に立つてそれを鑑賞するのは君の靈魂――即ち幽閉されたるスピリツトである。併しひとたび靈魂が肉體の枷鎖から解放せられるとき、君の情緒の可能範圍は無限に擴大する。そして君の情緒を搔きならしたところのものは、精髓そのものを理解する。』

今日の實驗會は自分たちのほかに立會つて下さつたG夫人の求めにより自分は愛情の歡びは靈界迄も存續し行くべきものであるか、地上の友情から得られる幸福の如きものは幽界にも存續するものであるかたづねた。『存在しますとも。常にそれは同一原則によるのだ。靈魂から出づるものゝ全て靈魂に屬するものゝ全ては、幽界に行けば著しく强烈となるのだ。靈界にて形づくらるゝ友の集り――これは同一傾向のものが互ひに集る「類は類を招ぶ」法則によりつくられるのだが――或るスピリツトは一層愉快に感ずる會心の友と云ふのがあるもので、彼等は相寄つて互ひに進步して行く。』(一九一三年四月十六日)

○

最初の催眠中レイヌは再び靑色のスピリツトを見るために出掛けた。そして今度は休息と娛樂の席に列した。レイヌの語るところによれば、彼女の靈體のみ幽界に出遊した其の儘の狀態では此の法外に强烈な幽界の歡喜を鑑賞することが出來なかつた筈であつたが、彼女はたすけられ、彼女の感覺は一層銳化せられ一層靈化せられて、如何なる言葉をもつてしても、此れを言ひ表はすことは出來ないやうな驚くべき微妙な調子の美に醉ひ得たのであつた。彼女は『音樂』と云ふ言葉を已むを得ず使つた。この言葉は今も尙彼女の感情を强烈に醉はせてゐる魅力の原因に最もピツタリ當て嵌まる言葉だと思はれる。而も『音樂』とは何たる貧弱な淺薄な小さき言葉であらう！………何たるトーンの缺乏した言葉であらう！　强烈な心身蕩然として了ふやうなハーモニヤスな振動――これを言ひあらはすには何とした不適當な！

レイヌの云ふところによれば極めて高級なるスピリツトはいづれも魅力あるメロデイを發することが出來るものであるが、多くのスピリツトが集つて調子を合はすときには、その音樂の美しさは著しく高潮し、崇高化するのである。嚴肅な瞑想や、人類救濟に奔走したのちなどには、此の非常に美しい音樂の演奏が始まつたり、それを聽いて樂しんだりするのである。それは地上の

吾々が最もサプライムな音樂と考へてゐるものゝ精の精であり、地上の吾等の音樂は聖なる靈界の音樂の貧弱な調子のくるつた反響にしか過ぎないのであると云ふ。（一九一三年五月九日）

○

ヴェッテリニの答の概略――スピリットは諸種の生活法を送つてゐるが、その生活法は人間の世界の吾々には未知の實質の狀態に屬するので、その觀念を地上の言葉で言ひあらはさうとしても、地上には其の言葉がないから、言ひあらはすことが出來ないのである。併し吾々の理解し得る限りの言葉で云へば、藝術の精髓的根源は靈界にある。そして又大自然の美を鑑賞する吾等の感情の精髓的根源も同樣に靈界にあるのである。彼等スピリットは空間を貫いて翺翔し行くことも出來、世界の回轉を觀察し、種々の現象を觀て樂しむことも出來るのである。音樂的旋律はスピリットにとつては盡くることなき愉樂の源泉である。彼等は明かに、樂器と云ふものを所有してはゐないが、彼等にはその必要がないのである。吾等が音樂と呼ぶ音律の調和の精髓は彼らは如何にしてつくるかと云へば、波動を色いろに組合はすのである。彼等はかうした目的のために會合する。また彼等は人間の藝術を鑑賞したり、人間の藝術にインスピレーションを與へたりすることに興味をもつてをり、時としてはそれに高き悅びを感じるのである。優れたる音樂藝術や

表現するために吾々が會合する時、その席にスピリットが來てゐないと云ふことは稀である。

（一九一三年七月三十日）

○

自分は屢〻音樂が靈界に於て如何にも重要視されてゐるらしいと云ふことを記述した。現世よりも一層精妙なる世界に於て此の藝術存在の可能性があると云ふことは比較的理解しやすい。併し繪畫に於ては、吾等の從事してゐるやうな美術はどうなるのであるか？ヴェッテリニの云ふところによれば靈界に於ては繪畫の製作にピッタリ當て嵌まるやうなものは存在しないのださうである。併し繪かきのするはたらきは靈界でも表出の機會を得る――例へばimage及びsceneの創作である。が、吾々はこれを精確に理解することは出來ない――それは此の地上の觀念の範疇以上のものである。（一九一四年一月二十一日）

二十二

スピリット自身は『小兒の靈』及壽命に就て斯く語る

さて、レイヌは今日彼女の統一狀態の初め頃に起つた出來事を話した。彼女は病氣だつたので極めて深い統一狀態にはならなかつた……。ヴェッテリニは今日はレイヌを外へ伴れ出すことは

出來なかつたので、此の畫室の中で、スピリツトの種類別けを彼女に觀察せしむることにしたのである。

第一――赤味を帶びたスピリツト――眞赤ではない。此の赭味を帶びた靈魂は低級の靈魂であつて、出來るだけ避けるのが好いのである。

第二――青味を帶びたスピリツト――特殊の青、濃い輝きを帶びた空の青のやうな色である。此の青味を帶びたスピリツトは高き進化をとげた靈魂であつて、彼女を助け彼女を教導するためにヴェツテリニは時々此の青色のスピリツトを派遣するさうである。此の種のスピリツトの教示には遵ふのが好い、否從はねばならぬといふ方が適當だ。この階級のスピリツトの色は生きてゐる人間の複體の青ともちがへば、普通階級のスピリツトの艶のない灰色を帶びた青ともちがふのである。否ヴェツテリニに扈從せるスピリツトの青は純な燦然たる青色である！

第三――の階級に屬するスピリツトはみづからレイヌの眼前にその姿をあらはした。それは黄金色を帶びて輝く白色である。レイヌは顏に包み切れぬやうな歡びを輝かしながら云ふ――「コルニリエさん。此等の白色の高級のスピリツトが何の靈魂だと云ふことはあなたの想像にも及ばないでせう……此等のスピリツトは出產の刹那に死んだ……此の世の日の目を見ないで死んだ嬰

兒の靈魂なんです。彼等は罪を既に有たないから、苦しむべき理由もなければ、贖罪の必要もないのですが……。』自分は、白狀するがレイヌの此の言葉に驚いた。自分はヴェツテリニに尋ねた——何故此等嬰兒の靈魂はその進化の程度に應じて特殊の色澤をもつてゐないのか、嬰兒が死ぬと云ふことは單なる偶發事件ではないか。それは何も積極的な價値の創造ではない。だから嬰兒の靈魂はそれ相應の階級にとゞまるべきではないか。兎も角も彼等はそれ自身、自己獨特の進化の度を備へてゐる歸幽の靈魂である。從つて、最近の生れ出でに於て得たる進化狀態相應の色彩を備へてゐるのが論理的ではあるまいか？

その答はなか〳〵面倒なものである——それは問題が複雜してゐるのと、その眞意を傳へるの困難を感じた靈媒の肉體の狀態によるのであつた。『此れらの白色の輝くスピリツトは、出產の刹那に死んだと云ふ理由で白色に輝いてゐるのではありません。彼等が出產の刹那に死んだのは地上に於ける進化の全過程を完了して、地上への出生が與へ得る限りの最大の惠みを完全に享けて了つたからなんです。彼等は決して再び地上へ出生しないでせう。彼等スピリツトの色はそれで眞に彼等が現在ある程度の進化に相應はしいのです』

自分は反問した——『此の高級の靈魂にとつて、單なる胎兒としての生活がどんな利益を齎す

のですか。』

ヴェッテリニの答へによれば――今此の點について自分に説明するのは容易ではない。この問題を理解し得るやうに説明するには、その以前に先づ理解して置かねばならない幾多の問題があるのである――併し、これを簡約して云へば、子宮内の生活は地上に於ける苦痛の最後の抑揚として彼等の進化を遂げさせたのである。(一九一三年二月二十四日)*

(註)どうして斯くの如き靈示を其儘信じて好いものであらうか。高級の靈魂は胎兒形成中、子宮内に八九ヶ月間幽閉されてゐると云ふだけで、何を自身の進化に附加へ得るのであらうか。更に難解なのは、高級靈魂中には出産後數ヶ月又は數年間、自由な精神反應すら爲し得ない憫れな不具乃至白痴狀態にて生存し、そのまゝ靈界に移るものがあると云ふが斯くの如きことによつて其の靈魂は何を自身に附加へ得るのであらうか。ヴェッテリニの答へを綜合して得たところは次の通りである。

第一、先づ明確にして置かなければならないことは、靈魂の進歩は自己親らの體驗によつて獲得した智慧によるのである。人はたゞ自己が經驗したことのみを本當に知るのである。經驗しないものは「であらう」に過ぎないのである。吾々はヴェルサイユに往つて見ない限り、ヴェルサイユが存在することを本當に知ることが出來ない。吾々は、友人の報告や、書物やを通じて『ヴェルサイユは存在するであらう』と信ずるのであるが、本當にそれを知るのは自分自身の經驗に據らなければならない。

で、或る靈魂――それが低級な靈魂であつて地表圏内に於ける試煉の周期を殆ど完全に完了した精靈であるにも拘はらず、たゞ一つ精確なる體驗、物質的肉體をもつて生れ出づる意識的體驗がない、換言すれば物質界内に墜落する際の意識的經驗を得てゐない場合には、その體驗を得るために暫時母胎内に宿り來るのである。

普通一般の法則では、受胎は靈魂自身の意識的に決定せられるものではなくて、陰陽結合の振動が其の影響圏内に在る靈魂を、物質界に捲き込んで、受胎現象を起すのであるが、或る程度までの進化に到達したる靈魂のみは、その振動影響を感知し、その影響に抵抗することが出來るのである。斯くの如き程度に進化してからの受胎のみ、靈魂が物質界内に墜落する際の意識的體驗を得ることが出來る。彼は全然明瞭な意識を以て、受胎と胎兒形成と出産との全ての過程を經驗し、この經驗によつて進化を加へるのである。（一定高度に進化せるすべての靈魂が、此の意識的受胎の出産の體驗過程を經るために半産または夭折しなければならないのではない。靈界に於て、此の體驗過程に匹敵すべき試煉があつて、その方を選びたい者はその方を選んで好いのである）

第二、極めて高き進化を遂げたる靈魂が、たゞ數ケ月又は數年間の壽命を以て地上に生れて來る場合には、彼は自己に缺けてゐる或る心的要素（心の調律）を獲得するために、地上に生れて來るのであつて、斯かる場合には、此の靈魂は靈界に本地を有つてゐて、肉體内にその全靈魂が完全には宿り來らないので

ある。かゝる場合、其の靈魂は肉體を完全に構成しようと云ふ努力をしないために屢々その肉體が先天的不具者のやうな姿で放置されることさへあるのである。斯かる程度の靈魂進化の段階に於ては、肉體の束縛や艱難その事が、其の靈魂の求むる體驗の必須條件ではないのである。肉體と云ふ一個の浮標に靈魂が靈線を以て結び着いてゐると云ふことだけで、彼らは物質世界に於て得ねばならぬ地上最後の經驗の獲得を完了するのである。此の段階の靈魂が肉體の不完全な狀態を問題としないのは、その靈魂が肉體に宿つてゐないからである。それは靈の海に、輝く靈魂を一瞬間繫ぎ留めて置く一個の浮標にしか過ぎないのである。（コルニリエ氏註）

○

自分はまだ自分にとつて曖昧な問題をハツキリさしたいからヴエツテリニに此の交靈會へ出て來て欲しいと彼女に云つた。

第一、各人の壽命は出産の時既に定められてゐるのであるか自分は知りたかつたのである。

ヴエツテリニの答――『幼くして死すべく定められてゐる小兒の場合のほかは、各人の壽命はまだその出產の時には定まつてゐない。普通の生活を送る人々にとつては、死の日附は、その生活中に決定せられる――その生活のやり方、各自の業の加算によつて決定せられると云つても

好い。彼等の意識の發達は運命を早めたり遲らしたりするのであるが、いづれの場合にも死の日がやつて來るズツと以前に、自然に殆どきまつて了ふから豫知することが出來る』

次に自分は、レイヌの話によれば幼兒のうちに死ぬのは、非常に高い進化をとげた靈魂の徵候であると云ふのであるが、これは正しいかどうかとヴエツテリニに尋ねた。『確かにさうだ』とヴエツテリニは答へる。で自分は云つた、五歲から十歲までの間で死ぬ子供のうちには精神的に劣等な、否、時としては白痴のやうにさへ思はれるのがあると。

『それも本當である』とヴエツテリニは答へる。『併し、それは單に肉體機關が低級なのであつて、靈魂自身の進化の程度には何の關係もないのである。寧ろ多くの場合に於て、間近に迫つた自己の肉體の死をそれとなく豫知してゐるので、彼らは機官を改善しようと云ふ努力をとらないのである。』

で自分はたづねた――幼兒期のうちに死ぬのが、その靈魂の高級な徵候であるならば、年老いて死ぬのは、その靈魂の低級なことを示してゐるのであらうか？

『必ずしもそんなことはない。概括して云ふならば、低級なる靈魂は、出來るだけ色いろな經驗を積んで進化の機會を得るために長生しなければならない。併し、高級の靈魂と雖も長生すると

ともある。――それには種々の理由がある――例へばその人がまだ地上に於て果すべき役割のあるとき、その人の存在が周圍の人々の進化に役立つとき、それからまた、單にその人が地上の生存を尙享受したいと希つてゐるが如きこれである。』（一九一三年十二月二十四日）

（1）コルニリエ氏の質問も隨分鋭いやうであるが、レイヌの口を通じて答ふるスピリットの囘答はいと易々とその理由を説明してゐる。無智の一少女の囘答としては、あまりに深遠に且つ複雜に過ぎるのである。此のやうな點からも、此の心靈現象の性質を觀察する緒が見出される。コルニリエ氏の豫期しないやうな囘答が出て來るのであるから、無論所謂精神交感現象ではない。（谷口註）

○

自分は再び幼くして此の世を去るべく定められた小兒の問題に歸つた。例へば Bicetre のやうな慈惠院には四五百人もの幼兒がそこに收容されてゐるのであるが、皆白癡か、片輪者かで三歳乃至十二歳迄で死ぬやうな運命を有つてゐるのである。では、吾等は此等の憫れな幼兒を高き進化を遂げた靈魂であると信ずべきであらうか？　答へは正に然りと云ふ――『彼等はすべて略々同じ階級の――可成り高き階級の靈魂であるのだ。此の世に出生せんとする瞬間、彼等は自分の前途に如何なる運命が橫たはつてゐるかを察知する。が、彼等は此の苦痛多き運命を甘受する。

時としては自ら進んで此の苦痛な運命を選んで受ける――それは一層高き進化に尚一層速かに到達せんと欲するからなのだ。』

自分は人間の全生涯！　生死輪廻を通じての全生活――中に於て、地上の生活は最も耐へ忍びがたき、勞苦と苦しき努力との生活であり、靈界に於ける生活は、善きにせよ、惡しきにせよ、成されたる仕事に對する收穫の時――何はともあれ一種の休養期間――と考ふべきではなからうか……？　とたづねた。と、その答へは肯定的に來た――『地上は勞苦と奮鬪と、受苦の世界なのだ。靈魂は時には幸福な事もあるが今後尚、地上に生れ更つて出づべき靈魂の全ての場合では、それは一種の執行猶豫期間、休戰期間とでも云ふべきものだ。』（一九一三年二月二十四日）

○

凡ての早產兒の靈魂が高級の進化をとげた靈魂であると云ふ自分の記錄に誤りはないかと云ふことを自分は確かめたいと思つた。此のことは絕對的のことだらうか？　例外と云ふものはないのだらうか？

答――『それは絕對的なのだ。お產に臨んで死せる全ての胎兒は、それが早產兒であらうと遲產兒であらうと、突發事件の爲であらうと、外科的施術のためであらうと、すべて彼等は例外な

く高級の進化を遂げた靈魂で、——たゞ小さな一點だけが足りない、謂はゞ彼が獲得した王冠に寳玉だけが足りない様な高級の靈魂なのだ。意識を完全に有する高級な靈魂にとつては物質のうちに幽閉されることが最も苦痛なのだ。若し、その嬰兒が一二週間でも、一二ヶ月でも、一二ヶ年でも此の世に生き存へてゐるならば、それはそれだけ臨産の刹那に死んだ胎兒の靈魂よりも稍々低く、尚この世で得ねばならぬ何ものかを缺いてゐたのを補ふ經驗を得るためである。早産、變災、白癡等——すべて各個の幼兒の靈魂の受くべき運命は、あらかじめ定められてゐるのであつて偶然なるものはその間に介在する餘地はないのだ。』

そこで又自分は例の駁撃をはじめた——偉大なるスピリツトは人間の生活に干渉する怖るべき力をもつてゐると云ふが、彼等は人間の生活を導き定めて行くことに於て、何等の錯誤も演じないものであらうか？

答——斷じて、彼等は間違はない。君の理解を絶した、はるかに〳〵君の理解の彼方にゐるものを理解しようと考へてはならない。此等偉大なるスピリツトの力は、君に話したゞけのスピリツトの力でも君を恐怖さし、君を驚かしたが、彼等の實力はなか〳〵そんな位なものではないのである。既に君に話しただけのことでも、世人は君が氣狂ひではないかと思ふだらう。併し君は

兎も角も自分の言はんと欲するところの內容を攫んで吳れ、その價値を知つて吳れた。が、自分が君に云つたところは、眞相の唯の片鱗にしか過ぎないのだ。でもそれで充分だ。何故なら、第一、それは君の理解力以上の事であるからである。第二、折角自分が靈界通信に於て合理的だと人間に考へられる所までを話して來たのに、それ以上の眞相に突き入れば、最早人間の頭には合理的でないと思はれ、この靈界通信の價値を損じて了ふからなのだ……それは徒らに疑念を增すばかりだ……そして君自身までも自己の立脚地を失つて了ふだらう…』(一九一三年十二月二十九日)

二十三
スピリット自身は『個性の存續と價値』に就て斷く語る

個性的意識は進化の過程を通じて層一層個性的となるものであるか? またスピリットは常に自己自身の存在と繼續と同事とを意識してゐるか? それともある敎義でとなふる如く、進化すると云ふことと其ことのために、個性的意識が普遍的意識に吸收されて了ふものであるか――卽ち、靈魂の進化とは緩徐なる個性の破壞的過程であるのか?

自分の此の間に對してレイヌは鋭い注意をあつめて聽いてゐたが、自分の方へ振り返つた――

『コルニリエさん。ヴエツテリニの彼仰るところによりますと、個性的意識は進化の度が進むに

從つて愈〻益〻大となるのです。靈魂が一生涯によつて獲得し征服したすべてはその靈魂の個性をそれだけ明瞭にそれだけ强大にするのです。個性は彼のものです。彼のみのものです。青色のスピリットは灰色のスピリットよりも個性が明瞭です。白色のスピリットは青色のスピリットよりも尙一層個性的です。尙一層高級なスピリットは、尙一層自己自身であるのです。The Still higher Spirits are Still more themselves.』

上記の意味の嚴肅な問答をヴェッテリニはしたほかに、彼は個性を滅することを高き進化とみとめる一派の思想家に對して鋭い批評をあびせかけたものらしい。自分はレイヌがヴェッテリニに對して『それは餘り苛酷な批評ですわよ。……何故あなたはこの一派の思想家に其麼に憤慨なさるんです？……これらの人たちも亦眞理を發見しようとしてるんぢやありませんか。』と云つてゐるのを傍らから聞いたからである。（一九一三年四月二日）

二十四

スピリット自身は如何に『彼岸の生活』に就て語るか

自分は例の時間にレイヌをマグネタイズし始めた。彼女に今日は何をさせようか。高い靈界に出遊さす實驗を試みたものであらうか。それとも自分の父方の祖父の靈魂を此の席へ呼び出した

ものであらうか。此の祖父と云ふものは自分だけの印象から云へば、そして自分に人々が話して呉れた話などから想像すれば、自分とは隨分類似の性格をもつてゐたらしいのである。たうとう自分は後の方の實驗をやることに極めて、此の祖父のものであつた唯二品の物品を統一狀態にゐるレイヌの手に渡した。一つは會計簿を引きはぐした一枚の紙にインキで描いた『船』のペン畫で、そして他の一つはフリーメンス協會のローズ・クロイキス級の小さい綬章であつたが、自分は此等の物品を彼女に渡して此等の物品の持主であつた人の靈魂を搜し出して、その靈魂を此處へ伴うて來るやうにだけ彼女に云つて、他の説明はしなかつた。レイヌは注意深く此等の品々を調べてゐる樣子だつたが、綬章の方に殘つてゐる靈魂波動の方が强烈だつたことが判つたさうである。それで、これを所持してゐた人のスピリツトを搜しに行つて來ませうと彼女は云ふのである。自分は彼女の靈魂が彼を搜しに出掛けてゐるあひだ中、思念を自分の祖父に集中して彼を心の中で强く呼んだ。

數分間の後、レイヌの靈魂は歸來して彼を巴里で搜したが見當らない、何處で死んだのですかと尋ねるのである。

『ナントでだよ』と自分は答へた。

『では其處へまゐりませう。がナントとは何處の方です。わたしは知らないんですもの』

どう云つて彼女に說明したら好いか一瞬間自分は間誤ついた。が彼女はツルーを知つて居ると云ふので、其處へ先づ行くやうに命じた。ツルーに行けばロイルが直ぐに見える。其處を沿うて降りて行けば二大都市——ソーミュル及びアンヂエール——が見える。それを過ぐれば三番目の街がナントである。自分は自分の全心の力を添へながら彼女の靈魂を其處に行かしめた。

たちまち彼女はナントに來ましたと告げる。彼女はこれから、自分の祖父の靈的波動を搜し出すために墓地へ行くつもりだと云ふのである。それで自分は墓地の方向を敎へた。

『オヽ！　綺麗なお墓ですこと！　澤山に立派な禮拜所がある！　靈魂が一杯ゐます。スピリツトが群集してゐます。だけど、あの人はゐらつしやいません。此處にゐるスピリツトは皆赤味を帶びた色のスピリツトばかりです。わたしはもつと靈界高くのぼつて行かなければなりません』

此の時靈的波動の類似してゐるスピリツトがゐたので一寸搜してゐる祖父が見つかつたと彼女は思ひちがつたが、それが間違であることは直ぐわかつた。自分は彼女に靑色のスピリツトに祖父のことを訊いて見てはどうかと勸めた。彼女は納得したやうであつたが、彼女を間誤つかせたものが何であるのか知らうとして、氣をとられてゐるやうな様子であつた。彼女は自分の手に觸れ

て、それから其の小さい綬章にさはつて見た。そして又彼女の手は自分の手のところへ遣つて來て、それ〴〵の印象を比較研究してゐるやうな樣子であつた。かうして研究を二三度繰り返して見たのちに、自分は彼女がかうつぶやいてゐるのを聞いた――『しかし？……フム……イヤ、それは同じではない。が、どちらにも同じやうなところがあるわ……なんて不思議な！』

自分の興味はいちじるしく唆られた。併し自分はそれを氣振りにも見せなかつた。そして其の綬章を着けてゐた人を探し出しなさいと唯それだけを促した。

突然彼女は叫んだ――『ハ！……あの人を見つけました。』

『あの人だと云ふことは確かですか！　レイヌ。』

『たしかですとも！　わたしはあの人を此處へ伴れて來なければなりません。』

數分間もすると自分の祖父は此處へ來たのである。彼女は彼が來たと告げる。

『わたしが判るか訊いて下さい。』と自分は云つた。

と、レイヌは微笑してゐる。『あの方は被仰いますわ、貴方はピエールだつて*』かう云ひながら彼女の微笑は人を惹き着ける樣な輝きを帶びて來た。彼女は何か氣持の好いことを、愉快な何事かを自分に話さうと思つてゐるらしいのだ。

*ピエールと云ふのはコルニリエ氏の名である（谷口註）

が、彼女は突然口をつぐんだ。そしてその表情が嚴肅になる。彼女は可愛い指先を威嚇するやうにスピリットの方へ擧げながら、

『貴方は本當のことを被仰つてゐるんですか。嘘ぢやありませんね……ハテね？』彼女の樣子で觀るとスピリットは丁度彼女の眞向ひに一寸上方の空間に出現してゐるらしいのである。

彼女は自分の方へ振返つて話し出さうとしたが、また躊躇してスピリットの方へ向き直る。

『本當ですね？　嘘は被仰いませんね？　必ずともに本當なんですね？』から云つた彼女の顏には再び微笑が浮んだ。いよ〳〵確信が出來たらしく、

『此の方は貴方の御。父。さんだと被仰いますわ』と云ふ。(自分はレイヌが自分の祖。父。さんと云ふ意りで云つたものだと受取つた)

そのスピリットの色はどんな色をしてゐます？　と云ふ自分の問に對して、彼女は一寸ばかり肩をそびやかした――

『オー、此の方は灰色……赤ぢやありません。あの……青味がかつた灰色をしていらつしやいます。』

で自分は、例の品を知つてゐるか、此のペン畫はその人の生前に描いたものであるか、此の絨

章は生前つけたことがあるか、そのスピリツトに訊いてくれるやうに求めた。レイヌはスピリツトに尋ねてゐる。が首を掉つた――『いゝえ、これらの品々は此のスピリツトのものぢやありませんでしたわ。』

極めて興味深い狀態がしばらく續いた――レイヌは再び三種の靈的波動、唯今出席してゐるスピリツトの靈的波動、それから自分の靈的波動を調べて見、比較してゐるのである。

『本當に不思議ですわ、三つとも同じぢやありません。同なじでは。……併し非常に似寄つてをりますわ！　併し、あなたの靈波と、この品々の靈波とは一層よく似てゐますわ。貴方の「お父さん」のは一寸違ひますが、矢つ張り同じところが非常に澤山ありますわ。』かう云ふやうな會話があつて、暫く問答の末此處へ出席して來たのは矢つ張り自分の父の靈魂であつて祖父ではないと云ふことが解つた。

父は巴里で死んだのに、何故ナントにゐたのかと自分は尋ねる。ナントには屢々行くことがあるのだと父のスピリツトは答へるのである。『自分はナントで生れたのだから常住ナントへ還るのだ』と云ふ。（父がナントで生れたと云ふことは正しい。）

自分は此のスピリツトに自身の子供たちのことに就て詳細を尋ねた。その答は、子供たち各々

の特徴なども批評し得て正しかつた。それで自分は祖父(このスピリツトの父)のことを言ひ出した。父は云ふのに祖父は極めて高級のスピリツトになつてゐると。

『ひとつ、祖父さんのスピリツトを探しに行つて呉れませんか』と自分は云ふ。自分のために探して來ても好い、とスピリツトは答へる。と、レイヌは此のスピリツトをまるで子供扱ひするやうな調子で『ではね、早く往つて下さいね。でなきや私が自分で往きますわ』と云つた。

　此のスピリツトが出掛けて往つたあとで、レイヌは肉體としてはまだ一度も見たことのないナントのことをベラベラ喋るのである。肉體では往つたことはないけれども、靈魂が出遊して自分の祖父の靈魂を捜しに往つた道すがら色いろ驚くべき事物を見たと云ふのである。……

『しかし何よりも可笑しいのは婦人のつけてゐる白い小さな頭飾りです。髪の毛はうしろへグツと引きつめて――此んな風に』と彼女は兩手で髪の毛を後部へ引きつめて見せながらも愉快さうに云つた。笑ひかたが實に愉快さうであつたので、自分も誘はれて笑ひ出したが、彼女がナントの街の特色を色いろ此の短かい時間に捉へて來たのに實は驚いたのである。

　が、待つてゐるのは實に辛い仕事である。レイヌはもどかしさうにし出した。――『わたしがも一度あそこへ往つて見ますわ。あの人はあんまり遲い。往つてまゐりませうね、コルニリエさ

ん』と云ふ。

で、自分は今少し彼女をマグネタイズして彼女に行かしめた。今度は彼女は波止場のところを通つて行くに違ひない――彼女は巨きな船を見て、そんな大きな帆桁が此の世にあるものだとは今迄知らなかつたと驚いてゐる。彼女は今迄そんな大きな帆船を見たことがなかつたのである。

やがて彼女の靈魂は、二人のスピリツトを伴つて歸つて來た。

『二人とも來られました。今度はたしかに貴方の祖父さんです。祖父さんのスピリツトの色は素晴らしい青色です。たしかに此の方は高級のスピリツトです。極めて高級のスピリツトに相違ありません……だけど無論此のスピリツトは貴方も知つてゐらつしやいます。此のかたは度々此處へは往らつしやるのです。此のかたは此處へ來るのは愉快だと云つてゐらつしやいます。今迄にも貴方の生活にそれとなく附きまとうて出來るだけの援助はせられたのださうです。』

自分は二三の問を發した。それは自分だけに興味のあるものであるから此處には書かない。然る後、彼が自分を愛して時々此處へ來ることがあるのだと云ふならば、何故今日彼を此の交靈會へ招いたのに直ぐ遣つて來なかつたのだと問うた。

彼の說明によると、彼はあまりに遠くに……餘り高くにゐたのださうである。それで自分の呼

ぶところの思念波動が途中で稀薄に瀰散して了つて、彼に達しなかつたのださうである。彼は極めて熱心に仕事にとりかゝつてゐた。彼は自分の選擇した特殊の仕事にたづさはつてゐる一團のスピリツトの一員であつた。彼は再び地上に生を受けて進化するよりも、靈界にゐてその儘自己の進化を繼續したいと云ふ方のスピリツトであつた。

『靈界に於ける進化のための修行は洗錬された氣質の靈魂でない限りは非常に苦痛である。』（此の言ひあらはし方は祖父特有のものである）『併し地上に生を受けるよりも一層それは興味がある。』と祖父は云ふ――彼は苦痛多き地上生活のみやげ物をもつて靈界へ這入つたものである。地上は彼にとつて著しく苦痛の生活であつた。併し今は彼は幸福である。自由に自己の意識をもつて進化の道程を選擇し得る境涯に達したのであると……。

次いで彼の家族に就ての話がはじまつた。その興味の主要點は、まるで吾々の思ひもかけない觀察を彼が抱いてゐる點である。彼はかう云ふだらうと吾々が思つてゐるその反對の批評を下すのである。

また祖父は一般的の話にうつゝた――彼の如きスピリツトは地上の雰圍氣に來るには非常な不快感をしのばねばならない。彼は自分にとつて非常に不便な重い幽體を着けなければ來られない

のである。それで斯うした高級靈が下界を訪れるのは、其の努力が眞に效果ある實を結び得ると感じられるとき、また訪れた相手から得られる反動のうちに、その苦痛をつぐなひ得る貴重な何物かゞ獲られると確信し得る時に限るのである。

それから自分は是非次のことを心得ておかなければならない、靈界に於ては肉親の結ばれから來る執着は存在しないのである。そして靈魂自身の傾向の類似と進化の類似とによつてのみ彼等は集合してゐるのだと云ふことである。

『何か助言を得たいとき、何か援けを蒙りたいとき……かう云ふ場合にあなたを御招び申してもよろしいでせうか』と自分は尋ねる。『何時でも來るよ、喜んで』と彼は答へる。『今迄にだつてお前は知らないが幾度も其のために來たことがあるんだよ。』『何かあなたの爲に私の方でしてあげることとでもありませんか。――いや少くともあなたに喜んで頂くために。』と自分は云ふ。『いや、お前がわしのために何が出來よう。が自分が歸つたあとで此處にゐるこれに』と云つて其處の隅つこにまだ待つてゐるらしい『父の靈魂』を指差すもの丶如く『これに話してあげて呉れ、お前は彼の助けになることは出來るのだ。是非さうしてやつてくれ』と云ふのである。

またレイヌも命令するやうに繰返した。『お祖父さんは貴方がお父さんのスピリットとお話し

なさるやうに望んでゐらつしやいます。命令せんばかりに、さうして呉れと云つてゐらつしやいます。』

祖父の靈魂は歸り去つた。レイヌは『おさらば』と云ふかのやうにスピリツトの後を見送る。で、自分は父の方へ振り返つて『何でもあなたの爲にさせて頂きませう。あなたは私に何をして欲しいと云つてゐるのです。』と云つた。

父からの答へは、過去に於て自分を惱ましてゐた家庭の不和をまつたく肉體としては知らない此の靈感中の少女によつて傳へられたのであるが、それにも拘らず事實と性格との正確な表現として素張らしいものであつた。それは吾々二人の會見が父子の間に引起した感情を心理的に遺憾なく表現してゐるものであつた。此の場に出現してゐるスピリツトが父に相違ないことは自分にはそれでスツカリ證據だてられた。無論これは自分だけにしか解らない證據であると云ふことは自分も知つてゐる。自分自身だけが、このスピリツトが父自身のスピリツトであることを承認し得るのである。が、自分は父からの通信がどんな言葉ではじまつたかと云ふことだけを玆に書いて、讀者に此のスピリツトの通信の價値をば推測し得る證據の一端を示したいと思ふ。

『先づ、貴方のお父さんは、わしを餘り酷しく審判いて呉れるでないと被仰つてゐますわ。』

……かうした言葉が嚴かに何も知らない筈の少女レイヌの唇から漏れたのだつた。

それからレイヌは續いて父の考へと希望とを傳へた。それが終ると、レイヌは彼女自身の發意で、父が現在ゐる状態を自分に説明して呉れた。

『此の方は惡い方ではありません。強くないのです。色々の考へが頭の中でこぐらがつてゐるのです。彼は自身の父が非常に高い階級にゐるのを見ます。そして自身の子息がまだスピリットにはなつてゐないが、靈の階級が自分よりも上位にあるのを見ます……と彼はそれに就て心の眼を開きたいと望んでゐます。……彼は出來る限り好いことをしたいと思つてゐるのですが、なにをしたら好いか知らないのです。……兎に角彼は今うまれかはつて出てはならないのです。彼はあまり弱すぎます。彼は若し今うまれ替つて出て來ても前生涯そのまゝの生活をまた始めねばならないでせう。』かう云つてから彼女は自分に背を向けて權威ある語調で自分の父のスピリットに話しかけた。

『何よりも先づ、貴方はまだ地上に出て來てはならないのです。貴方が此の世に生れて出て來ようと考へてゐらつしやる事はわたし知つてゐますわ。あなたは地上で好い經驗をして來てゐます。併しあなたはまだ善い生活を送り得る程には強くはなつてゐません。もし今生れかはつて地

上の生活を繰返されゝば、同じやうな過を繰返します……貴方は地上に生れかはつて出るまでにもう少し靈界で生長なさらねばなりません……そのためには貴方は赤味を帶びた色のスピリツトとの交りを避けなければなりません。それから貴方自身のやうに灰色のスピリツトとも餘り交際なさつてはなりません。青色のスピリツト……いや青！純粹な青ではありませんが、貴方自身よりも青い色彩の勝つたスピリツトと交るやうになさい。……これが貴方の向上なさる道です。これが貴方の心の眼を開く最も好い道です。』

父の靈との會見を終らうとして、自分は父が進化するために父を如何に援助するのが最善であるかをヴエッテリニに問うて置かうと父の靈に約束した。すると自分の此の言葉にそゝられて、父はまた親愛な考へ(自分には最も興味ある考へ)をまた更に傳へて來た。それは屢〻父が此處へやつて來たいと云ふことであつた。彼は自分自身の責任で此處へ時々やつて來ると云ふのである。彼は此處へやつて來ても自身から發する靈的波動では誰も傷けはしないし、而も此處へ來て受ける靈的放射が自身の向上のために助けになると云ふことをさとつたのである。父にとつて善いことだ。父は、私が時々父のことを思ひ出し、父を此處へ呼び出し、父と話を交へるならば嬉しいのだといふ……彼はいまナントへ歸らうとしてゐる——其處には彼の愛する色んな事物が

彼は引きつけるのだと彼は云つてゐる。そして彼は去つた。……

* * *

此のながい場面は長時間を要した。が自分は靈媒に彼女の守護靈(ヴェッテリニ)が其處にゐるかと訊いた。自分は彼にたづねたい或る疑問があるのだ。ヴェッテリニは交靈會に姿をあらはして例の位置に座を占めた。

自分はエフルュービヤ(effluvia—幽體)の色彩に關する問題を先づ決定したいと思つた——が自分がそれを言葉に出しかけた時レイヌはそれを遮つた——

『コルニリエさん、ヴェッテリニが貴方に其のことをお話しようと思つて待つてゐらつしやいます。ヴェッテリニは以前には間違つてゐたのですつて。その間違は、ヴェッテリニが今迄そんな問題の研究に就て興味をもつた事もなかつたのと、常に靈界でスピリット達がたゞ一色の靈體を有つてゐるのを見慣れてゐるために、靈體は各スピリットに就て、只一色のものだと被仰つたのださうです。ところが、貴方のお問で今度其問題を調べて、今迄の考への正否を確かめ御自分の説を訂正されることにせられたのです……貴方の説は正しいのですわ。それから貴方が引合に出される心靈學者の説も正しいのですわ。』それからレイヌはざつと次のやうな説明を續けた。

生命磁氣の瓦斯狀流出物を發生する人間の幽體は、スピリツト（精靈）とその有機的機關との二個の全然相異る要素によつて影響せられる。精靈は幽體に青の色合を與へ、その有機的機關は幽體に赤の色合を與へる。實驗上より云へば、此の二要素は瞬間の間は分離せしめ得て、直ちにもとの完全なる流動體を形成し得るやうに再結合し得るものである。茲に注意すべきは兩要素の組成分量の割合は、各人の靈魂の進化の程度によつて異ると云ふことである。例へば劣等なる靈魂は赤の色合が優り、進化の程度大なる靈魂は青の色合がより強く、最後に愈々その精靈的本質が有機的機關よりも甚だしく强烈なる時には、その青色は愈々冴えかへるのである。併し此の最後の場合には、その靈的流動體が出遊せんとするに當つて、靈的要素の位置が變つて、青色の要素は本人の左側より赤色の要素は本人の右側より出遊することがあるのである。

肉體の死に當つては、その靈魂の進化の程度に從つて、或は長き、或は短き時間の經過せるのち、此の本來有機的なる瓦斯狀的體は、精靈が靈界に於てまとふべき『體』を形成する一層微妙なエーテル質様のものだけをスピリツトに殘して置いて、その他の部分はスピリツトから脫出し地に屬する新しい結合をつくるために地上に回收される。

自分はまた一つの問を出した。ヴェツテリニはそれに答へて此の有機的瓦斯狀ボディの色彩の

根元は、非有機的なエフルユービヤ（磁氣、その他……）…の色彩の根元とは又別であると說明した。（一九一三年四月七日）

二十五

スピリツト自身は如何に『彼岸の生活』に就て語るか（續）

レイヌは今日はいつもより一層好い狀態であつた。自分が施法をなし始めた抑々のはじめから彼女は全然つめたくなつて了つてゐた。それで此の交靈會は好成績に運ぶべく期待された。が不幸にして、自分が描いてゐたプログラムは實現出來なかつた。端睨すべからざる狀態に自分は呆氣にとられて、ヴエツテリニに對して質問しようと思つてゐた興味ある問題にも觸れずに了つた。

自分の例の通りの問に對してレイヌは答へる――『わたしは偉大なる青色スピリツトたちに會ひに往つてゐました。青色のスピリツト達はわたしを高い高い空間に伴れて往つて呉れました。わたしは何も尋ねませんでした。（自分は彼女に何の問題をも訊いて呉れとは託してゐなかつた）で、わたしは今の靈魂出遊に就て何も別にお話し申上げるやうな事柄はありません――たゞ、時

時わたしは奇妙な靈的流動體の流れに觸れるのを感じました。わたしの考へでは此の靈的流動體の流れは高級のスピリット達がしてゐる色いろの仕事に關係のあるものだと思ひます。それは確かに人間の運命を修正しようとするスピリットの努力と關係があるものゝやうです。わたしは強ひてたづねはしませんでした』と。

では自分はまた別の日の交靈會でこの問題に觸れる機會を見出さう。彼女が此の報告を終つた時、自分は自分の祖父に會ひたいから、是非とも祖父の靈魂を探し出して來て吳れるやうにと彼女に云つて、ローズ・クロイキスの綬章を彼女の手に渡した。が、自分が此の希望を表出し終らないうちに、彼女は驚いて叫び出した。

『いえ、探しに行く必要はありません。あの方は此處に來てゐらつしやいます。えゝ、えゝ、此處にゐらつしやるのです。あの方は「貴方が今日しよつちう自分のことを考へてゐたから、自分を呼ぶだらうと思つてゐた」と被仰います。今朝貴方は此の品を手にもつて、午後には祖父の靈魂を呼び出さうとお決めになつたのでせう』……（彼女の云ふことは正確に的中した。今朝自分はひとり居るとき、机の抽斗から例の綬章を出して、それを手にとつて見ながら、今日の交靈會に自分の祖父に提出しようと思ふ質問をきめて置いたのである。）

一寸挨拶の言葉の後、自分は祖父に『貴方は靈界で貴方の二番目の息子と御交通になつてゐますか』とたづねた。

『いゝや、ちつとも』と祖父は答へた。彼は自分が歸幽するよりも前に死んだ二番目の息子のことを漠然と思出したらしい。併しそれでお仕舞ひである。彼は二番目の息子の名前さへも覺えてゐなかつた（1）。これには自分も驚いた――『貴方のやうに進化の程度の高いスピリツトだつたら、一寸思念を其の事柄に集中なすつたら、それを精確に思出せさうなものぢやありませんか』と自分はたづねる。彼は答へる。『それはさうだ。實際、さうやらうと思へば出來るのだ。併し自分は全體及び自分自身を進化せしめようとする計畫に何の關係もない一切の事物には、あまりにも遠く懸け離れて了つてゐるのだ。そんな事物は一切下らない虛ろなものに自分には見えるのだ。そんな息子の名前などは、思ひ出さうとするだけの價値はない。そんな事には自分はすつかり懸絕してゐる。』

（1）――レイヌの靈界通信が潛在意識の精神交感現象や讀心作用に起因するものでないことは、茲でもまた證明されるのである。實際、若し彼女が自分の意識又は下意識から彼女の報告資料を讀心術的に得來るのであるならば、何故彼女はいつもあることだがしよつちう自分の記憶の中に存する事項を知らないと

云ふのであるか？　例へば、自分は自分の祖父の二番目の息子が極めてドラマティックな狀態で溺死した光景や、これから自分が後に語る自分の從兄に就ての色いろの小事件やをば、或は漠然と或は明確に記憶してゐるのである。然るにレイヌは自分の意識中にある此等の一つをすら讀心することが出來ない。而も此等の兩人格の道德的特性について心理學的分析を試みたりするのは……？それは少くとも奇妙である！彼女の靈界通信が彼女の潛在意識の『創作』であるとするならば、特に心理的要素を集めて此れを實際に符合する生きたキャラクターに『創作』するのは（前節、父の靈魂の出現の條參照）單に自分の心の中に多少とも重大な心象乃至記憶として存在する事を讀心術的に感知して、其れを其儘傳へるよりも難しいとしなければならない。然るに、歸幽の靈魂の存續を假定してこれを說明するならば、スピリットは歸幽して全然地上的狀態とは切り離されたのであるから、吾々にとつて鮮かな大小の地上の事件も彼等にとつては全然關心する要なき事件となつて了つたと云ふことは理解しやすきことである。彼等が地上の事件を忘れて了つたと云ふことは、吾等もこれを認め得よう――何故なら吾等地上の人間も忘れることがあるからである。自分の家庭に屬する人々の生活に關しても、自分は想起することの出來ない幾多のエピソードがあることを認めねばならない。遠隔の地に住んでゐる自分の親戚で數年間何らの接觸もない人々の名前には自分も全然忘れて了つたのもあるのである。吾等が青年時代に閱して來た環境のうちには、重要なものでありながら、成長後の今日、どんなに多く吾々の記憶から消えて了つたのがあることだらう。（コルニ

リエ氏註）

＊　＊　＊

自分はそれを遺憾に思つて絶えず物足りない表情をつゞけてゐると、レイヌ自身の靈魂は靈界の事情を説明しようとして呉れる。「勿論地上の人間には納得出來にくいことです。併し貴方は此のことを御記憶にならなくてはなりません。——靈界には親族關係とか血族關係とか云ふ風なものは存在しないのです。スピリツトを繫ぎあはす唯一の紐は其の靈波の類似と云ふことです。貴方の祖父は其の息子の靈波とは何等の類似を有つてはゐられません。それで二人ともその肉體がなくなつて、地上で彼等を血緣として結びつけてゐた肉體と云ふ機關を奪ひ去られて了つた後には、二人は全然他人であり、全然何の關係もないのです。それに貴方の祖父さんは靈界に於て益〻高く進化を繼續せられて、非常に高い階級のスピリツトになつてゐられる。それについて、此の地上生活の暫しの間の繫がりと云ふ風なものゝ回想は全然心の底から消えて了つたのです。最早や地上的な繫りはあの方の靈にとつては存在しないのです。さうしたことを事こまかに想出すための努力は一層善きことのために費さねばならないのです。だつて祖父の靈は貴方のところへ歸つて來たぢやないかと被仰るんでせう——さうです。だけど、それはあの方の靈波は貴方の靈

波と似てゐるからなんです。祖父のやうな高いスピリツトは吾々の住む地上の雰圍氣内に入ることは苦痛なんです。だけどあの方は貴方の進化を助けることが出來るから常に此處へ來て下さいます。お解りにならない？――なか〳〵靈界の原理は呑み込めないことが多いのです。併しそれが事實なのです……あなたはあの方に何をお尋ねにならうとしてゐるのです。あなたの助けになることなら、何でも爲ようとあの方は被仰つてゐられるのですわ』

自分は自分の從兄（祖父の第二子の息子である）の靈魂と話したいと云ふことを說明した――自分は從兄の有つてゐた品物を一つも持つてゐない。で、どうぞ從兄の靈魂を探し出して此の交靈會に伴れて來て頂きたいと。祖父は云ふ――『探して見よう、だけどもこの孫の靈的流動體がどんな變化を經て來てゐるか自分にはわからないから、探すのに時間がかゝるかも知れない』此處に從兄の靈的流動體の波動を帶びてゐる物品が何もないので、祖父は全般的に吾々家族の靈的流動體の波動を帶びてゐるスピリツトを探し出し、而も二代の間にわたつて或る變化を閱してゐる靈體を搜し出さねばならないのである。問題は極めて複雜である。併し祖父は遣つて見ようと言ふのだ。

レイヌは說明する――『これがヴエツテリニだつたら又別です。ヴエツテリニだつたらあの人

の過去の生活の詳細をあなたにお話しすることが出來たでせうよ。何故ならヴェッテリニは吾々を助ける使命を帶びて、既に前々から此地上の雰圍氣に已むを得ず歸つて來てゐるのですから。彼方は常に地上の吾々の生活を見まもつてゐて呉れてゐます。彼方は吾々とともに生活してゐるのです。彼は吾々に關係した事なら何でも知つてゐます。併し貴方の祖父さんの靈魂の場合ではスツカリ事情がちがひます。あの方は突然非常に高い靈界から來られたのです……地上の雰圍氣内との接觸は極めて昨今のことなんですもの……』

吾々は祖父のスピリツトが歸つて來るのを待つてゐた。が、なか〳〵探すのが面倒だと見えて歸つて來ない。で自分は別の實驗に轉じた。自分は一語も發しないでレイヌの手の上に小さな寶石を置いた。レイヌは其れに觸れて樂しむやうな表情が見える……『本當に妙です！　わたしは何だか以前に大切にしてゐたものを、失うてゐたものを探出したやうな氣がします』（彼女の此の言葉はヴェッテリニが暫く前、吾々に話したことのあるレイヌの前生の一つに聯關さして考へると興味があるのである――それは彼女が前生のその前の生に於てエヂプトで生活を送つたといふのである。そして此の小さな寶石もエヂプト出來の頸飾からとつたものであつた）『此の品物に觸つて見るときの不思議な感じは言葉では言ひあらはすことは出來ません。これは……フム…

…これは……あゝわかつたエヂプトから來たんですね！　さうだ、さうだ、たしかにそれに違ひありません。これは腕環の中にか……頸飾のなかにあつたものです。この品に帶びてゐる靈波があまり微かなのでそれ以上のことはわかりません。併しこれがエヂプトから來たものだと云ふことはたしかです……オ、嬉しい！……わたしがこの石を自分の頸につけることが出來たら……？』こゝまで云つて彼女は椅子にかけたまゝ素早く周圍を見まはした『ヴェッテリニが來るやうです。それが感じられます。彼は極く近くまで來てゐます……ア、もう來ました。さあ、どうぞわたしのヴェッテリニ。』

彼女は無言で傾聽してから傳へる、『コルニリエさん。貴方の祖父さんの靈魂はまだ中々此處へは歸つて來ないだらうから、ヴェッテリニが來たのだと被仰つてゐます。祖父さんはまだあなたの從兄さんの靈魂のあとさへも見つけてゐられません。祖父さんのことは待たないが好いと被仰つてゐます。』

*　*　*

自分は進化の程度低きスピリットの感情や生活が、色いろに其のスピリットによつて相異してゐると云ふことに就て話した――或るものは極めて鋭敏な活動力をもつてゐるのに、他のあるも

のは極めて遲鈍な活動力をもつてゐると云ふやうな事實である。

ヴェッテリニは說明して云ふ――同一段階の進化をとげたスピリットであつても、靈界への移行によつて別種の反動的生活を營むに到るものである。實際此の反動は個々の靈魂そのものゝ個性によつて決定せられるのである。それは恰も此の世へ出生した人間の生活が、靈魂そのものゝ個性によつて決定せられるやうなものである。或る者にとつては眞理を把み得ないことは苦痛であるが、又他の或る者にとつては眞理の把握などと云ふことはどうでも好いことなのである。彼等は眞理を知るために時間を費さうなどとは思はない暢氣坊主なのである。彼等も或る活力をもつてゐてそれを使ふ。靈媒現象に於てテーブルを動かしたり『誰方ですか』と云ふ問に、靈媒を通じてゾンザイな言葉で答へたりするのは此の種のスピリットなのである。彼等は『生』の世界で生活したやうに『死後』の世界でも亦生活してゐるのである。（一九一三年五月五日）

○

レイヌは深い催眠狀態に這入つたやうに見える。しかしヴェッテリニとの關係に這入らうとする瞬間が來ると、彼女は言葉が充分聞えないで、まるで霧のなかゝらものを見るやうな鹽梅である。暫く躊躇と不安な疑念に包まれてゐたが、彼女はやがて其の理由がわかつたのである――ヴ

エッテリーは彼女にもつと充分自分をしてマグネタイズ（深い統一狀態にするために靈的流動體を彼を送ること）せしめよと云つてゐるのである。で、自分は六分間か八分間ばかり靈的流動體を彼女に送つた。と、自分とヴェッテリーとの間に明瞭な通信が交へられるやうになつた。

自分は偉大なるスピリットたちは顯微鏡的世界——黴菌を始めとして、更に降つては物質原子のやうな世界——を如何に觀ずるかを知りたいのである。此の不可思議なる世界は人間にとつては微妙な機械的裝置を介してのみ視得る世界に過ぎないが靈界の人々にとつては如何に視えるであらう。彼等はそれを視得るのであるか？　スピリットの觀察は『極微の世界』へ、どの程度まで穿ち入ることが出來るのであるか？

ヴェッテリーは答へる——偉大なるスピリット達は顯微鏡的世界の諸現象を完全精確に觀察し得るのである。彼等は一滴の水、一分子の水の中に存する凡ゆる要素を分解し、諸種のバクテリヤ等の存在を悉く見得る。併し彼等はかゝる極微の世界を人間のするやうに顯微鏡をもつて見るだけではない、否——。大なるスピリット達が此の極微の世界を認識し得るのは、主としてその化學的構成及び原子構造によつてゞある。彼等の觀察は人間の觀察力よりも深きに貫く、併しそこにもおのづから限度があるのである。スピリット自身の考へでは、彼等自身は生命の胚子が絶

對界から生れ出る略ぼ其の瞬間に於て、生命の出現を見ることが出來るのであると思つてゐる。併しその『創造の太源』は彼等にとつても依然として謎なのである……彼等は進化の行程をつゞけながら不可解の神祕(第一原因)を後にのこして、不可解な神祕(究極目的)へと進んで行くのである。

このときヴェッテリニは其の強い確信が爆發して押へ切れないと云ふ風な調子で、彼のやうな階級に屬するスピリットの生活の眞相をチラリと洩らす――『吾々靈界人にとつても其のまた奥の世界には神祕な一層深い靈界とも云ふべき世界があつて其處からスピリットが時々吾々を敎導し、一層高い眞理を啓示する使命を以て遣つて來るのだ――それは丁度吾々が人間を導くためにやつて來るやうなものだ。自分が斯うして敎へられてゐるところでは、此らの高きスピリットたちの究極的使命は宇宙力の方向を指導するためなのださうである。世界の生成、新天體系の出現、それらの消滅、これ等は此ら高き靈智者たちの決定するところであつて、宇宙力とか普遍的法則とかは此等高き靈智者たちの顯現樣式たるに過ぎないのだ』と。(1)

(1)日本の心靈學者たちの研究では、宇宙力とか大自然力とかを操つてゐるスピリットは偉大な變貌自在な自然靈であつて時には龍體を現ずるので龍神と云つてゐる。(谷口註)

ヴェツテリニの云ふところによれば、彼と同一程度の進化の階級にあるスピリツトが、此等一層高きスピリツトから受ける靈界通信で敎へられる事項には吾々地上の人間にとつてはホンのチラリとだけでも捕捉し得ないものが殆ど全部を占めてゐるのださうである。斯かる場合には、ヴエツテリニは云ふことを許される程度でそれを吾々に話して呉れるのだと……

そこで自分は期せずしてヴェツテリニと同階級のスピリツトの生活の詳細をたづねる。吾々の旣に聞いたところによれば、彼等は極めて忙はしく仕事に熱中してゐるので、單獨で仕事をやつてゐるのもあれば、多勢連絡を保つて仕事をしてゐるのもあると云ふ――そして其の仕事は槪して云へば人類の進化を早めるための重要な任務だと云ふことであるが、では、此のほかに彼等には何んな仕事があるのだと訊いた。

ヴェツテリニは答へる――『スピリツトは人間には未知に屬する構成の世界條件に固有なところの種々の生活があるのである。併し彼等の生活に該當する樣な觀念が人間界には存在しないので、自分でそれを語ることは出來ない。併し、人間の理會し得る經驗の範圍で云へば、藝術の精髓的本源は靈界より發するのである。そしてまた自然を鑑賞する人間の情緒の精髓的本源もまた靈界より發するのである……』

やがてヴェツテリニは新しい寧ろ奇妙なやうな打明け話をした――『吾々はスピリツトであるけれども、自己の靈界生活を刺戟するために或る種の力の更新を必要とする。でなければ吾々の生活は沈滯したものとなる。吾々は吾々の生活を充實したものとするためには、靈的流動體をもつて自己の養ひとしなければならない。だから吾々は此のフルーイドを見出すためにはたらかなければならないが、なかには懶惰なスピリツトがあつて沈滯した生活に打浸つてゐる』(併し或る時期になると、宇宙の神祕な電磁氣的流れに強要されて、嫌でも進化の道程に藻掻きのぼらねばならないのださうである。)『一言にして云へば』とヴェツテリニは續けるのである、『靈界の生活にもまた現世と同じやうに靈界相應の歡喜と悲哀とがある。併し地上の生活に比較すると無限に幸福で、無限に廣大で、無限に深刻で、また無限に輝かしいものである……』(一九一三年七月三十日)

○

レイヌはヴェツテリニが、彼女を青色のスピリツトのゐる靈圈へ例の通り伴つて行つて呉れたと云ふことを傳へた。これが今日彼女の統一狀態での談話のはじめだ。こんど彼女が見たところの青色のスピリツトは數は少かつたが、極めて忙がしさうに立ちはたらいてゐるのであつた。『こ

れらのスピリツト達は實に實に忙がしさうに……そら……そら……あの……』と彼女は自己の見て來た狀態を表現するに困つたやうな樣子で……『何だかそれは糸のやうに、フルーイドのやうに、流れのやうになつてゐるものゝ上に、スピリツト達は往つたり來たり、行きつ戾りつしてゐました。多分スピリツト達自身が、そんな糸のやうな流れのやうなものを造つたのだと思はれます。彼等は昇つたり降つたり、往きつ戾りつ織るやうに行き交うてゐました。それはまるで大きな將棋盤の上に將棋の駒が動くやうな鹽梅でした』

かう云つてレイヌはヴェツテリニの方へ說明の言葉を求める樣子である。ヴェツテリニの云ふところによれば、此等のスピリツトが何を爲しつゝあるかを人間に理會せしむることは不可能である。人間界にはそれに相應する觀念が全然ないのである。たゞ彼等が地上に起らうとする事件を修正せんがために働いてゐるのであると云ふ簡單な說明だけは下せると。

自分は他の問題を提出した――時間の全經過を通じて、靈魂は無制限に創造されつゝあるものであるか。それとも永遠を通じて或る一定數の靈魂が存在するのであつて、唯その進化狀態の相異から靈魂の種別と云ふものが生じるのであるか?

これに對する答――否靈媒を通じての答の移牒は極めて複雜したものであつた。實際レイヌの

現在の状態では此れに對する答へを明瞭にもとめるのは無理であつた。全てのうち唯一つだけ確答を得た。そしてそれは確實と認めて好いであらう――それは靈魂の萌芽は全時間を通じて間斷なく創造されつゝあると云ふことである。＊（一九一三年七月二日）

＊各自の靈魂の發達の等差や、地上生活への生れ更り度數の相異や、肉體の年齡に拘らず、靈界通信で『あの靈魂はまだ若い』などと云はれる事實から見ても、常に新しく現象界へ靈魂の萌芽が顯現されてゐることが判る。（谷口註）

二十六

スピリット自身は如何に『彼岸の生活』に就て語るか（續）

自分は出來るならば、レイヌの靈魂が空間高き靈圏に遊行してゐる間に受けた印象に就て合理的な觀念を得たいと思つた。この目的で自分は彼女に、（第一）彼女はそのとき如何に感じたか、（第二）彼女のこの高き靈圏遊行に於て、彼女は何を理解することが出來たのであるか――を訊いた。レイヌは到頭答へた、そして其の答へは大體に於て明瞭である。

彼女はその高き靈圏への遊行に於て彼女自身の實驗をなしたのである。卽ち謂はゞ、ヴェッテリニが話して吳れたところの事項――高き進化を遂げたるスピリットは人類の運命を修正すること

とが出來ると云ふこと――を眼のあたりに見せられたのであると。茲に彼女が統一狀態中に述べたところを思出すまゝに記述して見よう――

空に輝く星の各々はそれ自身の雰圍氣で取りかこまれてゐる。此の雰圍氣が其の星が死んだ生物の靈魂の棲息し得る範圍である。地表を遠ざかるに從つて次第に空氣は稀薄となりやがてつひに幽微なエーテルの雰圍氣に出るやうに、それと同じやうに人の靈魂も意識の鈍い不發達な狀態から、次第に進化するにつれて意識の玲瓏透徹した狀態へと到達する。かゝる狀態へまで進化した靈魂は地上の運命を支配したり修正したりする力を得るのであるが、その力は靈魂の進化と共に常に增加するのである。

地球の表面より雲のあるあたりまでの區域までに出會ふスピリットは赤味を帶びた靈魂である。それより上圈へ行くと灰色のスピリットが棲んでゐる、上圈に行けば行くほどその灰色はだん〳〵と澄んで來る。雲が漂うてゐない程の上まで行くと靑い色のスピリットが棲んでゐる。それより上圈、稀薄なエーテル世界――星と星との空間――が白い色のスピリットの世界である。

此の高級なスピリットの世界にて、神祕なる運命（不可知の手）が定めたる地上の事件を修正せんがための『靈的流動體の流れ』が發生せしめられる。此の『靈的流動體の流れ』は吾等の太

陽系及び吾等の宇宙に存在せる靈磁氣的力を應用せるものと思はれる。そしてこれを使用する目的は靈魂の進化を指導し促進せんがためなのである……

レイヌのまた理會し得たところによれば、運命の修正は必ずしも確實に效を奏するものとは決つてゐないのである。修正せんとする電磁氣の流れは途中で外れる。或は其の反對的な宇宙的力――諸種の物理的現象によつて稀薄にされたり吸收されたりして了ふ。

此の高級なスピリットの世界に出遊することが出來たのは、實にレイヌに許された特別の恩寵――殆どユニークな恩寵ではないかと尋ねた。ヴェッテリニは答へる――必ずしもレイヌに許されたる恩寵ではない、それは吾々の仕事に對して許されたる恩寵であると。で、自分はヴェッテリニに告白した――自分一個人としては此の靈界出遊の功德をみとめる。併し吾等と同時代の多くは取殘されてゐるのである。俊秀な人々さへも心靈現象には無關心である。最と小さき黍の實さへも此程には輕んぜられはしないだらう！

ヴェッテリニは、自分の意見に就て論じようとはしなかつた、そして唯かう云ふのである――『そんなことはどうでも好いのだ。吾々の仕事は何も今直ぐみとめられるのが唯一の目的ではない。此の現象の記錄が編纂されて出版される――そしてタイムが經過する、その時、此の本の意

味を把んで呉れる人々がやつて來る、吾等の仕事は未來の研究者のための種蒔きである。それは新しい研究の領土での開拓である。人類の進化がもつと高くなれば、人々は一層理解するやうになるだらう。そして現在のところでは吾々の仕事が最も大なる反響を起すのは、恐らく佛蘭西ではないのだ。』（一九一三年七月二十五日）

○

自分はヴエツテリニと話すべく求めた。幽界に棲む靈魂人たちには、吾々地上の人の生活の如き仕事と休息とのリズムがあるか？　活動の期間の次に骨やすめの期間と云ふものはあるか？

スピリツトは疲勞すると云ふことはあるか？

ヴエツテリニは答へる――靈魂に於ては疲勞は存在しない。仕事を完成するには努力、否、勞苦さへも必要ではある。併し一つの仕事が完了したのちには活動の停止があるだけで、休息はないのである――余の知れる限りに於てはスピリツトは疲勞することがないから、從つて休息の必要はないのである。加之、靈界の狀態、靈界の感じ等は人間の言葉で言ひあらはすことは不可能であると。

ヴエツテリニは續けて云ふ。スピリツトはその靈波の類似によつて、ある共通な目的を努力し

て遂げんがために群居してゐることが屢〻ある。
で自分は其の群集の各員の間に意見を異にして互ひに諍論するが如きことはないかと尋ねた。
答――スピリツトが高級の進化をとげた場合には、高く進化せると云ふその事實によつて其處には完全な調和が存在する。と云つても此れは個性の滅却と云ふことではない。或る完成せねばならぬ仕事に對する意見がマチマチにはならないと云ふことである。完成すべき目標は一つである。分擔すべき部分がちがつてゐるが、受持つ仕事を如何になすかと云ふことに就て諍論されると云ふことはないのである。これに反して低き靈界に於ては、地上の人間生活に附きまとうてゐた異論百出的な狀態が存在する。各スピリツトは地上に於て有した性癖や意見の俤をそのまゝ備へてゐる。社會問題、政治問題、宗教問題等は論爭の種であつて、彼等に於てはまだパツションは超克されてゐない。靈界通信に於てスピリツトの持說が區々に別れてゐるのは此の理由によるのである――或るスピリツトは極めて眞面目に祈りは魂の安息のために必要であると說いてゐるし、又或るスピリツトは極めて眞摯に教會のために寄附金を募るのは好いと考へてゐる。また或るスピリツトは機才を誇るために、或は單に戲言を弄する面白さから出鱈目な意見を述べて人々を欺くのである。死者』は、彼が生きてゐた時知つてゐたこと以上のことを知らないのが普通

で、生きてゐた時よりも無智であることさへ時にはあるのである。例へば、生前優秀な肉體を備へてゐた靈魂は、肉體を放棄することによつて却つて貧弱となつた譯である。

二十七

スピリツト自身は如何に『佛教』に就て語るか

話はまだ續く。自分は佛教のこと、佛陀のこと等について話した。

ヴェツテリニの考へでは、佛教は吾々歐羅巴人種とは全然異る人種の要求を表現せるものである――從つて其の教義は歐洲人にとつては何等の益もないと云ふのである。併し彼は佛陀のことを大いに尊敬して語つた。吾々はバハイズム其の他のキリスト教の諸分派について語つた。ヴェツテリニは、あらゆる宗教には、或る段階まで達してゐない人々にとつての良き教訓となり、行爲の基準となるものを含んでゐると云つた。併し彼自身の主人公となつた人間にとつては『完全な解放』が必要であると強く主張した。（一九一三年四月四日）

二十八

スピリツト自身は如何に肉體と靈魂との關係に就て語るか

自分は現世の生活に於ける肉體の役割を聞かされて、それが時として比較にならない程重要な

ものであることを知つて驚いた。或る人は生前、聰明で教養あり才幹あり德性あり精力また旺盛であるのに、死して肉體を奪ひ去られてしまつたあとには貧しき弱き迷へる靈魂でしかない場合があるとは？　これは如何にして可能であるか？

　これに對する答は長くまた幾分複雜な紛糾したものであつた――靈魂は多くの場合に於て、多くの靈魂論者が考へてゐるやうに現實界に於ける力を備へてゐるものではないのである。地上に於ては、肉體は屢〻一切の主者である。肉體の作用に對して靈魂は無論相呼應したり反撥したりするのであるが、肉體そのものは否定すべからざる自主權を有するのである。肉體は普通であることもあれば、優秀であることもある。肉體が優秀であれば鈍ろ間でさへも優秀な生活を營むことが出來るのである。肉體は乘馬であり靈魂は其の騎手である。

　自分は、若し此の見地が採用せられたならば、地上に於ける各人相互の判斷は奇妙なものになつて了ふであらうと云つた。そしてまた、運命は靈魂から、靈魂自身の能力だと思はれてゐたものを其の肉體の不完全なといふゆゑに突然奪つて了ふと云ふのは何たる殘酷なものであらうと言ひ足した。

が、レイヌは主張する――「いゝえ、それは全然反對です。如何なる場合にも攝理の恩寵は其

の靈魂につきまとつてゐるのです。靈魂は常に反作用を營むものです。そして現實的には所有してゐない優秀な肉體を使用して獲られると同じ利益を其の靈魂は獲得するのです。』

二十九

スピリット自身は現在の社會狀態に就て斯く語る

自分の妻は現在の複雜した社會狀態は一個の頽廢ではないかとたづねた。古き時代にもつと健全なもつと善良な時代はなかつたものだらうか？　そこには眞に進步と言ひ得るものがあるか？　それは同じ要素の排列を變へたものに過ぎないのではあるまいか？

ヴェッテリニは哄笑した――『否。吾等の云ふ所と同じ事を吾等の祖父も亦云つたのである。進步はある――知性の進步、德性の進步、そして靈性の進步。併し藝術について云へば吾等の所謂文明と云ふものが創まつて以來、何等進步の跡を示してゐない。それは前時代の大藝術家が一人も此の世に生れかはつて來てゐないからである。槪して之を云へば現在の「藝術制作者」は靈界より助けるだけの價値があるとは思はれない「若き靈魂」たちである。藝術（特に造形藝術）に危機が來てゐるとすれば、それはたゞ危機の一つに過ぎない……今に變る』（一九一三年五月九日）

三十

スピリット自身は『心靈現象』に就て斯く語る

問（コルニリエ氏）――物理的心靈現象にて靈魂像製作の場合、それはたゞ觀念力にて客觀的形態を塑像することが出來るのか？（Ideoplastic）

答（ヴェッテリニ）――觀念力にて客觀的形態を造り得ると思ふのは誤解である。觀念及び思考は放射波動の如きものを發生する。しかし形態――三次元的ひろがりをもつた形態――を直接造ることはない。觀念そのものゝ寫眞をとることは不可能である。念寫と云はれる現象は其の原因が別である。又別の機會にそれを說明しよう。

（1）此れは『生長の家』で說く『念の具象化』の原則に衝突するものではない。物理的心靈現象における場合に於て司配靈が靈魂像その他の形態を製作して見せるのは單に觀念力によるのではなく、可塑性の有る材質その他色々の條件が要るを云ふ。（谷口註）

問――スピリットが億兆無數のスピリットの中から、或る特定の靈魂の波動を見わけるにはどうするのであるか？

答――それは說明することの出來ない事實である。靈界に於てはスピリットは此の能力がどこから來るのか自分にもわからないで使用してゐるのである。

問――靈魂は輪廻轉生しつゝある間に、自然其の靈體に幾分の變化を受けるではあらうが、同一の遊星に附屬してゐる限りに於て、其の幽體は本來のものと同じ靈體であるか？

答――靈魂は同一遊星に生れ更つて來る場合は、幾度生れ代つて來ても同一の靈體を備へてゐる。そして進化するにつれて其の同一の靈體が淨化されるのである。併しながら、地球（他の遊星に於ける場合も同樣である）に屬する最後の更生を經た上は、その靈魂は最早物質的世界に生れ更り出るべき必要のない進化の段階に到達する。その靈魂は最早どの遊星にも、どの恒星にも屬しない。此の瞬間より、靈體なるものは最更やその靈魂にとつて不必要のものとなつて了ふ。本來靈魂なるものは精靈と其の有機的器官とを結び合はす媒質だつたのである。玆に於て彼は永遠に此の媒質を放棄する――棄てられた媒質はその屬する遊星に於て新らしい結合體をつくるための材料となる。靈魂は此の時あらゆる繋縛から解放されて、たゞ精靈そのものとなる――此の狀態は人間の知性では理會しがたきものである。（一九一三年四月二十三日）

○

自分は再び物理的心靈現象實驗會に於ける靈魂像製作は單に念力によるとの說(Ideoplastic theory）の問題に歸つて往つた。

ヴエツテリニは再び觀念又は思念は其れを代表する形態を有するものではないと云ふことを確說した。所謂る『念寫』なるものは全然異る他の原因より生ずるのである。寫眞に映されるものは、觀念又は思念そのものではない。それは靈媒が（自覺的又は無意識的）につくれる像、又は靈媒を助けつゝあるスピリツトのつくれる像の寫眞である。例へばヴエツテリニはレイヌの頭腦に或るイメージを投影する。それは普通主觀的感覺（靈視現象）であるが、時として必要を認めるときは、幽體即ち靈的流動體を結合して客觀的形態をつくり上げる。そしてイメージが複雜な場合には、瞬時的に物質から材料を得るのである。（1）かゝる場合にはそのイメージは寫眞に撮影せられる。また或る場合にはその實驗に立會つてゐる人々の眼に認められるのである。

（1）若し完全な物質化現象が必要な場合には進化の度低き、その幽體が物質に近いスピリツトに命じて此の現象を起させる。（コ氏註）

靈媒リンダによつて得られた線畫像の念寫及び、ドクトル・オチオロウイチその他の實驗を說明の引合に出した。ヴエツテリニは、彼の說明はこの種の現象にはいづれも適用して間違はないと云つた。靈媒リンダの靈能は恐らく非常に強いのであらう。それは彼女自身だけの力によつて物質化せるイメージを作り得たのであるか、それともスピリツトが彼女の仕事を行ふのを助けた

かいづれかである。併しながら此の現象は腦髓内に存在する觀念又は想念と何等の關係もないことを確言しなければならない。若し『觀念』と『寫眞』との間に何等かの關係を認めるとすれば畫家が繪を描くのと同じやうな徑路を經るのであつて、手續なしに觀念が直接に形體をつくるのではないのである。

自分は話のキツカケを利用して、巫戲けた併し有名な物質化現象――かのリシエ教授が撮影したビアン・ボアの幽靈寫眞――兜を冠り、頸鎧をつけ、その他諸種の假裝的衣裳を着けた幽靈の寫眞の意義を尋ねた。

ヴェツテリニは再び說明して云ふに――それは低級な靈界棲息者が面白がつてした弄戲なのである。低級靈の或るものは、低級ではあるが、靈媒の力を利用すべき方法を知つてゐるのである。彼らは一層進化せるスピリツトの遣り方を注意して見習ひ又は聞き覺えたのである。そして彼等が良質の靈媒（但し低い階級の）と相協力する時、弄戲を爲すに好都合な機會をつかむのである。時として彼等は善意よりして物質的現象を行ふこともある。彼は自分の知性の發達に應じた程度で、出來るだけのことをするのである。

偉大なスピリツトは斯くの如き巫山戲た現象を防止することは出來ないのであるかと自分は尋

ねた。

答――＝極端な場合のほかは、吾等はそれを止めることは出來ない。スピリツトは或る程度までは自由である。人間は正邪を甄別しなければならない。進化を促すのは研究であり、理解せんとする努力である。若し人間に「眞理」ばかりが與へられるならば「眞理」に到達せんとする努力はなくなり、彼等の進化は停止するのだ』（一九一三年四月二十五日）

○

自分は暗示感應現象及び、念傳並に遠感現象は如何なるカラクリで出來るか說明をもとめた。此れ等の現象は存在するに拘らず、自分は自分の心のうちに存在する觀念、心象、又は言葉を催眠中のレイヌに傳へようとして、意志の全努力をなしたに拘らず、それが全然不可能であつた場合が度々あるが、それは何故であるか？ 彼女は催眠中自分の暗示に全然反抗した場合が實にたびたびあるのである。

今度はレイヌ自身の靈魂が答へる、（時々はヴェツテリニに助けられながら）――『コルニリエさん、暗示は私に與へても成功しません。その理由は極めて簡單です。暗示感應現象は二つの靈魂が兩方とも同じ力である場合には不可能です。或る思念を強制的に傳へたり、權威によつて暗示

に服せしめようとする場合に效を奏するのは、高級なる靈魂から低級なる靈魂に對してのみです。若し貴方が意志弱き靈媒、又はどんな暗示にでも感應しやすい(靈魂の低きに因る)靈媒が得られるならば、貴方は其の靈媒に、あなたの欲する事物を見せたり、感じたり、言はしめたりすることが出來ます。併し、私に對してそれは不可能のことです。貴方と私とは同一階級の靈魂が相協力して仕事をしてゐるのです。成る程、私は貴方の申出に從ひます――たしかに從ひます。しかしそれは全然別問題です。あなたが密閉した筐の中を透視して見よと云はれゝば私はそれを試みます。それを透視するのは私自身です。私の靈魂がその實驗の價値を知つて、それを試みるのです。それは決して貴方の思念を感受したり、暗示に感應したのではありません。貴方は私に決して暗示を强制的に感應さすことは出來ません。

彼女は極めて明快に、讀心現象、暗示感應、遠感現象、幻影、客觀に符合する幻覺、千里眼現象…等の說明を續けた。此等の心靈現象のすべては一つ乃至二つの主要原因より起るのである――

第一――アクティーヴな狀態にある腦髓が思念波動を送り出すと、パツシイーヴな狀態又は感受的な腦髓がその波動を受けて感知するのである。(念傳、遠感現象等)

第二――一般に或る印象(必ずしも强烈な印象でなくとも好い)を受けたのが動機となつて、人

は自己の幽體を出遊せしめて、受動的な感受狀態にある第二者に其の姿を示現することがある。(幻影、事實に符合する幻覺等はこれである。)また感受者みづからの幽體が出遊して或る狀態を見て來ることもあれば、事件の起らうとする兆候を把んでくることもある。(讀心術、千里眼、遠感現象等……)

第三——守護靈その他、靈界の靈魂が(それは死後の靈魂が現世の人達に興味を有つてゐる場合、又はその他の理由に依る)報告者としての役目を果して、感受者に現在存する事實の觀念、又はイメージを傳へる。又或る場合は報告せんとする事實の姿を見せることさへある。

最後に、レイヌは云つた——かうした念傳、千里眼現象、讀心現象等は自發的に行はれる場合には、力の等しい靈魂同士の間にも、力の不等な靈魂同士の間にも行はれるが、吾々の行ふ場合のやうな、有意的に行はうとする實驗に於ては、移送せんとする思念は、高級な靈魂から低級な靈魂に對してゞないと傳へることは出來ないものである。(一九一三年四月四日)

○

自分は他の問題に移つた。

進化の高下と云ふ見地から見るならば靈媒とは何であるか?

答――靈媒的能力は靈魂そのものとは全然獨立せる別個の問題である。此の能力は、肉體の心靈化學的な素質から來るのである。だから、どんな階級の靈魂を宿す肉體にも靈媒となり得るものがある。靈媒となり得る素質の肉體を有しながらも、その靈魂がかゝる役目に自分の肉體をつかふことを厭つて、生涯自身に靈媒的能力があるかないか、判らず仕舞ひに此の世を去る人々もあるのである。肉體の靈媒的傾向は、スピリットから見れば容易にわかるもので、低級なスピリツトは絶えず靈媒的肉體を通じて、自己を生者の世界に示さうとするのである。

自分にとつて興味のあるのは靈媒的能力は肉體的素質の問題であつて、靈魂の素質に無關係だと云ふことである。(一九一三年二月二十一日)

○

生者の「幽體」即ち複體の遊離の難易は、靈魂の進化の程度によると云ふことに就て――

ヴェッテリニの説明――大多數の場合に於て生者の「幽體」は肉體の表面から四分の一吋乃至四分の三吋ハミ出てゐる。或る場合にはもつと多くハミ出てゐることがある。また往々にして殆ど全く肉體から遊離して、肉體の頭上に立つてゐることがある。一層多くは肉體の左側に立つてゐるのである。普通「幽體」と肉體との遊離しやすいほど、その靈魂の進化の度が高いのである

が特に發達せる靈媒又は靈媒的な心靈・物理的組織を有する肉體に於いては、幽體の遊離し易いと遊離し難いとは靈魂の進化の程度に關係はないのである。それは靈的流動體を放出し易い或る肉體的素質から來る作用である――そして一般に靈媒と云ふものゝ特徴は、その肉體から靈的流動體を放出し易いところにある。

レイヌは云ふ――例せば彼女自身は極めて好い靈媒だと云ふ譯には行かないのである。彼女の肉體の素質は現實的な役割を演ずるには適してゐない。それで物質的現象には無力である。

レイヌの此の言葉から自分は思出した――彼女は最初の頃の交靈會で『今は貴方で結構ですが、段々後になると、わたしをマグネタイズするのにもつと強力な力が要ります』と云つたことがあるのである。で此の判斷は今でもやはり通用するのかとたづねる。

『いゝえ』と彼女は答へる。『今ではあなたのほかにわたしを催眠せしめることの出來る人はありません。……最初あなたの靈的流動體の力は大分弱かつたのです。どれだけそれが開發されるか私にはその當時知ることが出來ませんでした――が、あなたはその必要な力だ[illegible]されました。この心靈的仕事をやり遂げ得るのはあなたの忍耐と不屈不撓によつてゞす。この心靈的仕事を終へたのちは靈媒として私は他の實驗に役立つことはありません。わたしは靈媒として何らの報酬

も貰つてはならないことになつてゐます。この心靈的仕事――吾々の共同的仕事は全然利益を度外視して行はれつゝあるのです。常に今後とも吾々の此の關係は保たれるでせう。併しあなた以外の何人も私を使用することは出來ません。私の靈魂がそれを拒みます。たとひまた私の靈魂がそれを拒まなくつても、私はそれを禁ぜられるに違ひありません。

この時、ヴェッテリニは自分(コルニリエ氏)の仕事の役割について言葉を挾んだ。明かに自分は正氣の人間としての榮譽を賭してゐるのである。併し自分が賭して失ふものがあらうとも、それがどれ程のことであらうぞ。自分は名聲も官職も有つて居ないのだ、失ふところは殆どない――自分は貧しき價値の身なるが故に此のショックには堪へ得るのだ。(一九一三年八月十九日)

三十一

スピリット自身は『火葬』に就て斯く語る

話題のつゞきが自ら『火葬』の問題に落ちて往つた。

ヴェッテリニは、地的なる見地――(衞生的と云ふやうな見地)からは火葬は好いことだと云つたが、何か言ふことを憚つてゐるやうな樣子が見えるので、自分は强ひて尋ねてヴェッテリニから次の如き詳細を聞くことが出來た――

『肉體を火葬に付せられた靈魂は直ちに現世の羈がたち切られて獨立したものとなる。此のことは其の靈魂が充分進化したものである場合には、一箇の利益となり得るのである。が、普通一般の進化の程度の靈魂にとつては利益とならない。「火葬」によつて彼は自己の屬して居る世界に繋がる支點を失つて了ふ。彼の靈魂は纜を失つて了ふ。そして謂はゞ糸の切れた風船玉のやうになつて了ふ。再び地上に生れ出る必要のない靈魂にとつては、肉體を燒き盡して了ふことも好いのであるが、再び地上に生れ代つて出る必要のある靈魂にとつては、また地上に殘つてゐる人達を助けるために、靈界から地上へ歸つて來たい靈魂にとつては「埋葬」の方が好いのである。

(一九一三年二月十四日)

○

また『火葬』の問題に及ぶ——火葬が、死者の靈魂をして地上への繋がりを全然破壞し、『生れ更り』を一層困難ならしめるものであるならば、一般的法則から云へば、速かに生れ更つて出る必要のある低級な靈魂に對して火葬はどんな影響を與へるか?

自分のこの問に對するヴェッテリニの答——此の靈魂は生殖細胞に入り込むことが一層困難となる。そして、此の肉體を火葬にされた靈魂は(その靈魂の價値の故に)若し守護靈(Protecting

Spirits）によつて助けられるのでなければ、長期に亙つて好都合の狀態を見出し得ないで、空間を彷徨しなければならない。（一九一三年二月二十一日）

○

まだ『火葬』の問題について疑があるので、その問題に歸つて往つた。

火葬に付せられた人々は（自身の同意がない場合と、或は火葬が最善であるとの信念の下にみづから進んで火葬に付せられた場合とを論ぜず）火葬の結果について無智であつたと云ふ故にて、法則の課する運命的な働きによつて苦しまねばならぬと云ふやうなことがあり得るか？

ヴエツテリニの答――『原則として云へば、知らずに犯した行爲に對しては何人も罰を受けない。かゝる場合には、贖ひの問題は起らない。苦しき悔恨は其の靈魂にとつては經驗されない。併し、それにも拘らず、物理化學的な故障によつて、地上への再生の期はおくれるのである。併し白色のスピリツトが情狀を酌量して法則の適用を加減して呉れることがある。』

（一九一三年二月二十四日）

○

ヴエツテリニは自分の友人Cが非常に早く地上に生れかはつて出て來たのに驚いたやうな樣子

であつた。で自分は幽界へ行つた靈魂が再び地上へ生れかはつて來るまでには平均何年を要するかと訊いた。

答――生れ更りまでに要する期間には長短がある。それは其の靈魂の進化の程度に關係するのである――低き靈魂は歸幽して十五年乃至二十年を經たのち地上に生れ更つて來るが、稍〻高き靈魂は歸幽して後約四十年後にして再び地上に生れかはり出る。併しこれは平均であるので、靈魂の進化を促進するために修正が加へられることが度々ある。或る仕事、使命、役割等を自ら進んで引受けた場合には、地上への再生が遲らされたり速められたりするのである。指導者たるスピリツトは常に其の靈魂を導いて最も進化の速いやうに計らふのである。(一九一三年四月二日)

○

自分の友人Cが非常に速く生れ出たことに就て、自分はヴェツテリニに、火葬されたCがどうして其麼に速かに地上に生れ代つて來ることが出來たのであるか、彼は火葬されて地上へ歸る一切の繫りを斷ち切られて了つたではないかと訊いた。

ヴェツテリニの答――彼は彼を導く高き指導者たるスピリツトに助けられて、狀態が修正され、生れ更りの波の上に速かに其の靈魂が乘せられたのである。(一九一三年四月九日)

○

死後の肉體を如何に葬るべきであるかと云ふ問題を、今日の交靈會の終りにも尋ねた。

ヴェッテリニは『埋葬』が好いと云ふ――『歸幽の靈魂は色いろの理由から、地上にゐる友だちと接觸することを欲する、地上へ歸つて來、地上の人たちに感應を起したりする可能性を失はないことを欲する。普通の靈魂にとつて肉體の死と分解とは耐へがたきものであるけれども、彼は此の最後の試みにせめて縋つてゐたいのである。『火葬は靈魂を解放する――併し、かくして得たる自由は繫留線を斷ち切られた氣球の自由である。地上における人々の交通、靈交はこれによつて殆ど不可能となる。生れ更りは一層困難となる。だから火葬しない方が好い。』

(一九一三年四月二日)

○

ヴェッテリニの言葉――若し『火葬』に付せられた肉體が充分進化した靈魂であつた場合には、彼は所要の試煉を經たのち、比較的短期間、地上との交通を始めることが出來る――併しこれは常に善き仕事のためにであり、進化の目的にかなふためにでなければならない。この法則の適用は實際に當つて千變萬化する。(一九一三年五月二十九日)

○

吾々は既に『火葬』が、靈魂と現世との繫索を斷ち切つて現世への生れ更りを困難とし、個々の靈魂の進化の上から見て好ましからぬ影響を與へるものであると云ふことを度々聞かされたが今日は催眠中のレイヌの靈魂自身が、全然豫期せぬ新らしい見地から、其れに就ての意見を述べた——

『あらゆる生物——造られたるものは——進化しなければなりません。それ故進化の方法を見出さねばなりません。最も微さき生物、最も低き動物——死骸に生ずる蛆蟲でさへも、他の生物と同じやうに進化せねばなりません。極微生物の靈魂が人間の死體に湧く蛆蟲に生れ更つて來ると云ふことは大きな利益です。お解りになりますでせう。それは大きな惠福です。それだのに火葬は極微生物の靈魂から此の惠福を奪つて了ふぢやありませんか。肉體の死と分解は、それに宿つてゐる靈魂の進化に役立つばかりではありません。それは今やつと無意識の境涯から遁れ出たばかりの幾百兆の靈魂の進化の源泉となるのです。これらの極微生物の靈魂にとつて、人間の死骸は廣大な「進歩の沃野」です。如何なる生物からでも、どんな低い卑しい微生物からでも、其の受くべき惠福を「奪ふ」と云ふことは正しいことではありません。それはまさに掠奪です。そ

れは意識の進化への行進を遲らせます。そんなことは決してなすべきことではありません。』から云つてレイヌは更に力說した――『そんな考へを全然あなたの意志から斷ち切つて下さい。ヴェッテリニの命令です。』

自分は『火葬』とは反對の極端に行つた場合――肉體を木乃伊にして半永久的に保存した場合――の結果はどうなるかと尋ねた。

答――肉體を木乃伊とせられることはそれに宿つてゐる靈魂にとつては不幸な出來事であります。肉體が存續し永續してゐる限り、靈魂はその肉體から完全に釋放されることは出來ません。彼は自由になることも生れ更ることも出來ません。しかしこの不幸は彼自身が負ふだけで、普通何等の悔恨も伴ひません。木乃伊にせられるのは普通生前木乃伊にして保存されたいとの强烈な欲望から來るのですから、彼はそれをもつて光榮とし、誇りとしてゐるので、そのほかに一層よき道があるのを知らないのです。

自分は抗言した――埃及人のうちには高い進化を遂げた僧侶(Grand Inities)の如き人々が多數ある。彼等は靈界の事情に一層通曉してゐた筈である。（1）

（1）或る神祕主義者（Occultist）の說に從へば、埃及に於ては死者の靈魂を現世に結びつけておいて、

死靈を招び出し、魔術を行ふに便利なやうに死體を木乃伊にしたことがあると云ふ。（コ氏註）
レイヌの答――『高き進化を遂げた靈魂と雖も、先入觀念、偏見に必ずしも捕へられないものではありません。』教養のない少女の唇から出た此等の言葉の如何に驚くべきことよ――『埃及の僧侶は如何にその知識が進歩してゐたと云つても、此の點では間違つてゐたのです。彼らは木乃伊として肉體を保存することは絶對必要であると云ふ觀念に捉はれ切つてゐたのです。それは吾々文明人でも色いろの間違に捉はれてゐるやうなものです。やがて後の時代の人々が現在吾々が學理だとか教理だとか考へてゐることを調べてみて、その或る點に關しては、何て愚かなことをその時代の人々は大切だと考へてゐたことだらうと驚くやうなものです。』それから稍あつて『埃及のミイラの靈魂は、科學者の好奇心や、偶然のはづみで、木乃伊が破壞されて靈魂が急に纜を切られた場合、非常に苦しむものです。』と云つた。
では死體を木乃伊にした場合、極微生物の進化と云ふ點から觀てはどうなるのだと尋ねた。
レイヌの云ふところによれば、木乃伊となつだ肉體も極微生物の發生には貢獻しないではない。それにまた、內臟その他、低き動物靈魂に利用さるべき大部分は捨て去られて腐敗するので、微生物はこれを利用することが出來るのであると云ふ。（一九一三年七月廿五日）

三十二、スピリット自身は『物質主義者』の靈魂に就て斯く語る

暫時憩んでのち、自分は一二の問題に答へて呉れるやうにスピリット・ヴェッテリニに賴んだ。頑固な唯物論者は必ずしも進化低き靈魂ではあるまい？　多くの偉大なる哲人(物質主義者)の公平無私なる澄み切つた否定的態度は賞讃に價ひする。あらゆる宗教(スピリチュアリズムをも含めて)の教義には、兎も角にも努力に對する報償として、また苦痛に對するつぐなひとして『來世』のことを約束する。物質主義者のみ頑として來世の報償に耳を藉さない。これについてヴェッテリニの意見が知りたい。

ヴェッテリニ曰く――『大多數の物質主義者は自己の過去世の生活について微かな記憶をすら留めてゐないので、單純に自己の唯物的意見に固執するのである。彼等の心のうちには自己が信ずる粗大な證明しか有たない極めて單純な物質的世界觀と相鬩ぐところの何となくソグハないやうな感じが絶對に起らないのである。彼等は此の世に生れ出る以前に幽界に昏睡狀態にゐたのであつて、交靈會に呼出された前の君の父の靈魂のやうにさへ達してゐなかつたのである。彼等は生れかはつて出て來たが、自己の過去の狀態について何一つ直覺的な認識をも殘さないのである。

それで彼等は物質的に議論を進めて行けば最もロヂカルだと思はれる信仰に驀進することが出來るのである。低き階級の物質主義者はこの部類に屬する。』

『秀でたる思想家、偉大なる知性を備ふる大思想家の如きでさへも、その靈魂が前者と同じく甚だ低い進化のものであることが屢〻ある。彼等は幸ひにも非常に完全な非常に調御し易い肉體を得たのである。騎手は下手でも乘馬が非常に良いのである。名馬は最も貧しい騎手にさへ巧妙な乘り廻しを見せる。』

『併し、また人類の幸福のために働いてゐるところの賞讃すべき、眞理に忠實な、最價値ある哲人にして、應報應果のことに就て何の望みも有しないものがある。此らの哲人！　嗚呼……彼等は偉大なる進化をとげつゝあるのである。彼等自身の爲にしようと云ふ少しの觀念もなしに獻げ切つた研究の生活をなしづゝある彼等の生活は、彼の靈魂を高きに引上げる。しかし斯かる場合は稀である。しかも斯かる人々でさへも其の臨終に於て「誰がこれを知つて呉れるだらう？　自分は自己が眞理であると信ずることのために自己の內の最善なるものを奉仕さしたのだ……しかしこれを誰が知つて呉れるだらう？」と果して嘆息しないであらうか。全然應報を期待しないでゐられるものは殆どないのだ。』と。（一九一四年四月十六日）

三十三、

スピリツト自身は靈魂の生れ更りに就て斯く語る

自分は心靈現象を研究してゐる數多の先輩や友人を有つてゐるが、此等の人たちが、多くの靈媒について研究した結果によつても、人間の靈魂の生れ更りの問題については、靈魂論者の間にも異論があるのである。或る人は自己の靈媒による實驗により靈魂は幾度でも現世に生れかはり出ると云ひ、或る人はこれも自己の靈媒による實驗乃至靈示により、人間靈は只一囘現世に生れ出たるのちは、再び現世には生れ更り出ずして、主として靈界で進化をとげると云ふ。これ等の異論の生ずる原因は何處にあるのか。次のコルニリエ氏の手記がこれに合理的な解決を與へてゐると思はれる――(谷口註)

自分は近頃讀んだムーア提督著“Glimps of the next State”(來世の瞥見)と云ふ本のことをヴエツテリニに話した。この本は十年以上に亙つて靈媒現象を根氣よく而も巧妙に研究せる著者の研究を公にせる浩澣な書物である。ヴエツテリニの示教と全然符合する諸種の靈界通信の中にまじつて『生れ更り』を全然否定せる個所や、靈界の幼稚園に於て小兒の靈魂がスピリツトの先生に教育を受けてゐると云ふやうな信じがたい諸點が目につくのである。何故こんな間違が出來るのであらう。靈界の生活についての靈界通信の意見が區々に分たれるのはどう云ふ理由

によるのであるか？

ヴェツテリニは云ふ――『先づ吾々は靈媒を介して意志を通ずると云ふことに伴ふ非常な困難とその困難より來る間違と、それから靈界通信を齎らすスピリツトの大多數が低き階級の無智のスピリツトであることを考慮に入れなければならない。彼等は生前もさうであつたやうに、充分知りもしないことをペチヤクチヤ喋りたがるのである。靈界通信を齎らすスピリツトに高級なスピリツトが極めて稀だと云ふことを記憶しなければならない。……併しながら高く進化せるスピリツトも「生れ更り」を否定することがあるのである。それは生前より人間は生れ更るものでないとの確信を抱いて靈界に入り、自分が既に高き進化を遂げた靈魂であつて「生れ更り」の必要もなく、自分の住む靈界が高き圏内にあるので「生れ更り」と云ふことが少しも議論にも噂にも上らないやうな場合には、そのスピリツトは、生れ更りはないものと云ふ信念を暫しの間はもちつゞけるのである。』（一九一三年九月三日）

三十四

スピリツト自身は『靈魂の形態』に就て斯く語る

自分は或るスピリツトはレイヌの眼に生前の姿を備へて見え、或るスピリツトは小さな焔のや

うにどうして見えるかと云ふ理由をたづねた。

ヴェッテリニの云ふ所によれば、それは進化の程度にばかり依るのではなく、靈魂自身の個性や固執觀念によるのである。或るスピリットは、現世に近づいて生れ出たいと云ふ希望を常に抱いてゐる場合は、靈波を利用して自己の姿を物質化し、そして幾分でも現世に近き生活を送る方法を知るに至るのである。若し反對にスピリット自身の考へが、常に高きエーテル圏に上昇したいと云ふことにあるならば、かゝるスピリットは地的な狀態からは愈々益々離れて行くのである。或るスピリットは、自分がしたいと思へば自由に自分の姿を物質化して見せることが出來る。これは氣分の問題である。(一九一三年十月二十一日)

三十五

他界を自覺せず現世にゐると錯覺せる靈魂

〔備考〕次にかゝぐるは第百〇七回目の實驗會以後(一九一四年二月十二日以後)の交靈會によってコルニリエ氏が蒐めた研究の補遺の一部である。

1、進化の程度低きスピリットの大多數は他界しても、直ぐには自分が靈界に這入つたと云ふことに氣がつかない。(特にそれは無靈魂論者である場合、それから急激の死、變死の如き場合。)

靈魂の脫出は、（それが昏睡中に起るにせよ、又は突如として來るショックに依るにせよ）無意識のうちに行はれる。それから又、彼等の比較的密度濃き重濁した幽體は——漠然と半覺醒狀態に於て——彼等が日常生活を送るに當つて彼等を地上の雰圍氣内にとゞめて置くが故に、彼等自身がまだ生存してゐると云ふ信念を破壞する何ものも彼等の周圍にはないのである。

自分は親しく此のやうな奇怪なる實例を目擊したことがあるが、心靈現象の記錄中にはこんな實例はいくらでも見出すことが出來る。自分の知つてゐる最も珍妙な實例はムーア提督が、その著『來世の狀態の瞥見』の補遺のところに發表した記錄である——此の記錄にある『お前は死んでゐるのだよ』と云はれて呆れて物も言へないでゐる靈魂の光景ほどドラマチツクなものは又とあるまい。

此の狀態はまだ進化の最初の階梯にある低級な靈魂にのみ可能な狀態だと思はれるが、それ以上の階級にあるスピリツトも、その靈的性癖、固き先入觀念、研究心の缺乏等の結果として、暫しの間は斯うした狀態でゐることもあるのである。

『わたしが死んでゐますつて。死んでゐるなら本人が一等それをよく知つてゐます。そんな馬鹿な事があるもんですか。わたしは眼も見えるし、耳も聞えます。これがわたしの生きてゐる證據

です。』と自分に答へたスピリツトがあつた。自分は『君の死骸を埋めてある墓へ行つて御覽なさい』と云つてこのスピリツトを自身の墓へ遣つてはじめて此の理窟屋を得心させたことがあつた。靈界通信が必ずしも正しいばかりではない原因の一つはこれである。

2、スピリツトは自身の有する執拗な固定觀念で自分の周圍に無意識に幻像を作りあげる。そして此の幻像に先づみづから擒となり、自己の周圍のスピリツトをも亦その幻像の擒とする。*

*現實界に於ても吾らは執拗な固定觀念で病氣の幻像を作り上げそれを具象化して周圍の人々をもその幻像を實在だと思はしめてゐるのである。殆ど全ての病氣がみな然りである。(谷口)

自分の實驗室中にも高級のスピリツトが、當座の必要に應じて幻像を有意志的に作り出した實例も數多見出される。また、心靈實驗に於て恍惚狀態に陷つてゐる或る靈媒——遊離した靈魂が昏朦狀態に陷つてゐる靈媒——が無意識的に、靈媒自身の思想の延長であるとでも解釋するほかはないホンの一寸した物質化現象を起すことがある事實に鑑みれば、低級なるスピリツトが無意識的に幻像を作り出すことは容易に頷くことが出來るであらう。加之、遠感現象によれば、第一者が無意識的にある幻像を頭腦から發生した場合(自發的テレパシー)にせよ、有意志的にイメージを念傳した場合(實驗的テレパシー)にせよ、そのイメージは感受者の想念によつて感知せら

れるのである。かやうに、吾等の物質世界に於て存在する斯かる現象は、靈界に於てもまた持續し存在すると云ふことは極めて自然なことである。

誠實な靈界通信に錯誤が交ると云ふ第二の原因は此處にあるのである。しかもかゝる靈界通信が、事實の報道として價値なきこと、他の幻覺と何等變りはない。（1）

（1）自分は不意の事件で生命を奪はれた大工の靈魂に『君は今どうしてゐる』と訊いた。彼が答へるのに『自分は仕事着を着て手に鋸を有つてゐる。自分は仕事を捜してゐるのだが、何故誰も自分を顧みて呉れないのか判らない。』と。また他界して數ケ月になる或る婦人の靈魂は、『わたしは今日は赤いドレスを着て寶石を飾つてゐます。』と言つた。やがて冬が來て彼女は毛皮を着けるであらう。（コ氏註）

3、進化の程度低き靈魂は、靈界に於て、原則として、此等の幻覺ばかりを見てくらしてゐるものである。

自分の實驗によれば、靈界に於ける幻覺は進化の度に應じて發達して行くものゝやうである。そして、まだ地的雰圍氣に彷徨つてゐる程の靈魂にとつては、より高級なスピリットの精妙なエーテル的世界の狀態を知ることは出來ない――それは丁度吾等地上の生活者が地圏に彷徨うてゐるスピリットの生活すら見ることの出來ないやうなものである。

これが、靈界通信に錯誤がまじる第三の原因である。

これを要約すると、死者よりの通信の眞實さは、その通信し來るスピリットの進化の度に應じて決まるのである。それは全然荒唐無稽のこともあれば、靈魂の狀態により歪められ變形せられてゐることもあるのである。

三十六

歐洲大戰及び世界の最後的破壞を豫言せる靈示

『一九一三年に、私が諸君のこれから讀まうとする次の論文を書いたときに、世界の上に蔽ひかかつてゐた大戰爭を豫知した者も豫告したものもなかつた。多數の豫言の中で、獨り信憑し承認するに足る二三の豫言（私が「戰の跡」の一章の中で調査した豫言）も曖昧であり、不明瞭であり且つ殆んど無意味なのである。千里眼者が、彼等自身には說明出來ない、人の死滅の蔓延とも云ふべきものを、餘程前から彼等に相談をかけに來る者の間に發見してゐたのは事實である。この研究を始めるに當つて、先づ次の宣言を公正にする必要がある。卽ちそれは地球を荒しまはつた一番怖ろしき災害（歐洲大戰のことである――谷口註）は既に數百萬の人の命を掠め去つたに拘らず曾て一度も豫言された事はなかつた――と云ふことである。かくの如くして次の原則は再び確實

となる。更に良い原則の現れるまでは、吾々は宜しく之に滿足すべきである。それは卽ち未來の知識は嚴密に個人的にして極めて近き將來に起る事件に關する事以外には、殆ど常に虛妄である――と云ふことである』

以上はメエテルリンクが、心靈現象に關する氏の論文集『未知の賓客』中に收めた『未來の知識』なる論文の冒頭にあとから書き加へた言葉である。

實際メエテルリンクの言ふ通り、靈媒現象に於て豫告が眞實となつてあらはれるのは多くの場合に於て、近き將來のことゝ、一個人の運命に關することゝが大多數を占めてゐるのである。そして世界的な大事變の豫告はあまりに發表されはしなかつた。しかし、その豫告が全然存在しなかつたとメ氏のやうに斷言して了ふことは早計である。自分がこゝに紹介しつゝある靈媒レイヌは歐洲大戰の靈示を一九一三年二月十四日以降、數度の實驗會に於て見せられた。自分はその時の實驗會に於けるコルニリエ氏の手記を次に譯載する。

一九一三年二月十四日の實驗會

午後三時、吾々は例のテーブルに對つた。テーブル通信は靈媒の健康法のことを長く書き綴つたのち、猛烈な千變萬化の動きかたを始めたので、レイヌは滿悦の態であつた。彼女は未だ嘗て

テーブルが此麽にひどく自働するのを見たことがないのだつた。

四時。吾等は小さな客間の中へ陣取つた。光線を適當に暗くして、赤いランプを點けた。すべて心靈現象の實驗上正式な形式をとることにしたのだ。自分には之でよいと思はれた。レイヌは直ぐ統一狀態に入つた――そして充分深かく〳〵とだ――彼女は例時にくらべるとズツと冷たい。彼女の椅子の周圍を自分は廻りながら時々新たにマグネタイズする手を上下した。そして彼女の靈魂に對して彼女自身から遊離せよとの命令を繰返した。

突然、彼女はスツクと立上る、兩手を仰天したやうに打ち開いて、恐るべき光景を目擊して心を打たれたものと見えるのだ。赤色のランプと、微かに透入して來る日の光とで、自分は彼女の身振りや、顏の表情を見ることが出來た。彼女は恐怖の叫び聲を鋭くあげてゐる。

『マア――マア――恐ろしい！　恐ろしい！　悲慘だわ！……ア、あの戰ひの有樣は！　兵隊――騎馬の兵隊――ア、何と云ふ怖ろしい戰ひ……到る處に血が流れてゐる。火の海！　ア、恐ろしい！……何と云ふ大袈裟な殺し合ひ……大虐殺だ！……どこも彼處も死屍累々としてゐる……幾千の死屍……幾千の負傷者……四面火で包まれてゐる――死と火との呪ひだ……街はあとかたもなく滅びてゆく！　空からも焰と彈丸とが落ちて來る……ア……列車が見える兵隊が一杯に載

つてゐる……戰場へ行く兵士たちだ……ア、馬だ、幾千疋の馬が運搬車に詰め込まれてゐる……また列車だ……また列車だ……數限りもない……數へられない……どの車にも兵隊が一ぱい詰つてゐる……皆んな殺人に行く人たちだ…………………焰！…………焰でないものは何もない！　森と云ふ森、街と云ふ街、……村と云ふ村……一切が荒廢の手で呪はれてゐる！どちらを振向いても滅亡と破壞のみだ。ア、何と云ふ恐ろしい光景……ア、恐ろしい……オ、…オ、……オ、……』

から叫んで彼女は恐怖すべき示現に踠きつ喘ぎつ椅子の中へ倒れ込んだ。そして兩手を縮めて自分の手に縋りつくかと思ふと、今度は自身の眼を其の手で蔽ふ。

眼を蔽つても恐るべき幻影は愈〻その震天動地の光景を間斷なく捲きひろげる。

時々彼女は叫喚の聲をやめて『わたしは活動寫眞のやうに間斷なく展開する光景を見てゐるのです』などと說明する。

『その光景は無際限の地平線一ぱいに續いてゐます……地球全體……空と境を接するかぎりの地面全體が殺人です。荒掠です、破壞です……フランスだけではありません……歐羅巴の全國民！植民地も。すべて殺戮と焰と劫掠です！……フランスは長い間辛抱してゐた。フランスは最後に

なつて戰亂にまき込まれます……併し其れは已むを得なかつたのです。』と、突然、靈示の光景がサツと變つた。政府が變りつゝある……變つた。共和政治が覆へる。王族の一人、追放されたプリンスが出現する。レイヌは明瞭にその風丰を話すのである……

『……額の廣い、こめかみの窪んだ、暗い深い眼、大きな黒い口髭、峻嚴な容貌……峻嚴な』

彼が迎へられる。萬人は共和政治を嫌ふ。そしてあらゆる災禍の原因が共和政治にあると批難する……

靈示の光景はまた變る。また別の恐ろしい光景、否、一層凄慘な光景と云つて好い。

『……だつて……巴里です……燃えてゐるのは巴里です……オヽ、巴里！………全市が戰つてゐます。どこも彼處も殺し合ひばかりです……そのほかに何もありません！　全市が破壞されました……廢墟、たゞ廢墟です……建物の壁の一部があちこちにまだ殘つて煙を吹いてゐます……死屍が山と積んでゐます……血の河、血の洪水……それに飢餓が迫つて來ます。パンさへない……殺戮を免れた人々も飢餓のために死んでゐる！

『巴里が圍まれる……外人にではない、佛蘭西人に。革命です——人民が蜂起しました——あらゆる物を破壞して復讐心を滿足さしてゐるのです……街ぢゆうを襲擊してゐる……どの街もどの

街も破壊した。巴里のプロムナードも全滅した。』

前述したプリンスの幻影があらはれる……彼は秩序を回復する。パンを與へる。戦は終熄した。しかし誰も生活をどうして再び始めて好いかわからないのだ。到る處に失望が充ちてゐる。彼――プリンスは其の方法を發見する（『だけど彼は今は一錢も持つてゐないのです』とレイヌは語つた。）彼は二人兄弟である……兄弟は互ひに嫉妬し合ふ……一方が他方を凌がうと試みる……『勝利を得たのは配偶のある方の兄弟です。彼の妻は美人です……わたしは彼女を見ました。丈の高い婦人です……さうです……さうです……彼です。』そして彼女は決然とした語調で言ひ足した――

『彼はナポレオンのやうな勇者です。』

自分は此の慘禍の時期を明確にして欲しいと彼女に云つた。彼女は躊躇する……やがて云ふ……

……『もう差し迫つてゐます。間近です。もう實に目捷に迫つてゐます。今年中に何か起ります……

……これを防がうと努力してゐますが、それはせき止めることはできません……たゞ事變を遅らせるに過ぎません。あまりに延ばして置くと、出かけたら一層慘禍が激しくなります。と云ふのは延ばせば延ばすだけ革命精神にオーガナイズする時間を與へるからです――最初に起るものは叛

亂です』彼女は卒然恐怖の叫びを上げた。『若しそれが起らうものなら……吾々も、もうお了ひです！　フランスで戰爭が起れば、更に他國の戰亂の勃發に便宜を與へます。延ばしてはならないのです。』＊

＊レイヌの此らの言葉は、既に所在に掲出した彼女の言葉と共に、運命は不可避ではないと云ふ事を示してゐるやうに思はれる。豫示現象――靈界に兆してゐる事變のプログラムの讀知現象は、その當時に於ては或る事件を豫示してゐる諸種の兆候より推定した判斷であつても、やがて種々の修正的はたらきが加へられる。このことは此の靈界通信が回を加へて行くに從つて明かとなるであらう。（コ氏註）

自分はレイヌに色いろの疑問を提出してそれに答へるやうに切望した。彼女は恐怖すべき幻影より、一轉してヴェツテリニの言葉を傾聽してそれを傳へる――

『バルカンの戰爭が全ヨーロッパに擴がつたのです。フランスは出來る限り戰ひに卷き込まれないやうにしてゐました。ポアンカレーは全力を盡しますが、それは暴風に飜弄される船を隻手で支へようとするやうなものです。全フランスは自國を支離滅裂にしようとしてゐるのです。運動は既に始まつてゐます。此の危急の時に到る處に陰謀が行はれるのです。追放されてゐたプリンスを想起したボーナパート黨が直ぐ此の巴里に集つてくる。他のプリンスを擁立する黨派の人た

ち、それから社會主義者、無政府主義者――すべてこれらは互ひに相排擠して、黨員はすべて自分一個の利益ばかりを考へてゐるのです。

それはフランスの hallali です。叛逆、探偵、姦惡――レイヌを通じてヴエツテリニは問題のあらゆる方面に觸れ、政府及び警察の狀態を巨細に說き、戰爭に從事せる種々の國民の狀態を一一性格的に描き出す等々。『ロシヤでは軍隊の編成が破壞して亂痴戲騷ぎが起ります……獨逸ではカイゼルに對する勞働階級の憎惡が激しくなり共和政治に對する熱望が高まります。キリアム二世の前途は暗黑です。彼はマークを附せられてゐます。彼の將來には凶兆がありあり見える。』(彼女は或る瞬間、人民の手に幽閉せられてゐるカイゼルの姿を見たらしい。)

併し彼女は、各國民の運命を明瞭に見ることは出來ぬのである。自分はこの意味に於て更に彼女を促した。併し彼女は此の大戰の結果を透視することは出來ない。この戰ひに比ぶれば、過去の戰爭の如きは單なる兒戲に等しいと彼女は云ふ。實に恐怖すべき事件が國境に接して起る。相互の憎惡は頂上に達し、双方ともこの戰が危急存亡の戰ひであると云ふことを知つて死力を盡して互に襲擊する。佛蘭西內の市街と云ふ市街は全部破壞せられる。併し敵軍が全然吾が國を占領してゐる狀態は、彼女は見なかつたと云つてゐる。巴里に於て互ひに殺傷してゐるのはフランス

人同士であつて、他の市街でも同様のことが起る。それはフランス人同士である。

續いて現在の狀態に對する批評があつた。――『オー、どんなに多くの人民が、口にはそれと云はないが、現在の政治を嫌つてゐることだらう！　突然彼等はその手をあらはす。今でも、もうポスターは出來上つてゐます――フランボイヤン式の飾りのある印刷物で、麗々しく擁立せんとするプリンスの肖像が印刷せられてゐます。その愈々の晩が來ると、壁といふ壁はこのポスターで埋められて了ひます……。そして全國民がこのプリンスの擁立に贊同する程共和政治に對する不滿が著しいのです。』

また別の光景がレイヌの前に現れた。『到る處、軍事探偵ばかりです。オヽ軍事探偵の多いこと！　而も地位のある、勢力のある、誰も疑つたことのないやうな人々――將軍までが軍事探偵として、國民のために協同作戰をとつてゐます。』（これは獨逸のこと）

『海上でもまた激戰が行はれてゐます。海上の戰ひでは吾が佛蘭西は慘めです、慘めです。がイギリスは……あの海上に堂々たる艨艟の雄姿を御覽なさい！』

此の大げさな人間の始めた大異變に、地はその汚されたのを憤るが如く、地震、噴火、洪水等が相ついで起るらしい。

ヴェツテリニは自分から引切りなしに問ひかける疑問に惱まされて、その疑問に答へることが出來なかつた――否答へたくなかつたのかも知れない。彼は云ふ、すべては紛糾つて、各國とも上下顚倒する――確かなことは何もわからない。それは戰爭中だけのことではない。戰爭が終つてからも其の狀態は長いあひだ――ずつと永いあひだつゞく。何も明瞭にはわからない……。併しながら、フランスはこの恐るべきカタストローフの後にまでその存在を失はないものらしい。フランスは依然として存在する。火と血との暴風によつて再生するのか？ ヴェツテリニの言葉は曖昧で、殊更に神祕の幕を閉して置くらしい口振だ……彼は誤解される恐れがあると思つてか、それとも吾々があまりの悲慘に聞くに堪へないと思つてか、これ以上に語ることを欲しない。

突然レイヌは自身の椅子にグタリと靠れかゝつて死骸のやうに前後不覺に横はつた。

* * *

一九一三年四月十一日の實驗會にては

レイヌは惡性の感冒に惱んでゐる。併し實驗會には別に其のさはりはなかつた。自分は『何を見てゐたのです』と訊いた時に、彼女は、高い靈界へ往つて青色のスピリットの開催した相談會

のやうなものに出席してゐたのですが、今やつと其處から歸つたところですと答へた。曰く――『わたしは高く高く、たゞひとりで昇つて行きました。と見ると其處にはスピリツトの一大集會が開かれてゐるのです。そこにゐるスピリツトは高級のものばかりでした。みんなブリユー色のスピリツト。ヴエツテリニのやうな鮮やかに澄んだ美しい藍色のスピリツトばかりでした。彼等は極めて重大な問題について審議してゐるらしい様子でした。彼等はわたしが彼等の間近に行くことを許してくれました。どうして解つたのか自分にも判りませんが、彼等の討議してゐることを熱心に聽いてをれと、彼等がわたしに云ふやうに思はれました。討議――と云つても、それは所謂討議ではありません。第一彼等は言語を用ひないと云ふことを心して置いて下さい。彼等は言語なしに互ひに理解し、直ちに同一意見に落着するのです。彼等ほどの進化の程度に達したスピリツトの判斷はみんな一致するものです。

　自分は其の光景を話すやうに求める。彼女は云ふ――それは極めて大規模な集會のやうであつた。幾千と居並ぶ彼等スピリツトは小さい青い色の綺羅星のやうに見えた。比喩を云はうとして彼女は言葉に窮した模樣だつた――『彼等は手掌ほどの大いさの青い空氣の燦く波動のやうに見えました。』そして附言して曰く、既に曩日の交靈會の際に云つたやうに、これがスピリツトの正

常な外見で、彼ら自身達と同格のスピリツトばかりゐるところで、別に誰にどう見せようとも思はないやうな時にはかう云ふ姿をしてゐるのである。彼女は彼等の論議するところを知るに何の面倒をも感じなかつたさうで、それが彼女自身の靈能の一大進歩を示すものだと語つた。

その後になつて、彼女は此の席に彼女を引きつけたのはヴエツテリニで、彼等の論議の意味を理解し得せしめたのもヴエツテリニであると語つた。このスピリツトの會合は地上に起らうとしてゐる驚怖すべき事件に關してゞあつた。彼等高級のスピリツトは地上に起る慘澹たる運命を彼等の力限り避けようとしてゐる――否彼等の力限り修正しようとしてゐるのである。地上の運命のうちには、スピリツトが如何に努力しても絶對にどうにもならないフエータルな部分がある。併し人間の性格の相互作用より起る部分や、人間の決意によつて起される事件に對しては、高級なスピリツトは、これに影響を與へる力があるのである。人類を震撼する一大運動や、一大潮流の大部分はスピリツトによつて招徠されたり修正されたりするのである。刻下の場合にては人間の感情に影響を與へる程度は餘程深刻でなければならない。何故ならそれによつて人類の行動をモディフアイしなければならないからである。それは重き任務である。何故なら彼らは自己の棲家としてゐる高き靈圈を去つて吾等の雰圍氣上に來り吾等と混つて生活を送らねばならないか

らである。此の會合に於て彼等はその採るべき方策を説明してゐたと云ふ。彼等は各々特殊の役目につく。或るスピリツトは政治的事件を左右する人物に憑いて、その人物に影響を與へる――彼等の感情を變化し、個人的打算を修正する。煽動心を阻止し、虚榮心を破壞し、嫉妬心を波靜にする……等々。又他のスピリツトは公衆の意見に影響を與へて強調すべき眞理を強調し、誤れる愛國心の如きものを抑制する。かゝる影響を與へるために彼等は重濁せる地の雰圍氣に潛り込み、彼等にとつて最も苦痛なる狀態に於て自己自身を物質化しなければならない。『實際それは大事業です――難事業です――』とレイヌは再び絶叫した。彼等は幾群にも分れて、スピリツトの各群はそれ〴〵受持ちの國々、受持ちの人々に附いて働くのである。彼等ほどに進化せるスピリツトには、所屬の國籍と云ふものは存在しないのである。人道――これが各等にとつて唯一の全てなのである。彼等の唯一の目的は彼等の能力の範圍内に於て人類全體の進化の邪魔になるものを排除することである。そして彼等はそれを爲すべく努力しつゝあるのである。

レイヌは附言して云つた――彼等は戰爭（繰返して二度目には戰爭を複數で云つた）を阻止することは出來ないであらう。併し確かに彼等はそれを修正し、靈界に原型として描かれた恐るべき破壞と擾亂の程度を縮め、内爭と革命を防ぐことには成功する。約めて云へば、彼等は地上の大

慘事の程度を減じて、既に獲得した文化の基礎を破壞しないやうにするのである。

自分はヴエツテリニは其處にゐるかと尋ねた。まもなく吾々はレイヌの靈界出遊のことについて話を交へてゐた。彼の言ふには、靈界に於ける高級靈魂の仕事を、少々ばかり理解せしめたいと思つて、レイヌを高級靈魂の集會に招んだのだと。

* * *

一九一三年七月二日の實驗會にては

レイヌが昨日夢うつゝの狀態に於て見た二つの靈示があつた――そのヴイジヨンの意義を自分は問うた。ヴエツテリニは云ふ――『この靈示を見せたのは自分である。それは今は豫戒的に見せたのだが、やがて彼女はそれと同じ光景を現實に見るであらう』と。自分は此處にその靈示の控へをとつて置かう。

第一の靈示は、强烈に熱狂せる見送りの群衆にとり卷かれて、出陣せんとする軍隊が巴里の街を進軍せる光景である。

第二の靈示は、戰鬪後これ等の軍隊が歸還しつゝある光景だが、殆ど全滅して、生殘の兵士たちの軍服は破れ、泥にまみれて太く悲しげな樣子で彼等は歸還してゐる――レイヌは此の光景に

就て二つの重大なことを話した――第一、彼女はハッキリ自國の軍隊のうちに外國の兵士たちを見た。彼女は其の軍服について何の知識もないので、確かなことは云へないが、『英國の兵士かも知れません（1）……だけど確かなことは判りません。たゞフランスの兵士でないことだけは明かです』

第二、兵士の歸還せる光景は冬であると云ふこと。これは確實であると。

（1）この豫言は實現した。英佛聯合軍の成立はこれである。（谷口註）

＊　＊　＊

一九一三年八月十一日の實驗會にては

互ひに挨拶を交換した後、ヴェツテリニは自分に語つた――事件は現に形となりつゝある。で自分のノートを出版する用意をして置くが良いと云ふのである――『高級なスピリツトは戰爭を暫くの間阻止するのに成功した――が、たゞ、それは單に延ばされたと云ふだけだ。それは必ず實現する。それは必ず實現する。それは運命的なものだ。が、少くとも今直ちに何ら心配の起る憂ひはない。で兎も角今年の末までに原稿を用意して置くがよからう。』と。そしてその積りで吾々の時間を最善に利用せよと云ふのである。

＊　＊　＊

一九一三年十二月五日の實驗會にては

ヴェツテリニは吾々が今經つゝある悪い影響に就て說明して呉れた。それは十二日から十五日までの間が最も善くないだらう。それから後は見直して來る。それは殆ど普遍的である。實際地球全體に現在呪ひの符が貼られてゐるやうなものだ。吾々の著述は遲れるだらう。しかし心配するには及ばぬ。どうも仕樣がないのだ。

自分は政治上の問題を話しかけた。ヴェツテリニは云ふ――『高級靈は、既定の運命をたしかに修正した。でなければ、時局は今よりも更に一層よくないものとなつただらう。しかしそれはホンの暫く阻止してあるだけだ。凡ては既に靈示した通りに實現するだらう……一大隣接國の運命は既に定まりつゝある。最も强大なる帝國は滅落する。それは避けることは出來ない。彼等は共和政治を望んでゐる……(1)多くの人類の血が流される……その時は既に始まりつゝある、二三ケ月たてば……君にそれはわかる! フランスは又別な旋風に捲き込まれる。フランスは友邦を助けるために矛を持たなくてはならないだらう。フランスはやがてそれを後悔する。戰爭の最中に一度植民地が叛亂して獨立を恢復することがある。政治的陰謀はもう始まつてゐる……あらゆる兆候は破壞と擾亂とを指示してゐる』

自分はポアンカレの內閣のことに言及した。ヴェッテリニは此の內閣の壽命は十一月一杯を超えまいと云つたことがあるのだ。彼の答へ――『時局の緊張を避けるために彼の政治的生命は延ばされた。しかしたゞ延ばされたと云ふに過ぎない。』

(1) 獨逸帝國瓦解の豫告で、これは既に以前の靈示にも現れたが、終にその豫告は的中したのである。(谷口註)

三十七

豫言は何故間違ふことがあるか

以上の靈示は或る程度の修正を經たにしても、其の大部分が實現してゐると見ても好いであらう。與へられた運命は、スピリットの努力によつて修正を受けることは既にレイヌの靈界通信にあつたとほりであるが、これらの豫示は修正を經ない以前に人類の運命の原型として靈界に存する狀態の透視とも見るべきもので、此の原型が如何なる程度にモディファイせらるゝかはスピリットの干涉と人間の努力とにあるのである。併し歐洲大戰以來のロシヤの運命、獨逸皇帝の運命などが、殆ど修正なしに實現したことはレイヌの見せしめられた靈示の確實さを示すものだと云はねばならない。かゝる確實なる豫言に接するとき、吾等は將來に關する一大事件の豫告に就て

も、おのづから興味を感じずにはゐられないであらう。併し、豫言は間違ふことがあるものである。特に時期に關しては常にさうである。かの舊約にあらはれた豫言は勿論、馬太傳第二十四章に於て耶蘇が豫言した『世の終り』なども、時期の點に於て誤りがあつたと云ふ譏を免がれないであらう。かのポーロの如きも『世界の終末』が自分の生存中に來るものであると信じ、『婚姻せざるを可しとす』と宣傳した位である。最近に於て、『世界終末と日本の世界統一』の時期を輕卒に指定して失敗したものとしては大本教の豫言があつて、これは吾等の記憶に新しいところである。何故豫言は間違ふかと云ふことは心靈現象の研究者にとつては忽せにすべからざる問題である。それはスピリツトによる既定の運命の修正があるのと、スピリツトの有する時間の知覺と人間の有する時間の知覺との間に誤差？があるからである。この事實を知つて置いた上で、はじめて吾等は、將來の事件にかゝる豫言を讀むのも興味が深いであらう。次節にかゝぐる將來の事件に關する豫示のうち、黄色人種の歐洲襲撃はコルニリエ氏の手記自身が示すやうに、既にスピリツトの修正によつて阻止されたと云つて取消してあるので、其の他の部分だけが純粹に將來に關はる豫言である。先づ、豫言の間違ふことのある所以を語つた實驗會の手記を左に抄記する

一九一三年八月十五日の實驗會

問――恐らく精神能力の低級な或る種の人々、夢遊病者や卜筮師や、手相見などが時として甚だ目立つやうな豫言をなし、それが正確に的中することがあるのに、ヴェツテリニのやうな高級のスピリツトが、吾々に興味ある事件の豫言をなすのに、どうも曖昧な豫言しか出來ないらしいのは何故であるか？

ヴェツテリニの答――『此ら卜筮師などの低級の靈媒は、普通自分と同程度の進化に在るスピリツトにより助けられ靈示を受けて豫言をするのである。此ら低き階級のスピリツトは人間に立ちまじつて人間の雰圍氣內に棲んでゐる。從つて地上の人間界に關係ある事件を支配してゐる影響要因をよく知つてゐるために、容易に將來に起る小事件を豫言することが出來るのである。例へば彼のフエルナンと呼ぶスピリツトだ。若し彼の靈告に從つたならば公衆の注意を喚起するやうな現象を屢ゝ起し得たにちがひない。

『併し高級のスピリツトは人間とは懸絶した別の靈圈に住んでゐる。そして其役目は人性の傾向を修正し、人類を與へられた方向に進化せしむべき主流を刺戟するに在る。それで原則としては高級靈は決定的な大事件とか事件の總體の大體的結果と云ふやうなもののみを豫言し得るのであ

る。』

自分（コルニリエ氏）はヴエツテリニの回答を納得する。然しながら、全ヨーロツパを根柢より震盪せしむるやうな恐るべき大暴風的事件、ヴエツテリニがレイヌに與へた靈示にあらはれたやうな大事變をば單に地上の些末な事件であると言ひ得るであらうか……？　ヴエツテリニはこれを近代文明に於ける一大危機であると云つたではないか。それだのにヴエツテリニの與へた靈示に間違があるやうに見えるのは何故であるか？　此等の驚怖すべき幻影はヴエツテリニの考へを表明せんがために創造された心象であるのか。そしてそれがレイヌの感情によつて脚色されたのであるのか？

ヴエツテリニの答――『否、レイヌが靈視した事實は、自分が或る事件をレイヌに報道するためにレイヌにヴイジヨンを視せしめたのではない。レイヌの靈視せる光景は其の時未來の事件を示顯しつゝ存在する幽體的波動より生ぜる正しき寫象である。自分が影響を與へた部分は、たゞこの幽體的波長を感受し理解し得る狀態にレイヌをおいただけに過ぎない。それは其の時に於て眞實であつたのだし、今も尚眞實である。高級靈たちは其の全力を集中して、戰爭の慘事を遲らし、その悲慘を緩和しようとしてゐるのだ。高級靈たちは運命への干渉は有效であつ

た。しかしその勢力範圍は限られてゐることを知らねばならない。レイヌが靈視したものが何であらうとも、その靈視せる通りを君の手記には記載して置いて宜しい。何故ならそれは實現するからだ……何日それが實現するか精確な瞬間を云ふことは出來ない。吾々スピリツトは時を指定する力はない。吾々は時の經過を感じない。吾々スピリツトは君達人間のやうに時を理解することが必要な狀態に自身をおくことは難かしいのである。』（1）

（1）スピリツトが時の經過を感じないと云ふことは吾々人間にとつては實に理解しがたきことである。何故なら吾等の經驗は、常に時間及び空間の範疇を通じてのみ可能だからである。それに時間なしに仕事の持續の感じが存在するらしいのも變梃子ではある。併しヴエツテリニが時の經過を感じないと云ふことは此の實驗會に於てはじめて言ふことではない。その參考のためにそれ以前の實驗會に於て『時』に就てヴエツテリニが云つた處を抄記する。次は一九一三年三月三十一日の實驗會の手記である。

コルニリエ氏の問――スピリツトにとつて時間の觀念はどう感じられるのですか？

答――時間はスピリツトにとつては存在しない。スピリツトは時の持續を知覺しない。過去、現在、未來は共在する。問者も答者も多くの言葉を費したが、結局『時』が存在しないと云ふ狀態を考へることは、吾々人間の能力以上であると云ふことを認めざるを得なかつた。必ずや吾々の言語で説明すること

の不可能な狀態であり、議論しても甲斐がなからう……

又コルニリエ氏は卷末の補遺に於てかう云つてゐる(一九二一年)――

この數年間引續いて行つた靈界通信の實驗により、自分はかう信ずるやうになつた。歸幽の靈魂は吾々とは異る時間の觀念をもつものであるが、それにも拘らずスピリットは事件の『持續』及び『繼起』を感ずる。簡單に言へば、彼等にとつて吾等と感じかたが異ふのは時のリズムである。かの瀕死の人又は窒死せんとする人が、一瞬間に過去の全生涯を再び經驗することがあると云ふ周知の事實や、一瞬間の夢に自己にとつては數年を要する事件が展開すると云ふ事實は、ある存在狀態に於ては、時のリズムが著しく促進するものであることを理解する助けとなるであらう。數ケ月以前にヴエツテリニが或る遙かな星まで行くに就て『それは自分には千分の一秒ほどかゝる。しかし吾々にとつての一秒は人間にとつての數年である。』と云つたことがあるが、これも前述の事實からして解釋できよう。また『過去と現在と未來とが共存する』と云ふ主張は單に言葉に云ひ得るだけであらう。が併し、極めて高級のスピリットは繼起する事件を謂はゞ一瞬間にして知覺し得ると云ふ事實は認めなければならない。過去に就て云へば、それは、印象――即ち靈的流動體に殘つてゐる痕跡――を基礎として過去のイメージを再び築きあげるのである。また未來に就て云へばイメージの『豫覺』乃至は『既に兆として存在する徴候』(併しそれは常に修正を受けて實現するものである)を感知するのである。この過現未の一瞬時的通觀は人間の有する時間の觀念に從へ

ば、過去現在未來の共在と云ふことに當るのであるが、實際は靈界に於ける活動寫眞式イメージを指示するものであらう。(コ氏補註)

三十八

將來の事件に關する靈示(一九一三年二月十七日の實驗會)

今日の實驗にレイヌの見せしめられた靈示は順序が整然としてゐないでイメージとイメージとが紛糾混亂してゐるのと、レイヌの語彙が不足で見せられた光景を充分に現し得ないためとで、自分の了解し得るところも次のやうな漠然としたものである。

流血と破壞とを喜ぶ熱狂した精神波動はヨーロッパよりアジヤへと擴がつて行く。白人種の枷鎖につながれてゐた東洋諸國は叛亂を企てる——印度支那、安南、トンキン、英領印度。此等屬國となつてゐた諸國民の叛亂は、既に自國のことに忙殺され、疲勞してゐるヨーロッパ諸國にとつて恐るべき敵となる。長い間その誇りを傷けられ間斷なくその奧底の感情をふみにじられてゐた多數の亞細亞人種にとつては好機逸すべからずと蹶起の感情を唆りたてられる。臥薪嘗膽して亞細亞諸國民が待つてゐた機會が來る。好機到來! 全支那は蹶起する。目にて目を償ひ、齒にて齒を償はんとする正義の復讐の發作に因つて、支那は歐羅巴へと殺到する。何等の警告も豫め

なる示威運動もない。西洋貿易が彼等に供給した完全な武器は、此の戰ひには殆ど價値を有しない。彼等は無慮無數の肉彈によつてひた押しに押し寄せて來る。彼等は敵地を席捲し呑噬する。日本は支那とは人種の上では從兄弟であり、文化の上では支那の流を汲むために、支那に味方し、支那を後援する。黄人種は全ヨーロッパを掃蕩する？……（全滅せしめると云ふ意味か？）……兎も角いづれにせよ彼等は全ヨーロッパを震駭せしめる。白人種が黄人種より奪つてゐた全領土を彼等は取り返す。その奪還は完全である。報復心は滿足する。（註―二二七頁參照）

アフリカにも擾亂が起る。アメリカにも亦。

高く擧がるもの、低く落ちるもの――興亡の變化が唯人間的事件より結果するものとしては餘りに激しい――レイヌは其れを唯人間の殘忍性だけの發露以上の高い原因に歸してゐる。この驚怖すべき悲慘な狀態を齎らしたのは人間の殘虐性だけに因るのでも、既成社會が新時代に對して無理解すぎるのに因るのでもないと云つてゐる。それは宇宙變化の週期的法則に起因する――それは恒星の進化に原因する。時代が進化の一週期の完了期に近づきつゝあるのだ。最も進化せる人種は滅びなければならない、これが自然の法則である。今より三百年――若しくは其の前後の頃に、地球の大變動が起る――大地震、火山の爆發、大洪水、舊大陸の海中への沈下、新大陸の

出現等があつてわが國の大部分及び、わが國民の大部分は破滅する運命をもつてゐる。彼等は一種無言の本能によつて、自己を破滅の淵に運んで行きつゝあるのである。――否寧ろ一層悲慘な運命へと突進しつゝあるのである。

……自分はレイヌの見た靈示の牧歌的な生彩ある特色を表現したいと思つたのだが、寧ろ此の交靈會の記錄は冷靜に分析的に叙述すべきであらう―最初それは想像するに困難なやうな象徴的な情景であらはれた――

精神統一が深くなるのに却々ひまどつた。そしてレイヌは冷たくならなかつた。が、たうとう彼女は自分の椅子に凭れたまゝ靜止狀態に入つた――息は靜かに規則正しく約四十五分間彼女は氣持よささうに眠つてゐたが、やがて動きはじめた。彼女は奇怪な光景を目擊しつゝあるものゝ如く、低い聲で話すかと思ふと、耳を澄ますやうな身振りをし、何やら判らぬことを呟いた。やがての果てに彼女は自分を招んだ――『あゝ草臥れた。すつかり草臥れちやつた！ ヴェツテリニがわたしを伴れて、遠い遠いところへ行つたんです――海を越えて――大變かはつた國々を通つて來ました。わたしは變な風態の人々を見ました。髮が編んである――さうです辮髮です。』かう云つて彼女は、最初に行つた遠き外國でヴェツテリニに見せて貰つた人々や光景などを語つた。

その次には又やつぱり變な風態の、併し、また別の國民――非常に黒い皮膚をもつて、キラキラ光る艶のある衣服を着た人間を見せて貰つた。彼等は金貨をもつてゐる。金貨の袋をもつてゐる。そして熱心に、且つ祕密に其の金貨の袋を地中に埋めてゐるのだつた。やがて彼女はその長い靈的旅行から此の處へ引きもどされたのだつた！　最初に辮髪の東洋人を見たのは支那人を日本人と區別するために見せた靈示で、その次に見たのは印度人であつたのである。（これら人種の名前は彼女が大努力をしてヴェッテリニより教へられたのである。）此等の國民はやがて間もなく壓制者――白人種に對して叛旗をあげるときに必要な軍用金を貯へてゐるのである。『このことをヴェッテリニは貴方に知らしたいと思つてゐらつしやるのです。叛亂は到る處に準備せられてゐます。彼等は武器を得るため及び煽動費として金貨を貯蓄してゐるのです。』……で彼女は又その豫言的旅行に馬を驅つた――彼女の全然理會し得ない社會的狀態及び政治的狀態を說明するために時々その馬から地上に降りながらだ。

自分の受けた印象によると、ヴェッテリニは彼自身の豫見し得た我が國（フランス）の滅亡、その最後の運命をば話したくないやうな樣子であつた。無限の悲嘆を籠めた語調でレイヌが云ふのを自分は聞いたに過ぎない。――『吾が國民は既に獲なければならないだけのものを獲て了つた

のです。進化が完了したのです。いづれにせよ、間もなく滅ぶべき運命を有つてゐるのです。恐ろしいことですが、彼らは自身の運命を豫知しつゝあります！……獨逸帝國も滅亡する……カイゼルの死、その家の滅亡……獨逸聯邦の破壞……』等々。

* * *

その後(一九一三年三月十七日第三十五回目の實驗會に於て)得た靈示を茲に追加して置かう。何故なら或る意味に於て、それは前記の靈示の完了であり、吾が人種の滅亡に關する豫言の修正であるからである。

コルニリエ氏はヴェッテリニに云ふ——フランス人は古き人種であり、文化の最高度に達したから滅びなければならないと貴方は云ふ。それも可。併し、それほどの文化の程度に達した人間はフランス人中にも極少數ではないか！　大多數の人間は、この大仕掛な一掃的なカタストローフを合理的だと認め得る程の高さの進化に到達してゐないではないか？

ヴェッテリニの答——『必要な進化の度に到達してゐない人間は先づ、生き殘つた佛蘭西人のうちに其の地上の生活をつゞける……その次には他國——英國、露西亞、獨逸、等に生れかはつて出る……。』

自分は各國民の滅亡して行く順序を豫見し得るかと尋ねた。『確かなことは云へないが、』とてヴェッテリニの云ふには、フランスの次にはスペイン及びイタリーが洪水、噴火、地震等によつて破壞せられる。その次に來るのが獨逸の番だらう。英國及びアメリカは長い間存續する……但し英國のフランスに面する海岸の一部分は破壞する——併しその破壞は全滅的なものではない。支那も亦長い間破壞しない。（これは白人種よりも黄人種が先に滅亡すると云ふコスモソフイの學說とは反對である。）

政治的霸權の中心は將來歐羅巴より亞細亞に移動する……等々。

（1）歐洲大戰に聯關して黄色民族が勢力を得て歐洲を席捲するであらうとの靈示は、其後高級靈の修正力により『地上の悲慘を輕減するために擊退した』と示されてゐる。『擊退した』との意味が全然そのプログラムを變更したと云ふ意味か、たゞ時期を延ばしたと云ふ意味かは不明であるが一九一三年八月十五日のヴェッテリニの靈示に『高級靈たちは其全力を集中して、戰爭の慘事を遲らし、その悲慘を緩和しようとしてゐるのだ。高級靈たちの運命への干涉は有效であつた。しかしその勢力範圍は限られてゐることを知らねばならぬ。レイヌが靈視したものが何であらうとも、その靈視せる通りを君の手記には書いて置いて宜しい。何故ならそれは實現するか、、　とあるから、此のプログラムも時期が修正されたと見られるのである。コルニリエ氏は此の手記の卷末に、斯う書いてゐる。『自分は事情が許すならば、歐洲大

戰の進行すべき順序を修正せんがために、靈界に於て如何にスピリットが活動したかに就ての詳細をそのうち公表したいと思つてゐる。此の一大悲壯劇を他界より觀た時には、更に一層恐るべきほど壯大なものである。自分の經驗した心靈現象の價値に就ての評價は如何にともあれ、このうら若き教養なき一少女が統一狀態中に生じた想像の高さと偉大さとに就ては、これは舊約のどの詩人に比べても劣らないと云ふことだけは否定し得ないと自分は信ずる。』（コルニリェ氏後記）

（2）其後のヴェッテリニの靈示を聞くに、人間の靈魂が地上の進化の一段階を完了するには普通四千年乃至六千年を要するのであつて、その期間には、三四十回の地上への生更と、それに伴ふ更生前の休養期とが含まれてゐるのである。他の星の生活から地上への轉生せる靈魂群の間には互に相關干係があるのである。白色人種として進化すべく、他の星より轉生せる人間靈魂群が悉く皆、地上の試煉生活の一サイクルを修了するには二萬五千六百年を經過しなければならないことになつてゐる。現代地上に生を享けてゐる靈魂たちは、一度に全部地上に生を享けて來たのではない。それは連續の周期波によつて幾回にも分れて地上に移住し來つたのであつて、各自はかくして自己の受持つ地上生活の舞臺を完了しつゝあるのである。フランス民族中には此の最初の頃の地上轉生の周期波に乘せられて地上に移住せる人間靈魂群が可成り多いのであつて、これらの靈魂たちは、更に重ねて地上生活を閲する必要がないのであつて、此らの古き移住靈魂は今より三百年程の間に完全に靈界人としての生活に入り、新しく地上に生れ更り來る靈魂達

を指導する役目をとる事になる。だから此の週期の終末期に地上より姿を沒するのは必ずしもフランス民族又はフランス國民だけではない―それがフランス民族だけのやうに取次いだのはレイヌの誤信である。今より三百年前後を一週期の終末として地上生活を完了するのは、今より約五千年前、地上生活に白人種として轉住し來れる移轉靈魂の最初の一群である。

此の靈示が眞なりとすれば、人間社會の進歩が不可解に遲々としてゐる理由が說明されるのである。或る所要程度まで進歩せる靈魂は、(自ら進んで特殊の地上任務を盡すために地上へ顯現る靈魂は別として、)地上に再び生れ來らず、まだ粗野なる未發達の靈魂のみが地上に移住し來るのであるから、その道德性及び人間性の進歩があるレベルを何時までも超え得ないのは當然である。併し更生週期の度數が重るにつれて地上人間の靈魂の進化が一層速かになる見込はある。即ち、後に來る靈魂は先の靈魂よりも一層教育的な條件を見出す。換言すれば、その肉體器官は一層精妙に進化せるものとなつてをり、個人的經驗を通じて及び靈魂よりの指導を通じてヨリ多くを學び得ることになるし、社會もまた個人の活動及び創造をより自由に營み得るやうになつてゐるであらうから。(コ氏後記)

第二章　平等心より見たる靈界の消息

一

丁抹の青年劇作者マグナツセンの作品は一時同國コペンハーゲンの帝國劇場で好劇家の寵兒となつてゐたのである。彼が一九一五年以來劇作を中絶してしまつたことは好劇家にとつては惜しいものゝ一つに數へられてゐた。併し彼はたゞ沈默を守つてゐたのではなかつた。彼は伸びんがために沈默を守つてゐたのであつた。五年間眠れる獅子のやうに沈默を守つてゐたマグナツセンが、愈ゝ五幕劇を完成したと云ふ噂がパツとコペンハーゲンにひろがつたのは一九二〇年のことである。ロイヤル・シーアターでは喜んで彼の作を最初に上演するやうに作者と約束をした。好劇家たちの間には一大センセーションが喚び起された。

當時マグナツセンは自分の作の第五幕を中途まで書いてゐた。併しそれが一種の不可抗力でその劇作を中止しなければならなくなつた。彼は完成したい戯曲の草稿を机の上で眺めて泣きたいばかりあせつたが、もうその臺詞の一くだりも書き下すことが出來なくなつて了つた。彼は病氣に罹つたのではなかつた。劇作の能力が消失したのでもなかつた。

丁度、一九二〇年の十一月初旬、劇作家マグナッセンは自分の机の前の椅子にかけて、日ならず完結するであらう自分の戯曲の草稿を前にして、原稿紙やペンやインキを自分の好みに從つてならべてゐた。

彼はその年の夏の大部分と秋とを、都會からのがれてユトランドの高原地方で過した。彼はそこで、生れて嘗てない程の日光と清がすがしい空氣とを吸ひ込んだ。彼は今非常な健康さと勇氣と精力とにみちた感じで書齋に於て捲土重來の畫策をめぐらしつゝあるのであつた。

マグナッセンは自作の戯曲中の人物を點檢し、その會話を吟味しながら自分の戯曲ながら、可成りの出來榮えであると思つた。

『これはモノになるぞ。五年間も隨分沈默を守つてゐたものだ。』

と彼は深か〴〵と太息をついたが、此の戯曲の出來榮えを考へるにつけても、未來の希望でツイ微笑まれるのであつた。

『やう〳〵自分自身になつたやうな氣がする。もう一奮發で此の作も完成して、板にのせることが出來るのだ。』

彼は隨分好い機嫌にならずにはゐられなかつた。『何故あんなに五年間も自分は筆が澁滯して

ゐたのだつたらう、自分は五年前のなつかしい筆力のゆたかな魂が自分の内に歸つて來たやうな氣がする。しかも一層若返つてだ。愈々新時代に直面するぞ。さうだ、新時代だ。』

彼はペンを取りあげて、机の前に屈み込むと、前額にその長い髮の毛がパラリと小うるさく蔽ひかゝるのを、左の手で拂ひのけながら、『さうだ、新時代だ、時代の歩みは自分の天分を人々が理會し得る方向に進んで來た。』

彼は劇中の對話を數行書きおろした。力強い臺詞だと彼は自身で思つた。併しそれ切り、もう筆が進まなかつた。

顏をあげると窓のそとに向ふ側の家の正面が見えるのである。その家の窓は閉つてゐる。

彼は覺えずホーツと深い太息をついた。何故こんな愉快な氣分の眞最中にこんなに溜息が出るのか、彼は判らなかつた。

彼は自己の心のうちで『新時代』と何者かゞ又しても囁くのを聞いた。

『新時代』その聲は今迄考へてゐた彼自身の想念とは全く別な『新時代』の意味をもつてゐるのであつた。

彼は窓外に見える家々の屋根の上にカツキリと晴れ渡つてゐる秋の空を見ながら自分自身に對

して呟きかけた。

『新時代はたしかに來る。新しい曙の光は地平線上に微笑みかけねばならないのだ。併し、それは何處から來るのだ？　政治家の演說からか、勞働や、義務や、同情や、溫情やを叫んでゐる新聞紙の記事からか？　そんなものから新時代は來るものか。併し新時代は必ず來るに相違ない。何故なら世界はその來ることを望んでゐるからだ。』

彼はこゝまで呟くと、再び自分の書いた原稿に目を落した。原稿を見つめる眼はやがて失望の色にかはつた。

彼自身の作には何も內容がないやうに思はれた。

『空虛だ！　空虛だ！　空虛だ！』彼はまた呟いた。『たゞ過去の影ばかりだ。そこには新しい色も曙の微笑みもない。自分の書いたものは此の世界と同樣に、俺自身と同樣に生彩のない灰色をしたものではないか。』

『新時代！　新時代なんて來ないのだ。世界戰爭は終熄しても、人類が豫想したやうな薔薇色の曙は來なかつた。吾々は待つてゐる。しかし地平線上に出現してゐるものはすべて灰色の雲ばかりではないか。新時代なんて噓に過ぎない。世界戰爭中よりもそれは一層遙かに遠のいたやう

に思はれる。』

『俺は机に向つて創作をやり始めてゐた。新時代とは、秋の空氣と、自己保存の慾望と、俺にまだ殘つてゐた若さとエネルギーとが新時代の幻影を描いて見せてくれたに過ぎなかつたのではないか。が、現實を一瞥せよ、自分を幻滅の悲哀に突き落すのは、唯の一瞥で好いのだ。今まで自分が無鐵砲にも明るい幻影をいだいて微笑んでゐたとき、新時代を耳もとで囁いてゐた惡魔は、今は自分に對つてグロテスクな表情で齒をむき出して笑つてゐる。』

『新時代だ？ ヘン、この俺が新しいつて？ 俺の書いた戲曲が新しいつて？ 自分の戲曲の中に現れてゐるのはたゞ過去の影ではないか。過去の影が過去の樂しい言葉を語る――しかしそれはたゞの影に過ぎないのだ。どこに新しさがあるのだ。』

マグナツセンはだん〳〵憂鬱になつて往つた。しかし彼は間もなく自分を慰めてゐた――どんな藝術家にも暗い時期が來るものだ。自己の作品がみじめに見えてそれを見ることが恐ろしい程の時期が來ても、それは間もなく過ぎ去つて了ふのだ。彼は此の自分の煉獄的な苦しみの時期も遠からず過ぎ去つてくれるだらうと思ひ直した。併し彼は心の底から依然として囁く不可思議な何者かの聲をきいた。お前の考へてゐることは自慰に過ぎない、お前は幻影を描いてゐるに過ぎ

ないのだぞ。お前はまだ樂しさうに原稿紙の面にペンを揮はうとするだらう。しかしそれが何になるのだ。此の世は畢竟影に過ぎない。一層眞實なるものゝ影に過ぎない。』

から囁く聲は自分自身の考へとは全くそぐはなかつた。彼は氣分をまぎらすために家を出た。

二

翌日、此の二三年間互ひに遠ざかつてゐた一人の詩人がマグナツセンを尋ねて來た。

此詩人は大分前から佛蘭西語で佛蘭西の出征軍人を題材にした詩作に耽つてゐたのであつた。

マグナツセンは母國語を無視した佛蘭西語の詩など聞きたくなかつた。

『母國語があるのに何だつて佛蘭西語で外國の軍人を讃嘆しなければならないのだ。君は馬鹿だな！』

から云つてマグナツセンは友達を攻撃したこともあつた。此の詩人がマグナツセンに遠ざかるやうになつたのはそんな理由からであつた。

今日彼が久方ぶりで訪ねて來たときにもマグナツセンは彼に今後フランス語などで詩作しないで、母國語でやつて貰ひたいと云つた。

詩人はそれには直接答へなかつた。彼は椅子にかけたまゝ空を見詰めてゐた。

『僕は今度素晴しい體驗を得た。』と詩人は云つた。『フランスの軍人と話して來たよ。』
『そんな事は珍らしくもないね。』とマグナッセンの答へは素氣なかつた。
『さうさ、當り前なら。併しその軍人は死んでゐるんだ。死んで了つたフランスの出征軍人と話したんだからね。』
マグナッセンは相手を憐れむやうに肩を聳やかした。――
『これは又！ フランスの戰死軍人が墓から起き上つて君の讃頌詩に感謝の意を表したとでも云ふのかね。』と彼は茶化すやうに云つた。
併し詩人はきはめて眞面目さうに劇作家の顏を見ながら、
『僕が今日來たのは實はそのためなんだ。君は頭の好い思索家だ。君は獨自の考へを有つてゐる。何ら迷信的思想にわづらはされてはゐない。誰も君を胡魔化す事は出來ないと僕は信じてゐる。そのために僕は今日來たんだ。僕が氣が狂つてゐるかどうか君の意見を聞きたいんだ。僕は實際、フランスの戰死軍人と話したんだ。』
『それを眞面目に君が云ふなら無論君は氣がちがつてゐる。別に聰明な第三者の判斷を待つまでもなく君は氣がちがつてゐるに相違ない。』とマグナッセンの言葉は冷然とした審判きぶりであつ

た。

『君は何の信仰も有たないんだね。』

『無いとも、信仰は僕には用事がない。』

詩人は取りつく島もないやうな表情をしてしばらく押しだまつてゐた。

やがて彼は事の經過を此の冷然たる劇作家の前に說明し出した――『僕は交靈會に何遍も出席したことがある。或る時その交靈會でフランスの戰死軍人の靈魂がテーブルの脚へ憑つて來た。そして僕はその靈魂と對話したんだ。君はそんなことはありさうにないと云つて笑ふだらう。笑ふのが君としては當然だ。併し僕は噓をいつてゐるのではない。テーブルの脚は文字を綴つて話すことが出來るんだ。吾々の周圍には多くの靈魂たちがとり捲いてゐる。吾々が今迄迷信だと思つて貶してゐた事實は却つて迷信ではなくて、實在する眞實であつたのだ。』

『へえ！』とマグナツセンはその唇に惡意のある微笑をたゝへながら答へた。『それは君のフランスへの崇拜がテーブルの脚にまで進出してその脚がフランス語を綴つたり、フランス軍人の眞似をするんだらうぜ。馬鹿々々しい。』

マグナツセンの嘲笑にも拘らず詩人は變に落着いてゐた――

『すべてを嘲笑に付して了ふことは何でもない。こんな事實は誰にでも一見馬鹿々々しい出來事だと思へる事實だから。だけど君は聰明な頭をもつてゐる。そして幸ひにして科學者ではない。で、僕が此處でその事實を實驗して見せたら君は何と云ふだらう。』

無神無靈魂論者のマグナツセンの答は飽くまで冷然としてゐた――

『僕自身が氣が狂つたと思ふまでさ。が、そんな馬鹿らしい話は止しにしようぢやないか。』

しかし詩人は益ゝ熱心になつた。『いや一切を嘲弄し去る君に對して實際を見せることは是非必要だ。現實的な君が超自然的現象の實際あることを知るのは君にとつて大いに參考となると思ふ。丁度好い！　あそこにテーブルがある。』

劇作家は笑ひ出した。『あれは僕の祖父のテーブルさ。あのテーブルがダンスでもすると君は思つてゐるのだらうか。』

『やつて見せよう。』と詩人は立ち上つた。

マグナツセンは書きかけた自分の原稿をチラリと見た。併し丁度、筆が澁つてゐたところなので、彼は結局こんな邪魔が這入つたことを幸ひに思ひながら、

『ぢや、僕の祖父のテーブルがダンスするのを見せて貰はうかね。ミニュエット踊りをやつて貰

ひたいもんだ。』が、詩人は眞面目くさつてマグナツセンの顏を見詰めて云つた。『君が今思つてゐるやうに僕も始めは思つてゐたんだ。併し今に君も全く別の光で心靈現象を考へるやうになるよ。』

『僕は死者の靈がそんな馬鹿な眞似をすると云ふことを何時までたつても信ずることは出來ないだらうよ。君が人體電氣とか人體磁氣とかヒステリヤ的な性質を多分にもつてゐて、その力でテーブルが動き出したとしたつて、直ちにフランスの戰死軍人の靈魂がやつて來てテーブルを動かしたなどと信ずることは僕には絶對に出來ないんだ。』マグナツセンの言葉は依然として冷嘲を帶びてゐた。

詩人は、かまはずにテーブルを部屋の眞中へ引つ張り出した。そして二人はテーブルを間に對坐して、二人とも兩手をテーブルの上に置いた。

二人は待つてゐた。テーブルは動かないで三十分間過ぎた。

『おい君、君のフランス人はやつて來ないよ。』とマグナツセンは馬鹿らしくなつて云つた。

『一寸待ちたまへ。』

詩人がかう答へると間もなくテーブルは傾き始めた。

『君がワザと動かすんだらう。』

『スピリットだ、僕ぢやない。』と詩人は答へた。スピリットとは靈界へ往つてゐる人間の魂のことである。

マグナツセンはたしかめるやうに詩人の手に觸つて見た。彼の手はテーブルに附いてゐるけれども、輕く觸つてゐるだけで、どうして、此の古い重いテーブルを動かせる筈がない。しかもテーブルは依然として動くのだ。

『これはたしかに妙だ。』

詩人は空を見詰めながら、低い押し消したやうな聲で云つた。『誰か此の机に來てゐるのなら答へて下さい。』

テーブルの脚は答へるものゝやうに三回床を蹴つて音を立てた。

二人は互ひに目を見かはした。詩人の瞳は勝ち誇つたやうな光が漂つてゐた。が、マグナツセンの瞳には『何を馬鹿な！』と云ふやうな意味の微笑が浮んでゐるに過ぎなかつた。

テーブルは此のときいよいよ激しく交互に前後に傾きつゞけた。詩人は心靈學上の術語で人間がテーブルと談話をはじめる方法を戲曲家に說明しはじめた。——

それは、テーブルの脚の一本が床を打つて音をたてる、その音の數を符號とするので、數幾つ床を打てば、それは何字の符號だと云ふ風にあらかじめ定めて置くのである。たとへばDは四つFは五つと云ふ風にである。また此方から疑問を出した場合には、三回つゞけてテーブルの脚が床を打てば『イエス』、一回だけ床を打てば『ノー』と云ふ答だと云ふやうにきめるのであつた。

詩人はテーブルに對して恰も生きた靈がゐるかのやうに、かうした通話の條件を交渉しはじめた。

戯曲家は興味ある眼でそれを看まもつた。彼には面白い遊戯だとも思はれた。

『誰方か此のテーブルに來てゐるのですか。』

から詩人は低い陰氣な墓の彼方からでも來るやうな特別な聲を出して訊いた。

『さうだ。』とテーブルは三つ續けさまに床を蹴つた。

『どなたです。お名前を被仰つて頂けませんか?』

『諾!』とテーブルは一回床を蹴つてから、やがて別の文字を綴るらしく、明瞭にコトコトコトコトと床の上に數をきざむ。そしてPの文字に達したとき、それは止つた。

『P!……その次を綴つて下さい。』と詩人は云つた。

テーブルはまたコトコトとやり出した。そして今度は0の文字符號の數まで往つたときハタと止つた。

かやうにして綴り出された文字は

“Polu”

と云ふ字であつた。それは佛蘭西の戰死軍人と云ふ意味であつた。

『ソレ、例の佛蘭西軍人がやつて來た。』

と詩人は云つた。

戲曲家マグナツセンには馬鹿々々しくなつた。彼はもう自分の感情をおさへてゐることが出來なくなつて、

『何だ、馬鹿な！』と吐き出すやうに云つた。餘りに愚劣な事實だと彼はその時思つたのだ。

詩人は、マグナツセンが『馬鹿な！』と吐き出すやうに云つたのも聞えぬらしく、

『何か君、この佛蘭西人に對つて話して見給へ、佛蘭西人だから佛蘭西語の方が好い』と云つた。

マグナツセンは吹き出すやうに笑ひ出した。詩人の此の云ひかたが、信じられさうもない荒唐無稽なことを、あまりクソ眞面目な調子で云つたからだ。

『佛蘭西語が要るものか』と彼は嘲笑するやうに云つた。『このフランス人は死んでゐてしかも生きてゐる。即ち巴里にある墓をぬけ出してコペンハーゲンくんだりまでやつて來て、この僕の祖父さんの遺物たるテーブルの下へ這ひ込んで話をしようと云ふ位なら、屹度デンマルク語がしやべれるだらう。さあ、何なと喋れ、佛蘭西人君！』

『君は神を瀆す者だ。』と、詩人はまだクソ眞面目だ。

この時テーブルの脚は『然り』と云ふやうに三つ續けさまに床を打つた。

『それ見給へ。この佛蘭西人も同感だ。この靈にはたしかにデンマルク語が解るのだ。』

そして詩人はテーブルの方へ向つた。『何か吾々に話したいことがあるんですか？』

『然り。』とテーブルは云つてから、愼重な脚どりで、『吾々は死んだ時に生活に入る』と綴つた。

『なかなかシヤレを云ふぞ。このフランス人。』とマグナツセンは起ち上りながら云つた。

『何かほかに云ひたいことはありませんか。』と詩人は訊いた。

『ない。』とテーブルは答へる。

『別に對話として面白い對話でもない。』とマグナツセンは部屋の中をグルグル歩きまはりながら

『吾々は二人とも大馬鹿者だぞ！　事實は認める。併し君は僕が、祖父のテーブルと一緒にダン

スしたなんて誰にもしやべつてはならないぞ。何て馬鹿々々しいことだ！』
『何も馬鹿々々しいことはないぢやないか。それは確かに眞理だ。死んだ時に吾々は生活に入るのだ。』
『もうもう御免だ！』マグナツセンはもうクシヤクシヤしてたまらなかつた。『死んだら吾々はテーブルの脚の中へ這ひこんで生活するのか。結構な未來世だ！ほかのことなら僕は信じもしよう。併しこればかりはあまり馬鹿々々しいことではないか。』
『ではこの現象を君はどう說明しようとするのだい。』
『そんなことは知らないよ。科學に訊きたまへ。人體電氣とか、人體磁氣とか、潛在意識とか云ふものだ。』
『いや交靈現象だ。スピリツト（靈魂）が來てゐるのだ。』
マグナツセンは詩人の胸に思はず摑みかゝりながら、
『若し靈魂がテーブルの脚に這ひ込んで、この晝日中にフランス語を綴るのが本當なら、靈魂なんて人間と同じ程度に愚劣なものぢやないか。』
『何だつて靈魂が人間と同じ程度に愚劣であつてはならないと云ふ理由はないぢやないか。』

『大いにあるよ、僕が靈界でアブラハムの胸に横はつて折角しづかに安息の生活に入らうと思つてゐるところへ、君が神通力を出してやつて來て、また〳〵馬鹿なフランス軍人の讃頌詩を朗吟したりでもしようものなら、僕の靈界の安息は破られてしまふからだ。アツハ、ハハハ……』

『誰か知らんや』と詩人は語尾に幾分反語らしいものを含ませて云つた。

マグナツセンは心から大きな聲を出して笑つた。しかし彼は自身がテーブルの上に輕く手を觸れてゐる時にテーブルが始めに動き出した時の感じを思ひ出すと不思議に堪へなかつた。それは仕掛がある譯でもなければ手品でもなかつた。彼はテーブルが或る神祕な個性を有つた力で動かされてゐたと云ふことを許さねばならなかつた。しかしそれはたとひ何かの問題を示してゐるにしても重々しい眞實と云ふよりも喜劇的なものに彼には思はれるのだつた。もう一度實驗して見ようと云ふ氣にもなつた。

今度は二人が兩手をテーブルの上に觸れて一分間もたゝないうちにテーブルはグルリと一廻りした。恐ろしい力で床の上を軋り歩いたかと思ふとマグナツセンの膝の上にソツとその脚をもたせかけた。

マグナツセンは何とも名狀しがたい感じに襲はれた。そして答へをうながすかのやうに詩人の

方へ眼をやつた。

『今度は君にも得心が行くだらう』と詩人は云つた。『何か重大な現象が起りさうだ』

かう云つてから、彼はテーブルに對つて、

『どなたですか？』と訊いた。

テーブルは一秒間躊躇した。が、少しも間違なしに、力強いその脚音で、マグナツセンの父の名を綴つた。

此の時、戯曲家は何か妙な感じが領元にながれるのを感じて椅子から立ち上つた。

『そんなことがあつて堪るか。あまりにも恐ろしいことだ』と彼は考へた。

『何故だか知らないが自分は、この時すべての現象が、突然堪らないほどイヤな感じにみたされた』とマグナツセンは告白してゐる。――彼は佛蘭西軍人の靈を取扱つてゐる間は單にナグサミとして甚だ輕く取扱つてゐることが出來たのだつたが、テーブルが突然自身の父の名を綴ると、それを承認することを喜ばない眞面目な重くるしい感じにおそはれるのであつた。

『君は馬鹿だ。』とマグナツセンは詩人に云つたが、その聲には確信がなかつた。『父は十二年前に死んだのだ。それがどうして此處へやつて來られるのだ。そんなことは信じられない。どうし

て君はそんなことが信じられるんだ。もう僕は僕自身をいつ迄も愚弄してゐるには耐へないよ。』から云つたものゝ、彼はやはりまた椅子に腰をおろしてテーブルの表面に掌を輕く置いてゐた。恐ろしいものが見たかつたのだ。

テーブルは直ちにまた脚で音を數へはじめた。音は精確で、ハツキリしてゐた。

『わしはお前の父だ。愛する子よ。』とそれは綴つた。

戯曲家は領脚に氷のやうに冷たいものが流れるのを感じた。彼はもうテーブルに當てゝゐた手をのけたいと思つた。しかし詩人は私語いた。

『何を君の父が君に云はうとするのか。しばらく待つて見たまへ。』

テーブルは、同じやうな力強い確かな叩音で次のやうに綴り出した。

『わしはお前の父だ。知れ、愛する子よ、神は活在ましますのだ。さやうなら。』

マグナツセンは暫らく言葉を出すことが出來なかつた。彼の手は力なく膝の上に落ちた。彼は直ぐに起ち上ることが出來なかつた。彼はそれほど深く感動してゐた。

しかし彼は自身の心を引立てた。

『まだまだ實驗が足りない。あまりに氣ちがひじみてゐる。あの愛する、生きてゐた時には偉大

な音樂家だつた父が、テーブルの脚の中にしのび入つてゐるとはどうしても思はれないではないか。どうも噓だ。テーブルは神のことを書いたが、父は神を知らなかつたのだ。』

彼は非常に昂奮して床の上をあちこち往つたり來たりした。しかし、詩人はじつと坐つたまゝこの劇作家の行動をながめてゐたが、やがて云つた。

『不思議な感じがしなかつたかね。神祕な珍しい現象ではないか？』

『何を馬鹿々々しい！』とマグナツセンは亂暴な調子で云つたが、その聲の調子は冴えてゐなかつた。彼は實際神祕な感じに打たれてゐたが、それを白狀することが嫌であつたのだつたと、あとで自身で書いてゐる。

『暗示の作用か、想像の作用か、潛在意識の作用さ。』と彼は別な科學的名稱を用ひて、自分の感じを胡麻化さうとしたのであつた。

『では訊くが、』と詩人はどこまでも落着いてゐた。『君は暗示に感應するやうな男だらうか。自己暗示の虜になるやうな男だらうか。君は事實をみとめてゐるのだ。たゞ信ずることが出來ないだけだ。』

この友人の落着いた態度が、一層マグナツセンをいらいらさせた。

『好い加減にして呉れよ。』と彼は叫んだ。『君は十二年前に死んだ僕の父が、僕の側にうろついてゐて、テーブルの脚の中から話をすると僕に信じさせたいんだらう。が、それは何も必然性がないぢやないか。君は偶然僕のところへやつて來て、偶然佛蘭西軍人の靈の話をしたに過ぎないぢやないか。』

『誰が、僕が此處へ今日偶然來たと云つたのだ？』

が、マグナツセンは引歪んだ笑ひを浮べた。『神が僕のところへ豫言者を送りたまふのであつたならば、氣狂ひのデンマルク詩人や佛蘭西軍人なんて者より、もつと立派な使ひを寄越しただらうよ。もう歸つてくれたまへ。僕は一人切りになりたいんだ。あまりに馬鹿々々しい。』とズケズケ云つた。

詩人は肩を聳やかして起ちあがつた。

マグナツセンは椅子に倒れるやうに腰をおろすとグツタリ掛けたまゝ動かなかつた。彼は自身の愚劣さに腹立しく昂奮してゐた。それだのに、どこかにスキートな甘い感激が彼の心の奥底に殘つてゐた。彼はいつの間にか先刻テーブルが綴り出したところの『わしはお前の父だ。知れ、愛する子よ、神は活在ましますのだ。さやうなら。』と云ふ言葉を思出してゐた。

三

それから後の、これも十一月の或る日だつた。マグナツセンは原稿の束をとり出して仕事をまた始めにかゝつた。書きかけた劇の筋がどうも思はしくまとまらないので彼は空しく書いたり消したりしてゐた。

彼の心には先日友人がやつて來て自分に實驗して見せた心靈現象のことが思出された。それは實に奇怪な現象だと思つた。しかし思出せば何よりも嚙むやうに心に悔いられるのは羞かしさの感じであつた。道を歩いてゐるときでも、あの時のことを思ひ浮べると血が頭に昇つて來て冷汗が腋の下から流出る思ひであつた。彼にとつては父の記憶は實に聖いものであつた。その愛する父についてテーブルと話を交へるために馬鹿な氣狂ひの詩人と一緒にテーブルの上に手を差しのべてゐた自分自身を思ひ出すと、とても彼はたまらなかつた。それにまた彼は自分自身が、あの際實際神祕なものに觸れたやうな妙な感じに打たれて、領首のところへ冷水でもブツかけられでもしたやうに感じたことを思ひ出すと『何たる馬鹿だ！』と穴へでも這入つて身を隱したい位な思ひがするのであつた。

晩秋の太陽は空からにこやかな光を送つてゐた。下界のすべては如何にも嬉しさうに輝いてゐ

たが此の劇作家だけは机にもたれたまゝ憂愁にとざされて顔をあげ得なかつた。彼はどう考へて見ても超自然現象を信ずるために、此の自身がテーブルにしがみついてゐたことを考へると、如何にも馬鹿々々しい幼稚な批判力のない自分だとみづからが省みられて口惜しいのだつた。

しかし此の口惜しさも、はづかしい經驗も、藝術家の小さな一つの挿話として忘れて了はねばならないと彼は心を引立たした。そして打沈んだ氣をはらすために窓の外に輝く晩秋の太陽に彩られた空を見たのである。陽炎のやうな秋の光は生々と踊つてゐた。彼は少しく勇氣をとりもどした。そしてペン軸を取り上げると、ペン尖を紙に當てがつたまゝ窓の外の太陽と青空とをぼんやりと眺めてゐた。

と、彼には自身の指先を何者かゞ引くやうな不思議な感じを感じた。彼は思はずシツカリとペン軸をにぎりしめた。しかし指先を引摺らうとするやうな不思議な感じは止まなかつた。彼は思はず俯向いて原稿紙をながめた。今度は痙攣するかのやうに、指先が自身の力でなしにペン軸を固く握つた。

『書け、今!』と何者かゞ自身の指に命ずるやうな恰好であつた。

しかし彼は思想がまとまらなかつた。なほしばらく紙にペン尖を押しつけたまゝでゐた。する

とそろ〳〵ペン尖が紙面の上を自働的にすべり出した。妙な形が紙の上に描かれはじめたのである。

マグナツセンは驚いて自分の意志を用ひないで自働する自分の指先を見詰めながら、この新らしい神經的發作に自分でもあきれてゐた。彼は暫くすればこの發作も沈靜するだらうと思ひながら指の動きが自然に止むのを待つてゐたが、なかなか止みさうもなくて、指先を引張る不思議な力は愈〻強くなり、指先に握つたペン尖は暫く矢鱈に唐草模様のやうなものを描いてゐたが、突然花文字でEと書いた。やがてペンは小文字のgと云ふ字を書く。次にはe、次にはd、次には再びe、するとペンはくるりと處をかへて大きな讀みやすい筆蹟でEgedeと自署したのであつた。

マグナツセンは又しても領首のところに冷水をあびせられたやうな感じと共に、前額から冷汗の流れ出るのを感じた。

『これは何だらう』と彼はみづから呟いた。『自分の手はEgedeと書いたんだが、イージードとは何だらう。自分には判らない。それは自分の頭のなかにはない何かだ。』

彼はこの時はじめて心靈現象に名前だけは聞いてゐた自働書記(automatic writing)と云ふ一

種の現象を思ひ出して、微笑まずにはゐられなかつた。

『テーブルと一緒にダンスさへした俺ぢやないか。自働書記もやりかねない。』と彼は呟いた。彼は當時近着の新聞によつて、自分の愛讀してゐた作家コナン・ドイル氏が或る日書齋の机に向つてゐると突然自働書記現象がはじまつて、これによつて靈界にゐる人たちと通信をはじめたと云ふ記事を讀んだことがあるのを思ひ出した。その時彼は靈界通信なんて云ふことを信じなかつたけれども、一寸興味あることに思つた。コナン・ドイルは色いろ神祕的な物語を書いたから、そんな神祕的な現象を起すのも彼らしいことだと思つたのだつた。

マグナツセンはコナン・ドイルのことを思ひ出したので、幾分自尊の念を囘復した。そして一時羞耻の念をわすれて了つた。實際、世界には賢者や偉人だと云はれてゐる人で心靈現象を起す人があるからだ。

『此の自働書記現象は興味ある實際現象であつて詩人の潛在意識の働きによつて起るものなのだらう。』

彼はかう解釋した。この解釋は彼にとつて最もみとめるに都合のよい解釋であつたのだ。實際作家とか藝術家とか云ふものは、潛在意識とかインスピレーションとか云つて、ひそかに内部か

ら彼に筆を押し進めさす神祕な力についての體驗をもつてゐるものであつた。又、科學者などでも、晝のうちに一所懸命に考へても解釋のつかなかつた難問が、夜中ふと眼ざめると、その解釋が突然頭に思ひ浮ぶと云ふやうなことはザラにある。これは別に、超自然現象と云ふものではなく、誰にでもある自然現象だと彼は思つた。彼はまた自身がホツフデイング教授について大學で哲學を習つたときにも此のことは敎へられたことを思ひ出した。

マグナツセンは此れを思ひ出すと、自働書記現象をもう潛在意識の作用にきめて了つた。それで彼はもうこの現象をはづかしいとは思はなかつた。彼はペンにインキを含ませて紙にあてながら、現在意識の發見しない何事かを潛在意識が敎へてくれるかも知れないと期待しながら看まもつた。

マグナツセンの手はまたしても何者かに引きずられるかのやうに動き出した。それは彼にとつて不思議な感じであつた。それは彼が讀んだ話に出て來る巫女などによくある無我又は無意識の狀態ではなかつた。彼は普通の意識をもつて、寧ろムシヤクシヤ氣持を焦立たせながら、すべての事を明瞭に意識してるのだし、生理的には朝飯をうんとたべて間がないので釋迦やキリストが修行のために斷食したのちのやうにふら〳〵した狀態ではなかつたのだ。

が、彼の手は容赦なくひとりでに動いて『愛らしきイージード』と全然自分の意識に何の關係もないことを大文字に書くのだつた。

マグナツセンの好奇心は高まつた。彼は『愛らしきイージード』を見たことも聞いたこともなかつた。ペンは此の次に何を書くだらうか？　彼は紙に再びペンを押し付けた。

手先は再び引きずられるかのやうに動いて、大きな讀み易い字で、

『わたしはイージードです。貴方を愛する者です。』と書きあらはした。

マグナツセンは又しても背中に冷水を浴びせられたやうに感じた。自分の蹈んでゐる大地が沈んで行くやうな氣がした。

『誰だ。此處にゐるのは？』と彼は本能的に言葉が出た。

『わたしはイージードです。此處にゐます。貴方のお顔が見えてゐます。わたしは愛してゐます。』から彼の手は書きつゞけた。

彼は額から汗のにじみ出るのを感じながら、覺えずあたりを見廻した。

部屋には無論誰も其處にはゐなかつた。窓の外には太陽が街をあか／＼と照らしてゐた。青空には悠々と雲が浮んで、彼自身がしづかに机に向つてゐるほかに何もなかつた。

マグナツセンは再びペンを紙に當てながら、われにも非ず囁いた。――
『イージードつて誰です、僕は君を知つてゐるか。』
ペンは書いた――『わたしは貴方のお友達です。わたしは貴方を知つてゐます。』
『僕の方は君を知つてゐるのかい。』と彼は低聲で云つた。
ペンは書いた――『貴方はわたしを御存じぢやありません。わたしは愛らしいイージードです。わたしは貴方を愛する者です。』
マグナツセンはこんな現象にかゝはつてゐるのが羞かしいと感じはしたが、もう止めることが出來なかつた。自分自身の書いた妙な記述に氣をすつかり掻きみだされて烈しく問ひかけた。
『君は一體誰なんだ。』
『子供です。』とペンは書いた。
『幾歳の子供だ。』
『八歳です。』
マグナツセンは一瞬時唇に微笑をうかべた。それは神祕現象でもあれば、喜劇だとも思へるのだつた。『潛在意識が不思議なことをすると云つても、とても變なことを考へついたものだ』と彼

は考へながら、
『君の親は何と云ふのだ。』と訊く。
『それは云へません。』とペンは答へる。
『云つてくれないのかい。』
『云つてはならないのです。わたしは愛らしいイージード、愛らしいイージードです。』
『何日君は死んだのだい。』
『それは云へません。』
『何かほかにもつと云ひたいことがあるかい。』
『えゝ。』
『云つて御覽。』
『わたしは愛らしいイージード。愛らしいイージードよ。』
から書いてイージードは去つて了つた。もう彼のペンは死んだやうに動かなかつた。マグナツセンは椅子に背をぐつたりもたらせながら考へた。
『いよいよ自分は氣狂ひになつたのかな。氣狂ひでないにしても少くとも神經病だ。』

彼は部屋の中をぐるりと一ぺん見廻した。それからまた起ち上ると床の上をアチコチ二三回往復する。鏡をのぞき込む。窓を明けて外を眺める。又しめる。椅子に掛ける。起ち上る。それから彼は自分の兩手を頭にあげて又考へて見るのだつた。

彼はさうしてゐるうちに次第に心が落ち着いて來た。彼は『イージード』と幾囘も自分のペンが書いた時の手の動きかたが、全然自分の書く時とは異つてゐたことを思ひ出した。どうもそれは潛在意識にしても變なところがあるやうに思はれた。

『も一度書いて見よう。』から彼は今度は子供が新しい玩具にたはむれる時のやうな好奇心と歡びとでペンをとつて紙にあてた。

ペンは再びしづかに紙の上を滑る。そして、極めて丁寧な書體で『イージード』と再び書くのだ。

『小さきイージードさん。何か僕に云ひたいことはありませんか。』

と彼は幾分矢張り馬鹿氣て耻かしかつたが、きはめて親しい氣持を經驗しながら問ふのだつた。

『愛らしきイージード。』からペンは書いたまゝ動かなくなつた。マグナツセンは期待を裏切られ

たやうな不快を感じた。

しかし暫くすると、彼は指先が前よりも強い力で引ずられるのを感じた。ペンは大きく動いて速力を増すかと思ふと、其處には『父』と云ふ字が描き出された。

彼の手はとまつた。ぐつと首根つ子を突かれるやうな感じで彼は前こゞみになつた。『肩に力を入れたからだ』と彼は思つた。と、ペンはその瞬間又動いて、

『わたしは父だ。お前の父だ。わたしは生きてゐてお前を見ることが出來てゐる。愛する子よ、わたしは生きてゐる。』と書いた。

首根つ子にかゝつてゐた重味が一時に輕くなつたやうに感じると、ペンは動かなくなつた。

マグナツセンは、深い深い太息を續けさまにした。彼は理窟を考へてゐるやうな餘裕はなかつた。彼は突然またある衝動にかられながらペンを原稿紙に押しあてた。一つ深い吐息をすると彼は首根つ子にまた押付けられるやうな重味を感じた。ペンは又何か書き始めた。

『わたしはお前の父だ。』とペンは自働して書くのだ。『わたしは此處にゐる。わたしは生きてゐる。お前はわたしの若いときの筆蹟を知つてゐる筈だ。誰も此の筆蹟は眞似ることは出來ない。書いてゐるのはわたしだ。お前はわたしの愛する子だ。わたしは生きてゐる――そして永遠に死

を知らない――このことをわたしはお前に知らせるためにやつて來たのだ。お前も死ぬと云ふことは無い、誰も本當は死にはしないのだ。わが愛する子よ。わたしは澤山書きたいことがある。併しお前はまだそれに耐へないだらう。考へることを止めてわたしの言葉に傾聽せよ。わたしがお前に話さうとすることは素晴しい輝く眞理だ。わたしは生きてゐる。お前も決して死ぬことはない。お前が死んだときそれは新しい生命に入るのだ。誰も死なない。そして永遠に生きて神を見得る「生」に入るのだ。――

『わが子よ、わが愛する子よ。わたしは稻妻のやうに空間を天翔つて、お前の許へやつて來てお前の首根つ子のところに今ゐるのだ。そしてお前と倶に書いてゐるのだ！　神は生きてゐますのだ！　わが親愛なる子よ、わが子よ、わたしは稻妻のやうに空間を天翔つてお前の耳元へ來て、お前の思想に人間が死なゝいと云ふ眞理を囁き込むのだ。――

『このためにわたしは今日お前のところへやつて來たのだ。すべて此らの奇妙な今日起つた出來事をお前は今みとめてゐる。この現象が何を意味するか、お前はやがて眞理を知るだらう。わたしはやがて、それをお前に語るときが來る。我が生涯の最も善き友であつた吾が子よ、わがいとし子よ。お前に話しかけてゐるのはお前の父だよ。お前の手をもつて書いてゐるのはお前の父だ

よ。お前の眼は今泪ぐんで來た。心臟がふるへてゐる。わがいとし子よ、わたしに微笑の顏を見せてお呉れ。わたしは今幸福感のうちに往かうとするのだ。またお前のところへ歸つて來るよ。併し、今はこれ以上はお前の肉體の精力が耐へ切れない。またやつて來るよ。吾々は決して別れてしまふと云ふことはないのだ。わが子よ汝の父はもう往くよ、お前の微笑の顏を見せよ。さやうなら。』

から書くとペンはマグナツセンの指からすべり落ちた。寂寞が部屋一ぱいに充ちてゐるやうに思はれた、と彼はその時のことを回想して云つてゐる。

彼は眼の前に自身の手で書いた父の手紙、しかも小さな特徴まで寸分生前の父とはちがはない父その儘の筆蹟の手紙が机の上に置かれてゐた。彼は手紙をとりあげてしらべでもするやうに注意深く看まもつた。

やがて彼はそれを繰返し讀んだ。繰返し繰返してゐるうちに彼は泣けて來た。『自分の心臟はいつにない懷かしさにつゝまれて顫へてゐた』と、彼はその時の感情を説明してゐる。『あゝ此の手紙、十二年前に死んだ父から受取つた手紙!』

それは實に信ぜられない不思議な事實であつたが、事實は事實と認めるのほかはなかつた。彼

は事實を見た、手で觸つた。事實！　しかし彼はまだ信じなかつた。

マグナツセンは目の前に自分の手そのものが書いた靈界の父からの手紙、誰も眞似ることの出來ない寸分違はぬ父自身の特徴ある筆蹟の手紙を繰返し讀んでゐると、何となきなつかしさがこみ上げて來て一時は泣けて來たが、次第に自己をとり戻して來るにつれて批判的な反省心が起つて來た。彼はその現象にどうしても確然たる解釋を下すことが出來ないのでまた憂鬱に押しつぶされさうになつた。

彼は、父その儘の筆蹟で手紙を書いた自分の手の自働作用が、覺めてゐる自分の作用でも、所謂、潛在意識でもない事をみとめてゐた。彼は自身の手を自働的に動かして書くべく強ひてゐるところのものが一種の神祕的な力であることをみとめてはゐた。それは彼にはハツキリ判つてゐたのだつた。ほかに說明のしやうが彼にはなかつた。『自分は机にむかつて靜かに坐つてゐたのだつた。心はハツキリしてゐた。それどころか、神祕的だとか超自然的だとかの說明を避けることが出來るところの自己欺瞞とか自己暗示とかの要素が少しでもあれば、それをつかまへて、トツチメてやらうとさへ用意してゐたのだ』と彼は後に告白してゐる。併し彼はどうもこれを神祕力と信じたくなかつた。また信ずることが出來なかつた。總ての事實は信じ得るにしては餘りに

奇怪な信じがたきものゝやうに思はれた。彼はこの奇怪な現象に納得の出來るやうな自然的な說明を與へることが絕對に不可能であることを感じながら、益ゝ憂鬱な氣分にとざされるのであつた。

彼のこの憂鬱な氣分は、『父より』と稱して彼の手自身が書きつゞつた手紙にあらはれてゐる嚴かな神聖な感じには打たれずにはゐられなかつたにも拘らず、それに對して本當に信ずることが出來ないと云ふ矛盾から來てゐた。この現象を如何に說明する道があるのであらう。彼はどうしても科學的な解釋が欲しかつたのだ。

しかし、それは無駄であつた。說明の仕樣がもしあればそれは彼自身が氣狂ひになつて幻覺を見てゐるとでも云ふほかはなかつた。併し狂人であれば、自分の狂亂狀態についてかうして色いろと反省したり詮鑿したりする筈はないではないかと彼はまた考へずにはゐられなかつた。『では自分が狂人でないとしたら、この現象は一體どう解釋すべきものだらうか？　この現象の眞實性を信ずるほかはないのではないか。』とまた彼は考へるのであつた。『父は死んだのちも存續へてゐる、そして自分のところへ來て自分の手をつかつて自分への手紙を書いたんだ』と。しかしそれを信ずれば彼の父の靈魂がテーブルの脚に宿つて彼に話しかけたと云ふ事をも信ぜねば

ならなかつた。それは彼の父についての神聖な記憶を汚すかのやうに思はれるのであつた。……
こんな苦悶と反省と疑惑の日が幾日かつゞいた。

四

それから後の或る日、彼は數日の疑惑と苦悶とから起ち上つた。仕事をはじめねばならぬ。この考へは彼を勇氣づけた。彼は先日まで折角第五幕を書き續けてゐた戯曲を完成せしめようとして例のテーブルに對つてペンをとつた。しかし彼はペンをとると不思議に何も書けなかつた。妙な倦怠感が彼を襲うて、ペンをとるまでの勇氣や高揚した氣持がすつかり消えてしまつた。急に目に睡む氣が來たやうに瞬いて欠伸が出た。何故こんなに仕事に氣乘りがしないのであらうか。唯の一分間でも惜しいほどに仕事が急がれるこの芝居の上演季節に、もう數日を無駄に過して來たことが彼にはまたなく惜しく思はれた。

彼は氣を引立てゝまたペンをとつた。ペンが紙の上に行くとまた彼の手に妙な或る操る力が外から加はつた。彼には誰かゞ來て自分の頸ねつこを引つかんだやうにも思はれた。と、彼をとらへてゐた倦怠の感が急に消えた。前の日の時のやうな緊張が心によみがへつて來るのを覺えた。彼のペンはいやでも應でも無理強ひに彼の手を動かして次のやうにしたゝめた。――

『愛する吾が子よ。

『わしはまた來たよ。お前はしばらく休養してまた勇氣を回復した。お前の疑ひも、もう殆ど全部なくなつたやうだ。お前は此のわしと云ふものを單に神經作用だとも、とるに足らぬ詰らない一時的現象だとも思はなくなつたやうだ。併しねえお前、お前はわしを誤解してゐる。わしはお前の父だよ。お前の父がお前の頸のぼんのくぼのところに作用してお前の手にペンをぐつと握らせてゐるのだ。どうだわかるか、このわしの力が判るか。このペンを押しつけて彈きかへす音を聞け。お前はお前だけでこんな書き方が出來ると思ふか。お前の潛在意識にこんなことが出來ると思ふか、何でも好い、ほかの機械的動力でこんなことが出來ると思ふか？――

『否々、わが子よ。わしはお前の父なのだ。わしはお前の手の中に座を占めてゐる。わしは十二年前と同樣に、此の世に生きてゐたときのやうに強健で眞實な存在だよ。お前はいま大きく眼を見ひらいて部屋の周圍を凝視してゐる。それだのにお前の手は此の手紙を書いてゐる。お前は頸と手の指とに強い痛みを感じてゐる。どうだ、お前がわしを信じないならばわしの力を見せようか。ほら、こんなに文字が太く書け出して來た。お前の腕は重いだらう。これがわかるか、ねえお前。』

こゝまで書いて來たとき、マグナツセンの握つてゐるペン軸がぽきりと折れてしまつた。マグナツセンは仰天して魂もそゞろだつた。彼は生れて以來のはじめての經驗にぶつゝかつたのだつた。この現象は眞實で疑ひやうがなかつた。彼の膝はをのゝき、冷い風が領元から背筋へながれ込むやうに思はれた。彼はそれでも別のペン軸をとり出してそれを手にしたペンが紙に觸れると、それは次のやうに書き出した。

『どうだ判つたらう！　わしはお前の握つてゐるペン軸を折つて見せた。若しお前がわしをそれでも信じないならば、こんなこと位は三番叟だ。併しお前は信じてゐる。わしはお前の心の恐怖を見た。お前の背筋から流れ込む戰慄をも見た。わしはお前にたゞわしの力を見せればそれで足りたのだ。ねえ吾が子よ、わしは部屋の中をほつゝきあるいてテーブルの脚を持ち上げ、自分の子供の腕の中で泣きくづれるやうなセンチメンタルな瓦斯體ではないんだよ。わしは靈だ。有力な靈だ。わしはお前の父の靈だ。しかし此の世にゐたときにお前が懷かしがつてゐたお前の父と云ふ肉體にやどつてゐた頃のあの纖弱い靈魂だつたときとは、千倍も偉大な、千倍も強力な靈魂になつてゐる。

『わしはお前のデスクを粉碎し、お前のテーブルを木端微塵にして了ふことも出來るのだ。わし

を、救ひをもとめて地上の親戚知己の周圍を悲しげに飛びまはるべく來た弱い靈魂だと思ふのは滑稽だ。それは見當違ひだ。お前が想像したり空想したところとはすつかり異ふぞ。わしがお前へ來たのはこの事實についての奧儀を語らんがためなのだ。

『かう云へば、ほかの人間に語つてはならない靈界の神祕を話してくれるとお前は信じてゐるやうだ。ねえ、さうだらう。私はお前の考へを讀むことが出來るのだ。お前は靈に質してたづねるには及ばない。なぜつて靈はお前自身の考をお前が意識するよりも前に知つてゐるからだ。わしは少しも靈界の祕密に就てはお前に漏らすことは出來ない。またどんな靈でも人間には靈界の祕密を漏らすことは出來ないのだ。また人間に話してやつても靈界の祕密を理解するものではないのだ。人間の頭腦ではその神祕はわかるものではないのだ。

『だがお前の手にお前自身のものでない一つの力を現に感じてゐる。そしてこの刹那、お前はそれがわしだと云ふことを知つてゐる。わしは聲でもありありと聞えさうな程のしつかりした書體で、しかも大文字で書いてゐる。わしはお前のペンを通じて話すのだ。わしの書き方が餘りに早いのでペンが紙に引つかゝる。お前は此の奇蹟をたゞあきれて諦視してゐる。

『吾が愛する子よ。わしはお前の父である。わしがお前を訪れるのは、地上に殘した愛する子供

に別れを惜しんで嘆くために來るのではないのである。またお前の方がこの父を求めてゐるから來たのでもないのである。何故つて、お前にはわしは必要でないからだ。わしがお前を愛するのは、わしがお前の父であるのと、わしが靈であるからだ。わしがお前と別れてゐても嘆かないのは、わしはいつでもお前のたましひのうちに、おまへの思想のうちに自由に這入り込むことが出來るからだ。わしはお前の心のどんな奥底の祕密でも知つてゐる。お前の生涯中一度でもお前の心をかすめた考へならわしの知らないものは一つもないのだ。かくの如き靈妙な性能をもつてゐるのが靈の本性である。それをわしはお前に教へずにはゐられないのだ。まだ〳〵教へることが澤山ある。お前は普通の人々よりも多く眞理を知るやうになるだらう。わしはお前がわしの思想で考へ、わしの思想で書くことが出來るやうに教へるつもりだ。

『このまへ、お前のところへ來たときに、わしは稻妻のやうに空中を飛來して、お前の思想の中に坐し、お前の手をもつて書かしめてゐると云つたね。あれは本當だ。それは人間の靈魂の一種の特性であつて數百萬哩を一秒のうちに飛來し、その同じ秒のうちにもとの座に歸る事が出來るのだ。わしは東京にゐる可愛い藝者の頰をちよいと撫でて置いて次の一秒の後にお前の祖父のテーブルの脚のところへ來て音をたてることも出來るのだ。かう云へば如何にも神祕めかしく聞え

るでもあらうが、同時に興味深くもお前は思つてゐる。お前の唇に微笑がのぼつたのをわしは見てゐる。眞理は莊嚴にしてまた愚かしきものである――しかし此れは眞理だ。この事柄についてわしはお前が今迄夢想だにしたことのないことをお前に敎へる。人間の靈は永遠である。靈は時間と空間とを超越してゐる。靈はこの世の肉體を捨てゝ永遠の世界に移され、そこにて神をまのあたりに見るのである。お前はまだ理解し得ないにしても、今このことを知らなければならぬ。何故なら吾らは皆逝かねばならぬからだ。これは始めであり、終りである。吾が子よ、神は實在する。そして人間の靈は永遠で神聖であるのだ。

『今日は、わしは大分お前の頭をこんがらかせたが、それでもわしはわしの知つてゐる事の百萬分の一も話してゐないのだ。わしが話したあとでゆつくり考へ直して見るが好い。お前はお前自身を氣が狂つたと思ふだらう。併し明日までにわしはわしの力の證據を見せよう。お前は今迄夢想だもしなかつた。否、夢想だも出來なかつたたましひの戰きと歡びとを感ずるだらう。

『この手紙を終るに先だつて何故わしがお前のところへ來たか、何故お前の心を用意して置くために祖父のテーブルの脚を動かして佛蘭西の戰死軍人と名乘つてあらはれて以來、半ば馬鹿げた神祕現象をあらはしたか話して置きたいと思ふ。あれはわしであつたのだ。本當にあれはわしで

あつたのだ。靈はテーブルの脚にでも作用することが出來る。やがてその理由と方法とをお前は知るときが來るであらう。

『わしは今お前の父として來、お前の父としてお前の頸のぼんのくぼを引つかんでゐる。それはお前の感ずる通りだ。わしはデスクに對つたお前を支配し、書けとお前に命じたのだ。併しわが子よ、わしは子供に執着して地上を訪れた如きセンチメンタルな靈ではないのだ。わしが來たのはお前を人間にするためなのだ。今よりのち、お前はわしが爲せよと命ずることのほか何も出來ない。今よりのちお前はわしのものである。お前はわしに從ふほかはないのだ。……

『わが愛する子よ、わしがお前に語らうとするところのものを聞け。わしは死んではゐないのだ。わしは靈界に生きてゐる。そして神をまのあたり見たんだよ。いまお前の父は人の靈魂と神とについての眞理を語るために來たのだ。吾が愛する子よ。お前はわしの語る不思議な怪奇な驚異すべき事實の意味をつかんだであらうか。お前の父は許されてお前のところに來り、お前のハートに對して呼びかける。この愚かなる父は地上にながらへてゐる間は生命の本質を知らなかつた。それで今許しを得て自分が生前に吾が愛子に教へることが出來なかつたものをお前に教へるために此處に來たのだ。小さき、心狂へる此の音樂家たりし父は今お前のハートに對して呼びか

ける、そして神の祝福の微笑に就て話すことを許されたのだ。

『さうだ、吾が子よ。此の言葉は全世界に新時代を劃すべき言葉だらう。神の祝福の微笑！　此の言葉は人々をして歡喜の涙に泣き濡れた眼をあげしめ合掌を天に向けて新しい曙の光——神の祝福の微笑——を拜ましめる言葉なのだ。吾が親しき愛する子よ、地上に於ける吾がすべてよ、今、お前の眼は涙にぬれてゐる。泣け、吾が愛子。神はお前のハートの中で微笑したまふであらう。人の聖涙は神の微笑だよ。

『吾が語るところを聞け、吾が子よ。汝のハートを歡びで戰かし、行きてお前の老母にキスを與へよ。彼女の子は神の祝福の微笑について學びつゝあるのだ。汝の兄弟と妹とを抱いて喜べ。何故なら、父は神の祝福の微笑について人類に教へるためにお前のところに訪れたからだ。

『いまお前は泣いてゐる。お前のハートは波打つてゐる。わしはそれを見、それを知る。泣け吾が愛子よ、そしてわしに對して朗かに笑へ。お前のハートを戰かせよ。何故ならいま此の時間はお前の生涯の日のうちで最も偉大なる日であるからだ。

『いま、わしは去らうとしてゐる。わしが去つたあとでお前は疑ふであらう。そしてまた例の憂鬱がお前をとらへるであらう。しかし今よりのちお前は根本に於て幸福をうしなふことはないの

だ。お前は疑ふのも無理はない、生涯にはじめて經驗したこの神祕な事實はなか〳〵理解しにくいことであるからだ。しかしお前は今日を忘れることは出來ないであらう。わしが神の聖なる微笑についてお前に語つたときにお前のハートの底でお前が感じた其の聖悅を忘れることが出來ないであらう。「神の祝福の微笑」――かうお前のハートがお前のうちで囁くとき、お前の眼は歡びにまどろみ、云ふに云へない聖悅で戰くであらう。人間の眼が聖悅でまどろむとき、神は彼らに對して祝福の微笑を投げかけたまふ。

では、今こそ左樣ならだ。

お前の父より』

五

また別の日の靈界通信、彼の手の自動書記は次のやうに綴つた――

『わたしの親しき子よ――

『お前はまた例の氣狂ひ的現象がはじまるだらうかと思つて、溜息をついてお前の机に向つてゐる。わたしはもう此處に來てゐる。お前は書かねばならないのだ。ほらお前は首を掉つた。がお前は此の手が何を書き出すだらうかと興味をもつて待つてゐる。

『實にたゞごとならぬ日のつゞきだつた。夢に夢みる心地なのも無理もない。しかしお前は豫想以上に無關心で割合のんきにしてゐる。それも不思議ではない。何故なら、わたしがお前を守つてゐるからだ。お前はわたしの欲するやうになる。お前が街へ出かけるときに、わたしはお前に隨いて往く。わたしはお前に暗示を與へる、わたしはお前を机の前に坐らす、そして氣を靜めさす。

『お前の聞いたところのことは神祕な事實だ。しかしまだそれはお前の心を完全に捉へてしまふことは出來ない。お前はそんなにも無神論者なんだ。わたしがお前に神の祝福の微笑のことを話したとき、お前の心臟は成程をのゝいたのであつた。併しそれは言葉通りお前の心臟が幾分戰いたのであつてそれ以上のことではなかつた。お前はまだ少しも、お前の經驗した偉大な驚絶すべき摩訶不思議な現象の眞相を理解してはゐないのである。お前がそれを理解し、たましひの深いところで了解するやうになるにはまだ幾らか掛かるであらう。しかしそれはそれとして置かう。何故なら私はお前に話さねばならぬことが澤山あり、吾々は仕事にとりかゝらなければならないからである。……

『あまりに深く考へすぎるな。そしてわたしの邪魔をしてくれるな。わたしはお前の疑問をすべ

て知つてゐる。その疑問は適當な時期が來たときに順次にみんな答へるであらう。わたしは何ものも忘れはしない。わたしは絶對に確實な心性機關を備へてゐる。何ものも吾々の記憶から消滅するものはないのである。一つの疑問に解答すべき適當な時期が來たときには、わたしはその疑問をお前の意識の表面に浮びあがらせるだけである。

『吾々スピリットの力の偉大さよ。いまお前は聽かねばならぬ。しかし忍耐して待て。吾々はまだ長時間仕事をしなければならぬのである。

『先づ第一に、わたしはお前に告げる――テーブルの傾斜現象は眞實である。わたしはお前の顏を、お前の思想を讀む。お前はこの現象に吾々がたづさはることを實に耻かしいことだと思つてゐる。それはお前がこの現象の眞實性を信じないからである。……

『テーブルは踊る！　さうだ。それは出來るのだ。お前はそれを見、それを自分自身で體驗した。テーブルを動かすのは人間の靈魂だ。否、わが伴侶よ、今はわたしはそれをやらない。だがしばらく我慢して呉れ。テーブルを動かすのは靈魂であつて、人體磁氣でも、潛在意識でも、筋肉のはたらきでもない。それは、科學が賢くも研究してさぐり出したところのどんな他の力でもない。お前にテーブルを通じて話したのは死者の靈だ。それは遊戲だ。不可解の遊戲だ。だからそ

れは爲すことを許されるのだ。

『やがて人間は、吾々靈魂たちが肉體の死後生きてをり幸福であることを知らされるやうになるだらう。人間が數人あつまつて一つのテーブルを取捲く、そして兩手をその上に置く。するとテーブルが傾き出して、その脚がコツコツ音を立てる。これは靈魂が來て人間に話しかけるのだ。この現象の眞實性をお前に信ぜしめることは今はまだ困難なやうに感じる。併しお前が、わたしがお前に話さねばならぬだけを一切聽いてしまつたなら、テーブル傾斜現象がたいした現象ではないが、自然な現象であることを悟ると思ふ。

『テーブル傾斜を實驗して見ても現象が起らないことは度々ある。或人はテーブル傾斜現象を起す者を愚劣な馬鹿者だと考へてゐるし、又或る人はそれを實見する機會がないがためにそんなことは事實起らないものであると考へてゐる。併しこの現象はみんな說明し得ることなのだ。やがて、何もかもお前に說明するだらう。併し、幾千と云ふ疑問を一度に出してわしを惱ましてくれるな。わしがすべての疑問に直ぐ答へようとするならば、その說明が明瞭を缺くことになるからだ。……

『人間はやがて神の活在したまふことを知るやうになるだらう。そして吾々靈魂も生きてをり吾

吾と話を交へることが出來ると云ふことも知るやうになるだらう。……

『何故地上の人間が幾十世紀の間も、靈魂の死後存續と云ふことに就て知らされてゐなかつたかと云ふ問題を多くの人々は提出するが、この疑問に、君たちが理解し得る限り出來るだけ明瞭に答へよう。地上の生活の眞意義は生活することであつて、この生活を捨てることではない。地上の人間は生に執着し、死を厭ふ。死は生の抹殺であるからだ。……

『人間は人間であつて、生きられる限り地上で生きねばならない。何故なら人間の生活は地上のそれであつて、そのほかのものであり得ぬのだ。生には法則があり、世界にも法則があり、それは變へることの出來ないものだ。と云ふのはこの法則は神の掟て給へるものだからだ。人間は人生に生活し搖籃に始まつて墓に終るまでの間苦しみ鬪ふ。今迄かくの如くありし如く、これからも常にさうであるだらう。太陽は昇り、太陽は沒する。日光は輝き、心臓は顫へる。數千年このかた人間は生命と人間自身と、光と此の世界と、それから理解し得るあらゆる事物とを研究して來た。人間は生命の法則、地球の軌道、遊星の運動、植物や動物の生命を研究して知つたのである。無限時間を通じて、すべてこれらのことは不變であつた。人間は地上の帝王となり、彼は地的なあらゆる事物を豫告することも出來るやうになつてゐる。何日この病人は死ぬか、又生理的

に何故死ぬかをも知つてゐる。人間は、地上に群がる一切の事物を了解することが出來たのである。たゞ知らないのは『死』とは何か？『生』の前に何があるか？『死』の後に何があるかと云ふことだけだ。これは本來人間のかゝはり知る部分ではなく神の領域である。これらのことは人間には了解を絶した事柄であるから、人間から觀れば神祕に見えるのだ、わたしが內々お前にこれから話さうとするこれらの問題を、お前は眞には決して理解することは出來ないであらう。お前はわたしの言葉を說明するために、お前の人間的な智慧を使ふだらう。そして疑問が起るだらう。何故ならお前は人間であつて、地上世界の法則によつて生きてゐるからだ。お前は地上に生をうけたところの『生命』であつて『地上』の法則に支配されてゐる。お前の理解し得ることはこの地上の法則にかなふことだけであつて、此の法則以外の法則に支配されてゐる事柄を決して知ることは出來ないのだ。（1）人間は『神』を眞には理解することは出來ぬ。何故なら人間は完全圓滿をつかみ得ぬからだ。若し『完全圓滿』に達し得たならば、人間はもう人間ではないであらう。人生は過去の如く今もあり、永劫を通じてさうであつて決して異るものとはならないであらう。

（1）こゝに書かれてゐる『人間』とは肉體人間のことであつて實相人間のことではない。（谷口）

『併し、神が活在したまふこと、及び人間の靈魂が永遠に生き通しであると云ふことをお前は知

る事を許されてゐる。お前は一切を知ることも出來るであらう。何故ならわたしはお前に一切のことを祕密にしないからだ。お前が神祕の存在を信ずることが出來るやうに、奇蹟を信じ、奇蹟を知る事が出來るやうに、わたしは凡ゆる方法を講ずるであらう。併しお前は何事をも本當には知ることは決して出來ないであらう。何故なら、お前は理解することが出來ない事物を決して知ることが出來ないからだ。

『この世界に於て奇蹟が起らず、人間の感覺の世界に於て奇蹟が起ることが出來ないのはこの理由によるのだ。この世界に於ては太陽は地球の四方からは昇らず、月は帽子を冠ることはないであらう。何故ならそんな事は、此世界の法則と人生の目的とに背反するからだ。實在の世界に於ては毎日幾百千の奇蹟が起つてゐるけれども人間はそれを理解することが出來ないのだ。今お前の手にもつたペンでわたしの筆蹟で手紙を書きながらそれを奇蹟だと思つてゐる。それはたしかに一つの奇蹟ではある。お前はたましひの奥深いところではこの奇蹟の存在を信じてゐる。しかしお前がたとひそれを信じ、それが眞實であると自覺してさへも、お前にはそれは不可解のことであるのだ。お前はこれを證明することが出來ぬし、世人はこれに反駁することが出來るのだ。この地上の世界に於ては、そして人間の生活に於ては、如何なる方法によるも反駁することが出

來ないと云ふやうな奇蹟や、人間の智的反省によつて懷疑を喚び起さないやうな奇蹟は起りやうはないのだ。かくの如くあつて、ほかの如くはあり得ないのだ。奇蹟を見ることを許された人間は、同時にまたそれを疑ふことをも許されてゐるのだ。

『眞理と神の微笑と宇宙の數々の神祕を見ることを許されてゐる人間は、同時に、疑ふ力を與へられてゐるか、理解する力を奪はれてゐるかどちらかである。何故なら、肉體の人間は地上だけの生命であり、地上の生命は肉體人的でなければならぬからである。超人間的生命は一個の神である。肉體人的なるものは超人ではあり得ない。何故なら超人となつたらもう肉體人ではないからである。

『お前はこれらの事柄にあらはれてゐる無限大の智慧について何らかの概念を得たであらうか？それとも又この世界はこのやうであつては進步しないと考へて失望したであらうか？世界は大いに進步するであらう。新時代は始まるであらう。神は人類の上に微笑み給ふであらう。併し、すべてこれらはお前の想像するところとは全く異ふ過程によつて來るであらう。何故ならそれは神の御心のうちにあり、お前は神のみこゝろを想像し得ないからだ。

『言葉が走り過ぎた。吾々は哲學者になつてはならないのだつた。わたしはお前に何故奇蹟が起

らないかを、人間の言葉によつて說明して聞かしてあげよう。奇蹟は地上の生活の敵であるからだ。若し人間が朝寢床で眼を覺まして、神の造つた世界構圖と永生と永遠のプログラムとを見得るならば、吾が子よ、お前の想像力で考へよ。何事が果して起るであらうか。誰がそれに耐へ得るであらうか？　人間はそれまでに先づ地上の主でなければならない。彼自身の生活を生きなければならないのだ。地上を自己に服從させなければならないのだ。併しながら若し神が活在し、人間はたゞ神の意志を傀儡のやうに行ふほか何ものでもないと云ふことを人間が知りでもしたならば、人間はその時一ケの蟲に化して了ふであらう。若し、人間が自分が思想も行動もどれ一つとして自分のものであるものはなく、すべては定められてゐて、それ以外には微塵も行動の自由がないと云ふことを知るとしたら、人生は果してどうなるであらうか。人類の歴史を見るに、人間が聰明となるに從つてその知見は益〻廣くなり、人生の法則を益〻深く理解するやうになつてゐるではないか。人間は高くのぼればのぼる程その人格、能力は益〻進歩してゐる。人間は偉大となればなるほど自己自身を一層よく知り、自己の力を自覺する。弱き人間、愚かなる人間ほど無自覺で神祕現象を信じやすいのだ。最も高き敎養ある人間は、それだけ却つて神祕現象に反對する。何故なら彼は神祕を否定するために戰はねばならないし、また戰ひを續けるであらう。容易

に神祕の存在を許さないのが彼の高く進化せるしるしであるからだ。若し實際「神祕現象」と云ふものが起るならば、それは神が彼自身の御業を自分でかき亂してゐるとも云へるであらう。それは最も高く進化せる人間に對する神の爭ひとも云へるであらう。だから愛子よ、安心せよ、お前が心に思つてゐるやうな意味では決して奇蹟は起らない。

『人間とは何ぞや？ と云ふ疑問をお前は起してゐるね。嗚呼！ わが友。わたしがお前の疑問のすべてに答へなければならぬとしたら、いつまでたつてもそれは盡きると云ふことはないであらう。お前は待たねばならないのだ。何故なら、吾々は今はたゞ「テーブル傾斜現象」とその他の物理的心靈現象のことを云つてゐるのだからだ。出來るだけ、今はこの問題だけに限ることにしようね。併し、わたしは「人間とは何ぞや？」の問題にも或る程度まで解明の光を投げることを避けはしない。お前の疑問に答へよう。さすれば、お前がわたしを理解してくれるかどうかゞわかるであらう。

『人間とは神から放射された「理念」である。だから人間は神に屬し「生命の世界」に住するものであつて、彼の信ずるが如くには地上の住者でないのである。併し彼は地上の住者だと信ずるであらう。何故なら彼は神の定めたまひしやうに生を送るやうになつてゐるからである。人性は

永遠に變へることは出來ないと云ふことは全く正しい。何故なら人性の法則は變化すべからざるもので、高級な人間ほど理解し得ないものゝ存在を信じないやうになつてゐるからである。あらゆる疑問の中を最も鋭いメスをもつて突き進み、あらゆる事物の奥儀をさぐり當てる人間は選ばれた人であるのだ。

『神秘を知つたと信ずるところの人間、それは必ずしも偉大なる人間ではない。何故なら、彼必ずしも眞にその神秘を本當に理解したとは云へぬからである。

『智慧貧しき人々は奇蹟を見て、神の存在を知るのである。併し乍ら、彼とて眞に神秘を理解したのではない。神秘は人間の智慧では把むことが出來ぬからである。却つて智慧なき弱き人間はそのために神を容易に信ずることが出來るのである。

『かう云つたからとてわたしは貧しき者は幸ひなるかなと云ふ聖書の言葉を玆に繰返さうとするのだと思つては間違だ……。』

六

マグナツセンの持つたペンは彼自身がどう思はうと頓着なく、遠慮もなく自働して、まがふ方なき亡父の筆蹟を示しつゝその手紙のつゞきを書いて行くのであつた。――

『吾が子よ、吾々は智慧あるものをも賞め讃へないし、愚かなる者をもいやしめようとは思はないのだ。何故なら彼らはすべて斯くあるべくして斯くあるのであるからだ。智慧なき者もやがて智慧を得るであらうし、智慧ある者も嘗ては智慧なき者であつたからだ。かくして人間は愈々高く向上するのだ。智慧に於て優れたるものはその智慧によつて神から與へられたる使命を果し、愛に於てすぐれたる者は、愛によつて神から與へられたる使命を果す。しかし最も智慧に於てすぐれたる者もやがてはまた、最も深き愛を獲得するであらう。また愚かなる者もやがては最上の智慧を獲得するであらう。そしてあらゆる人類は永遠のタイムを通じて等しき高さに向上する。

『お前の問に引きずられて吾々はまだ完全に知つてゐない問題を語り過ぎた。吾々は話をもとへ戻さねばならない。併しそれまでに、自分は云ふことを忘れてゐた一つの事を云ひ足して人間とは何ぞやの問題に結論を與へて置かうと思ふ。吾々の生命それ自身は至聖なものだよ。生命の本源は至聖なものだよ。何故――何處へ――何處より――この偉大なる不可知的本源は、至聖なもの、そして人間の靈もこれと等しく至聖な、無窮のものであるのだ。

『吾々が人を指して偉人だの賢者だのと呼ぶのは其人の神性を指して云ふのではなく、その人が地上に生きてゐる間の彼を指して云ふのだ。すべての人々には神性が宿つてゐる。しかしこれを

感ずる者はすべての人間と云ふ譯には行かない。大智者と雖も、自己に宿つてゐる神性を自覺しないでその地上の生涯を終ることがある。これは彼の運命だ。併し、神がその人の上に微笑みを投げかけ給ふ者のみは自己の神性を感ずることが出來るのだ。若し、大智者の上に神が微笑みを投げかけ給うたならば彼はどうなると思ふ？　彼は靈が神であることを感ずる、併し依然として彼の頭腦には神は理解されないだらう。何故なら、肉體人間の頭腦には神は理解し難きものであるからだ。

『が、ひとたび神が彼の上に微笑みを投げかけ給うたならば、彼はもう決して魂の歡びを失ふことは出來ないのである。この法悅こそ奇蹟でなくて何であらう。汝ら愚かなる人間が奇蹟だなどと考へてゐる現象よりも魂の法悅こそ幾層倍もの深遠な奇蹟であるのだ。

靈媒現象の說明

『が、それはそれとして、今吾々が說明せねばならぬテーブル傾斜現象の問題に移らう。では吾が親しき友よ、吾々はテーブルの脚を動かして、その動かし具合で通信する。すると或る人々は靈魂の存在を信じようとし、或る人々は靈魂の存在を信じまいとする。そして吾々は別に彼らを

信ずるやうに引込まうと努力したりはしないのだ。靈魂の存在を信ずるやうになつてゐる者は、必然的に信ぜねばならぬやうになつてゐるのだ。また此の現象を嘲笑する人も、それは又斯くあるべくして斯くあるので誠に自然のことであるのだ。

『お前たちはイカサマ降靈會の、色々と馬鹿氣た現象の記事をたび／＼讀んだことがあるであらう。それもその筈、地上はあまりに多數の痴者と嘘つきとがゐるからだ。で、お前たちは異常な現象だと云へば常に嘘だと想像するのだ。併し吾々靈魂の爲すところには、必ず一定の目的がある。目的のないことを吾々はすることがないのである。死後の吾々の生命に就て吾々があまり詳しく話さないのは、それを話すと却つてお前達のためにならないほどに、それは極めて興味ある神祕的な存在であるからだ。

『二人の人間がテーブルに向ひ合つて靈魂を招く。だと云つて彼らに靈界の祕事を語らねばならぬ何らの理由もないではないか。何らかの理由で、そのうちの一人が靈魂の存在を信ぜねばならぬならば、吾々のうちの一人が其のテーブルに來るのだ。若しその人が信ぜねばならない運命の人ならば、吾々はどんなことをしてゞも彼を信ぜしめる。……若し自分が何らか正當なる目的があつて、スキンダーゲードのテーブルの脚にナポレオンの靈魂と稱して出現する必要があるなら

ばナポレオンとも顯はれよう。またニユーカツスルのテーブルの脚にレオニダスの靈魂と稱して出現する必要があるならばレオニダスとも顯はれよう。吾々は何でもするし、どんなことでも工夫することが出來るのだ。併し、吾々は決して惡事をすることは出來ない。吾々はたゞ善事のみを知る。吾々のすべての企て、すべての仕事はたゞ神の目的に順ふにある。この言葉はお前には不可解とも聞えよう。併し吾々は續けねばならない。何故ならお前はそんなにも好い氣分でゐるからだ。今お前の靜まつた心を搔き亂すものとては何もない。

『吾々はテーブルの脚に入り、薄明の中でごと〳〵と音を立てゝわざと不正確な文字を綴つて見せたり、外國語を綴つて見せたりする。すると、愛すべき人間は慄へながら、吾々に最もよく解ると思へる其の外國語で尋ねかける。本當は何國語を使つてもそんなことはどうでも好いのだと云ふことを知るべきだつたであらう。吾々は彼らの念を讀む。彼等の生命を見る。吾々は彼らの全生命を通じて彼らの思想を讀み取るのだ。吾々は凡ゆる國語で思浮べた、言葉に顯はさない問に對しても答へる事が出來るのだ。吾々は何も間違つた綴の文字しか知らないのではないのだ。吾々はまた疲れてもゐないし、懶くなつてもゐないのだ。吾々は常に愉快だ。しようと思へばテーブルを粉々に粉碎することも出來れば、壁を叩きわることも出來る。吾々は不透明な耐火性の

壁でも貫いて自由に出入することも出來るのだ。これが眞理だ。心靈現象に眞理があるならば、これを措いてほかには無いのだ。

『併し、吾々が心靈現象で芝居を演つて見せるとき、吾々は吾々の法則を守るのである。否、吾の法則ではない、何故なら、前に云つたことのあるやうに吾々は吾々に與へられたる拒むことの出來ない吾々の本性に順ふほかはないからだ。吾々が爲すところのすべての行爲はいち〳〵目的があるのだ。俺が最初ボーンホルムの一俳優の家庭でテーブル傾斜現象を起して、死んだデンマルク詩人の靈魂として顯はれたのは、そこに出席してゐた一人の人間の心に反響を呼び起し、その人間があの詩人の心を動かし、やがてあの詩人がお前を訪問してテーブル傾斜現象を實驗して、フランスの戰死軍人の靈と名乘つてテーブルの脚から通信して見せるための準備行動であつたのだ。

『吾々が不正確な文字を綴つたり、鹿爪らしい文句を書いたりしたのも亦目的があつてのことであるのだ。それはお前達の內心に求めてゐることであるから、吾々はお前達にさうして見せた迄のことだ。吾々は常にお前達の求めてゐる通りに顯はれるかお前達が理解を受けるやうに顯はれるかするのだ。お前は知らねばならぬ――お前が眞に必要もない問ひを問ふときお前は神託めい

た答を受けるだらう。お前たちが吾々に豫言を求める時には吾々は如何にも神祕めかしく樣態ぶつて出鱈目を答へるだらう。併し、吾々は決してお前たちを傷けはしないのだ。吾々はお前たちの毒になるやうなことは何も云はないのだ。吾々はお前たちのことを充分理解んでやつてゐる。併し、テーブルの脚は如何なる場合にも吾々が人間に教へてはならない祕密を漏らしはしないのだ。

『兎も角吾々は續けねばならない。何故なら、吾々は心靈現象に就て語るべきことが澤山あるからだ。吾々は此の世界を惑はしてゐる各種の心靈現象に就て大急ぎで說明して行かう。さうだ、それらの心靈現象は實際この世界を惑はすために工夫せられたものなのだ。

心靈現象の通有性

『肉體滅後の人間の存在に就ては、疑ふものは尙この世に絶えないであらう。何故なら、心靈現象は起るが、解釋のしやうによつては靈魂存在の確證とはなり得ないからである。吾々は「卓子傾斜現象」に於てテーブルの脚で通信を始めて靈界の音づれを現實界の人々に送る。併し同時に或る點で、疑へば疑へるやうな罅隙を造つてあるのである。お前が「心靈現象」を主題にした出

版物を繙いて、その書物の始から終までを仔細に檢査して見るならば、私の云ふことが本當だと云ふことが判つて來るであらう。ギヤツプは極めて小さいこともあるが必ず其の何處かに隙があつて、此處が詐術かも知れぬと疑へば疑へるであらうし、一種の潛在意識のいたづらだとも解釋出來るであらうし、ヒステリーの狂的發作だとも云ふことが出來るであらう。

『されば、全世界をして信ぜしめるに足る、太陽のやうに明瞭な心靈現象と云ふものは一つも無いのである。このことは何時までたつても本當である。お前も心靈現象の本を少しは讀んだことがあるであらう。その記錄は必ず贋ひ物らしくして、本當の眞理を語つてゐる部分さへも、贋ひものだと證明することが出來るのが殆ど常である。わたしは今迄の心靈現象に未だ嘗て靈魂が出現しなかつたと云はうとするのではない。何故なら私は全智全能の者ではないからだ。私は全き眞理を語るが爲に此處に來たのではないのである。全き眞理は何人も理解することが出來ぬであらうから。私は單にお前の理解し得ることだけを語る。それ以上を語ることは許されない。と云ふのはお前の理解し得る以上のことはお前にとつて近付くを許されない神祕であるからである。人間の靈魂は全智全能の「神」の縮圖となつて空間を飛翔してゐるのではない。人間の靈魂は畢竟「人間の靈魂」でしかないのである。それは、肉體に宿つてゐた時と同じやうな個性を有つてゐ

る。それは私の知つてゐる限りに於て惡ではない、それは神を知つてゐる。神を知つてゐるところの靈界の吾々は或る點では地上の最も慧しき賢者よりも賢者である。併し、靈界の住者も人間の肉體に憑かるときには、其の作用として肉體人間性を有つに到るのであつて、その靈魂が自分自身の肉體のうちに宿つてゐたときと同樣以上のことは出來ないのである。

『だから、靈魂には色々ある。(かく表現することを許せ。)そして色々不規則な心靈現象を起すのだ。しかし無目的な現象は何一つとして起らないであらう。何故ならそれは起る可能性がないからである。お前は無邪氣な靈界の住者が何か異常現象を起して地上の人間を驚かさうとするのだと思ふかも知れぬが、しかしお前は直ぐ其の異常現象が打消されるのであることを知らねばならない。何故なら吾々は萬事を承知した上でないと心靈現象のゲームに加はらないからである。私として、かう云ふのは心苦しいが、私は今思ひ切つて云はねばならない。あまりに此頃は價値のない降靈現象が多すぎる――靈魂の物質化現象や、最も愚昧なる心理學的說明を附したる讀心術や、催眠術などが簇出するが、無論、靈魂の物質化は本當に物質化したのではない。そして、讀心術や催眠術は心理學の說明するやうな現象としては存在しないんだよ。

『お前は今驚いてゐる。――お前はこの問題に非常に興味をもつてゐるね。愛する吾が子よ、も

つと驚け、いくらでも驚かすぞ。わたしは生前にお前に靈的訓練を與へることを怠つてゐた。わたしは生前には靈を知らぬ愚かなる者であつた。いま私はそのつぐなひにお前に靈的訓練を與へようとして來たのである。——

靈媒現象の解說

『愛する吾が子よ。では、靈媒とは何であるかを說明しよう。靈媒——から私が書くときお前の心が、妙に紛糾かつた考へで一ぱいになつてゐることを私は感ずる。觀察者の誤解、靈媒の詐り、ヒステリー性の發作——こんな考へでお前の心が一ぱいになつてゐるのは無理ではない。靈媒のうちにはずゐぶんニセ物がまじつてゐる。眞性の意味に於て「靈媒」なるものはないのである。其處には完全なる憑依と云ふものはない。此の現象の大多數は、潛在意識中の觀念と、觀察者の誤解と、靈媒の自己欺瞞との混合物である。吾々「靈界の住者」自身はかくの如きものには超然としてゐるのである。吾々は人間のすることは人間にまかせて、其の現象を徹底的に支持しようとは思はないのである。吾々靈界の住者は心靈現象に於て、人間の心理的遊戲の仲間入りをするのであつて、そこに吾々の特殊の場面があるのである。

『例へば、お前が、全然赤の他人を靈媒として、死靈の憑り臺とする場合を考へて見よう。お前は一種の莊嚴な態度で、また幾分馬鹿々々しい態度で靈媒に臨むであらう。それを見て吾々靈魂たちは微笑せざるを得ないのである。若しさうでなかつたならば吾々靈魂たちは心靈現象全體に就て責任を負はねばならないであらう。が吾々はこの問題に就てはあまり興味を感じないし、またこの問題を嘲笑し去ることによつて多數の人間を悲しますことは本當でないから、あまりに深く立入つて批判しないことにする。

『さて、吾々靈界の住者が靈媒を扱ふのは、吾々が「テーブル傾斜現象」を起すのと同じやうにしてゞある。何か人間たちが新しい工夫を考案するならば、吾々は「人間はなか／＼味をやるな」と思つて、その遊戯に加はるのである。靈媒は普通所謂「恍惚狀態」と云はれてゐるところの失神狀態に入るとき、卓子傾斜現象の際のテーブルの性質を發揮して吳れる。併し「トランス狀態」は別に神聖な現象ではないのである。この狀態は人間自身が、みづからを欺くために、否みづからの信念を强めるために、創作した一種の狀態であるのである。

『お前自身を見よ。お前は靈媒ではない。しかし見よ、お前は明るい光の中に机の前に坐つて、別に何らのトランス狀態のやうなヒステリー的徴候を示さずに、お前の手で私の言葉を書いてゐ

るではないか。吾々は此の現象を、もつと後に詳しく説明しようと思ふ。それは極めて興味が深い。こゝには單に、靈界通信を送るべき眞に必要を感ずるならば、どんな種類の巫山戯た眞似も「トランス狀態」も、うす暗がりも不要だと云ふことを大急ぎで云ふにとゞめる。すべて斯くの如きものは過去の幽靈譚の遺物でしかないのである。

「お前たちは、靈媒に對して問を發する。靈媒はテーブル傾斜現象のテーブルの脚であるかのやうに無意識で答へる。靈媒は、吾々が彼に囁くとほりの言葉を話さねばならない。それはテーブルの叩音と同じやうに、またそれは今お前が私の言葉を書いてゐるのと同じやうにである。すべてかゝる現象が起るのは、吾々靈界の住者が、靈媒の意識の中に、或はテーブルの脚の中に、或はお前の後頭部の中に吾々の思念を送るからである。が、テーブルの脚が想念を混同して混雜した合圖を鳴らす。それと同じやうに靈媒も混雜したことを喋るのである。また室内の中を漂うてゐる意識の波の中に在るところの本來判り切つた事柄を喋るに過ぎないのである。何故なら吾々は「無」から「有」を創造することは出來ないからである。若し吾々が人間の心のうちに想念を喚起することが出來ない時には、テーブルの脚によつても靈媒によつても、はたまたお前の手によつても吾々は思想を傳へることが出來ないのである。肉體を脱した人間の靈魂と云ふものは畢

竟かくの如き性質のものであるのだ。

『なほ詳しくこのことを說明しよう。假りに不幸な英國婦人が自分の息子が歐洲大戰で死んだので、その靈魂を或る靈媒に招靈して問答した場合を例にあげて考へて見よう。靈媒は、此の母が知つてゐる通りの息子をあらはして答へる。また此の母のみが知つてゐて、ほかの人がどうしても知る筈のない事實を話したとする。これは奇蹟であつた。だが、害のない奇蹟である。何故なら、これは科學的に說明出來る精神感應現象で、奇蹟でもなんでもないからである。併し、その母にとつては實に奇蹟であつたのだ。彼女は泣く。しかしこの時、神は彼女の情に祝福の微笑を投げかけ給ふのだ。

『この現象の眞相を語れば畢竟かくの如きものである。神が此の母親に祝福の微笑を投げかけ給うた如く、今後幾百萬の他の母親にも祝福の微笑を投げかけ給ふであらう。方法は複雜してゐるが、さうであるほかはないのだ。また何時かわたしはお前の手によつて、お前の知らない、決して知る筈がない事件をお前の母親へ宛てた手紙で書くであらう。その時、お前の母親はその胸に神の祝福の微笑を感ずるであらう。併し科學はその現象を一笑に附するか、遠感現象だと說明するであらう。かくの如くあり、かくの如くあるさだめであるのだ。

『では、吾々靈界の住者をして、靈媒現象の機構を說明せしめよ。母親は靈媒に對つて、死んだ自分の子供を招靈して尋ねる――例へば、どんな狀態でゐるか、何處にゐるか、周圍に何が見えるかと。幾十百の母親はみんな此れと同じやうなことを尋ねる。すると、靈界の住者の一人が靈媒の「思想の座」に入り込んで、そしてそれに對する答へを與へる。テーブルで答へても、お前の自動書記の手で答へても同じ過程である。

『此の母親は、靈界に就て、また神について、何らの知識も有つてゐないであらう。靈媒自身も何も知らないであらう。お前たちも亦どれほども賢くはないであらう。そこで吾々「靈界の住者」は何をなさうとするのであらうか？　吾々はたゞ一つの眞理――神の活在ましますこと、死者の靈の生きてゐること、そして彼らは幸福であること、――この一つの眞理のみを語らうとするのである。併し、母親はもつと色々のことを聞かせて欲しいのである。彼女の心に、愛する吾が子の狀態を知りたいと云ふ願望があらはれる。その願望が靈媒の心に映る。靈媒の思想の波が混線する――恐らく靈媒は心の單純な無智な人であるかも知れない。お前たちの方でも靈媒に對する正しい取扱ひ方がわからない。靈媒から出る答は勢ひ混線したものとならざるを得ないのである。そこで靈媒から出る答はナンセンスとなる。此のナンセンスには死者の靈魂の云ひさうな言

葉と、母親の思ひ煩ひと、靈媒の無智とがこぐらかつてゐるのである。若し母親がお前を靈媒として尋ねたのであつたならば、お前から出る答は全然ちがつたものになつてゐたであらう。吾々はいま暫くのあひだ其れについて話さねばならない。

かくの如きものが吾々の靈魂の性質なのだ。前にも云つたやうに私はお前の思想のなかに入り込む。或る場合はまた、靈媒の思想の中に入り込む。しかし靈魂は全能の神ではないのであるから、吾々は「無」からは何物をも造り出すことは出來ないのである。若しお前が心の底ふかく或る想念を強く喚起するならば、私もその通りの想念を想ふほかはないのである。若し靈媒が或る想念を思ひ起すならば、その思想の中に入り込んだ吾々靈魂も其の通り想ふほかはないのである。そこで母親に對して答へんとする靈魂の答は、靈魂自身の想念と、靈媒自身の想念とが、混線せざるを得ないのである。それが靈魂の性質なんだよ。吾々は全然自分獨特の思想だけを靈媒を通じて表現することは出來ないんだよ。

「では、吾々自身に就て、お前に書かせてゐる此の自働書記現象について語らうと思ふ。かくの如くすることによつて、私がお前に書かせようとした心靈現象の最後の完全な說明に達することが出來るであらう。

『私はたとへば空を一閃するところの稲妻のやうに、お前に來つて、お前の思想の中に自分自身を置いたのである。かうして私はお前の手をもつて手紙を書くことが出來る。これは死者の靈魂が現世の人に對して話すために採り得る方法のうち最も完全な最も美しき方法であるのである。

『お前は私の靈の靈である、吾々のたましひは相互に共通の理解をもつてゐる。私はお前の父であり、お前は私の子であるのだ。だから、お前のたましひの底に喚起されるすべての想念は、わが想念にピツタリしてゐる。お前の魂の内奥のリズムはわが魂の内奥のリズムにピツタリと合ふのだ。私は自分の魂の許に歸るかの如くお前の許に來ることが出來るのである。お前は私がお前の靈魂であるかの如く、私の聲で話すことが出來るのである。

『しかしお前は肉體の人間であり、私は靈魂である。肉體の人間は私を理解せず、私は肉體の人間を變化することは出來ない。だから、私がお前に話すときには私の方から肉體の人間に近い性質を眞似ねばならないのだ。お前の方を聖化することは出來ないんだからな。既に靈魂の人間は聖化してゐるにしても、肉體の人間は要するに肉體の人間なんだからな。

『併し、聽け。長き時經てお前はつひに私のものとなつたのだ。何のために？　如何にして？　と云ふことはまた後の機會に讓る。今はそれを語るに適當な時機でないのだ。併しお前は私のも

いのだと云ふことをお前も感ずるであらう。どこへお前が行かうとも、私がお前の近くにゐるとき、私がお前に何かを語りたいとき、それをお前は感ずることが出來るであらう。お前がペンを取上げるときお前の疑惑は消える。ペンが自働し出すときお前は自分自身が書くのでないことを自覺してゐる。何故ならお前は、お前の手が書きつゝあることについて何らの豫想も有つてゐないんだからな。この手紙が何の目的で書かれるかお前はちつとも知らないんだからな。併しお前の手は私の考へを書く。文字が書かれてしまつてから、はじめてお前はその文字の意味がわかるのだ。お前自身の書きものと、私が書かせるものとの區別は其處にあるのだ。もしお前自身が此の手紙を書いてゐるのであれば、お前は文句をあらかじめ心に豫想する。併し、書き手が私である場合には、お前はほんの一瞬間待つてゐるだけで好いのである――何故なら私の思想がお前に感應してゐるからである。

『何と云ふ素晴しさ。お前が今日筆を擱いたとき、お前は非常な驚きに滿たされるであらう。お前は絶大の驚異をもつて今書きながら見てゐるこの文句を讀み返すであらう。これはお前にとつては全く新しい創作だ。何故なら書かれてゐることはお前の思想ではなく、私自身の思想であるからだ。

『わが語るところは眞實で、また極めて明瞭である。お前が私の言葉を書きつゝある間に、若し、お前が本來私の思想でないことを思ひ浮べるならば、お前の手は停止する。そして私はその思想を肯定するか拒絶するかするのである。お前は覺えてゐるだらう。先刻私が「神」のことをお前に書いた、するとお前は非常に感動した。併しお前は外に走る自動車の音を聞いたとき、ふと赤い消防用自動車のことを思ひ浮べた。その時は私は書くことを暫くやめてゐたのである。お前の意識の中から自動車のことを逐ひ出して了はない間は、私は「神」のことを書くことは出來なかつたのである。併し若し、私が驚異すべき事項に筆を走らせたときお前に疑惑が雲の如く湧き起るならば、私はすぐその問に答へ得るし、その疑惑に就て語ることが出來るのである。

『お前はヒステリツクな感受性を有つてゐず、また靈媒的特性もない。だから、私がお前の思想を誘導し啓發することが出來ない事柄をお前に説明することは出來ないのである。靈魂の作用とはかくの如きものであつて、人間たちは今迄理解するところなく靈魂と云ふものを推察してゐたのである。

『わが親しき子よ、吾が書くところは信じ難いであらう。誰もまだ、吾々の此の經驗が如何に特異のものであるかを知つてはゐないのだ。が、この點に於て私とお前とは少しばかり知ることを

許されたのだ。お前は詩人である。私は生前「氣狂ひ音樂家」であつた。無數の可能性が自分のうちには宿つてゐる。が、其の可能性のどの一つも生前には完全に發達せしめることが出來たかつた。何故なら私は愛する妻と四人の可愛い子供達の生計を支へるために學校と飜譯仕事に沒頭してゐなければならなかつたからである。わがたましひは落ち着く暇もなく、本來藝術家で音樂家で、詩人であつたわが生活は、打ち碎かれた。私は駄作を奏でてゐたが、魂にやどつてゐる高貴なる憧憬れは、わたしの生活を愈ゝにがいものにした。わが愛する子よ、お前もまた詩人である、お前のたましひは音樂で滿ちてゐる。お前のうちには無數の可能性が宿つてゐる。しかしどの一つも本物にはなつてゐないし、完全に發達させてゐないのだ。が今、私はお前を摑んだ――今後すべては變るであらう。

『わが靈性はお前に來り、お前のたましひの中に今座を占める。私はお前と偕に書くことが出來るのである。お前は詩人であり、無數の可能性をもつてゐるからだ。私はお前の才能を高め、その潛在能力を强めることが出來るのだ。前にも云つたやうに吾々は全能の神ではないから、「無」より「有」を創造することは出來ないけれども、お前のたましひのうちに宿してゐる、微笑を、全心全靈で爆發さすことは出來るのだ。お前のたましひに宿してゐる詩想を詩にまで組み立てさ

すことは出來るのだ。妙に感ずるかも知れないが、これは本當だ。やがて私はお前に此れを證明するであらう。

『わが愛する子よ。私がお前の手を支配して「神の祝福の微笑」に就て書きはじめるとき、お前のたましひは打ちふるへ、さめ〲と啼泣する。それは、私がお前のたましひを搔きたてゝそれをしめやかに打ち顫はすからである。お前は何とも云へぬたましひの法悅で滿たされる。そして涙で瞳を埋めながら、未だ甞て豫想もしたこともない法悅味を書くのである。若しお前のたましひのうちに此の法悅が搔きたてられなかつたら、この法悅を斯くの如く書きあらはすことは出來ないであらう。若し、「神」が汝の上に祝福の微笑を投げかけたまはなかつたならば、お前のたましひはこんなに戰かず、お前の眼はこんなに涙で掩はれることはなかつたであらう。神の祝福――わが子よ、これが始めであり終りである。吾々は「神の祝福」を全世界に告げなければならぬ。氣づかれないやうに、徐々に、吾々は全地上に次の如き福音を囁きかける――わが子よ、今わたしがお前にそれを囁きかけてゐるかのやうに。

『すべての人類よ、神は活在したまふ。汝も亦神の祝福の微笑を見るであらう。

『母よ。涙に泣きぬれたあなたの眼をあげよ。あなたの子は死んではゐないのだ。彼は今も生き

てゐて幸福である。

『妻よ、良人を失ひし者よ。汝の良人は、今も尙生きてゐる、そして靈界にて神を知れるぞ！

『愛人を失ひて嘆く娘よ、汝の愛人は死んではゐないのだ。神は彼の上に祝福の微笑を投げかけてゐられる！

『――この驚くべき福音を全世界につたへることは吾が來りし使命である。この福音は全世界にひろがるであらう――かくの如くして、地上に新しき時代は來るのだ。わが子よ、わがペンに翼を與へよ。わたしは天翔つて全世界に此の輝く眞理を宣べ傳へたい――神は活在ましますのだ、生きとし生けるものにして死するものは一つとしてないのだ。みんな神を見る日が來るのだ。若きも、老いたるも、善なるも、惡しきも、みんな神の祝福の微笑を見る日が來るのだ。

『わが子よ、もう私は往くよ。お前のたましひの歡びと微笑とを私に投げかけよ。お前のたましひが微笑するとき、お前の眼は泪で曇り、神の祝福の微笑がお前の上に輝くであらう。

では、さやうなら。　　汝の父より。』

此處まで書いてペンを有つてゐたマグナッセンの手はハタと止つた。

彼は自分の手が不思議に何者かに動かされてから書きつゝある間に、自分の魂が不思議に法悦

の歡びで滿たされるのを感じた。泪がこみ上げてきて流れとなつて頰を傳ふ。『神の祝福の微笑』と云ふ父の聲があり〳〵と耳許で囁くやうな氣がするのだつた。

マグナツセンは起ち上つた。そして涙をふいて、部屋の中を見廻した。燈光が原稿紙の上に落ちて、ストーヴの中で石炭が音をたてゝゐた。何も別に變つてゐなかつた。壁に沿うて書架には書物がズラリと竝んでゐて、机の上の瓶花は紅い花の色を壁の面に反映させてゐた。彼が起ち上つた椅子は依然として元の位置にあつた。彼は再び腰をかけたが、また起ち上つた。

『神！　神はある。神の祝福の微笑を受けよ』――かう彼は呟かずにはゐられなかつた。彼は顏をあげて、窓から外の夜の暗さを刺し透すかのやうに眺めてゐた。

『神はある、神はある。これをすべての人々に宣べ傳へよ』まだ何者かゞ彼の魂の中で囁いてゐるやうに思はれた。

『だが、』と彼は思つた――『こんな事が果してほかの人たちに理解出來るであらうか。否々！　世界幾千萬の人々が神を信じてゐるではないか。何もこれは新しい特殊のことではないのだ。自分だけが、今まで神を知らなかつたに過ぎないのだ。が、さうではない。若し誰か神を知つてゐるものがあれば、自分だつて知つてゐたに相違ないのだ。誰かゞ知り得るものは神祕だと云ふ事

は出來ないではないか。では、すべての人間もまた神を知り得るに相違ないのだ。

彼は自分の考へてゐることが支離滅裂になつて來たことを感じた。彼はまた眼を轉じて窓外の暗黑をしばらく凝視してゐたが、また机の上を見やつた。其處には現在この自分の手で、亡父が書いた筆蹟が載つてゐた。彼はまた椅子に腰をおろして持つともなしにペンを持つた。またペンは自働して亡父の筆蹟で書いた――『愛する吾が子よ、神は今、汝に祝福の微笑を送りたまふ。』彼はまた泣けて來た。法悅の涙で一杯にぬれた顏を蔽ひながら彼は長い間すゝり泣いてゐた。神は果してあるか。今後、彼にどんな事件が待つてゐるであらう。

七

其夜はそのまゝ眠りについたが、曉方になつてマグナツセンは眼を覺ました。彼はそれ切り眠ることが出來なかつた。昨日の出來事が色々と思ひ出される。憂鬱が彼の心を捉へる。彼は眠らうと思つて電燈を消して、ベッドの上を轉輾した。そのうちに、ひとりでに深い息が數回出たかと思ふと、今度は非常に短い息が出て來る。と思ふと、また深い息が出て來る。息を深々としてゐるうちに、彼は搖籃の中で搖られながら、うと〳〵眠りに誘ひ込まれるやうな氣持になつた。と、不思議にも心の奥の方から、奥の〳〵實に遙かなるところから、靜かな〳〵音樂の調べが聞

えて來るやうな氣がするのだ。實に靜かな遙かなる處から聞えて來る調音だ。が、それは確かにどこかで聞き覺えがある。それは耳で聞えると云ふよりも心の中で囁く聲のやうに聞えるのだ。マグナツセンにとつては此の優しい、靜かなメロディが自分の寢息と一緒にリズムを合はせながら奏でられてゐるのを知つた。

と、その靜かな調音が搖籃の中に眠つてゐる自分を愛慰すために歌つてゐる父の聲に聞えて來た――『私はお前の父だ』と。『私はお前と倶にゐるのだ。私はお前の思想の中にゐるのだ。聞けわが子よ、愛する子よ、私はお前をかうして搖つてゐるのだ、愛慰してゐるのだ。私はお前を神樣に引合はしてあげるのだ。私はお前を靜かに〳〵愛慰しながら、神さまのみ許へ伴れて行くのだ。お聞き、お前には聞えるだらう。私の靜かに歌ふ聲が。私はお前を伴れて行くよ、遙かな輝くお國へ伴れて行くよ。お出で、もつとお出で。歌つてあげるよ、搖つてあげるよ。もう神樣の國の森まで來たよ、此處は神樣のお國の森、神樣がお前を微笑んで見てゐられるよ。』

こんな風に、マグナツセンは夢ともなく現ともなく、自分自身の深い息に調子を合はした子守歌のやうに優しい父の言葉を聞くのであつた――『おいで、いとし子よ。神の國の森を見せてあげよう。その色彩の麗はしいこと、光の國だよ。靜かに搖つてゐるのは私だよ、私の歌をお聽き

よ。お眠り、お眠りよ、吾が愛し兒よ。』

父の歌聲が次第に低く靜かに聞えてゐるうちにマグナツセンの肉體は本當に眠つてしまつた。併し彼の魂は起きてゐるのか父の聲を依然として聞いてゐるのだ。その調音が丁度搖籃に入れられて搖られるやうに彼の魂を搖さぶるのだつた。マグナツセンの眼には幼年の頃眠りにくい晩、父親に愛慰して貰つて居たときに見たのと同じやうな星の光が空にちらばつてゐるのが見えはじめた。あゝその美しい空の色、星の瞬き、それは幼年の頃見た星よりもズツト數が多いやうに思はれた。

翌朝眼を覺ますと、暫く彼は何事も忘れて了つてゐた。心が爽かで、氣分が輕かつた。彼は起きると顏を剃るために姿見に向つて微笑した。とポツカリと昨夜、靈交のあつた父の聲の幻覺の事を思ひ出した。それは確かに幻覺であつた。こんな幻覺にまたしても惱まされるのであるかと思ふと彼は自分ながらウンザリした。

『スツカリ一切を忘れよう！』から決心して彼は洋服に着かへて朝食にとりかゝつた。彼は朝食を終へて食後の珈琲を飲んだ。と、彼の唇に覺えず上つた歌があつた。『オヤ！』と彼は思つた。それは何の歌だつたらう。彼の知らない歌であつた。併し何だか聞いたことのある歌のやうな氣

もするのだ。さうだ、それは父の聲で歌ふ子守歌であつた。彼は自分の唇に父の聲で歌ふ子守歌が出るのが不思議であつた。彼は今まで一度もその子守歌を歌つたことがなかつたのだ。

マグナツセンの父は非常に豐富な音樂の天分を有つてゐたが、不遇に終つた素人音樂家であつた。マグナツセンも幾分音樂の天分を承け繼いでゐたかも知れない。彼は自分の唇に偶然のぼつた此の子守歌が非常に妙なる美しい曲のやうに感ぜられたので、それをピアノで彈いて見たいと思つた。彼はその生涯のうち、一月だけピアノを習つたことがあつた。それ以來ピアノと云ふものを習つたことはなく、ヴアイオリンの方を習つたのであつた。それで彼はピアノをギゴチない手つきで右手は二本の指を一時に抑へて彈くことは出來た。左手はカラキシ駄目で、時々調子はづれに低音を混ぜて見るだけで滿足してゐたのだつた。

が、今、マグナツセンがピアノの鍵盤の上に指をやつて、子守歌を彈いて見ようと云ふ氣になつたとき、突然、彼の指は痙攣するやうに自働し出した。それは彼の手が自働し出して父の筆蹟で靈界通信を書いたときと同じやうに、自分ならざる何者かの力で自分の手が動いてピアノの鍵盤を叩くのであつた。驚くべし、彼の指先は同時に少くとも八個の異なる鍵盤を叩いて調子が少しも亂れないのであつた。不思議なる力が彼の手を操つて、彼の彈かうとした子守歌を（彼が

少しも演奏法も樂譜も知らないその子守歌を）美事に即座に彈いて了つた。

マグナツセンは自分自身を疑つた、心が紛糾つて來る。彼の額から汗がにじんで來た。彼はもう一度彈けるかどうかと疑ひながら、再び指が鍵盤に觸れた。と、たちまち其の指がスラスラと鍵盤の上を巧みに走つて、同じ曲を同じ巧妙さで演奏した。

彼は自分ながら感動した。その感動は、彼が嘗て自分の手で自働して父の筆蹟で父からの第一回目の手紙を書き出したときよりも深かつた。何事が起つたのだ。實に奇蹟だ。これがヒステリーの發作と云へるか、狂氣と云へるか、潛在意識の作用と云へるか、ギゴチなく右手だけの二本の指でポツリ〱しか彈けなかつた未熟な者の硬ばつた指先だのに、たゞの潛在意識がこんなに巧妙な演奏法をさすことが出來るだらうか……

彼はピアノの前に腰をおろして兩手の指を鍵盤に觸れてゐると自分の魂の底のうちに不思議な優しい和やかな愛の心が――嘗て死し、今、彼の指先を操つてゐてくれる父に對する憧憬の心が湧き起つて來た。父！　父が生きてゐる、父が吾がうちにいます。吾が父がうちにいます。吾が父よ！

と、何と云ふ不思議なことだらう、マグナツセンの指先は愈々活潑にピアノの鍵盤の上を走り

出した。もう子守歌だけではない。あらゆる複雑な樂曲が不思議な巧妙さで奏でられるのだ。彼は自分の指先が演奏する其の曲の美しさに醉うて了つた。今迄よう使はなかつた左手が巧妙に低音を操る！ 右手は奇蹟のやうに神速に右に左に飛びかひながら鍵盤を叩く。彼自身の全然知らない曲もあれば、どこかで聞いて覺えてゐる曲もある。ワグネルが出て來る、ベートーベンが出て來る、グリユツクがある、プツティニーがある。それを自分の指先がこんなにも巧妙に奏でるとは！

マグナツセンは鍵盤の上を巧妙に走る自分の指先の中に父を感じた。父だ！ 彼の眼は泣けて來た。指はそれにも拘らず、益〻激しく鍵盤の上を、あちらより此方へ、こちらより彼方へ、或は急霰のやうに、或は大河の淀みのやうに、高音に、低音に、その交錯に、巧妙きはまる樂音が奏で出される。おゝ！ それは父の靈魂が彼に宿つて彈く演奏であつた。名演奏家であつた父が自分の指先で演奏する奇蹟を、マグナツセンは、まるで客觀的に聽者となつて聽いてゐた。

その日以來、彼はたび〳〵ピアノの前に惹付けられるやうに坐つた。坐ると不思議な力が彼の指先から湧き出して來て、彼自身何を彈くのか自覺しないのに指先がズン〳〵自働して、巧妙な演奏が始まるのであつた。彼は自分の指先の演奏する曲目のピアノの樂譜を殆ど知らなかつた。

併し、彼の奏でる諧調が完全に樂譜に合つたものであることは、自身がヴアイオリンの演奏者であり、音樂の知識と耳とを充分有つてゐる彼には疑ひもなくハツキリ知られたのであつた。

　マグナツセンは音樂の聽き手としては可成り豐富な素養を備へてゐたが、これ迄彼が辛うじて彈き得た曲目は英國の或るセンチメンタルな小曲と、プツテイニーの『マダム・バターフライ』の或る部分と、或る簡單なダンスの數曲とだけであつた。これらの曲はいづれも初步の彈き手に面倒な低音部は二三單純に指を動かせば好いものばかりであつた。これ以上に彼は殆どどんなピアノの曲も演奏し得ないのであつた。彼はまたピアノの樂譜を見てその樂譜の通りに彈くことなどは決して思ひもよらなかつた。耳で覺えてゐる音の高低に從つて好い加減に鍵盤の上に指を走らせて、それに似た調子を出して見ることが出來るのが彼にとつて關の山だつた。彼にとつては上下に列んでゐる高音譜と低音譜を一度に讀むことが出來るピアニストの離れ技に對しては唯もう自分の及ばない奇蹟のやうな感じがしてゐた位だつた。

　ところが、父の靈魂が彼に來て、彼の指を自由に操るやうになつてからは、彼の指は奇蹟を演じ始めたのである。彼は自分だけの自覺では尙指が鯱鉾張つて動き難い感じがしてゐたが、實際にピアノの鍵盤に向へば自由自在に滑かな指の曲折が出來て、未だ嘗て聽いたことのない複雜な

曲調が流れ出るやうに湧いて來るのであつた。

試みに彼がピアノの鍵盤の上に手を翳して伊太利の劇作家プッティニーのことを思へば指は自然に動いて、彼のラトスカを奏で出でるのであつた。と思ふと、突然ワグネルの『冬の暴風』の曲が鍵盤の上を走る指の下から唸るやうに鳴り出したりした。或る日、彼はショパンの作『ポロネイズ』が自分の觸れた指の下から巧妙に奏でられるのに聽き入つてゐた。ショパンの『ポロネイズ』は父が生前、非常に熱心になつてゐた曲であつたが、彼は今迄、うつかりその樂譜を忘れてゐた。しかし音のタッチとテンポとで、自分の指先の奏でる曲がショパンのポロネイズであることを彼は知ることが出來た。

彼がピアノの名曲を演奏することが次第に家族たちに知られて來た。彼の家族が此の現象唯一の證據人であつた。何故なら彼の家族たちは、今迄のマグナツセンがどの程度のピアノ彈きであつたかと云ふことと、彼の死んだ父が生前如何なる曲を愛してゐたかと云ふことを知つてゐたからである。

或る日、兄がマグナツセンの室へ來て『ピアノを彈いて聽かせろ』と云ふのであつた。

『何でもお好み次第のものが彈けますよ』とマグナツセンは答へた。兄は、それではプッティニ

ーの歌劇の抜萃曲を聽かせてくれと云つた。彼は十五年前にフロレンスにゐたとき此の歌劇を見て非常に感じたことがあるのだが、それ以來此の歌劇を見たことはないのだつた。

マグナツセンがピアノに向ふと間もなく、その指先は『蝶々夫人』の抜萃曲を流れるやうに奏でるのであつた。

『さうだ。その通りだ！』と兄は感嘆の聲を漏らした。

マグナツセンは一曲を終つた。彼は何だか自働書記で書かねばならぬことがあるやうな氣がするのであつた。それで、辯解するかのやうに兄に云つた。

『亡父さんが、兄さんに敬意を表したいと思つてゐらつしやるやうです。何かあなたに話したいことがあるんでせう。』

兄は其頃少しく病氣に罹つてゐて、殆ど病床につきたい位になつてゐた。

マグナツセンはピアノの前に腰をかけたまゝ紙をとりあげた。鉛筆をそれに當てがふと、

『さうだ、私はあれに話したいと思つてゐる』と、手が自働して書くのであつた。『兄にさう云うてお呉れ、あれの好きな大變喜びさうな曲を彈くことにしよう。』

マグナツセンは、かう書いた紙を兄に渡すと、もう彼の指先は隼のやうに鍵盤の上を往復して

何かを奏で始めた。マグナツセンはそれが何の曲だか判らない。たゞ非常に美しい曲だと思つた。

『この曲を貴方は知つてゐるんですか？』と彼は兄に訊いた。

『暫らく待つて！』と兄は制した。彼は異常に感動し昂奮して息をつめて聽いてゐた。

調子は一段と激しくなつた。見よ、マグナツセンの指は低音部から高音部へと急霰のやうな勢ひでさ渡るのだ。と、ピアノから大オルガンの莊重な響と、教會の鐘の音が聞えて來た。兄は急に前屈みになつた。彼は泣いてゐるのだ。歔欷いてゐるのだ。此の時、それは一轉して『吾が神は強き砦』と云ふ歌になつたと思ふと、教會の鐘の音を強く打叩いてその曲は終つて了つた。マグナツセンは疲れ切つて、腕は痛む、指先は疼く、殆ど息もつけない有様になつてゐた。

『お前、今の曲を知つてゐるのか』と兄は訊くのだつた。

『知らない』と彼は答へざるを得なかつた。『吾が神は強き砦』の歌になつたところは氣がついてゐたけれども誰の作だか知らなかつた。

『ヤコプ・メーヤーベールのフーゲーノツトと云ふ曲だ』と兄は云つた。『僕は實にこれが好きだよ。とても耐らない、よく彈けたねえ。僕は前にこれをストックホルムで聞いたことがある。そ

れ以來好きだつたのだ。僕は先刻、この曲のことを思つてゐたのだ。すると此の曲たお前が彈き出した。しかし「吾が神は強き砦」の歌をまさか彈きはすまいと思つてゐた。僕はその歌が出て來るかどうか待つてゐたのだ。すると本當にやつて來たね。最初の其の曲を聽いたとき、もう耐らなくなつたよ。何と云ふ立派な曲だらう！』

マグナツセンはメーヤーベール作の『フーゲーノツト』を未だ聞いたことがなかつた。その最後の場面が敎會になつてゐて鐘が鳴り、オルガンの音が聞えると云ふことは無論少しも知らなかつた。それだのにその曲がその通り間違へずに彈けたのだ。それをもし潛在意識の働きと云ひ得るだらうか！　否、否、否！

その後、マグナツセンはピアノを彈きたい衝動に驅られて每日彈いた。每日の彈奏が彼にとつては奇蹟であつた。日每にちがつた新しい曲が出て來た。それが、まるで意識的であるかのやうに次第々々に難かしい曲にと進んで行くのであつた。每日々々彼は難曲を彈きこなして往つた。彼の自働書記による父からの通信によれば、彼が凡ゆる曲を敎へられること、凡ゆる曲を正しく彈くやうになれること、凡ゆる演奏の手法が正しくなつて決して誤まつた彈き方をしなくなると云ふことであつた。

彼は自分の彈きなれてゐる曲目を選んで彈いて見ようとすると却つて旨く彈けなかつた。注意に注意を凝らして譜の通りに、今度こそは正しく彈いて見たいと思つて彈いて見ると、却つて間違つて隣りの鍵盤のところを指が叩いてゐたりした。以前から相當彈けると思つてゐた曲はからして散々失敗して了ふのだ。では父の靈魂が自分の指を自動的に操つて幾度も〳〵彈いて呉れた曲なら自分ももうスツカリ憶えて了つてゐるから自分の巧者でも彈けるだらうと思つて、マグナツセンが彼自身の力で彈かうとすると、それもカラキシ駄目であつた。彼の『私』の力が加はる程、彼の演奏は下手になつた。これに反して彼の全く知らない曲ほど、最も正しく最も巧みに彈きこなせた。

マグナツセンの演奏は、いはゞ自働演奏であつた。それは彼の自働書記と同樣で、彼自身の考へと云ふものを出來るだけ空無にして、自然に動く手の働きにまかせてゐる時ほど、却つて自由に間違なく彈けるのであつた。ところが『此處は斯うしたら好いだらう』と云ふやうな私的な考が混入すると、自働書記も自働演奏も却つて不確かな間違多いものとなるのであつた。

彼の意識が混ずれば混ずるほど、その演奏に間違が出來て來る。自分の意識が混入しない全く知らぬ曲ほど一層巧みに正しく彈きこなせる――これが自分の潛在意識の作用だと云へるだらう

か。それは實際他界の靈魂の指導によるのではないだらうかと彼は考へた。

彼はかうして毎日々々新しい曲を覺えた。或る日、彼は特に素晴しくチャーミングな小曲を彈いた。彼はその曲の名を知らなかつた。彼はその名を靈界の父に聞いて見たいと思つた。さう思つたとき彼は何だか懷かしい思ひが湧いて來て自然に微笑がこぼれてくるのであつた。彼は紙をとり上げた。

彼の有つたペンは自働して父の筆蹟があらはれた――

『わたしはお前の微笑を見て嬉しく感ずる。お前への返事としてこれを書く。お前が今彈いたのはプッティーニの新作歌劇「淺瀨」だよ。お前はそれを信じないかも知れない。お前はまだその歌劇を知らないんだから無理はない。自分の知らない曲が彈ける。だからそれは奇蹟なのだ。併し、お前が若しロイヤル座へいつて「淺瀨」の歌劇の一曲をきくならば、お前は今と同じ曲を聽いて今迄にないやうな感激を受けるに相違ない。』

自働書記は終つた。マグナツセンは非常に心を打たれた。彼はピアノの前に坐つた。またしても『淺瀨』の曲が彼の指先から流れ出して來た。それは實際プッティーニの作に相違なかつた。死せる父は斯くの如く生きてゐて斯くの如く現實界の人々を操ることが出來ると云ふ證據を見

せたのだつた！

その日、彼の自働書記に現れた、彼の父の靈魂からの靈界通信は、また一層詳しく死後の靈界生活を說明したものであつた。

『わが愛する子よ――わたしはまたお前の手にやつて來たよ。お前はペンを有つた自身の手を見詰めながら、お前の持つてゐるペンがお前自身の力ではなく父の靈の力で握られてゐることを認めずにゐられまい。ほらお前はかう心で呟いてゐるよ――この現象はいつまでも續くのであらうか、一體、自分は、他界の靈の保護の下に置かれたのであらうか。こんなことが以前に此の世に起つたことがあるだらうかと。お前の手に有つたペンが紙の上を自働する。併しお前はこれから何を書くのか知らないのだ。……

『わたしはお前の手で書かせた最初の頃の手紙にも書いた通り、――お前は私のものになつたのだと云ふことを玆に再び繰返し書いて置かう。お前は私に與へられたのだ。私は自分の望み通りにお前を使ふことが出來るのだ。が、私の望むところはたゞ善なることのみだよ。それは豫め定められてゐるので、そのほかのことはあり得ないのだ。お前が今後どうなるか、どんなことが今後起つて來るか私にはわかつてゐる。それは定められてをり、あるべきやうにあるほかはないの

である。お前は「私のもの」なのだ。私はお前を「私のもの」にした。再びお前はもとのお前にはなることが出來ないのだ。お前は元のたゞの愉快な青年になることも出來なければ、表面で動搖してゐる氣鬱ぎの老人になることも出來ないのだ。元のお前はもう去つたのだ、永久に去つて了つたのだ。お前は神が定めた通りのものに生長したのだ。此の手紙の終りにお前が此の使命に割當てられた因緣を話してきかせてあげるよ。それはお前を驚かす。そしてお前の手で茲に書いてゐるのは靈の力だと云ふことが解るだらう。お前の生活にこれから起つて來ることは、夢うつつの中にでさへも、定められた通りのほかは起り得ないのだ。

『思索して見たつて駄目のことだよ。人間考への當て推量で、色々頭をなやまして見たとて無駄のことだよ。それは私に面倒をかけ、二人の使命を遲らせることになるばかりだ。人間智を捨てよ。人間智以上のものがお前を支配するのだ。それは靈人の手で書くのだ。それはお前を驚かし世間を一層驚かし、世間はお前が狂つたと云ふことにして了ふであらう。

『併しそのやうな狀態は長くは續かないであらう。お前が氣狂ひになつたのでないと云ふことをやがて世界はさとるであらう。世界が心靈の世界に目覺めてくるのは豫定の事實だ。吾々は結局勝利するのだ——だがまだ、お前はこのことを信じてゐないだらうし、吾々が此の物質萬能の世

界を靈的信仰で征服する手段をお前に話すならば、お前は更に一層自分自身を氣狂になつたと思ふであらう。

『此處——靈の世界にすんでゐる吾々は決して勝利しないと云ふことは出來ないのだ。吾々は此處にゐてすべてのことを知つてゐる。何もかも知つてゐると云ふのは萬事のプログラムはあらかじめ定まつてゐるからだ。すべて地上の出來事は、心の世界に於ける出來事の結果に過ぎないのだ。すべては豫め見、豫め知ることが出來るのだ。

『私はテーブル傾斜現象を最初に起して、覺束ないテーブルの足どりでお前たちに通信を始めたことを失敗だつたとは思はない。人間がさう云ふ心靈遊戯を始めるときには吾々はいつでもそれに參加するのだ。吾々は出來るだけ人間に理解出來るやうな方法で回答する。人間が現在でも吾吾靈魂の存在を充分信じないのに、吾々はそれを一層信じ難くしてはならないからだ。靈媒にかかつて嚴かなスタイルで、物憂い言葉を語るならば人間は直ぐに信ずるのだ。併し、下らない物理的心靈現象を起したり當てにならない神託を喋つたりするのが靈魂の本性ではないのである。人類は、美しい幾多の宗教をもつてゐるけれども、人間はその死後の生活に就ては甚だ下らぬ妄想を有つてゐたのである。これは人間として避けがたい定めだつたのである。若しさうでなかつ

たならば、靈魂とは蒼ざめた憂鬱な幽靈の姿として人間に描かれる事はなかつたに相違ないのである。テーブル傾斜の心靈現象を起したり、自動書記の心靈現象を起したりして、吾らの神のことをお前たちに解らせようと色々下らぬ形式をとらねばならぬかと思ふと吾々は實際ウンザリするよ。

『何故つて人間は、まだ神が朗かな笑ひであり、小鳥の囀きであり、薔薇の花の芳ばしい匂ひであることを知らないからである。人類はこれらの明るい存在を、ひとり人生に屬し、地上に屬し、現實界に屬してゐるものだと信じてをり心靈界と云つたら影のやうに實在性の稀薄なものであつて、死者の靈とは淡暗い朦朧たる世界に色のさめた百合の花を手にして淋しいオルガンの調べを聽いてゐる位にしか思つてゐないのだ。ところが、何ぞ計らんや、その反對こそ眞實であつて、影とは寧ろ現實界のことであるのだ。

『あゝ！　吾が兒よ、今日はこれに就ては多くは語るまい。私が突然お前の手に來て自動書記現象を起した目的を知らすために、却つてお前を五里霧中の世界へ引摺つて行つてはならないからである。私がお前のところへ來た目的は何だつたか？　お待ち、吾が子よ、お前は、それを少しも豫期してゐないけれども――お前の胸は顫へてゐる。……

『誰もまだ靈界の吾々の生活に就ては本當に知らないのである。何故なら吾々は現實界の人間とは異る觀念をもつてゐるからである。しかし、私はわが住む靈界を「神の國の森」だと呼ばう。「森」と云ふ言葉で、お前はそれをお前の好いたやうに解釋するが好い、吾々は其處で實に幸福に生活してゐる。それは「神の國の森」だよ。空中から幾百千の音樂を一時に奏でるやうな微妙な音樂が降り濺ぐ。そして曙の光の中に神は吾らに祝福の微笑を投げかけてゐ給ふのだ。吾々がたゞどんな言葉も語ることの出來ない幸福に醉ひ、お前たちの理解されない法悅にひたされてゐるのは此の世界に於てなのだ。お前よ、地上に於ける最も美しい事物のことを想像してお呉れ。愛兒の瞳にのぼつた優しい懷かしい微笑のことを想つてお呉れ。眼に泪がにじむほどに嬉しい情の歡びを想つてお呉れ。この優しい懷かしい微笑が、この妙なる情の歡びが一秒間に數十億回も貴方の心に投げかけられるのだ。どれを想像して見てくれたら、吾々の棲んでゐる此の世界の歡びの百萬分の一が理解されるであらう。

『靈魂と云ふものは肉體を離れたならば、それはエーテル界に浮動してゐる。そしてやがて此の森に導かれたならば、曙の光のなかに神の歡びの微笑をほの見るのだ。吾が愛するいとし子よ。お前を愛する汝の父は曙の光のうちに神の祝福の微笑を見たのだ。今私はこの世界からお前に囁

きかけるのだ。

『お前はわたしのものとなつたのだ。私は神の微笑が何であるかを、お前に敎へる許しを得たのだ。それだから私の手でピアノを彈き、私の手で靈界のたよりを書くことが出來るのだ、それだからお前の心は歡びで歔欷き、云ふに謂はれぬ優しい感激でをのゝくのだ。

『私はお前が知らねばならぬことをお前に敎へるやうに許されて來たのである。私がお前に語るところをお前はもう聞いても耐へる力が出來てゐる。お前は選ばれた人間であり、私はお前を導くのだ。これは神の定め給へる私たちの使命なのである。今日の日が來ると云ふこと――お前が「神の祝福の微笑」の書籍を全世界に弘める日が來ることは既に使命として定められてゐるのである。たとひお前の心の中に幾百千の反對論が起つて來、手に持つてゐるペンを抛げ棄て、もう書くまいと思つても書かずにはゐられないのだ。お前は自分の心の中で荒唐無稽だと思つて耻ぢることを全世界に本にして發表する――それがお前に定められた使命なのだ。そして「私は選ばれた者だ」とお前自身の口をもつて全世界に呼びかけねばならないのである。

『お前は今羞耻心で顏色を染めてゐる。私はそれを見てゐる。吾がいとしの子よ。お前はいまは自尊の感情と戰つてゐる。わたしはお前に同情する。わが最愛のいとし子よ、お前は苦しんでゐ

る。私も察するよ、それはにがいくるしみだ。併し吾らはさう云ふ使命に割當てられたのだ。吾らは選ばれたのだ。耐へておくれ。

『吾がいとし兒よ、私はお前の心の戰ひを知る、私はお前の側にゐてお前の人間性と戰つてゐるのだ。私が戰つてゐるのはお前の人間性とだ。お前の性格とだ。何故ならお前は私がお前の手で書かせてゐる通信を信じないし、信じることは出來ないし、それを嫌惡さへしなければならないのだからである。この事は豫め定められてゐるので、さうであるほかはないのである。お前は一個の人間であり、今後もまた一個の人間であるであらう。お前は、お前の個性を持續して行かなければならないし、今迄と同じやうにお前の生活は續いて行くであらう。お前はこれ迄と同じやうに嘲笑家で、善人で、お前の自然の性格の一つをも失ふことはないであらう。併し、それにも拘らず今よりお前は私のものになつたのだ。お前は私の思想ばかりを書かなければならないのだ。お前の書いてゐるところの思想は人間の思想ではない、靈人の思想であるのだ。靈界にゐて神を知つたところのお前の父の思想であるのだ。お前の父の靈は聖められた。それ故、お前の手で書く私の思想もまた聖められたものである。私はお前がどんなに反抗してもこれを書かせねばならぬ。これを書かせてゐるのは十二年前病院の小さなベツドの中で生命を終へたところのお

前の父であるのだ。お前の父の靈魂は常に生きとほしで、今もなほ生きてゐるのである。この事實をお前を通じて全世界に發表せんがために私は此處に來たのである。お前はこの使命のために選ばれ、私はこの事實を傳へる使命を託されたのだ。それ故、私はお前の指先で奏でる音樂となり、お前のたましひの中でほゝゑむ微笑となり、お前の瞳を濡らす涙となつたのだ。

『わが親しき友よ、私は實に千古未顯の思想をお前に傳へるために來たのである。今迄誰も話したことのない、迚も美しい思想を傳へに來たのである。私の傳へる言葉が美しければ美しい程、私の傳へるメツセーヂが絢爛たるものであればあるほど、お前のたましひの苦惱は一層大きく、お前の憂鬱な懷疑は一層深いであらう。お前の人間性の一部分でも、そのために變ぜられることはないであらう、さうでなければ私はお前を使はないであらう。今後もお前はお前自身のやうにあるべきである。斯のやうに私は多年の間お前を準備して來たのである。

『いよ〳〵私が今度の手紙を書かせる本當の目的を發表するところまで漕ぎつけた。今まで三年の間、お前はやがて來るべき何物かを世界に探しもとめてゐた。新時代の豫感だ。何か新しいことが來なければならない！　何かゞ來なければならない――それは豫感であつたが、何が來るのか判然とはわからなかつた。それは漠然たる豫感だつた。お前はその內容をハツキリさせたいと

心をそれに集注してみたけれども無駄であつた。希望は失はれ、魂は安息所を見失つた。併しいつかはお前自身の魂の昏睡をよび覺すべき何事かゞ起ると云ふことをお前の内から囁きかける何者かゞあつたのである。……

『併し、その何事かは遂に起つたのだ。そしてお前はそれをすべての人類に呼びかけねばならないのだ。さきに私がお前は選ばれたのだと云つたのは、やがてはすべての人類が感じ且つ見るに至るところのことを、眞先に感じ且つ見ることが出來る人として選ばれたと云ふことである。……

『わが愛子よ、三年前お前は死んで了つたのだ。その時私はお前を吾がものとすることが出來たのだ。これこそ常々私がお前に話したいと思つてゐたところの事柄なのだ。かう書くとお前は何が何んだか譯が判らなくなつて四邊をぼんやり見廻してゐるね。お前の心はモヤ／＼になつて苦しんでゐるね、併し愛する吾が子よ、お前は三年前本當に死んだのだつたよ。

『三年前、お前は病院のベッドに横はつてゐた。手術後、すつかり衰弱して敗血症を起してゐたのだ。お前の肉體は死んでしまつて、お前の魂は肉體を去らうとしてゐた。此れは本當のことだよ、私はそれを斷言する。神の祝福に賭けて誓つても好い。

『お前の病氣の精確な状態をこゝに述べる必要はない。けれども、お前もあの時のことを人に談

す際には「つまりあの時は僕と云ふものが死んだ時ですよ」とよく冗談のやうに云つたものだ。お前は本當の事を知らないで眞實を喋らされてゐたのだ。何故つてお前はあの時本當に死んでしまつて、肉體はすつかり駄目になつてゐたのだからな。

「だが、此の事が事實であつても、その事を何故、今お前の手でもつて此處に書かねばならないのかお前は判斷に苦しむだらう。お前は父の靈魂が謎のやうな好い加減な餘談を書いてお前を誑らかさうとしてゐるのだと思ふだらう。併し私にはお前にこれをどうしても書かさねばならぬ私だけの理由があるのだ。お前は是非書かねばならない。私はお前に之を命ずるのだ。やがて恐らくお前は此の理由を理解するやうになるだらう。お前は暗默のうちに抵抗してゐるね。併しペンをしつかりとお前の指の間に握らせて、この事實を强制的に書かせる力は私だよ。これはお前の死と奇蹟的の恢復とに就ての誤りのない眞實だよ。……

『お前はベツドの中に橫たはり、お前の心の臟の鼓動は止つてゐた。お前はたゞ一人ぼつちだつた。お前の死の床の側には一人の附き添ひの女性が坐つてゐる切りだつた。お前は死んで了つてゐた。そしてまた息を吹き返して、熟睡して救はれたのだ。

『吾が愛する兒よ。その夜こそはお前の全生涯のうちで最も美はしい瞬間だつたのだ。お前はそ

れを知らねばならぬ、全世界もまたそれを知らねばならぬ。

『その時何が起つてゐたか。一人の若き婦人の胸のうちにお前の死を悲しんで激しく浪打つ心臓がそこにあつた。私は今それを敢て書く、また書くだけの價ひがあるのだ。書け、お前はそれを書かねばならぬ、私はそれを命ずる！　夜だつた。星が出てゐた。彼女は街の中を心臓を悲嘆で浪打たせ、恐怖で胸の中に啜り泣きながら走つてゐた。彼女の魂はお前を愛してゐたのだ。彼女は神を知らなかつた。彼女は最も單純な祈りを捧げたこともなかつた。併しその苦しみの中に彼女は私に呼びかけたのだ。彼女は、もう死んでゐていくら呼んでも聞えない筈だと心では思つてゐる私の名を呼んだのだ。彼女は苦しみの中に、嘗てお前の父たりし人の名を呼んだのだ。そして、貴方に出來る事なら此の人を助けて下さい。どうぞ死にかけてゐる彼のために、貴方に神様がおありなら「その神様に祈つて下さい！」から彼女は慄へながら、泣きながら、私の名を呼びつゞけたのだ。

『愛する吾が子よ！　其時、私は彼女の呼び聲をきいたのだ。私が今お前に書かせてゐるところの事をよく讀んで、神が現に生きていますことを心の底から信ぜよ。私は靈界から彼女の聲を聞いた。既に地上の世界からは死んで了つてゐる此父は星の亂れ降る夜の街を心亂して走つてゐる

彼女の愬へる聲を聞いたのだ。それで私はお前のところへ來たのだ。私はお前に魂を入れ、お前に生命の息を吹き込んだのだ――わが云ふところを傾聽せよ、そして此れを全世界に傳へよ。お前に生命を吹き込んだのはお前の父であつたのだ。お前は蘇つた。

『私はお前のために作曲した小唄を低い聲でお前の魂に歌つて聞かせた。お前の魂を搖すぶり、柔かく柔かくお前を眠りに誘なうたのは私だ。お前は自然の安らかな眠りを得、その眠りから覺めたときにはお前は蘇生つてゐたのである。お前の愛する友達は病床の側に立つてゐた。お前は眼をさまして彼女の眼にたまつてゐる泪を見た。お前は微笑んだ。涙が同じくお前の眼からも湧いて來た。何故なら神がお前の友達の愛の中に宿り給うてお前に對して微笑んでゐ給うたからである。彼女はお前の枕頭に立ちながら、その魂はお前の病床のうちに神の祝福の微笑を見てゐたのだつた。

『お前はその翌日、友達から送つて呉れた白い花を覺えてゐるか。お前は決してその花の香り高い匂ひを忘れはしないであらう。その薫りこそは神の微笑であつたのだ。すべて愛から獻げられた物の美しさは神の微笑であり、愛を贈る者の微笑は神の微笑である。お前は枕邊の花を見ながら彼女の手を自分の兩手で握つてむせび泣かずにはゐられなかつた。何故なら神はお前達二人の

者に祝福の微笑を投げかけ給うたからである。

『愛する吾が兒よ、いとし子よ。其の日から私はお前の魂に附添うてゐるのである。その日以後お前の爲すことは私に導かれて來たのである。私は不思議に曲りくねつた道を辿つてお前をこの輝かしい日にまで導いて來たのである。今こそ私はお前の手をとつてお前に囁くよ――いとし子よ、喜びに滿たされよ。私はお前に神祕の幕を破つて神に就いて教へるのだもの。我が兒よ、喜びに泣き濡れよ。心臟よ、浪打てよ。お前は全世界に此の輝かしい音づれを宣べ傳へる使命を受けたのだ――神は現にあり〳〵と存在し給ふ。何人も神の微笑を見ることが出來るのだ――父より。』

ペンは此處まで書くと停止してしまつた。その時のマグナツセンの感情は恐らく局外者には理解出來ないであらう。前節にも書いた通り、彼はピアノを本來彈く技能がないのにピアノに對へば、まるで逝ける音樂家たりし父と同じく指頭に古今の名曲を自由自在に操る事が出來たのだし、机に對つて戲曲を書かうとすれば、或る强制力が働いて、今は亡き父と同一の筆蹟で自分に對して呼掛ける通信が書けて來たのだ。心で反抗しながら『そんな事を書くものか』と否定すると、『書かねばならぬ、私が命ずるのだ』と云ふ言葉がペン尖から迸る。そして終に彼自身に就ては

心の奥の最も深い祕密であつた事柄、三年前彼が病氣の回復期に經驗した心の祕密に觸れて來た。書くまい！と反抗すれば、『書け、私が命ずる』と彼の手が強制するのであつた。この現象に就てマグナツセン自身は當時の感情を回想してから書いてゐる――

『これは何と云ふ種類の病氣であるのか。自分は全世界の神經病理學者に尋ねて見たい。私は普通の健康狀態であつたし、さう云ふ現象の起る時のほかは當り前の生活をしてゐたのである。併しひとたびペンをもてば自分の知らない、自分の理解出來ない、或は知つてはゐるが斷じて書きたくない事柄を書くのである。人間の腦髓の何處に自分自身の心でない心、自分自身とは獨立した人格、智能、意志などをもつた者が宿り得るのだ。自分は決して迷信を宣べ傳へようと云ふ意志はない。自分自身はどんな迷信にも捉はれてはゐないのだ。自分は狂信家でもなければ、盲信家でもない、自分自身に起る此の現象を斷じて信じたくはないし、また現に信ずることは出來ないのだ。實證を見せつけられゝば見せつけられる程、強制する力が強ければ強い程、自己保存の本能で私は一層強く反抗するのだ。實にあり得べからざる事、耐へ得ざる事である。しかし此の強制力は自分よりも強くて、豫め自分が何を書かせられるか知つてゐたら斷じて書きたくない事柄を文字が綴つて了ふのである。かうして私は自分の實に耐へられないこと、自分の全人格が

反抗し嘲笑すること、斷じて信じまいとする事を書かせられてしまつたのである。……私は自分の手で自分の死んでゐたことを書いた。死せる父の靈魂が私に生命を吹き込んだことを書いた。自分が選ばれた者であること、この書き物が神聖な使命で書かれるものであることを讀んだ。……醫術が既に自分を見放して了つてゐる時、既に死せる父の靈魂が私を癒して呉れたと云ふやうな荒唐無稽な事をどうして信ずることが出來よう。また、一介の戯曲家に過ぎない自分が、どうして斯かる使命に神から選ばれたと云ふことを信ずることが出來ようか。讀者よ、かくの如きが私の立場であつたのである。……』

からマグナツセン自身は書いてゐるのである。此の解き難き謎を解かうと彼は心の中に煩悶また煩悶、呆然と机の一角を眺めてゐると、またしても彼の手は自働して次のやうな文句を紙の上に認めた……

『我が愛する子よ、親しき友よ。汝の悒鬱を心より拂ひ去れ。汝はただ喜ぶほかはないのだ。私は汝の父であり、常に汝と偕にある。私はお前の疑ひを愛し、お前の嘲笑を愛し、お前の怒りを愛し、お前の悲しみを愛する。お前が悒鬱になればなる程私がお前を使ふのに適する樣になるのである。信じて了つた者が書くのでは世の中の誤解を招く。此の奇蹟の中にお前が疑つてゐるの

でこそ初めて使命を完うし得るのだ。これを書くところの手を罵れ。汝の手を憎め。私は此處にゐる。お前に疑ひの心を起させた者は私である。わが愛する汝の心を苦めつゝある者も私である。では、もう顏をあげて汝の親しき父に微笑みを見せよ、如何にふかく私がお前を愛してゐるか。わが兒よ、微笑め！ お前の魂は今顫へてゐる。お前はまた明るく幸福になるであらう。お前の手を以て書くのは私である。此處を去つてピアノに向へよ。お前の戰いてゐる魂に私の得意な樂しき數曲を彈いて聞かさう。お前はその曲を聞いて心の底から湧き上る不思議な淚を流すであらう。お前が咽び泣くときお前は再び吾が有である。そして神は汝に微笑みかけ給ふであらう。……父より。』

かう書いて、ペンはハタと停止した。マグナツセンは顏を兩手で埋めた。何故となく彼は魂の底から湧き上る喜びで咽び泣けるのであつた。

八

次の日のマグナツセンの父からの靈界通信は左の如く書き綴つた。――

『吾が愛する兒よ。今日はお前の父は自分自身の死の問題に就て書かうと思ふ。お前は私の語らうとするところの眞義を捉へ得るであらうかね。此の眞義をすべての人類が捉へ得たならば、全

世界は相を變へて了ふと云ふことがお前には解るだらうか。お前の此の素晴しい體驗に就てお前は本當の意味を理解してくれるであらうか？

『私は街路で突然病氣に襲はれて病床へ運ばれて、そして其處で死んだのだつた。家族のうちでお前だけが、父の意識の最後の殘りが幽かに漂うてゐる臨終に間に合つて來て呉れたのだつた。愛するわが兒よ。私はお前を感じたよ。お前と云ふ者が、私の最期に浮んだ「念」だつたのだ。お前は私の手が力なくお前の方へ動いて行つて垂れ下がつたのを思ひ出すであらう。それは私の現實界に於ける最後の運動であり、最後の力であつた。そして私は現實界から沒し去つて死んだのだ。

『私の愛する兒よ、お前は立ちながらお前の父親の肉體の上に覗き込んでゐた。併し其の時お前の心に浮んだのはお前の不幸な母親のことであつて私のことではなかつた。お前の魂は意識してゐなかつたが、私の魂の中に織り込まれてゐて私と同じことを考へてゐたのだ。「どうして此の憫れな母を助け、慰めてあげようか」と。――これがお前の惱みであり、同時に私の惱みであつたのだ。吾々は神を知らなかつた。父が死んだ時にさへも神への信仰を築くことの出來なかつた吾々であつたのだ。私が死んだら、此の憫れな婦人は紛碎されて、却々回復することは出來ない

であらう。彼女よりも先に私が他界すると云ふことは彼女にとつて實に殘虐な運命であつた。それは彼女にとつて太陽が沒したことになる。絕望と悲嘆との極みが彼女を襲ふであらう。

『かう云ふ考へが其の時お前に浮んだが、それは同時に私の魂に浮んだ考へであつたのだ。わが親しき兒よ。否友よ――私は肉體が死んだ時以來、お前の心の中に繫がつて同じことを考へてゐたのだよ。これは本當だ』

『わが兒よ。その時、お前の母親がやつて來たのだ。その時のことを此處には書くまい。不必要にお前の感情を興奮させたくないからだ。併しお前はそれでも母の其の時の悲しげな眼付と、死んだ私に對する張りさけるやうな愛の慟哭とを憶ひ出すだらう。私はその時お前の母の心の慟哭を聞いたのだ。それは悲しい音樂だつた。併し、まだ吾々は神の存在を知らない人々であつたのだ。

『吾が兒よ、その時お前は自分の手で母親の手を握りしめ彼女の腕を抱きあげた――さうしたのは本當はお前ではなく、私だつたのだ。お前は眼の前に橫たはつてゐる父親を忘れて母親に囁きかけた――さうしたのは、本當は私だつたのだ。私はお前に力を與へ、お前の母親に內から力を與へてゐた。彼女がその夜お前が心配したやうには悶絕もせず悲しみに耐へることが出來たのは

そのためだつたのだ。

『夜は更けて來た。お前は家に歸らねばならなかつた。併し翌朝お前は病院にかへつて來た。私は病院のベッドの上に横たはつてゐた。數枚の布が私の上に掛けてあつた。そして私の裸の足首には、注意深い病院の人が私の名と所とを記した荷札のやうな物を、死體を他人のそれと間違はぬやうに針金で結びつけてくれてゐたのだつた。

『お前は父の死骸がかう云ふ風に横たはつてゐるのを見たときに、そこに突臥して泣けて泣けてしかたがなかつた。父の死に對して、お前はその時はじめて大いなる悲しみを感じたのだつた。死、それはお前にとつては不可解な分解と消滅とに感じられてゐたのだ。

『だが、吾が愛する兒よ。生命と云ふものが、こんなに慘めな何の高貴さもないやうな有様で終りを告げるものだとお前は本當に信ずるだらうか。お前の父の歌と音樂との生命、念願と憧憬との生命、愛と情との生命が、私が病院のベッドの上で伸びて了つて、裝飾もない布を着せられ、裸の足首に荷札のやうなものを針金で結びつけられた切りで、終つて了ふものだとお前は信ずるであらうか。

『お前に云つたことがあるやうに、お前の理性は眞相を捉へることが出來ないから、生命が肉體

の死後存續することは信じ難きことだらう。併し、一層信じ難いのは、私の歌と音樂と、私の希望と憧憬と、私の愛と情とが、何にもない「無」に解消して了ふと云ふことではないか。

『自分の內に宿つてゐた力は果してどうなつたか。私の心臟を鼓動させ、私の肺臟を呼吸させ、私の生命を生活させ、私の手を働かせ、眼と口元とに微笑を湛へさせた其の力は一體どうなつたか。私の心に無量無數の音樂のメロディを搔き鳴らしたその力、私の情の中に言ひやうのないデリケートな優しさと狂ほしい情熱とを奏でてゐたその力はどうなつたか。私の冷たい理性に反抗して、私自身の生涯をどこどこまでも引摺つて行きながら苦しい運命と打ち戰ひ、一切の不幸、蹉跌、貧乏及び絕望に挑戰しながら、自分の魂のうちに歌を生かし、聖とい調律と薰はしい花の匂ひを生かしてゐたところの力は一體どうなつたのであるか？　お前は此の力が一朝私の肉體が病院のベッドの上で長くなつて棺衣で蔽はれて了つたら、其儘全然消滅したと思ふであらうか？

『吾が兒よ。お前は、お前の愛する父の死體の傍に立つたとき生命の解きがたき謎に直面したのだ。誰でも自分の愛する者の屍を眺めたところのものは、一瞬間その心のうちに或る聖とい感じを味はずにはゐられないであらう。

『見よ、死者の冷たき肉體を。その默せる唇を。その瞬間お前は現實世界から遙かに遙かに隔つ

た世界にゐて不思議な超現實的な力に支配されてゐることを感じたであらう。それは蒼空愈ゝ高くして、心情愈ゝ淨まるとでも云はうか、あらゆる物はお前の心の中から淨められて影をとゞめず、不可思議な忘却の中に一列に沒し去つてゐたのである。お前の悲しみはいと深く、愛する者を失つた悔みは愈ゝ深刻であつたとはいへ、お前は其の瞬間に味つた不思議な魂の顫へ、神聖な不思議な幽邃な感じを捨てたいとは決して思はないであらう。さうだ、吾が兒よ、お前がそれを捨てたくないのも無理はないのだ。この無限の悲しみの瞬間に魂の底より湧き出て來る聖なる感情は、如何なる時にも吾々を捨て給はない神の祝福の微笑であつたのだ。

「お前は、此の世界が矛盾に滿ちた世界だと信じてゐる。此の世界は實に悲しき墓場であつて、地下には幾百萬の人間が横たはつて死んでゐる。愛子は飢ゑて死に瀕しその妻は魂が傷付いて死に垂んとし、此の世界は慘酷さと、寄る邊なさと、空ろな恐怖の醜い世界であつて、そのほかに何物もないやうに思つてゐる。

「併し私はお前に告げる――人は神の子であるから神は如何なる其の小さき子供たちにも祝福の微笑を投げかけ給ふのである。その肉體は去つて行く如何なる小さき魂にも微笑を投げかけ給ふのである。間もなく全世界の人類は、神の造り給へる此の世界には人間自身が信念によつて創作

しない限りは何一つ醜いものは存在せず、何一つ悪なるものは存在せず、何一つ恐怖すべきものは存在しないことを悟るに到るであらう。すべての醜くさ、すべての恐怖すべきものは何一つ實在ではないのである。それは實在するかのやうな外見を示してゐるけれども本當は實在しないのである。人間の眞性は（眞に實在する人間は）神の子たる靈性である。神の子たる人間の靈は本來聖淨であつて神は常にその上に祝福の微笑を投げかけてゐ給ふのである。死するやうに見えようとも一切の神の子は神に抱かれ、神に導かれ永遠に生きるのである。あらゆる人は永遠に生き、神と偕に生きるのである。何處にも此の世界には恐怖すべき何物も實在しないのである！

『では再び或る神祕な不可解な事柄を話して置かう。如何にそれは不可解に見えようとも、私の語るところは眞理である。何時かはお前はそれを理解するに到るであらう。お前はそれを書かねばならぬ。全世界はそれを知らねばならぬ。まもなく全世界はそれを理解するに到るであらう。人類が此れに就て幾分の理解を得るやうに定められた時は來たのだ。これは既に定められたのであつて、そのほかのことはあり得ないのだ。

『後になつてまたもつと詳しく書くことがあるであらう。だが、それはお前が私の書くことを理解し得るやうになつてからのことであつて、今はまだ時機ではない。先づお前に教へなければな

らないことが澤山ある。世界は聖なる實在の片鱗を理解し得るまでに尚多くを學ばねばならないのだ。

『私は私自身の死と埋葬との問題に今や歸つて行かねばならぬ。吾が愛する兒よ、私は今もう一つ興味ある事實を茲に書いて置かう。私は私自身の埋葬の儀式に參列したと云ふことだ。私が今から書けばお前はそんなことがあるものか！と思つてゐる。お前にはそれが興味ある事實だと思へるよりも、恐らく寧ろ喜劇的に思へてゐるやうである。併し私はそれを語らねばならぬ。私は最早この事實を隱しては置けないのである。やがて全世界の人類は死者の靈魂は彼自身の葬式に參列するものだと云ふことを理解するに到るであらう。（註――死者の靈魂は此の靈の如く覺醒狀態で意識しながら、墓地へ伴ふのもあれば、まだ昏睡のまゝ無意識狀態にて伴はれ行くのもある。）

『少しくお前が想像を用ひれば此の靈界通信によつて、如何なる革命が全世界に起るかを理解し得るであらう。無論、すべての人類はこの啓示を信ずることは出來ないにしても、お前が此の啓示を信じられる程度には其の一部を信ずることが出來るのだ。嘗ても云つた通り吾々は打勝つのだ。否、打ち勝つべく定められてゐるのである。間もなくお前も全世界も、此の靈界通信が始めより終りまで眞理である事を理解し、悟り、感ずる時が來るであらう。これこそお前の待ち憧れ

た新時代だ。役目を終つた舊時代は再び歸つて來ることはないであらう。凡ゆる事物は一つの目標を指して運行してゐるのである。此の新時代に於ては人間は決して死なないものだと云ふことを人類は悟るであらう。彼等は人間の葬ひの儀式とはたゞ肉體を葬るだけのものであつて、「眞の人間」を葬るものではないことを悟るであらう。甞て知り甞て愛したところの人は常に吾等の周圍にその生前よりも遙かに偉大に、遙かに善良に、永遠に幸福に、悠久に、無窮に、神の祝福の微笑を自己の上に浴びながら生きてゐるのである。

『吾が兒よ、お前は今日私がお前に齎した此の通信が、何を目的とするものであるかゞ解るであらうが、何故私は一瞬間前までは人類が沈んで行く不幸の深淵――物凄い死――を描いてお前の心を打つたのであるか、其の理由をお前は今理解出來るであらう？ 同時にお前は肉體の死が決して不幸でないと云ふことを理解するであらう。お前の心の底遙かには人間の魂が全てを知り終に眞理を知るであらうことを理解するであらう。お前は、もう既に神の實在を理解し神を悟る能力なしには決して地上の王者にはなれない時代が到達したことを理解するであらう。お前はかゝる時代に生まれたのだ。若し今迄に人間が神を理解し神を悟る能力があつたならば人類の不幸と云ふものはこれ迄に起らなかつたであらう。併し人類はそんなに永く耐へ忍んだのではない、僅

か一秒間經つたに過ぎないのである。何故なら、實相は永遠であり、地上の不幸を嘗めて來たすべての靈魂は、たゞ肉の人間として苦しみを嘗めたに過ぎないのである。(併し肉の人間は實相でないから苦しみも亦實在ではなかつたのである。)實相としては人間は永遠である。されば人間は決して未だ嘗て苦しんだことはないのである。

『吾が愛する兒よ、私はかすかな光の閃きをお前の魂に投げかけたに過ぎないのである。これが全てゞはない、吾が汝に告げんとする偉大なるメツセーヂの小部分をこれによつて理解せよ。言妄絶慮、神祕不可思議な觀念——永遠と神とをこれによつて理解せよ!

『なほ續けよう。僅か數行で餘りにも大いなる問題を取扱つた。お前の理解力ではこれを把むことが出來ないであらう。併しながら、これだけ語れば吾が目的は達するのである。何故ならこれだけでもお前の心に光を投げかけることになり、今日私が自身の埋葬の葬式に參列したと云ふことを語つたのでお前が私に尋ねたがつてゐる幾百千の疑問に對する答へを朧げながらもお前は把むであらう。

『吾々は生命の謎を眞直にほどいて行くことは出來ない。何故なら、人間は人間であり、それに就てはたゞ幽かな解決の光を捉へ得るに過ぎないのであるからだ。吾らは順序を追うて組織的に

進んで行かなければならないのだ。お前は私の子であり私はお前の親であるのだ。お前は「生命」と「死」と「永遠」とに就て知らなければならない。お前はまだ人生を本當に知ることが出來ないし、お前と同じく全世界も亦さうである。世界はまだ知ることが出來ないが、やがてそれを學ぶであらう。みづから人生を知つたと云ふ自信のあつたお前だ。人類の揺籃時代に相對照して近代及び他の世紀の歴史を描いたところのお前だ。併しお前でさへもまだ本當に人生を知ることは出來てゐないのだ。

『併し、定められた通りに時はめぐり來つたのである。お前はお前の歴史を消し去ることが出來る。お前は今迄まだ人類の幼稚園にゐたのである。今はじめてお前は天の光の一閃に觸れるであらう。では、これで今日は左樣なら。お前の親しき師なる父より。』

九

更に別の日の靈界通信――

＝愛する吾が兒よ、前の手紙に於て私は自分自身の葬式に參列したと云ふ話を書いた。お前は深い感銘に打たれてゐた。それは私が今迄お前に話して來たことや、お前自身が體驗して來たことの當然の歸結であつたのだ。それは甚だ深い印象をお前の心に與へはしたが、私はその印象をお

前の心の奥底深く埋めておいたのだ。が、その印象は今種子として芽生え、生長しつゝある。それと同じく、私はお前の思想の中に私自身の種子を蒔いた。それは發芽し、生長しつゝある。お前はやがてそれを悟る日が來るであらう。同じやうに全世界もそれを悟る日が來るであらう。吾吾靈人が、その子供達に生命と智慧の祕密を與へるのはさう云ふ遣り方によるのである。

「お前の死んだ父卽ち私自身の埋葬の儀式中にお前が何を考へたか私はそれをよく知つてゐた。その時のことを茲に引續き書くことにする。私はお前の母の思想の中に坐して、彼女の魂に微笑みかけ、お前の小さき妹の頰を愛撫してゐた。あの私の葬式の五月の日ほど柔かに太陽の光が射してゐたのを私はこれまでに見たことがない。お前の頰には涙が流れ、お前の咽喉は歔欷に咽んでゐた。お前は私の死體を墓地まで運ばせて、そこで柩を地におろした。小鳥は水松の樹叢の中で囀つてゐた。草花は墓地のグラウンドから芳ばしい匂ひを放つてゐた。白雲が徐かに青空の中を帆掛船のやうに滑つてゐた。黑い會堂から私の柩は運ばれて來たのだ。會堂には悲し氣なオルガンの調律が呟いてゐた。オルガンの呟きに隨つてお前は頭を屈めながら、椅子に凭れてゐた。お前の手には黑い縁取りをした讚美歌が持たれてゐた。やがて扉がひらかれてお前は、明るい、眩しい日光の漂ふ眞晝間の中へ歩み出た。

『併しその時太陽の光を見たのは、吾が兒よ、死せる私ばかりであつたのだ。ほかの人は悲しみに泣き濡れて太陽の中へ出ても太陽を知らないのに、そんなに悲しまれてゐる私だけが太陽に對して微笑みかけてゐたのだ。お前の可愛い咽喉を涙で詰まらせつゝ私はお前と倶にゐたが、私は本當は幸福であつたのだ。私は神の微笑を感じてゐた。そして私の内には無限無數の樂しい調べが聞えて來てゐた。無數の美しい花が私を取捲き、幾百萬となき愛らしい小鳥の囀りが私を取圍み、無數の愛する人々の眼が私を見戍つてゐた。併し、お前は泣きながら私を携へて、私を最後の安息所へ運んで往つた。

『お前は私のお前に話さうとしてゐる此の輝かしい知らせを理解し得るであらうか。私だけが生命を見、私だけが太陽を見、私だけが歡喜を味ひ、私だけがお前を愛し、愛し、愛したのだつた。私は泣くことは出來なかつた。お前を憐れむことは出來なかつた。何故なら、私は靈であり、私はその儘で聖きものであり、お前も靈であり、その儘で聖きものであり、人間はすべて神の祝福の微笑を見るに相違ないことを知つてゐたからだ。悲しみや、憂ひは吾が世界では知られないのだ。何故なら此の世界では人間が自分の想像で悲しいと信ずる事物のほかには何ものも悲しむべき事物は存在しないからである。お前も此の世界へ來たときに知ることが出來るであらうが、哀

哭すべき事物はたゞ人間の想像のうちにのみ存在するものなのである。人間の想像のうちに哀哭すべき事物が造られるのは、彼が神を知らないからである。神が彼の靈性に與へたところの生命を自覺しないかぎりは、人は人間的な惱みを感じずにはゐられないのである。お前はまだこれを理解することが出來ない。併しやがて汝も一層悟るときが來るであらう。

『吾が愛する儚き兒よ。私はお前の父を埋葬した日のお前の心の悲しみを知つてゐる。私はお前と一緒に生きてゐたときにもお前の情の波動を感じてゐた。たゞそれに穿ち入らなかつただけである。私はお前と共に生活し、お前の思想を分ち有ちながらそれを自覺してゐなかつたのである。それは丁度愛人同士が何の理解も省察もなしに戯れてゐるのと同じことである。私は死んで一切を理解したのだ。今私は現世にゐたときよりもお前を一層愛してゐる。何故なら此の世界の空氣は、そして永遠の實在には愛の調音が貫き通つてゐるからだ。

『私はあの時お前の空ろな小さな情のうちに何が起つてゐたかを此處に話して見ようか。お前は會堂の中に坐しながら、暫しの間、お前が父の柩にかけた紐をもつて會堂の外へ父の柩を持ち出すときにはどんなに慘めな汝自身に見えるであらうかと考へてゐたのだ――これがお前の空ろな心の中に忍び込んだ考へではなかつたであらうか。後になつてお前は悲しみの眞最中に不思議に

もそんなに落着いて行動が出來たことをみづから訝つてゐた。お前は全世界の中で誰よりも私を愛してゐた。そしてお前は自分の最愛の父のために悲しい遣る瀬ない涙に咽んでゐた。私が此のお前の小さい心の祕密、お前が何となく理由もなしに恥かしくてお前の心の奥底に深く祕めて、敢て自分自身にさへも認めしめようとしなかつた此のお前の心の祕密を私が知つてゐることをば不思議に思ふな。

『今こそ私はお前に告げる。お前の其の感じは私自身の念であつたからだ。何故なら、私は會堂の窓から射しこんだお前の涙に反射してゐる太陽の光のなかにゐたのだもの。何故なら私の魂は私の柩の上を飾つてゐる薔薇の花の匂ひの中にゐたのだもの。そして私はお前の母親の魂に接吻し、お前の小さき妹の魂を温め、そして吾が愛するお前の思想の中に坐して汝の心に念を送つてゐたのである。その時でさへもお前の思想の中に何者か知らぬ者の聲が囁きかける不思議な狀態を私は、お前に示すことが出來たのである。私が此の祕密をお前に物語るとき、お前の今迄の疑は消える。お前は、それだけは理解しその論理的過程の當然さを認めるであらう。お前は何故それを認め得るか自分自身にそれを說明することは出來ない。併し何日かはお前も人の魂の中に本當に隱されて顯れない祕密は一つとしてないことを理解し、人にも自分にもそれを敎へるで

あらう。

『吾が愛する兒よ。ではお前は、そしてお前と共に多くの人達は、人間と云ふものが死んでからどうなるか？　何を感じ何を見るであらうか？　それを知りたいと思ふであらう。

『此の問題に就ては無邪氣な靈魂が幼稚な人間たちに色々の靈界通信で或る說明を與へてゐるであらう。或る者は云ふ――それは白い日光の交錯する世界であると。或る者は云ふ――そこで人間は靜かに眠つてをり憧憬に滿たされてゐると。また或る者は云ふ――そこには色々の花が咲き滿ちて山々が美しく見えると。これ等の說明は正しくあると共にまたそれだけ間違つてもゐるのである。死後の世界に就て、人が聽かされるところのものは、常に人間自身の發明であるのである。何故なら現實界の人間は靈界の生活に就ての眞相を知らないし、また知つてもそれを描き出す觀念と言葉とが現實界にないからである。たとひ人間がこれこそ靈界通信により知らされた靈界の狀態だと主張しようとも、それは人間自身の知らうとする努力の表現であり、自分自身の想像を描き出してゐるに過ぎないのである。何故なら、吾々靈魂と雖も、現實界の人間にとつて到底理解出來ないことは說明のしやうがないからである。吾々が若し靈界のことを話さうとも、それは靈界そのものではなく、人間の觀念で假裝させてあるのである。

『愛する吾が兒よ、吾々は詩人である。そして恐らく吾々は靈界の生活に就て一種の詩をつくり上げることは出來るが眞相を語ることは出來ないのである。人間はたゞ二つの眼と、心情と、理解力と五官としか持つてゐないからである。汝の眼を數千に增加せよ、そして汝の感官を數百萬種類に增加せよ。さすれば、汝は理解しがたき神祕の世界の片鱗をうかがふことが出來るであらう。

『ではお前がそれを理解し得るやうに吾々をして靈界の詩を作らしめよ。否、吾々をして眞相を詩化して語らしめよ。人間の靈魂が肉體を離れて多くの優しい魂たちに取まかれ、十萬億里の彼岸に伴れられて行くと吾々が人間に敎へるとき、それは眞相であると同時に詩であるのである。靈魂が形容の出來ない微妙なメロディの中に、美しい色彩の中に、輝く日光の中に、そして又馥郁たる匂ひの中に生活してゐると云ふとき、それは小說であると同時に眞相であるのである。遙かの遠くへ、遙かの彼方へ、吾々死後の人間の魂が伴ひ行かれて、優しき愛のみ手に抱かれ、み空を天翔け愛慰すやうに搖られながら、微妙な讃美の歌をきゝつゝ日沒のうちに神の微笑を見ると云ふのも眞相を詩化した歌であるに過ぎないのである。

『私がお前に、靈魂と云ふ者は微妙な天樂の響の中を馥郁たる薫の中を伴れられて神の國の森へ

件れられると云ふときそれは眞相を象徴化した詩であり、詩化した眞相であるのである。神の國の森の樹の葉は小兒の微笑をたゝへて吾々に囁きかけ、神の國の牧場に咲いた草花は鹿のやうに無心に遊び、その雰圍氣に漂ふ光は母のやうな優しさを有つてをり、野を蔽ふ青々とした苔は見るからに人間を力づけるとき、それは眞理の象徴詩であり、象徴化した眞理詩である。『眞理の神仙譚の如何に素晴らしう美しいことであることよ。そして眞理は、語れば神仙譚になるほかはないのである。吾々は全世界の悲しめる人達に、此の眞理の神仙譚を語るために遣はされた使者であるのである。此の世の悲しさに泣き濡れた者どもよ、眼をあげて眞理を見よ。吾が囁く眞理を悟れ――神は汝たちの世界に光をかざして微笑んでゐたまふのだ。父より。』

マグナツセンの父からの靈界通信として發表されたものはこれで終つてゐる。前章のヴェッテリニの靈界通信が指方立相の靈界の諸相を客觀的に『斯くある』として取扱つてゐるに反して、これはまた『斯くある』のは唯心所現の結果『斯くある』のであつて、不幸も惡も醜も恐怖すべきものは何一つ實在ではないと說き、『實相としては人間は永遠である。されば人間は決して未だ嘗て苦しんだことはない』と實相の立場から說いてゐる。前者は差別心から見た靈界の消息であり、後者は平等心から見た靈界の消息であり、二つ合して完全となるのであります。

第三章　個性生命の存續と其の物質化

『生長の家』で常に說いてゐるところの一つの根本思想は、人間は『心』であつて肉體ではないと云ふことであります。普通、生理學や醫學などでは、腦髓と云ふ構造をもつた肉體が先づあつて、その腦髓と云ふ物質が考へる――だから腦髓と云ふ物質が無くなつて了つたら考へることが出來ないとし、この考へる本體を『我』と云つてゐるのでありますから、腦髓そのものが考へると云ふ風な學說をもつてゐられる人には『我』即ち『自我』とは腦髓のことである、肉體のことであると、斯う云ふ風に考へ勝ちなのであります。それで、吾々が所謂る死んで、肉體と云ふものが崩壞し腦髓も崩壞したのちは、此の『我』と意識してゐる本體も崩壞して了つて、あとには『我』と云ふものは何も殘らなくなる、『死んだらお終ひだから、生きてゐるうちに仕たい三昧をして置け』と云ふやうなデカダン的な思想はそんな唯物論的生命觀から出て來るのであります。ところが『人間』は肉體が死んで腦髓が崩壞したのちも、矢張り生き通してゐる。それは盃の水を大海の中に注いだやうに大生命に歸一して普遍我と一如になつて生き通してゐると云ふやうな意味以外に、人間の個性生命も個性生命の儘で生き通してゐるのであります。そしてその肉體滅

後の個性生命（靈魂）の生活、即ち靈界の生活と云ふものはどんな狀態であるかと云ひますと、靈界も現界と同様に自己の『念』の投影せる世界でありますから、『念』が實相を悟つたものほど自由自在の境地にあり、悟つたマグナツセンの父の靈魂のやうに幸福な靈界に住んでゐて『不幸な靈界』が存在することすら氣がつかないことにもなるのであります。これは對境又は環境と云ふものは自分の『念の投影』でありますから、『念』が實相を悟つた靈魂の環境には自由自在な靈魂ばかりが『類は類を呼ぶ』法則によつて集つてゐるからであります。だが靈界にゐる靈魂は必ずしも、そんな自由な能力者ばかりではない。昭和八年一月中、大阪毎日や東京日々に載つてゐました靈媒龜井三郎氏による招靈實驗には昭和七年十二月中自動車事故のためなくなつた輔永博士の靈魂などは、『ウーン／＼』と唸つてゐて、息子が『苦しいですか』と尋ねると、『苦しい。このやうな目にあはせた自動車の運轉手が怨めしい』などと答へてゐるのであります。此のやうに個性生命と云ふものは死んでも死なゝいで、負傷の意識は存續してゐて苦しみつゞけてゐるのですから氣の毒なことであります。『死んだらお了ひ』どころの騒ぎではない、死んでからどうしたら病苦や負傷苦から解脱出來るかゞ問題なのであります。佛教で所謂る浮んでゐない靈魂が即ちこれで、どうしたらその靈魂を浮ばすことが出來るかゞ問題なのであります。

ところで、さう云ふ靈魂を招び出して、生前の知己の靈魂の靈界に於ける狀態を知るにはどうするかと云ふと主觀的には直感による方法もありますが、客觀的に立證するには靈媒を使ふのであります。昔から日本にも靈魂を招び出して話し合ふ仲立になつてくれる人に、所謂る巫女とか口寄せとか稻荷下げとか色々の名前で呼ばれてゐる靈媒たちがあります。併しこれらは大抵その巫女とか口寄せとかの役目をする人間自身が半意識狀態になつてゐて、靈媒自身の唇を動かし、靈媒自身の發聲機關を通じて靈魂が物を云ふのでありますから、靈媒自身が靈魂めかしく作り言を喋つてゐるかも知れないし、また靈媒にそんな惡意がなくとも靈媒自身の潛在意識が知らず識らずまじつて、純粹に靈魂そのものが話してゐるのだと云ふ確證がみとめられないのであります。然るに此處に空中談話の靈媒と云つて靈媒自身は椅子に緊縛されたまゝで昏々と昏睡狀態に陷つてゐる――その間に、靈魂自身が靈媒のエネルギーを使つて空中にメガホーンを浮揚せしめて、そのメガホーンの中から稍ゝ擴大した聲で話して吳れる種類の靈媒があります。現在日本では龜井三郎氏が唯一の空中談話の靈媒であります。先年大阪の醫師政山龍雄氏邸で實驗された時には今井楳軒先生や私の家内も立會つたのでありますが、龜井氏の司配靈モゴールの英語の大きな聲が彼方でする、その介添役の靈魂木村氏が日本語で通譯する。時には何處からともなく空中

から迚も男性の靈媒では眞似の出來ぬソプラノの歌手の美しい女性的な歌聲が聞えて來た。だから此の直接談話では靈媒の潛在意識が働くのだとか、靈媒が詐術を行ふのだとか云ふやうな疑問を抱く餘地は決して無いのであります。

ところで生長の家出版部でも昭和八年二月二十八日、龜井靈媒に就て招靈實驗を行つたのであります。その實驗記錄を玆に御紹介申上げようと思ふのであります。

龜井氏は靈魂の物質化現象に堪能な靈媒であります。本來、靈魂と云ふものは、肉眼には見えないものである。また聲を出しても人間に聽えるやうな聲を出すことが出來るものではない。それが此の種の實驗會に於て肉眼に見えるやうな顏貌をあらはし、肉耳に聞えるやうな聲を出すことが出來るのはどうして出來るかと云ふと、靈魂が龜井靈媒の肉體から、或る物質(現在吾々の使つてゐる意味に於ける物質と云ふ定義には當て嵌まらないかも知れないが、或る材料)を抽出して、その材料で其處に出席してゐる靈魂の容貌通りの顏貌を作つて、その瞬間その顏貌を靈魂自身が赤色燈で照らして見せてくれる。其の時に吾々は肉眼でその姿を見る、また出席靈魂が靈媒の此の材料を使つてその人の生前の發聲機關同樣の發聲機關を作つて、その發聲機關を振動させて物を云つてくれる。靈魂からの直接談話は斯うして可能になる譯であります。

此のやうに靈媒の肉體から抽き出して靈魂が利用して、見えない靈姿を見える姿に物質化し、聞えないその聲を聞える空氣の振動に化してくれる材料を心靈科學では『エクトプラズム』と稱してゐます。此のエクトプラズム（Ectoplasm）と云ふ材質をその體内に豐富に有つてゐて、見えない靈的存在をば見える形に複製するのに役立つ人を物理的心靈現象の靈媒と云ふのであります。偖て此のエクトプラズムで靈界の靈魂が、靈魂自身の顔を造つたり、發聲機關を造つたりするのは、彫塑家が粘土で塑像を作つたり、鑿で木像を彫つたりするやうに、手先の力や、外形的の力でこれを造るのではないのであります。此の事は注意すべきことであります。手先の力や外形の力で、一人の人の顔を生きたやうにあらはし、發聲機關をその人の生前に近い聲を出すほどに完全につくらうとするならば中々心靈實驗會の如き一時間や二時間内に如實にそれが出來上る筈はないのであります。では、心靈實驗會で本來見えぬ靈魂の顔貌が物質化して現れるのはどうしてであるかと云ふと、念塑材質を靈魂は『念』の力で靈媒の體内より抽出し、『念』の力でそれを所要の形にして了ふのであります。靈魂自身の云ふところによれば靈魂がエクトプラズムの中に入り、あらはさうと欲する顔貌とか發聲機關とかを思念すれば、その思念にしたがつてエクトプラズムが、あらはさうとする顔貌ともなり、造らうとする發聲機關にもなるのであります。

『生長の家』では肉體は本來存在しない、それは『念』の物質化したものである——即ち『念體』であると云ふのでありますが、『念』の力位でこんな複雜な肉體が出來上るものであらうかと疑はれる方もあるかも知れませんが、『念』の力であるからこそ、內部から斯う云ふ複雜微妙な有機體組織が出來上るのであつて、『念』が具象化すると云ふ事實を短時間に實驗するには、やはり心靈の物質化現象を實驗するのが手つ取り早いのであります。普通の物質はその組織が疎雜な、從つて重い『念體』でありますので『念』の力で徐々にそれを動かして、『念』に描いた形に結集するのには割合に時間が掛るのであります。だから吾々が病氣の念を有ちましても、すぐ肉體が病氣になる譯ではない。却つて病氣の念を起したことを忘れてしまつてゐる時分に病氣になることもあるのであります。それは丁度、吾々が種子を蒔きましても、種子の中には既に花の觀念があるから、やがてその念の力で徐々に物質が一定の形式に配列されて花が咲くことになるのでありますが、その物質と云ふものを念の力で動かすのは、結局は動かして了ふのでありますが、それには可成り長時間を要しますので、却つて何時種子を植ゑたか忘れた時分に花を開いて實を結ぶこともあるのであります。斯う云ふやうに『念』の力は物質を動かすのでありますが、昔から心が肉體を動かす事實を觀察して、念が物を動かすのはどう云ふ譯であるか、無形が有形を動か

し得るのはどう云ふ譯であるかと考へました哲學者も澤山ありましたが、結局『念』と『物』とは同じ質のものであるから『念』が『物』を動かすことが出來るのだとの結論に到達したのであります。これを『生長の家』の學說で考へて見ますと一層解りが好いのであります。即ち『生長の家』では『物質は無い』と云ひます。物質と云ふ固定したものは本來無いのであつて、物質と云ふ固定したやうに見えるものは、その實『念體』である、換言すれば念が形を顯はしたものであると云ふのであります。物質が念の形をあらはしたものであるとするならば、念の力でその形が變化するのは當然のことでありますから、健康を念ずれば健康な肉體となり、病氣を念ずれば病氣の肉體となるのは無論であります。物理的心靈現象の靈媒が實驗會で實驗して見せる靈の物質化現象は、實驗室に出場した他界の靈魂が、物質よりも一層速かに『念』の力に感じて形を自由に變化するところの材質なるエクトプラズムをば靈媒の身體より抽出して、このエクトプラズムを材料とし、『念』の力によつて靈魂自身の顏貌を造るのであります。靈魂像の物質化と云ひますけれども物質化ではなくエクトプラズム化であります。だから彫刻家が物質で塑像を造り、生命力が物質で生體をつくるよりも速かに出來上るのであります。そこに出來上る靈魂の顏貌の濃厚さとか、長時間出現し得てゐるかどうかと云ふことは、その靈媒のエクトプラズムの豐富さと

エネルギーの豊富さ如何によるのであります。日本の物質化現象の靈媒龜井氏に於ては多數回の實驗中、靈魂の姿が顏から足先まで完全に物質化したと云ふ記錄はなく、大抵顏貌だけ、時には半身像位を物質化否エクトプラズム化して見せてくれたのでありますが、世界の心靈現象の記錄の中には、全身像のエクトプラズム化が發表されてゐます。最も有名なのは、クルックス眞空管の發明者たる世界的大物理學者サー・ウヰリアム・クルックス(Sir William Crookes)が研究した靈媒クック孃にあらはれたケーティ・キングと云ふ名前の幽靈は全身をエクトプラズム化して顯はれて、心臟まで規則正しく鼓動し、試みに脈搏を數へると七十五搏つてゐる。すぐ後で靈媒クック孃の脈搏を數へると、靈媒のそれは九十搏つてゐて、このエクトプラズム化した幽靈の脈搏と、靈媒の脈搏とが全然獨立して生動してゐることを示してゐたのであります。

此のやうに、心靈現象の實驗會に於ては、エクトプラズムと云ふ材料と、これを利用するためのエネルギーとが豊富にありさへすれば、短時間のうちに生動する心臟や脈搏までも備へたところの言葉を云ふエクトプラズムの人間を造ることが出來るのであります。エクトプラズムが如何に水飴又は護謨のやうに柔軟な材料であると云つても、手や機械や外形の力をもつてしては、心臟が鼓動し脈搏があり、物を云ふやうな複雜微妙な人造人間を、一二時間の實驗時間中に造るこ

とは出來ない筈であります。時としては數分間中に連續的に異る幽靈のエクトプラズム化が十數人も交代にあらはれることもあります。どうしても外形的力ではそんな離れ業は出來る筈がないのであります。だからこれは『念』の力によるとしか解釋の仕樣がない。しかし此の『念』の力で物質分子を一定の形に配列して物をつくり上げるには、物質はその組織が粗大でありますから、種子を蒔いて實を結ぶほどの時間がかゝるのでありますが、此のエクトプラズムと云ふ材料は物質に比べれば、餘程その組織が微細であるらしく、『念』の力によつて極めて短時間に、念ずる形に化せられて了ふのであります。だから、こんな實驗會で直に念の形象化を實驗して見せることが出來るのであります。

兎も角、このエクトプラズムと云ふ材料を龜井氏はじめ物理的心靈現象の靈媒達は豐富に持つてゐるのです。普通の人間にはそれが無いかと云ふとさうではない。普通の人間にも心靈學者の研究せる所によれば三重の體があるのであります。即ちこの肉體、その次にエーテル體即ちイーサーリツク・ボデイ(Etheric body)と云ふものがあり、その次に尚々一層精妙な幽體(Astral body)があるのであります。此の三重の體はいづれも、念體(念の具象化せる體)でありまして、その精妙さの異る波動が同一空間を占めて互ひに重り合つて存在し得るのであります。それは恰

度、波長の異るエーテル波動が、太陽光線に於ては互ひに重なり合つてたゞ一種の白色光線に見えるやうになつてゐますが、その實は赤色光線や、紫外線や、黄色光線等々が重なり合つてゐるのと同じで、この人體もたゞ一種の肉體に見えますが、物質體（肉體）とエーテル體（エクトプラズム體）と幽體と三種の念體が重なり合つて成立つてゐるものであつて、重り合つた結果はじめて生きた肉體となつてゐるのであります。催眠術の實驗などで肉體からエーテル體を引抜くとその部分の肉體は感覺が無くなるのであり無痛刺針など出來るのでありますが、物質化現象の靈媒がエクトプラズムを實驗會の司配靈に提供してゐる間に於て殆ど無意識狀態になつてゐるのは、エーテル體卽ちエクトプラズム體であつて、その大部分を實驗のため提供して肉體外に出してゐる爲ではあるまいかと想像されてゐるのであります。

兎も角、此のエクトプラズム體は誰にも備はつてゐるものでありますが、（肉體もエーテル體も幽體も共に一種の念體である）それを濃厚に有つてゐる人は空中談話や、卓子傾斜や、靈魂像の顯現などの物理的心靈現象を起す事が出來るのであります。肉體死後の靈魂でもこのエクトプラズムを完全に脫してゐないものは、靈媒がなくとも目に見える姿を見せたり、所謂る騷ぐ幽靈と云つて、物を動かしたり、夜間に戸障子をガタ／＼云はせたり、死の刹那に知人の所へ達して、

その家の戸障子を開いたりするのであります。吾々が肉體を脱して靈界へ行きますと、尙、しばらくはエクトプラズム體を備へてをつて、半物質化してキリストのやうに弟子と握手したりすることも出來るのであります。兎も角この三種の體はいづれも念體でありまして吾々の本體(心識の本源體――我)ではないのであります。そして此の吾々の本體たる『我』が念ずる通りの形にあらはれるのであります。例へば本體たる『我』は美術家のやうなものであつて、『念體』はその美術家の描いた畫のやうなものであります。素描のやうに先づ下書きに幽かに描かれたのが幽體及びエーテル體で、肉體はその素描の上に描かれたる繪の具で立體的に盛り上つた部分とも云へるのであります。兎も角、この『我』なる本體が想念を起しますと先づ幽體がその『念』の通りに具象化し、つゞいてエーテル體が、その通りの形となり、やがて或る時間の後エーテル體の形の通りに肉體が形造られることになるのであります。病氣は、だから先づ念によつて生じ、念がエーテル體に病的波動を生じ、それが肉體の病氣となるのですから、病人を靈眼で見るとその病氣の場所のエーテル體が黑く見えるのであります。だから『心は肉體と成る』或は『念は肉體と成る』と云ふことは眞實でありまして、吾々が病念を有てば肉體に病氣をあらはし、健全の念を有てば肉體が健康になるのは斯う云ふ順序になるのであります。で、今日の實驗では、念の力に

よつて短時間の實驗中にエクトプラズム體が變形して、靈界の人間の容貌を再現し、また靈界の人間の發聲機關を再現して其處から生前同様の聲を出すのであります。

此の吾々の本體たる『我』と云ふ心識の念ずる通りに、すべて形あるものが徐々に結成するものであると云ふことが判りますれば、そして同時に、此の個々の『我』と云ふ無形のものは、神と云ふ大本體に結び付いて互ひに一體を成してゐるものだと云ふことを悟りますれば自分の『念』の念ずる通りに此の肉體が成るだけではなく、他人の肉體もさう成る即ち他人治療も出來、更に進んでは環境一切の事物は自分の『念』の念ずる通りに先づ事物の幽體が成就し、次に物質的にもそれが成就することが判るのであります。キリストも『信じて云へば此の山に彼處に到りて海に入れよ、と云つてもさう成る』と云つてゐるのも事實であつて、ウソではないと云ふことが判るのであります。山が動くと云ふと變でありますが、地震なども『念』の力が結集して物質を動かすのでありまして、人々の惡念が凝集すれば天變地變などが相繼いで起るやうになるのであつて、末法の世になれば天災地變が起るのは其の爲で、これは神が天變地變を起すのではない。惡念の集積が自壞しつゝ、その反映として物質を自壞するのであります。

吾々が死んで靈界へ入りますと、換言すれば肉體と云ふ念體を脱いでエーテル體及び幽體のみ

となつて靈界へ入りましても、體は依然としてあるのでありますから、生前病的觀念を有つてゐた人は、或る期間そのエーテル體及び幽體に病的狀態をあらはしてゐるものであります。靈界に入ると云ふことは要するに亡くなつて了ふことではなく、靈界へ轉任することであり、悲しむに當らないのでありますが、靈界に於て肉體の滅を自覺せず、やはり肉體はあると思つてゐたり、肉體はないと自覺しても、病氣や負傷は本來無いことを自覺しなければ、輔永博士の靈魂のやうに靈界に於ても、その幽體に病氣や負傷が再現して苦しまなければならないのであります。また靈界へ轉住しての直後は、極めて修行の足りた靈魂のほかは、一時肉體を脫する際の衝動にて人事不省狀態に陷るのでありますが、意識が覺めた時既に病念の去つてゐる靈魂もあれば、生前の病氣を想出し、病苦を幻の中に再現して苦しみつゞけてゐるのもあります。併し靈界の病苦も現實界の病苦と同樣に、たゞ觀念の假作せる幻でありますから、眞理を知らしてやれば病苦頓に薄らぎてその靈魂が靈界で自由を得るのであります。次には理論だけではなく言葉で眞理を知らせると同時に靈界の病苦が癒され、夫と共と靈界にゐる祖先又は緣者の靈波を感應して病氣になつてゐた現實界の人の病氣の治つた實例を揭げます。

第四章 悟らぬ靈魂を救ふ道

龜井靈媒物理的心靈現象實驗會記錄

會　場――生長の家本部假見眞道場。(當時兵庫縣武庫郡住吉村八甲田六九五番地)
時　間――昭和八年二月二十八日午後六時二十分より約二時間。
參會者――龜井靈媒、世話役中村弘治醫師、審神者今井楳軒氏、立會人谷口氏他三十七名。

(會場は六疊二室を連ねて一室とし、雨戸を密閉したる上、室の內部より黑絨のカーテンをもつて蔽ひ、絕對に他室より光線の入るを防ぐ。龜井靈媒は正面の籐椅子に掛け、これを世話役中村醫師及び參會者中の有志者深見麗水氏麻繩をもつて兩脚を椅子の脚に兩手を背にして後ろ手に椅子の『凭れ』に緊縛する。龜井靈媒の前方にテーブル一脚。テーブルの右側にボール紙製メガホーン三本。テーブル上に人形、鈴、懷中電燈、護謨のボール、動物の玩具、自轉車の警笛など、すべて暗中に空中浮揚せる際、明瞭にその物體の形が認められるやうに燐が塗つてある。但し、懷中電燈は自ら發光し得るを以て、燐を塗らずに机上に横たへただけである。これらはすべて龜井氏自身の持參せるものなれども實驗前點檢して、物質的なる仕掛なきことを認める。但しテーブルは見眞道場備付のものを急に實驗時になりて、兩脚及びテーブ

ル面の小口に燐を塗れるボール紙を留鋲して空中浮揚を觀察し得るやうにし、他に透視用の封筒に收めたる名刺一封を机上に置く。龜井靈媒を椅子に縛りつけたる後、その精神統一に入る助けとなり、同時に空氣に振動を與ふるため蓄音器に招靈用のレコードを掛ける。蓄音器係は相互貯蓄の岡村清一氏である。レコード五枚を奏したる時、微かに敲音起る。敲音は、龜井靈媒の司配靈(Control)たる印度人行者自稱モゴール氏の靈魂の靈媒のエクトプラズムを利用して極めて低く拍手するやうな音を發して、自己がその會に出場したる合圖をするのである。世話役中村醫師話しかける。）

中村――モゴールさんでございますか。今日は『生長の家』の道場を拜借致しまして、物理的心靈現象の實驗會を催すことになりました。就きましては今日御參會の方々は大抵『生長の家』の誌友で心靈現象に豫備知識のある方々でございますが、まだ實際に靈魂はあると云ふ實驗を見た方は少いのでありますから、出來るだけ各種の實驗を見せて下さいまして肉體死後の靈魂の實在を明らかにして下さるやうお願ひ致します。

モゴール――(暗黑の空中より聲する)いばい、のりと。

中村――何でございます。いばい……ハツキリ判りません。もう一度明瞭に被仰つて下さい。

モゴール――いまゐさん、のりと。
中村――いまゐさんのりと。あゝ今井さんに祝詞をあげて頂きたいと被仰るんですか。さうでしたら敲音を一回。
（敲音が暗中に聞える）
中村――今井先生、モゴールさんに天津祝詞をあげて頂けませんか。
今井――宜しい。（今井氏『高天原に神詰ります……』と天津祝詞を奏げる。）
（空中に、直徑一寸位の桃色の灯が大きく『の』の字のやうに輪を描きながら飛ぶ。これは懐中電燈が自ら灯を點じつゝ暗中に飛ぶのである。『の』字の描く圈線の直徑は一間半以上に及ぶ。私は龜井靈媒が、緊縛せる繩を拔けて兩手で懐中電燈を操るとしたら、どうしてもこれだけの大きな直徑の圈は描き得ないだらうと思ひつゝ見てゐる。）
（次に机上の柄のついた鈴が動き出す。リン／＼と一座にそれが響く。ボールが空中を舞ふ。いづれも燐が塗つてあるので物體の形通りの姿をした螢光が暗中に舞ふのである。一つが舞うて床上に投げ出されると、次のものが空中に舞ふ。玩具の動物、警笛、人形など次々に空中に浮揚して舞ふ。）

中村――一つづつ物體を動かすと、靈媒が肉體の手で品物を振舞はしてゐるやうに疑ふ方があるかも知れませぬから、一度に澤山の品物を動かして見せて下さい。

モゴール――（空中から聲）てんけん。

中村――點檢でございますか。それでは電燈をつけても宜しうございますか。

モゴール――よろしい。

（中村氏、赤色の懐中電燈を點じて、机上を點檢し、又、龜井靈媒を點檢する。龜井氏は實驗の初に當り緊縛した儘の位置に縛られて俯向いてゐる。中村氏は床上に落下せる物體浮揚實驗用の玩具などを丹念に拾つて机上に置く。中村氏の身體は氏の持てる赤色電燈にて机の左側にある事がハツキリしてゐる。中村氏は屈んで何か拾つてゐる。と、中村氏と甚だ隔れた位置（机の前方右側）にあるボールが突然垂直に引上げられて机の表面より二寸ほど高き位置まで行き自然に下りて机上に載る。中村氏が赤色燈を點じてゐるので周圍の狀態が仄かに見える。）

一同――（叫ぶ）ボールが上つた。あれこそ本當にひとりでに上つたぞ。誰もボールに觸るものがないのにひとりでに上つた。あれこそ本物だ。

(中村氏、赤色燈を消して着座する。岡村氏蓄音器を廻す。レコードは輕やかな音樂を奏する。)

(鈴が第一に動き始め、ボール、人形、警笛、動物の玩具、懷中電燈、綱など合計六種の物品が同時に空中に浮揚し、暗黒面を背景に燐光鮮かに、各々の物品は靈媒の身體よりいづれも三、四尺以上を隔てゝ同時に動くのである。よく觀ると物體と靈媒のゐる中央位置との間にかすかな微光線がサーチライトの光線のやうに(殆ど見えない位であるが)見えるのである。此れは、靈媒からエクトプラズムの放射物が出て物體を支へてゐるのであるが、六個の物體が暗黒を背景にゆるやかな足どりで動いてゐるのを見てゐると、中央部に反射鏡でもあつて、それを、ジリ〳〵回轉すると暗黒面に光が轉回して、物體の螢光のやうな映像が映るのではないかとも疑へさうである。と、その疑を晴らすかのやうに、單に視覺にのみ見える燐光體だと思はれてゐた二三の物の形が、突如、壁の上や床の上に投げつけられて音を立てた。見えるだけならば反射光線の手品だとも疑はれるが、その螢光を放つ物體が壁の上や床の上に投げつけられて、ボールはボールの音をたて、鈴は鈴の音をたて、人形は人形の音をたてたものだから、六個一時に暗中に光體が浮揚したのは反射光線の手品ではなからうか

と云ふ疑ひは解けた譯であつた。）

黒星（青年學生）——（疊の上へ投げ出されてゐる犬の玩具を手にする）これが浮揚したのだつたなあ。

黒星夫人（學生の母）——握つては可けませんよ。放つてお置きよ。

（學生、玩具を手から離して置く。玩具の犬、ひとりでにピョン〳〵二三間跳ぶ。）

黒星——本當に跳ねるよ。

黒星夫人——種、仕掛はないわね。

中村——色々の物體を浮揚させて頂きまして有がたうございます。一つテーブルを浮揚させて頂けませんか。

モゴール——ヴアイブレーション（ヴアイブレーションとは『振動』のことである。蓄音器又は振動器で空氣に振動を與へることを云ふのである。）

中村——（電氣自働按摩器のやうな振動器でブン〳〵空氣に振動を與へながら、參會者に說明する）此のブン〳〵と云ひますのは振動器の音響でありまして、斯うして空氣に振動を與へますと、その振動エネルギーを司配靈が利用して、これで物體を動かすのであります。

（テーブルが左方へ二寸ほど滑る。）

中村――上へうんと持上げて頂けませんか。

（テーブルが上方へ一寸ほど上る。上つた儘持續してゐる。突然床上に轉つてゐた人形が床上一尺五寸ほどの空中に浮び上つてダンスする。）

中村――蓄音器を廻して下さい。×の番號のレコードです。

（レコードの奏樂につれて燐光の人形が巧妙に空中でダンスする。觀衆は二三の人の注意によりそのダンスに合はせて拍手する。空氣に振動を與へて、物體浮揚のエネルギーを補給せんがためである。突然人形は床上に投げ出される。見詰めてゐると自轉車の警笛が突然蟇の踏みにじられたやうなギヤーと云ふ聲を出す。テーブルは何時の間にか床の上に降りてゐる。）

中村――『生長の家』の愛知縣犬山支部のお世話をなさつてゐた河村章一さんが一週間ばかり前に突然昇天なさいましたについては、河村氏の靈界に於ける狀態を皆さんに知らせたいと云ふ谷口先生の御希望がありますので、河村氏の靈魂に此の席へ來て頂いて、直接談話で話をして頂きたいのでありますが、河村氏の靈魂を招んで頂けませうか。招んで頂けますなれば敲音を

一つ。

(暗中に敲音一つ聞える。)

モゴール――……(發聲不明瞭)

中村――透視ですか。

モゴール――とうし(發聲不明瞭)

中村――透視を先にやるさうです。皆さんのお書きになつたものを封筒に入れたまゝこれから暗中で透視して讀むのです。讀む通りのことが書いてあつたら『その通り』と答へて下さい。

モゴール――はやしまさとし。

中村――ありますか。林正敏。

清都――さうです。

モゴール――(讀む)はるもと……。

中村――何ですか。はるもと? はるもと――とお書きになつた方はありますか。

モゴール――(讀む)ありもと。

中村――有元と云つてゐるのですよ。

辻内――有元、私の名刺がさうです。

中村――その次は?

モゴール――(讀む)ハルキタル。

A――その通り。

モゴール――(讀む)靈魂の不滅を信ず。

谷口夫人――その通りです。確かに當りました。

モゴール――(讀む)有難うございます。尊きものよ。

B――尊きものよ――それは私です。

モゴール――むつかしくつて讀めない。木村さんに代つて讀んで貰つてもよろしいか。

(木村さんと云ふのは中村醫師の娘聟で印度で客死した人の靈魂である。モゴールの物理的心靈現象に就て靈界にゐてモゴールの靈魂の輔佐をしてゐるのである。中村醫師が龜井靈媒が大阪に來たら世話を引受けてゐるのも、娘聟の木村氏の靈魂の因縁からである。)

中村――代つて下さい。貴方木村さんですか。

木村――木村です。………(モゴールよりも聲が小さくて明瞭に聞えない。ウヤムヤのうちに濟

む。)

中村――河村章一氏の靈魂を直接談話に出て頂きたうございます。

(空氣に振動を與へるため蓄音器が談話の間には常に音をたてゝゐる。)

中村――一寸蓄音器を止めて下さい。モゴールさんの聲が聞きとれません。

モゴール――(メガホーンの中かららしく、ボヤケタ聲を出す)今井さん、のりと。

中村――今井先生、誠に濟みませんが、モゴールさんがもう一度祝詞を所望してゐる。

(今井楳軒氏の天津祝詞の聲暗中に響く。)

モゴール――いすぶゑ。

中村――何でございますか。

モゴール――いすぶゑ。

中村――(聞きとれないで)何でございます。

聽衆の中より――石笛と云つてゐるのですよ。今井先生に石笛を吹いて欲しいと云つてゐるのですよ。

今井――あゝ石笛か、吹かう。(今井氏は鶏卵大の天然石に自然の孔の穿たれたる鎭魂用の石笛を

吹く。石笛の吹奏は古來から日本では招靈用に用ひられてゐる。細く長く澄み透つた石笛の音が暗中に冴えてゐる。）

（石笛の吹奏が止む。）

モゴール――ぷーしつか。

中村――河村氏の靈魂に直接談話に出て頂きたいのでありますが。出て頂けますか。

モゴール――ぷーしつか。

中村――物質化でございますか。

モゴール――物質化。

中村――物質化を先にやつて下さるのですか。河村氏の靈魂の姿を物質化して頂けるのでございますか。

モゴール――エネルギーが足りない。長時間物質化出來るかどうか判らない。

中村――（聞きとれないらしく）何と被仰つてゐますか。（耳を澄まして）エネルギーが足りないので長時間物質化が出來るかどうか判らない。皆さんエネルギーが足りないので、長時間物質化が出來るかどうか分らないとモゴールさんが云つてゐます。瞬間的にでも宜しうございますか

ら、靈魂の物質化を見せて下さい。

（机の上で、自働的に赤色の懐中電燈が三十秒間位づつ數回點つて、部屋の一隅を照らす）

中村――あの懐中電燈の光線の先に靈魂の顏が物質化されて皆さんに見えるやうに照らし出される筈ですから、その方向を注意して居つて下さい。

（突然、光線の射す方とは別方向、龜井靈媒の上方に、有田ドラックに陳列してある病人の顏のやうなもの二秒間ほどあらはれて消え、つゞく一分間ほどは暗黑。更にまた別の顏が二秒間ほどあらはれては一分間ほど消えてゐる。觀衆の視線は懐中電燈の光線の指した方をもう見ないで、その顏の出現する方向のみを注視してゐる。それから合計六個程異なる顏が入れ代り出現して見える。）

谷口――あの額の禿げ上つた、鼻筋の高い長い顏はどうも河村君のやうでしたね。

谷口夫人――あれは確かに河村さんのやうでございました。

岡村――あれが河村さんでしたか、確か額の廣い、鼻の高くながい、顏の長い若い人の顏は僕も見ました。

C――中途で老人の顏が見えましたが、あれは私の親類の老人に似てゐました。

谷口――河村さんに直接談話に出て欲しい。

モゴール――ヴァイブレーション。(とボヤケた聲がする)

中村――蓄音器をかけて下さい。

(蓄音器、鳴り始める。暫らく鳴つてゐるうちに、テーブルが徐々に空中に浮揚し始める。)

皆々――テーブルが上る。テーブルが上つた。オヤ、テーブルが宙返りする。

(觀衆は幾分熱狂的な聲を出す。テーブルは空中で、向つて右巻きに一回轉して下におりた。)

中村――(執拗に)河村章一氏の靈魂に直接談話に出て貰つて下さい。

モゴール――今井さん、かずうたを歌つて下さい。

中村――今井先生に『數歌』を歌つて欲しいと申してゐます。

今井――よろしい。

(今井氏『ひと、ふた、み、よ、いつ、むゆ、なゝ、や、こゝの、たり、もゝちよろづ』と緩やかに歌ふ。此の數歌は招靈の時、日本では古くから使はれてゐるものである。)

中村――河村氏の聲がするやうです。

（一同、耳を澄ます。苦しさうな呻き聲が幽かに聞えて漸次近づいて來る。）

谷口――河村さんですか。

聲――（答へないで呻いてゐる、呻き聲だん〳〵近づく）

谷口――苦しいのですか。どこが苦しいのです。

聲――（呻きながら）胸が。（烈しく喘ぐ）

谷口――（河村氏は肝臟の病氣で胸の病氣ではなかつたから、これは別だと思ひながら）貴方は誰です？　河村さんぢやないのですか。

（聲が次第に城坂京子夫人と澤村正子夫人との側に近づいて來る。）

城坂――（突然發言する）私のお母さんのやうです。

城坂――（あまりに眞に迫つて自分の亡母の臨終の聲其儘なので）本當に私のお母さんです。私のお母さんです。

（呻き聲は益々近づいて城坂夫人の殆ど顏の上まで來る。）

城坂――（谷口氏に呼びかけて）先生、どう云つてあげたら宜しいでせう。母が苦しさうです。……

母さま、京子です。

谷口――お母さんは何と云ふ名でしたかな?
城坂――高橋むらと申しました。(間断なく丁度城坂夫人の上の空中で病苦に喘ぐ聲が聞える。)
谷口――高橋むら……何處か惡かつたのですか。
城坂――肺炎だつたのです。あれ、あれ、母が苦しんでゐます。先生、どう云つてあげたら宜しいのですか? 母を、母を救つて下さい。
(益〻激しく病苦に喘ぐ聲間斷なくする。)
谷口――高橋むらさん。貴方はまだ御自分が肉體を有つて現實界にゐるやうに思つてゐられますが、本當は貴方は今靈界にゐるのですよ。もう貴方は肉體を脱して靈魂だけになつてゐるのですよ。肉體が無いから肺臓も無い、肺臓がないから肺炎も無い。だから貴方が肺炎で苦しいと思つてゐるのは夢を見てゐるのですよ。今その夢を覺ましてあげる。(氣合)イェツ! もう貴方の肉體はあると云ふ迷ひは消えた。もう貴方は靈魂のみになつてゐられるのです。靈魂のみだから肉體の病氣はない、胸の苦しみはない。人間本來神の子だ、病氣はない!!……
(空中から聞えてゐた呻き聲、急に安らかな息づかひになる。)
觀衆の一――病氣の苦しみが急に安らかになつた!

觀衆の二――本當に苦しみが消えたやうですね。

觀衆の三――不思議なものですねえ、本當に靜かな樂さうな息づかひになつた。

城坂――先生、有りがたうございます。

谷口――高橋むらさん、肉體のない貴方にはもう永久に肉體の苦しみは無い。肉體のことを思ひ煩ふな。靈界にゐる貴方には現實界の使命は既に終つたのだ。現實世界のことに執着するには及ばない。神樣が今、貴方を見守つてゐられる。神樣が靈界に於てよきやうに導いて下さる。神樣の導きに從つて靈界で修行を積み、愈々高きみ位にまであがられよ。

靈魂の聲――有り難うございます。(息使ひ愈々やすらかになる。)

城坂――(息使ひの安らかな母の狀態を見て)お母さん靜かにお眠り遊ばせ。

谷口――高橋むらさん決して現實世界に執着せられますな。靈魂は永遠の向上でありますぞ。神樣は常に貴方を護つてゐられる。もう肉體のない貴方には病苦はないのですよ。たとひ病苦と云ふやうなものが、尚かすかに殘つてゐませうとも、それは肉體を有つてゐると思つてゐたときの精神的習慣に過ぎないのですから、今後速かにその殘りの苦しみも消えて行きます。決して現實世界に執着せられますな。靈界には靈界の營みがある。靈魂は永遠の向上であります

ぞ。どうぞ靈界で善き修行を積み、愈ゝ高き靈界へ上られよ。

（靈魂の聲、次第に遠ざかつて行く。）

木村氏の靈の聲――今井さん、みたましづめをして下さい。

中村――今井先生、みたま鎭めをしてあげて下さい。

今井――今の靈魂は何宗であつたかな。

谷口――クリスチヤンですよ。

今井――さうか。ふうむ。（考へて）宜しい。（嚴かに）幽世の大神憐み給へ、惠み給へ。幽世の大神憐み給へ、惠み給へ。（氣合）ウーム！

聲――（靈魂の聲愈ゝ遠ざかりつゝ）有難う……有難う。

今井――今の靈魂は救はれて往つたよ。

城坂――本當に難有うございました。母が此の席に出るとは全く思ひがけませんでした。今日は實は母が亡くなつてから十七年目の祥月命日なのです。

觀衆の一――ほう十七年目の祥月命日ですか。出て來た筈ですな。

城坂――十七年間もあの病苦の儘で、知らずに手を下さずに放つて置いたかと思ふと本當に娘と

して申譯ありません。

黒星――先生、何か私の處へ飛んで來ました。（黒星夫人の首筋の處へ飛んで來た封筒を谷口氏に手渡す。）

谷口――何ですか、これは？

モゴール――透視……（語尾不明）

谷口――これを透視すると云ふのですか。

中村――先刻透視した名刺を投げたのだと云つてゐます。

谷口――モゴールさん。河村章一に直接談話に出て貰へないですか。

モゴールの聲――（はつきりしない）

谷口――一體河村氏の靈魂は附近に招んで來てゐるのですか。

中村――河村氏の靈魂が此處に來てゐるのなら、敲音を一つ。

（かすかにラップが一つ聞える。）

中村――直接談話に出て貰つて頂けませんか。

モゴールの聲――（はつきりしない）

中村――どうも直接談話に出にくいやうですな。靈界へ行つて間がない靈魂だからでせう。

谷口――出られないなら出られないで宜しいが、河村さんは今どんな狀態でゐるのです。……元氣ですか。

モゴールの聲――元氣はないやうです。疲れて靜かに眠つてゐる。

谷口――さうですか。眠つてゐるのですか。眠つてゐれば話せないのも無理はない。いつ眼がさめるのです。

モゴールの聲――三十一日……（語尾不明）

中村――何ですか、三十一日……三十一日間ですか。

モゴールの聲――三十一……（語尾依然として不明）

中村――三十一日……何ですか。どうも充分聞きとれません。もう少しハツキリ……。聞えません。もうエネルギーが足りないやうです。モゴールさん。もうエネルギーが足りないのですか。足りなければ今日の會はこれだけに致して置きます。

モゴールの聲――タニグチさんサンキユー。イマキさん有り難う、京子さん左樣なら。

中村――それでは、もう電燈を點けても宜しうございますか。電燈を點けても宜しかつたら敲音

を一つ。

（かすかにラップが一つ聞える。）

中村――それでは電燈をつけさせて頂きます。

（中村氏赤色燈を點して龜井氏を點検する。龜井氏は椅子に縛りつけられたまゝ、俯向にぐつたりとなつて無意識狀態である。中村氏は龜井氏の緊縛を解く。觀衆立上つて龜井氏の周圍に集まりその狀態を觀察してゐる。龜井氏の昏睡狀態はまだ覺めない。）

觀衆の二――（空中浮揚の玩具の一つを取上げながら）此の人形が空中ダンスをやつたんだな。

（觀衆次第に實驗場を去り、階下の座敷に集る。）

龜井靈媒の物理的心靈現象の實驗直後、私（谷口）は實驗室に當てられた二階から降りて來て、階下の座敷で他の觀衆たちと對座した。そして懷ろに何かあつたことを思ひ出してそれを出して見た。それは龜井靈媒が透視した名刺を收めてある封筒であつた。私は皆の前で封筒の封を破つた。名刺は次の樣な順序で出て來た。モゴールは封筒に入れたまゝの順序で讀んだものである。

（順序は上層より左の通り）

林正敏。有元新太郎。ハルキタル（厚紙）。（靈魂の不滅を信ず（厚紙）。有難う御座います、尊

きものよ。篠島清作。

最下層の『篠島清作』氏の名刺は、司配靈モゴールが讀みかねて、その輔佐役たる木村氏の靈魂に入れ代つて讀んで貰はうとしたが、結局、明瞭に讀み得ず遂にウヤムヤに終つたものである。この名刺は當時北海道より生長の家本部へ修行に來てをられた篠島清作氏自身が出された名刺であるが、同氏自身『篠島』を本當は何と讀むか知らないのださうである。氏は北海道へ移住するまでは『サヽジマ』と呼んでゐたのであるが、北海道へ渡つてから、人呼んで『シノジマ』と云ふので、假りに『シノジマ』と云つてゐるが、どちらが本當だか自分にも不明だと云はれた。司配靈たる印度人が、日本語の漢字に精通する筈はないと云ふ假定から進むと、他の名刺の文字を讀んだのでも必ずしも、靈視した文字をヂカに讀み下し得たのではなく、その文字に宿る『觀念』を讀んだものであらう。即ち『有元』を『アリモト』と讀んだのも『有元』と云ふ漢字を知つてゐたためではなく、その文字に宿る觀念を讀んだものであらう。斯う解釋して行くと司配靈モゴールが名刺の他の漢字を讀み得ながら『篠島』を讀み得なかつたのは『篠島』と云ふ文字に當時絡つてゐる觀念が『サヽジマ』と『シノジマ』と兩方あるために、混雜を來して讀み得なかつたものだと思はれる。

龜井靈媒實驗會後記

此の龜井氏物理的心靈現象に於ての特徴とも云ふべきは城坂京子氏の母堂の靈魂が招靈もしないのに出現して救はれたことであります。そしてその空中談話も特に選んで其の遺兒たる城坂京子氏自身の左耳の眞上に、そして澤村正子氏の右耳の眞近に出現して聞かれたのであります。それで此の二人はその母堂の聲を最も眞近に實に其人の臨終の側に侍するが如く明瞭に聞いたのであつて、他の人達には、大變遠くにゐるやうに聞えた。これは直接談話が空中に浮揚せるメガホーンの口を城坂京子氏の左耳を特に選んでそれに近寄せて話されたので、メガホーンの口の眞近にゐる人には電話の受話器に耳を當てたやうに明瞭に聞えたが、メガホーンの口に遠き位置にゐる人には電話の話が受話器に遠い處にゐる人に對するやうに聞えが惡かつたのであります。兎も角、城坂京子氏は自分の左耳元一尺と隔たらない空中に、臨終の母堂の苦しみ、その切なさ、其儘を聞いたので、覺えず、『お母さん、京子です』と叫んだのだと云つてゐられました。

城坂京子氏の述懷によれば氏の母堂は、まだ死ぬとは思はず、遺兒のことを思ひ煩ひつゝ病ひ急に重りて靈界に移られたので、まだ他界せる自覺がなかつたのは當然であらうとのことでありました。これによつても將に靈界へ移つて行かうとする刹那の靈魂にとつて如何に正しい引導を

渡すと云ふことが必要であるかゞ判るでありませう。引導の渡し方が惡ければ、修行の足らぬまだ未發達の靈魂にとつては靈界へ移轉せる自覺がなく、從つて靈界にて依然として病的肉體を持續せる意識をつゞけ、その念に從つて幽體に病苦をあらはして、此の實驗に於て城坂京子氏の母堂が死後十七年間病苦を繼續せる如く、永く靈界に於て病苦を繼續しなければならないのであります。

では、斯う云ふ風に靈媒を通じて靈魂に話しかけないと迷つてゐる靈魂は救はれないものだらうかと云ふと必ずしもさうではないのであります。城坂京子氏の母堂の靈魂にとつては、今日あゝして現界の人から話しかけられて眞理を悟る機緣が熟したのですが、他の靈魂にとつては、靈界に於ける先輩の諸靈たちに諭されて眞理を悟る場合もあり得るのです。靈媒と云ふものはさう多數あるものではありませんし、靈媒の存在すら知らぬ人も多い。靈媒を通さなければ人間の靈魂が眞理を敎へられることが出來ないとしたならば、人間は殆ど救はれないと云ふことになりますが、そんなものではないのであります。迷へる靈魂は靈界の先輩から直接に導かれることもあり、現實界の人間から靈媒を通して、又は通さずに導かれることもあります。此の實驗に立會はれた有元氏の父君の靈魂などは、有元氏自身が靈媒も何もなしに私の勸めた方法により直接父の

靈魂を招び出して毎日佛前で『生命の實相』を說いて聞かせることにしたら靈界の父が眞理をさとつて救はれたのであります。有元氏は次のやうに云つてゐられます。

『子が親の靈を招び出すのですもの、その親の靈が出て來ないと云ふことはありませんよ。私は糖尿病にかゝつて神經痛を併發してどうしても治らない。××靈媒にも賴んで禍ひしてゐる數箇の靈魂を處分しましたがそれでも治らない。それで最後に「生長の家」に來ますと、私の親父の靈魂が靈界でまだ依然として肉體を有つてゐるやうに信じ、その信念に從つて私の父は靈界へ往つても、まだ糖尿病を持續してゐるのであるから、その父の靈魂を招び出して「肉體は本來無いから、病氣も本來ない」と云ふ眞理を說いて聞かせてやれと云はれましたので、毎日父の名を呼んでは、その眞理を說いて聞かし「生命の實相」を讀んで聞かすことにしましたら、靈界の父の糖尿病が治つて了つた。その爲にその糖尿病の念波を自分に送らなくなり、自分の糖尿病も治つて了つたのです。どうして父の靈魂の糖尿病が治つたと云ふことが判るかと云ひますと、實は私の父は糖尿病に神經痛を併發して死んだので、その父の靈魂が何とかして救はれたいと思つて、糖尿病の念波を送つてくるためでせう、その念波の影響で私と私の弟とが同時に糖尿病になつ。。。。。。。てゐたのです。それで若し父から發する糖尿病の念波で吾々に病氣が起つてゐたものならば、靈

界にゐる父の糖尿病が治つたら、私の糖尿病と弟の糖尿病とが同時に治る筈である。ところが、今日東京から大橋と云ふ親類の者が來て聽きますと、弟の糖尿病も治つてゐるんですよ。その證據人として明日はその大橋を道場へ伴れて來ますがね。當時私は自分の糖尿病が治つた時人から病氣のことを尋ねられると、「糖尿病は治り過ぎましたよ」と云ふ言葉が口癖のやうに何心なく口から飛び出してくるのでした。ところが言葉の力は不思議なものですね、實際「治り過ぎてゐた」のでして、私が治つただけではなく、靈界にゐる父と私の弟と三人一緒に治つたんですからねえ。』

これは元慶大教授有元新太郎氏の述懷談でありますが、有元氏の場合と同樣に、靈界で迷へる靈魂の悩みを解くと現實界の人間が二人同時に、同じ病氣が癒つた實例がほかにもあります。その人は大阪高商を卒業して熊本の某會社に勤務してゐられる方でしたが、或る時商用で大阪へ來られた序でに甲子園へ野球を見に行かれた。野球が終つて歸らうとすると多勢の觀覽者が一度にドツと同一の道に溢れて、身動きも出來ないやうに互ひ互ひの身體がギツシリ押しつめられたのです。その時この人は『此の儘身動きが出來ないやうに押し込まれたらどんなになるだらう』とフト思つた。此の考へはホンの瞬間的に此の人の頭をかすめただけでありましたが、それ以來

如何なる乘物に乘つても、この乘物の扉が此の儘開かなかつたら自分はどうなるだらうかと云ふ恐怖心が起つて、ゐても立つてもゐられない。その狀態は段々ひどくなつて、或る時、社用のため、自動車で數里の道をドライヴされたが、其の時も『此儘、この自動車の扉が開かなかつたら』と思ふと迚も其儘繼續して自動車に乘つてゐることが出來ないで、社用を果さずに自動車を中途で下りられた位でありました。『こんなことでは會社の仕事にも差支へる、それに此の正月休みには郷里の東京へ是非歸らねばならない。數里の道でも自動車を中途で下りねばならぬ程であるから、熊本から東京までも汽車に耐へ得ることは誠に覺束ない。何とか治らないものだらうか』と云ふ相談を九州から私の所へ寄越されました。私はその相談の手紙を見ると、『これは此の人の親類に、浮んでゐない靈魂があつて、その靈魂が現在、幽界の暗い所に幽閉せられてゐる、その幽閉せられてゐることがとても耐へがたい感じであるので、誰か自分を救つて呉れるものはないであらうかと思つて、最も親しい人にその幽閉恐怖の念波を送つてゐるのだ』と云ふことが直覺されましたから、そのことを返事に書いて『兎も角、正坐合掌して精神を統一し、自分にわざはひしてゐる靈魂よ』と呼びかけ、斯う呼びかけると必ず感應して出て來るものでありますから、その靈魂が貴方の眼に見えなくとも其處に來てゐるのであるからその靈魂に云ひ聞かせる積りで

『東京へ歸鄕したらよくお前の靈魂をしらべて必ずお前の救はれるやうに努力するから、東京へ行くまでの汽車の中で騷がないやうにして吳れ』と低聲で力強い聲で云ひきかして置いて東京へ發ちなさい。恐らく東京へ着くまでは大丈夫でせう。東京へ着いたら親類緣者で、貴方に緣の深さうな者で迷うてゐるやうな靈魂は無いか調べて、若し迷うてゐるやうな靈魂があれば墓參をして靈魂の悟りのために『生命の實相』を讀んであげなさい。若し私の云ふことが疑はしかつたら、九段の靖國神社裏に東京心靈相談所と云ふのがあつて、每月十日から三日間、靈媒で有名な中西りか女史が出張してゐて、心靈科學硏究會の淺野和三郞氏がその靈媒に立會つてどんな靈魂が貴方に障りをしてゐるか審判をして吳れるから、東京心靈相談所へ行つて私の鑑定と一致するか試して御覽なさいと薦めて置いたのであります。すると一月の中旬其の方が東京からの歸り途であると云つて生長の家へ立寄られて話されましたのによりますと、『丁度、東京へ歸つて調べて見ると、先生の被仰つたやうな親類の靈魂があつた』と云ふ譯です。此の質問者は、幼少より父母を失つて叔父の家で姉弟とも養はれてゐたのですから、其の叔父の息子卽ち從兄とは大變親しい間柄であつた。ところが此の從兄が親と意見が合はないと云ふので、親の家を飛び出して流浪してゐるうちに肺結核に罹つたのですが、親不孝で勝手に家を飛び出して血統にもない肺病になる

やうなものは鬪ひつけないと云ふので、看病にも往つてやらず、その儘病ひが重つて死んだのですが、祭も碌々してないと云ふやうな事情になつてゐましたので、その從兄が他界しても行く處へも行けず、誰かに縋り着きたいやうな氣持でゐると云ふことは在りさうなことであります。果して然らば現界にゐたとき最も親しかつた人間――即ち幼兒から一緒に育つた此の誌友姉弟に賴つて何とかして救はれたいと思ふに違ひないのですが、不思議なことには、此の誌友が上京して姉に會つて見られると、その姉も此の誌友と同樣乘物恐怖症を患つてゐて、電車や汽車などに乘つて、車掌が扉を閉めるのを見ると堪らなく幽閉の恐怖を感ずるやうになつてゐたさうであります。即ちこれは靈界の暗い所に幽閉されてゐる從兄から放送された幽閉恐怖者の念波が地上に殘つてゐる最も親しい從姉弟同士に同時に感受されて來た爲に違ひないので、若し、これが本當ならば此の靈界に幽閉されてゐると思はれる靈魂が、人からお經を誦げて貰ふとかお供養をして貰ふとかしてその靈魂が救はれた曉には、幽閉恐怖の念波を現實界の此の姉弟に送らなくなるから、此の二人は同時に幽閉恐怖症から救はれねばならない筈です。ところが此の誌友が、私の指示した通りに此の靈魂を供養した時、此の二人の乘物恐怖症が殆ど全部治つてしまつたのでありました。これは此の誌友が來られての實話なのですから間違はないのであります。

此實例でも判る通り『生命の實相』を讀んで尙完全に治せざる醫療不治の慢性病が家族中にある場合には、祖先の靈魂中、靈界に於て尙悟らず生前の病苦を繼續せる者よりの哀願の念波の感應せる場合が多いのでありますから、祖先を祭祀せる佛壇、御厨子などの前にて『某々家祖先代々親族九族一切の諸靈よ、庶幾くは「生命の實相」の功德により靈界にて悟りを開きて無限向上の道に入り給へ』と念じて後『生命の實相』中の聖經『甘露の法雨』を每日朗讀し、その實相篇、それから本書の光明篇を順次讀經のつもりにて朗讀せらるれば、靈界の先祖緣者の苦惱消え、現界の病人も治る例が多いのであります。

第五章　幽明の境を超ゆる念の感應

場　所——兵庫縣武庫郡住吉村八甲田、當時の生長の家本部。

談話者——谷口雅春氏（生長の家本部）、有元新太郎氏（元慶大教授）、中畑氏、中村十四馬氏（上海印刷公司）、南喜久雄氏、久村慶一氏（拓植學校卒業生）、佐瀬君子氏、龜井潔人氏、其他。

有元——十八日は家内の母親の命日でしたので、私は本來眞言宗で、眞宗のことは知らないのですが、家内の祖先はズット眞宗でしたので、大阪の眞宗のお寺から坊さんを招いて三部經をあげて貰つたのでありますが、その坊さんを捉へて眞宗では臨終に『引導』を渡すかと云つて問答を始めたのであります。その坊さんは眞宗では引導なんか渡さぬと申しました。

中村——禪宗では引導を喧しく云ひますねえ。

有元——眞宗では彌陀の四十八願を基として教へを立てゝあるので、その四十八願のうちでも第十八願が中心となるので、それには斯う書いてあると教へて呉れましたので寫して來ました。

設し我れ佛を得たらんには十方の衆生、至心に信樂して我國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗するとを除く。

此の乃至十念せんにとあるのは何故『十念』しなければならぬのか。『一念』では可かぬのかと申しますと、此の第十八願の願成就の文には『諸々の衆生ありて其の名號を聞き、信心歡喜して乃至一念し、至心に廻向して彼の國に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て不退轉に住せん』とありますので、一念でも十念でも好い、至心に阿彌陀佛に心を廻向すれば『彼の國』即ち極樂淨土に生れて、もう退轉することはない。だから別に『引導』と云ふやうな自力的な業と云ふものは要らないと云ふのでありました。その坊さんの云ふのには、眞宗は絕對他力である、淨土宗では、衆生、佛を憶念すれば佛衆生を憶念すであるけれども、眞宗では衆生が阿彌陀佛に廻向するのではなく、阿彌陀佛が衆生に廻向する、阿彌陀佛の衆生を救つてやりたいと云ふ願ひが廻向して、衆生の心に『救つて欲しい』と云ふ願が生れてくるので、自力と云ふものは少しもないのださうであります。

谷口――佛と衆生、衆生と佛と相對的になつてゐて、佛が衆生に廻向すれば、衆生が佛に廻向する。『救つてやらう』と佛が思へばその思ひがこちらへ廻つて來て『救つて下さい』と衆生が思ふのでは、まだ〳〵本當に絕對他力だと云へませんね。そこには佛と衆生と云ふものが相分れ相對立してゐる。『生長の家』は今貴方の被仰つたやうな眞宗よりも、もつと絕對他力なの

ですねえ。此の絶對他力と云ふ言葉は在來の習慣で使つて見たのですが、元來、絶對他力と云ふ言葉からして訝しいぢやありませんか。絶對とは對立が無いと云ふことであり、對立がないとは自他が一體で自力とも他力とも、そんな區別が無いことではありませんか。本來『ほとけも衆生もなかりけり。』そのまゝで救はれてゐる。救はれてゐると云ふ言葉も、救はれてゐない狀態があると云ふ狀態を假想して、その狀態に對立させて云ふ言葉だから矢張り相對的の言葉になつてゐる。救ふも救はれるもない。人間は本來『神』であり『佛』であるから、そのまゝそのまゝで可い。實相に氣が着けば好いのです。

有元――眞宗では、絶對他力と申しまして、自力的なことは觀法も供養も修行も何も要らない。私は淨土宗と眞宗とは本來同じものかと思つてゐたのでありますが、昨日坊さんに聞いて見ますと、淨土宗はまだ自力的なところがある、佛に衆生が憶念して貰ふために、衆生の方から佛を憶念して念佛を常に相續して斷たないと云ふことが必要である。ところが眞宗ではそんな必要がない。臨終の一念たゞ『南無阿彌陀佛』と念ずることによつて極樂淨土に往生することが出來ると云ふのです。

谷口――さうですねえ、淨土宗の開祖法然上人は『念佛三萬遍』と云つて一日に三萬遍づつ念佛

をお稱へになつたと聞いてゐますが、必ずしも數多くとなへなければ效力がないと云ふ意味ではないでせう。

有元——ところが眞宗では、そんなに念佛を常に斷たないと云ふやうな必要はない、臨終の一念に一言でも『南無阿彌陀佛』と念じたら、たゞそれだけで極樂往生疑ひなしと云ふのであるから、船に乘つて大洋を航行してゐる最中に壽命が終つても、臨終の一念たゞ『南無阿彌陀佛』と念ずることによつて極樂淨土に救ひとつて頂けるのであるから、『引導』を渡して貰ふと云ふ必要は眞宗には更にないと云ふのであります。

谷口——成る程。

有元——ところが、眞宗で喧しく云ふのは、至心に信樂して淨土に生れんことを欲する。その『至心』と云ふことが大切なのですなア。その至心はどうして得るかと云ふと、善知識を得てその說敎を聽聞すると云ふことによつて得られる。眞宗は絕對他力だと云ふけれども、說敎を聽聞して、至心を喚起して臨終に一念念佛すると云ふこと位は自力でやつて貰はなければならぬとその坊さんは云ふのです。

谷口——では、生きてゐるうちに善知識に遇ふことが出來ず、臨終に一念の『至心』を起すこと

が出來ないものはどうなるのですか。

有元――それは私も訊いたのですが、さう云ふ者は地獄へ墮ちるほか致し方がないとその坊さんは云ふのです。

谷口――それを救ふ道はないのですか。

有元――その坊さんの說く眞宗では、それを救ふ道はないのですなア。

南――そんなことはない。若しさうならばその坊さんは何のために佛前へ三部經をあげに來たのですか。

中村――それは、お金を儲けるためでせう。

南――そんなことはない、さう云ふ者が如何にしたら救はれるかと云ふことが『觀無量壽經』に書いてあるのぢやありませんか。

中村――『觀無量壽經』にどう書いてあるかどうかは私は知りませんが、眞宗の坊さん自身が眞宗のことを說くのだから間違はないでせう。

南――眞宗の坊さんだとて必ずしも眞宗の正說を理解してゐると定つてゐないと思ひます。

中村――どうも其の坊さんは靈界の存在が解らないのぢやありませんか。だから死んだものに眞

理を說いて聞かしても聞えないと思つてゐるのでせう。死んだものには三部經を說いて聞かしても聞えないから、臨終までに善知識に會つて『至心の一念』を起して置かなければ救はれる道がないと思つてゐるのでせう。斯う云ふ解らない坊さんが澤山あるのですから臨終までに善知識に遇うて『至心の一念』を起さねば救はれないと云つても、却々その善知識なるものに會へない譯ですねえ。

谷口――眞宗で『臨終の一念』を尊ぶのは無理のないことであつて、臨終に『我れ靈界に移る』と云ふ自覺なしに他界しましたら、死の刹那の衝動で一時無意識狀態になつて眠つてゐる靈魂が、靈界に來て眼を覺ますと、自分はまだ生きてゐると思ひ、生きてゐると思ふから、自分の肉體は病氣であつたと思ひ出し、その念の作用で肉體の病氣を再現し靈界でいつまでも病苦を繼續してなかなか極樂成佛が出來ないと云ふことになるのです。だから臨終の一念は大切である。併し臨終の一念に『我れ今靈界に移る』と云ふ自覺がなければ死んで了つてからは救ひやうがないと思ふのは間違つてゐる。現に死んでから長い間苦しんでゐる靈魂が『生命の實相』を說いて聞かされて救はれた實例は澤山あります。死んでからでも說敎經文を聽聞することが出來、それによつて悟りを開くことが出來るのであつてこそ、死後坊さんを招いて三部經をあ

げて貰つたりする根據があるのぢやありませんか。

中村――生長の家上海支部の鈴木さんが青島の藤倉夫人を靈媒として、死んだ息子の靈魂を招出して『お前は死んでゐるんだよ』と敎へてやると『イヤ、私が死んでゐるつて、そんな馬鹿なことはない。私はお父さんの方が死んで了つたのだと思つてゐる。お父さんの家へ歸つて、お父さんを探して見たけれども、どうしてもゐないから、これや、私の留守の間にお父さんは死んで亡くなつたのだと思つてゐた。』と云つたさうです。それで鈴木さんは『あの家は引越したんだよ。いまは文路にゐる』と云ふと、『さうかなア。不思議だなア。私はお父さんの方が死んで了つたのだと思つてゐた』と頓珍漢の返事をしたと云ひます。それで『お前の葬式をした寫眞まで撮つてあるから、今度それを持つて來て見せよう』などと色々諭しますと、だん／＼自分は肉體が死んで靈界にゐると云ふ自覺が出來て來たと云ひます。こんな譯で死後その靈魂を招んで、お經をあげてやると、お經の意味は兎も角として『自分に對して御經をあげてゝ呉れる。それぢや自分は病氣してゐたが、もう死んだのかなア』と云ふ自覺が出來て、その靈魂が救はれる第一歩を踏むと云ふことになるのです。

谷口――臨終にまだ本人が意識のあるうちに、至心に成佛の一念を起すやうに眞理を說いてあげ

ることが出來れば、それに越したことはありませんが、不幸にして自分が他界することを自覺せず、臨終の衝動で靈魂が無意識狀態に陷つて或る期間眠つたのち眼を覺ます。その時に『今汝は物質世界を去つて靈界にゐる。汝は肉體でないから、もう病氣はない。汝はもう物質界の生活者でないから物質界に執着しない。』と云ふことを悟らしてあげれば、初めて、その靈魂は生前の病氣が治り、物質世界への執着が消えて靈界生活の中で向上の一路をつゞけることが出來るのです。靈魂が『浮ぶ』と云ふのは物質世界への執着の絆が切れて、完全に靈界生活の上へ浮び出して行くことです。

有元――私は此の二月廿八日に道場の二階で龜井靈媒に出て來た城坂京子さんのお母さんの靈魂が死後十七年間、臨終の肺炎の苦しみを有ちつゞけて其席に顯はれて來られた。すると私の隣りにゐた城坂さんが『私のお母さんです。どうしませう。』と云はれる。『兎も角、貴女の名前を云つてあげなさい。』と私が云ふと『母さま、京子です、京子です』と云はれた。頭の上のところで激しく苦しむ息遣ひがしてゐる。城坂さんは『どうしませう、どうしませう』と云はれる。今井先生が『生前は何宗だつたのですか』ときいて、『キリスト敎でした』と城坂さんが答へると、今井先生は神道だものだから、『あゝキリスト敎か』と云つて一寸困つた風をしてゐられ

た。すると谷口先生が『肉體は存在しない』と云つて實相を說いてお聞かせになつたら、急に靈魂の病苦が和らいで『左樣なら、有り難う、有り難う』と云つて去つて行かれた。あの事實を見たら、もう死後の靈魂の存在と云ふことも、悟らぬ靈魂に病氣が存續すると云ふことも、『病氣が無い』と悟れば、もうその靈魂に病氣が無くなると云ふことも疑ふ餘地がありませんね。理窟ぢやない、事實なんだから仕方がない。

南――『左樣なら、有り難う』と云つて去つて行きましたかねえ。

澤村――あの時は、私は城坂さんのお隣りにゐましたので私と城坂さんとの丁度間の、今にも觸れさうな間近に來て、苦しい苦しい臨終の聲が聞えたのでございますから、私は可怖くて慄へながら城坂さんの手にしがみついてゐたのでございますわ。

有元――あれを見たら、死んでから經文を讀んでも聞えぬとか引導を渡しても聞えぬと云ふものではないと云ふことが端的に判りますなア。迷妄を照破する『實相の念』を以て谷口先生のやうな善知識が、實相を說いて下さつたら、どんなに死後迷つてゐる靈魂でも悟りを開いて靈界で自由を得ると思ひますねえ。併し、死んでから引導を渡しても聞えないと思つてゐるアヤフヤな信念の僧侶や、引導の渡し方も何も知らない基督敎の牧師に葬式をして貰つたのでは中々

その靈魂が悟れるかどうかゞ分らないですよ。

谷口――城坂さんも、自分の母の靈魂を十七年間死を自覺せしめないで苦しめてゐた體驗で、現在の基督教會で行ふ葬ひのやり方に何か缺陷があるやうに思ふと云つてゐられました。

南――吾々は生前でさへも、支那文のお經の棒讀みではその意味が明瞭に分らないとすると、死んでからもお經の棒讀みを聞かされたとて悟りを開くと云ふ譯には行かないでせう。やつぱり死者の靈にお經をあげて聞かせるのは、判り易い文章に書き直して聞かせる方が好いのでせう。

中村――眞宗では棒讀みの御經を依然としてあげてゐますか。日蓮宗では近頃は決して棒讀みの御經をあげません。皆訓讀の經文です。

谷口――其處に『生長の家』や『生命の實相』の價値がある譯で、釋迦の說いた、またはキリストの說いた眞理をば、直譯ではなく、現代人にでもハツキリ判るやうに近代的知識を平易に織り交ぜながら、生命の實相の眞理が說いてあるので、それを佛前で讀んで聞かせれば、祖先緣者の靈魂が悟を開いて救はれることになるのです。

有元――私の親父は黑住教でありましたが、ひどい糖尿病に神經痛を併發して死んで了つた。その靈魂が救はれたいと思ひ子孫に念を送つたのです。その念が、まだ靈界で糖尿病を持續して

ゐる人の念であるから、その念波を受けた息子の私と私の弟とが同時に糖尿病になつてゐたのであります。私の糖尿病は『生長の家』へ來ますと直ぐ治つたのでありますが、私の弟は東京に住んでゐて『家の光』と云ふ農村に讀まれる雜誌を出してゐる。農村へ出る雜誌ですから隨分賣れる雜誌なのです。

中村――『家の光』と云ふ雜誌ですか。あれなら農村到る處で見られますから、隨分部數が出てゐるでせう。

有元――詳しいことは知りませんが十四五萬は出てゐると云ふことですが、糖尿病で苦しんでゐては働きが出來ないから是非治してやりたい、弟の病氣を治すにはその本源の靈界にゐる亡父の糖尿病を治してやらねばならないと思つて、每日『生命の實相』を佛前で亡父の靈魂を招び出して讀んで聞かせることにしましたら、近頃、大橋と云ふ親類の者に聞いて見ますと、弟も糖尿病が治つて了つて、近頃では元氣に諸方に講演などをして步いてゐるさうです。

南――靈魂が無意識になつて眠つてゐると云ふのはどうなつてゐることですか。

谷口――死の刹那の衝動で我と云ふ『統體』が攪亂されてゐて『統體』としての意識が出て來ないと云ふことです。つまり人間の『我』と云ふ意識と云ふものは『統體』としての意識であつ

て『統體』を構成してゐる色々の要素の離れ離れの意識ではない。それで死の刹那のショックで『統體』が攪亂されると、統體としての意識がないから、昏睡狀態をつゞけてゐると云ふ譯です。低級の靈魂ほど此の昏睡狀態の期間が長いのです。

南――昏睡狀態をつゞけてゐる者には病苦も何もないでせうから、一層低級の靈魂になつて何時までも無意識狀態を續けてゐる方が幸福かも知れませんねえ。

谷口――さうはまゐりません。『我』と云ふ統體の攪亂が囘復して來ますと、其處に『統體』の意識が囘復し『我』と云ふものが再び目を覺ますと、まだ現界にゐると思ひ再び病氣を思ひ出すものはその病氣を再現すると云ふことになるのですねえ。だからその統體としての意識が囘復した時に、汝は靈界にゐるのであつて最早や現世的存在ではないから、現世に執着すべき何物もないと云ふことを教へてやる必要がある。これが死後の靈魂に尙、經文を讀みきかせたり引導を渡したりする必要がある所以です。

南――人間が眠つて無意識狀態であるとは、どう云ふ狀態なのですか。

谷口――今申しました通り『我』と云ふ統體が、臨終のショックで攪亂されてゐる……

南――いえ、私のお尋ねするのは普通に吾々が睡眠して肉體が無意識になつてゐる時に、靈魂は

どうなつてゐるのかと云ふことでございます。

谷口――あゝ、生きてゐて睡眠してゐる時ですか。その時には靈魂の大部分が靈界に出遊して靈界の或る營みに從事してゐる。そして其の靈魂は肉體には僅かに、この後頭部のところに靈線でつながつてゐるだけなのです。此の靈線が切れたら肉體は死んで了ふ。この靈線がつながつてゐる間だけ肉體は生きてゐるのです。肉體そのものは物質であるから意識がない。意識があるのは靈魂が肉體を使つてゐるからなのです。睡眠中人間が無意識であるのは、意識の『座』である靈魂の大部分が靈界に脱出して肉體を使用せずに靈界の營みをつゞけてゐるから、無意識であるのです。併し、靈魂の一部分は肉體に殘つて哨兵の役目をつとめてゐるから、何か危急の事變が起れば、その靈線を通じて靈魂の本體にその事變を通信するから、たちまち靈魂全體が歸つて來て肉體が目を覺ますのです。

南――私は、よく夢を見るのですが、夢を見ないやうになりたいと思ひますが、一體夢と云ふものはどう云ふ譯で見るものでせうか。

谷口――夢を見ないと云ふ人は決してないのです。たゞ人により、夢によつて、眼を覺ましたとき覺えてゐる夢と、眼を覺ましたとき忘れて了ふ夢とがあるのです。女性は男性よりも夢をよ

く覺えてゐる傾向がありますが、必ずしも全部さうだと云ふ譯ではない。吾々自身の經驗によつても、突然眼を覺まさせられると、確かに或る夢を見たと云ふことだけは覺えてゐるのに、どう云ふ夢を見たか、それをどうしても思出せないことがあります。だから思出せないから夢を見ないと云ふ證據にはならない。それと同じやうに吾々に前世の記憶と云ふものが少しもないから、前世は存在しないと云ふ證據にはならない。突然急激に非常に異つた意識層へ出ると前のことをどうしても思ひ出せなくなるものなのです。吾々の眠りと云ふことが、單なる昏睡ではなく、靈魂が靈界へ出遊して或る經驗を積んでゐると云ふことがわかると、睡眠中に靈魂が體驗したことはすべて夢として經驗してゐるのですけれども、急激に靈魂が肉體腦髓に歸つてくるために、肉體腦髓の意識層と、靈魂の意識層との連絡がとれないためにその夢を忘れて了ふやうになつてゐるのです。ところが、肉體が熟睡してゐない時には、睡眠中と雖も靈魂の三分許りは肉體の腦髓に殘つてゐるので、その肉體の腦髓を使つて色々と物を考へるから、その考へが形象化され、夢となつて記憶に殘つてゐると云ふことになるのです。だから夢に見たことは、どんな雜夢でも必ずその夢を分析して行けば自分の念が具象化した夢になつてゐる。或る人を非常に憎んでゐると假定しますと、その人の葬式に參列したりしてゐる夢を見ること

がある。ところがそれは正夢かと思ふと、さうではない。却つて相手がピン〳〵生きてゐると云ふやうな場合がある。さう云ふ夢を分析して行くと時として吾々が潛在意識で『あいつは死ねば好い』と思つたその假りそめの願望が、夢の世界で實現したりしてゐることがよくあるのです。こんな夢は逆夢と見られるけれども、潛在意識の『希望實現の夢』なのですから逆夢ではない、正夢と見るべきものです。また時として『あの子が死んではならない』と思つて、愛する子の死を非常に恐れてゐると、その子の死ぬ夢を見てハッと吃驚して眼を覺ますなどと云ふこともある。併しその子は達者であつたと云ふと、その夢も逆夢のやうであるけれども、恐怖で心に描いたものが夢に形象化してあらはれたと見れば、念が形に化した正しい夢だと云はなければならないでせう。

南――私は先月の廿九日に、ある知人の夢を見たのです。その知人のゐる部屋に電燈が明か〳〵と點いてゐたのに急にその電燈が暗くなつて非常にあたりの空氣が陰慘な色合になつたかと思ふと、電燈が今度はランプに變つて益々暗くなつて、將に燈の消えんとする前であるかのやうに、その光が明滅する。その狀態があたかもその知人の運命を象徴してゐるやうに思ひましたので、氣にかゝりましたから、その知人に手紙で問合はせてやりましたら、その日のその

時刻には本當に今將に危險狀態と云ふ所まで往つてゐた、併し、それから徐々に回復したから安心してくれと云ふ返事が來ました。先生は夢と云ふものは心に念ふ念が形象化するのだと云はれますが、この知人は前には非常に親しい間柄でしたが、こゝ數年間、忘れて音信せずにゐたのですから、別にその人を想ふ念が形象化してそんな夢を見た譯ではありません。斯う云ふ夢はどう解すべきでありませうか。

谷口――死の瞬間とか、非常な災難の瞬間とかに親しい人に、その危急を傳達する念波を送ると云ふことはよくあることで、死の刹那の幻覺として、フラマリオンなんかゞ無數にその實例をあげてゐます。

南――親しいと申しましても、別に親しいと云ふ程ではなく數ケ年音信せずにゐましたのですけれど……。

中村――だけど、そんな夢を見て直ぐ手紙で安否を尋ねたくなる程でしたら、やはり餘程親しい間柄だつたに相違ありませんねえ。

南――以前は非常に親しい間柄だつたのですけれども……只今は……

谷口――現在意識の世界では殆ど忘れようとしてゐたけれども、潛在意識と潛在意識とでは非常

に強く結ばれてゐたのでありませう。二人の精神的リズムはその奥の底では互ひに繋がる一つになるものを有つてゐたのでせう。だから、一人の心に危急のショックが起つた時に、もう一人の心にその念が感受された。その念が念そのまゝでは形にならないから夢にはならないけれども、念は形に化する法則で象徴化して、燈火の將に滅せんとするやうな光景を夢見られたのでありませう。

久村――僕は以前に親類の人が死んだ夢を見たことがありましたが、三日程するとその人が本當に死んだ。往つて見ると、その部屋の光景がまるで僕が夢に見た通りなんです。蒲團の位置から、死體の向き具合から、枕元に置いてあるものや、電燈の位置までも同じなのです。これには僕も驚いちやつたですねえ。

谷口――既にその人の死は數日前又は數ケ月前から心の世界で構成せられ、それが現實世界に投影し映寫されて來るのですから、此の世界は心の影に過ぎないと云ふ譯ですなア。心の世界に既に存在すればこそ、それを夢で見たり、靈能者は時として覺めてゐても未來に起る事件を感知して豫言することが出來るのです。無いものはそれを感知することが出來る筈がない。未來に起る事件を豫言すると云ふことが可能なのは、それは既に現實世界に先行する何處かの世界

に、その事變の模型と云ふ樣なものが存在して、その模型を感ずると云ふことよりほかに說明の仕方がない。だから吾々は現實世界をよくしようと思つて、それに直接働きかけても無駄である。或る人の死は久村さんの夢のやうに三日前に、その部屋の位置まで精確に定まつてゐると云ふやうなものです。だから現實世界をよくするには、現實世界に先行する世界、模型の世界、フイルムの世界をよくして置かなければならないと云ふのです。此の模型の世界、フイルムの世界と云ふのは念の世界なのです。念の世界に起つたことであるから、吾々の念に感受してそれを知ることが出來るのです。大抵念の世界で既に出來上つて了つたことは、それを神の强烈な念波で修正を加へられない限りは現實界に寫象して出て來るものなのです。こんな話があります。瀧さんが此の夏生長の家道場へ修行に來てをられた。瀧さんは今は東京の××社に勤めてゐられますが、以前には京都の大谷大學に勤めてゐられた。その頃生長の家誌友に紹介された安達幸子と云ふ方があります。この方は、もう二十年間も天理敎を御信仰になつてゐまして靈覺のある方である。この夫人が夢を見ると、必ずそれが實現するのです。例へば、雞が犬に取られた夢を見ると、その夢に見た通りの恰好に雞が犬に取られて食べられて了ふのです。三人お子さんがありましたが、二人まで子供を病死せしめられた。その時にも必ず

死の世界から子供を迎へに來る夢を見るのです。一人の子供を死の世界から迎へに來る夢を見たら、その一人の子供が間もなく病氣にかゝつて死んで了つた。すると、又その次の子供が死の世界から迎へに來る夢を見たら、今度も直ぐ、その次の子供が病氣になつて死んで了つた。これは、子供が病氣になつたので死にはしないかと恐怖して、そんな夢を見たのではないのです。子供が達者なうちに、その子供が死の世界から迎へが來る夢を見ると間もなく、その子供が病氣になつて死んで了ふのです。もうあとには一人しか子供がない。ところがまたその子供を死の使ひが迎へに來た夢を見たのです。『どうぞ今度の子供だけは死なさないで置いて欲しいから、谷口先生に何とか頼んで下さい』と云つて安達夫人から瀧さんへ手紙が來たのでありました。瀧さんはその手紙を見せて私に指示を仰がれましたが、その結果を見ないで歸京せられました。何しろ安達夫人は、既に心の世界で起つて了つた子供の死のフイルムを御覽になつたのですから、當り前ならそれが實現しないことは難かしいのです。果してそれが實現しました。數日しますと安達夫人からその夢に見た子供が、昨日まで達者であつたのに急に腦膜炎に罹つて重態になりました。醫師も、もう醫術では難かしいから『覺悟をして神さまを拜むなり、信心するなり何なとしてくれ』と云ひますから、もう一度神樣のお力で今度だけは救けて頂きた

いと申して來られたのであります。それでこちらからも神に祈つて遠隔治療し、安達夫人にも病兒の枕頭で熱心に神想觀をして頂くことにしました。ところが、その病兒が、もう駄目と云ふ處まで往つて、急に生き返つたのです。心の世界で既にその子の死のフイルムが出來上つてゐて九分九厘まで現實界に映寫し出されたのでありますが、それが神の強烈な修正の念波で修正されたので再び生き返つたとより解することは出來ません。併し、神による運命の修正は必ず有るとは定まつてはゐません。本人の靈魂、周圍の人達の靈魂の向上にその方が善いと云ふ見極めがついた場合に神の修正が加へられるので、自分が不思議に治つたら『アノ人も治してやつてくれ、アノ人も治してやつてくれ』と云つて知人の病人の名前をみんな云つて來られる方がありますが、そんなに無闇に神の修正の手は加へられるものではないので、病氣の本人にしても、その時治る方がその人の靈魂の救ひになるか、その時靈界に移轉して了ふ方がその人の靈魂の救ひになるかは、神樣がチヤンと見透した上で修正の念波が送られる譯で、我儘勝手な願ひがすべて通ると云ふ譯ではないのであります。

久村——念が感應すると云ふ事實は、私がまだ學校へ往つてゐた時分、電車に乘つて友人に『今日はあの人を此方へ向かせて見ようか』と云つて一人の人を定めて置いて、自分はジツと思念す

ると、その人が必ず私の方へ向くんですね。無論、人と云ふものはこちらを向いてゐませんでしても、こちらからジッと見詰めてゐますと、漠然とそれが見えるから、見詰めてゐる人の方を向くのは不思議ではないのですが、その人の方を見詰めないで、外方を向いて思念しながら友人にその人が私の方を向くか見とつて貰ふのですね。矢張り必ず私の方を向きますよ。念の感應と云ふことは爭へない事實です。

谷口――佐瀬さんは先月、祖母さんと、その妹さんのお亡くなりになつた時に、念の感應があつたと云ふことをお話しになりましたね。

佐瀬――えゝ、ございました。あの時は子供も主人も私も夜半に不思議に目がさめて親戚の者が死んだのだなと云ふ感じを受けたのでしたが、果してさうでございました。唯今も今度は先生が私にお聲をおかけになると感じました。果してさうでございました。念の感應でございますねえ。

澤村――私にもよくそんなことがございます。私が問題を有つて先生とこへお伺ひした時に限つて、『澤村さん、問題は?』と先生が被仰いますし、問題を持つてゐない時には先生は默つて被居います。

谷口――『噂をすれば影』と云ふ諺なども、念の感應を現したものですねえ。噂をしたから來たのではなく、その人の念が豫め來てゐるから、其人のことを思ひ出して噂をするのですねえ。『まじなひ』と云ふものは大變面白いものですね。先日、陸軍科學研究所の山田櫻さんが大變面白い『まじなひ』を教へて下さいました。

B――どんな『まじなひ』ですか。

谷口――蛤や色々の貝を食べる時に、その貝殼に貝の柱がひつゝいてゐて中々とらうと思つても離れないことがありますねえ。あの時に貝の柱を突つゝくことを止めて、貝殼を裏返しにして、貝の柱が此處にあると思ふ邊の貝殼を外側から三遍箸の先で、丸く撫ぜて置いてから、貝の柱をつまんでとると綺麗にとれるんださうです。それは山田櫻さんが誰からか教へられて、最初はそんな馬鹿らしいことは無いと思はれたのださうですが、自分でやつて見ると、氣持よく貝の柱がとれるので、科學者の山田さんも、世の中には理外の理と云ふものがあると思つて感心せられたのださうです。これを念の感應として考へれば容易く解釋がつくと思ひます。蛸壺へ這入つた蛸を出すには壺の口から手を入れて、蛸の頭を摑んでは壺に吸ひついてゐて、イツカナ離れないのであるが、壺を裏返しにして壺の裏をコン〳〵と叩くとすぐ蛸が這出るさう

です。それと同じく、貝も熱い湯に入れられて將に死なうとする時、その死の刹那の强い念で貝の柱が貝殼に一所懸命しがみついてゐる。それは念の力でしがみついてゐるのだから、貝殼を反對の方から撫でて蛸を逐ひ出すと同じやうに、貝殼を放れよと云ふ念を送ると離れるのでせう。

久村——疣をとる『まじなひ』にはお盆に佛様に供へる『おきやら』とか何とか云ふ白い棒がありますねえ。あれを箸にして疣をつまんで捨てる眞似をすると不思議に治るものです。

増田——私の國（靜岡）ではお寺へ、タワシを供へて拜んでからそのタワシで洗ふと必ず疣が治ると云はれてゐます。そんな馬鹿なことはないと私は思つてゐたのですが、皆が實際それをやつて見て『治つた、治つた』と云つてゐるのです。

谷口——私は小學校時代に、一里程も隔てた學校へ田圃道を通つて通學したものでしたが、途中の溝や畦に蛙が澤山ゐたので、草の葉を小さく丸めたものを括つてぶらさげて小蟲のやうに見せかけて、蛙を釣つたものです。釣つた蛙を可哀相に石の上に投げつけたりして澤山殺しました。すると身體中に疣が出來て來ましたねえ。そいつには氣持が惡くて弱つたものでしたが、『お前は蛙を殺すからこんなになるのだ』と母から敎へられて、もう殺さないやうにしてゐま

すと、一年ばかりのうちにすつかり治つて了ひました。今から考へて見ると蛙の怨みの念波が來てゐたのですねえ。しかし悪念と云ふものは、ほつて置けば自然に自淨して『無』に歸して了ふものだから、怨みの念波の自淨と同時に疣も消えて了つたものだと思ひます。

久村――私も泉水にゐる蛙をいぢめて脚一杯に疣だらけになつたことがあります。これは『まじなひ』で治りました。

有元――『病氣が無い』と云ふことは疣を見れば最もよく判りますねえ。吃逆などでも、私は頸にハンケチを捲くと治ると敎へられてゐるから、吃逆が起ればハンケチを捲くと治ります。治ると思ふから治るのですねえ。

久村――吃逆を治すのには吾々は茶碗に水を入れて箸を十文字に渡し、その箸の四方の間隔から水を一口づつ飲めば好いと敎へられ、その通りにしたら治ります。

谷口――子供の時から、かうしたら治るのだと強く敎へられ、それが潛在意識に滲み込んでゐる時には、その通りしたら治るのです。藥を服めば治ると云ふことでも、それは精神的には一種の『まじなひ』だとも云ふことが出來ます。どんな方法にでも、『これなら治る』とその人が潛在意識の底の底まで強く信じ得れば治るのです。治らないのは其の方法にまだ疑ひをもつてを

り、『これなら治る!』と云ふ其人の思ひ方がまだ弱いからです。本來『病氣は無い』のだから『これなら治る』と強い強い信念を起して治らない病氣は一つもない。すべての方法はたゞその人に強い信念を喚起する媒介になるだけです。たゞその方法が、甲には強い信念を喚起し得ても、乙には強い信念を喚起し得ないから、治ると治らないとの相異を生ずるのです。要するに、何らかの方法で病氣を消滅し得るのは本來病氣は『無い』からで、その『無い』と云ふ事實を現す方便となり、媒介となるのが『まじなひ』なのです。『まじなひ』とは『魔事無い』だと黒住教祖は云ひましたが『惡しき事は本來無い』と云ふ事實、『魔事は無い、存在せず』と云ふ事實を現す方便が『まじなひ』なのです。魔事はない、惡はない。無いから消える。無いものを有ると思つてゐるのだから消えるのです。

有元――私の親父は黒住教でしたが、宗忠公が『まじなひ』を『魔事無い』と註されたと云ふことは初めて承りました。

中村――要するに『生長の家』の中心思想は『人間は神の子である。』と云ふことと、『物質は念の影であるから、魔事と見え、惡と見えるものも、念の影であつて實在でないから、消えるより仕方がないものである』と云ふことだと思ひますが、此の『物質が念の影であつて實在ではな

い』と云ふことが解らないと云ふ人が多いのです。上海支部の人達も、本部へ往つたらそのことをよく聽いて來て呉れと云はれましたが、その點を誰にも解り易いやうに說明しては頂けませんか。

谷口――『物質無』の一大眞理は、これが解つたら殆ど悟りの半分を開いたと云つても好い程のものですが、中々これは說明がし難いのです。第一、この物質世界は『本來無』であつて、單なる念の影に過ぎないと云ふことは、未來の豫知現象によつても知ることが出來ます。久村さんは親類の方の死を三日も以前にそれを夢に見た。そして其の通りに部屋の物品の竝び方や、電燈の位置までも、現實界に出現した。斯うすると、現實界卽ち物質界に、さう云ふやうに物質が列ぶまでに、物質でない形で、思想とか、潛勢力とか――何とかの狀態で、旣にその狀態は存在の世界にあるのでなくては、物質的形體にそれが出現する以前にそれを見ることが出來る筈はない。これによつて考へても、物質と云ふものは、それに先立つて存在した精神的存在の影だと云ふことが出來ませう。此處に斯う云ふ火鉢がある（火鉢を手で指して）これは誰の念の影だと云へば、人が火を入れて溫まる道具を造りたいと云ふ念が形をあらはして火鉢となつた。その火鉢が此處に今日姿をあらはしてゐるのは此處に今日お集りになる方に溫まつて貰ひ

たいと思ふ吾々の念の現れである。この集りが終つたらもう此の席で皆樣に遑まつて貰ひたいと云ふ念が消えるから、此の火鉢は此席から姿を消す。この火鉢と云ふものは吾々の念に從つて姿を顯はしたり姿を消したりすることが解るでせう。此の火鉢が此の席から姿を消しても、まだ何處かに藏つてあつて全然現象界から消えて了はないとお思ひになるかも知れませんが、それは吾々が火鉢を藏つて置いて又今度の役に立てたいと思つてゐるからなので、この火鉢がどこかに藏はれると云ふことも亦、吾々の念の投影としてさうなるのです。全人類が火鉢の必要を感ぜず、火鉢の形を全然『念の世界』から消し去ることが出來たらどうなるかと云ふと、念の惰力によつて若干時間火鉢の形は存續して、念の惰力の消滅と共に火鉢の形は崩壞して現象界から姿を消して了ふのであります。それは私の幼時に身體に出來た疣と同じことであつて念の持續期間だけ姿をあらはしてゐて、あとは姿が全然現象界から消えて了ふのであります。火鉢が崩壞したのち火鉢を構成してゐた物質はどうなるかと云ふと、一定物質としての念の惰力の持續期間だけ陶器の破片とか何とかの形で存續し、その念の存續期間が過ぎて、念が更に一層な簡單念になると、その念としての顯はれたる物質も一層簡單となり、電子から更に假想物質たるエーテルと云ふ『何もない物』に還元する。そのエーテルと云ふ『何も無い物』も全

然何もないと云ふ譯ではなく、念起れば念の影としてエーテル中に渦卷や旋風や環流が起つてまた電子とか分子とか物質とかゞ構成せられる。念起れば念に相應したものが現れ、念が消えたら何もなくなる――科學者には何もないところから何かゞ出來るとは考へ難いので、假りに何もないやうに見えるエーテルと云ふ假想的マテリアルをあると考へてゐるのですが、本當を云へば、念がなければ物質の最後の單位たるエーテルも何もない。念が起れば念相應の現れが現象界に出來るのです。斯う云ふやうに、物質は無いので、念がなければエーテルさへも無いのです。エーテルさへも否定して了はないと、根本的に物質を否定したことにはならないのです。

ところで、此處に斯うあらはれてゐる火鉢と云ふものを觀てゐますと、これが中々『念』の反影であつて本來存在しない影のやうな蜃氣樓のやうな存在だとは思はれないでせう。それは吾吾の念が、『物質は有る』『陶器は有る』『粘土はある』として觀るからあるのですが、吾々と異る念を有つてゐる人には『無い』と感じられたり、影のやうな透過自在な存在だと感じられるのです。先刻話の出ました青島の靈媒、藤倉夫人は物質を透過することが出來る靈媒であつて針金で固く縛つて置いても、その針金をほどかないでそのまゝその肉體を針金から脫け出すこ

とが出來る。ほかにも高知の靈媒北村延榮氏や、東京の龜井三郎氏のやうな、密閉室內へ物を持ち込んだり、繩で完全に縛られた儘一番下の襦袢だけを脱いだり裏返しに着たりすることが出來る靈媒があります。何故こんな物質の不可入性を打破つたやうな實驗が出來るかと申しますと、物質はこれを固いと思ふ念を有つてゐる人には固いし、物質は存在しない、影見たいなものだと思つてゐる人にはさう云ふやうにしか感じられないのです。これらの靈媒にはいづれも靈界の靈魂がついてゐて人間を操縦してゐる。それらの靈魂は現實界とは異ふ念を有つてゐるから、吾々が固いと思ふものでも、スーッと透過して了ふ。その念で物質を取扱ふから、物質の不可入性が打破られて了ふのです。昔から幽靈が密閉して置いた部屋の中へでも這入つて來るのは周知の事實ですが、それが出來るのは靈魂は吾々とは念の異ふ世界に棲んでゐるからです。この火鉢が固いと云ふのは何の根據もない、靈魂ならスーッと火鉢を透過出來る。理論上から考へても、火鉢を構造してゐる分子と分子は、その大いさの比較から云へば天體と天體ほどの距離があいてゐて、その空間に分子の少粒子が浮いてゐるのだから固いと云ふ筈がない。たゞ固いと感ずる念の作用で固く感じて何もない空間を突き貫くことが出來ないのです。また分子と分子との間を埋めてゐるエーテルと云ふ材質を假想してもエーテルとは何らの抵抗もな

い存在であるから、斯うして吾々は空間に手を振つて見ても少しも抵抗を感じない。さうすれば、分子と分子との間にあるエーテルでも何らの抵抗なしに自由に吾々の壓迫の前に陷沒しなければならないけれども、中々斯うして押して見ると手ごたへがする。本來抵抗の無いところのエーテルに抵抗を感じて吾々はそれを突き貫くことが出來ない。ところが誰でも突き貫くことが出來ないかと云ふと、同じ肉體でも、ある念を作用すると、藤倉夫人のやうに、龜井靈媒のやうに、北村靈媒のやうに突き貫くことが出來る。すると、物質が固い存在だと云ふことは凡ゆる場合には通用しない。固いと云ふ念を有つてゐる人には固いし、さうでない人にはさうではない、要するに心の影だと云ふことになります。『物質は無』だと云ふことは理論上ではまアこれ位にしか説明が出來ませんが、大抵これ位で納得出來ると思ひます。

中村――大變よく判りました。難有うございます。

南――靈媒に靈魂がかゝると云ふのは、死んだ者の靈魂ばかりですか、生きてゐる者の靈魂もありますか。

谷口――生きてゐる者の靈魂もあります。所謂る生靈ですねえ。

南――靈魂が憑くと云ふのは、念波を送つて念送で操縱してゐる意味ですか。それとも靈魂その

ものがやつて來てしがみついてゐるのですか。

谷口――念波による遠隔操縦の場合もあれば、靈魂が來て直接操縦する場合もあります。船舶の無線操縦もあれば、船員が船に乘り込んで直接に操縦する場合もあるやうなものです。

南――生きてゐる者の靈魂がよそへ行つて憑けば、本人の方は靈魂が脱けてフラ〳〵になりませんか。

亀井――實際フラ〳〵になるやうですねえ。私の郷里にこんな話があります。鐵道線路の附近に大きな狸がフラ〳〵してゐて活潑に動けないので生けどつたのですが、一方にその狸に憑かれた人があつて、その人が、わしは何處そこの鐵道線路の附近にゐる狸だが理由あつて此の人間に憑いたのだと云ひました。その人の云ふことと、一方實際さう云ふ狸のゐたこととが符合するので、その事實が交叉證明された譯です。

谷口――人間でも人とか物とかに執着があつて心を惱ますと、靈魂がその相手の方へばかり脱けて往つてフラ〳〵になつてゐるのがありますぜ。神經衰弱と云ふのは大半そんなものでせう。

南――動物靈が人間に憑くのはどう云ふ理由によるのですか。

亀井――小便をかけたとか、自分の繩張りの地面に人間が無斷で侵入したとか云ふやうな……

谷口――動物の靈魂は單純なものですから、そんなに重大な理由と云つてはなくとも、單なる好奇心で憑くのがあります。大政醫師の患者でなかなか重態で治らない幼兒がありました。大政醫師自身が靈媒となり、今井楳軒翁が審神者としてその憑き物を調べてみましたら、狸の靈魂がついてゐると云ふのです。何故憑いてゐるのかと云ふと、此の狸は嘗て葬式の行列を見たことがあるので、人が死ぬと人間が多勢行列して面白いから、この子供を殺さうと思つてゐるなどと答へました。實につまらない動機ですねえ。併し狸自身には、これで大眞面目な意りなのです。

南――人間がさう云ふ動物につかれないやうにするには、どう云ふやうにしたら好いのですか。

谷口――心をポカンと放心的に虛にしないことが第一です。それから、動物のやうな低劣な精神を起さないことが第二です。心が虛になり放心的になると他の靈魂が乘り移つて來ますし、心を虛にしないでも自分が動物同樣の下らない念波を起すと、その瞬間に惡靈の念波と波長が合ふために感應して來るのです。ところで精神統一と云ふと、何も思はないで心がウツトリとして來るのが好いのだと思ふ人がありますが、心は何も思はないでウツトリとしてゐるのは靈媒狀態即ち他の靈魂に乘り移られる時の精神統一狀態であつて、神想觀の場合の精神統一狀態

ではないのです。

南――心がうつとりすると云ふのは恍惚狀態のことですか。

谷口――さう〳〵、靈媒のトランス狀態のことです、元來、精神統一法に二種あつて、心を虛にする精神統一と、心を實にする精神統一とがあるのです。靈媒を養成する場合の精神統一法は心を虛にする精神統一法であつて、わが靈魂が一時遊離して肉體を操縱する權利を拋棄して、わづかに靈線によつて肉體に繫留されてゐると云ふだけになつてゐるのですから、他の靈魂がその肉體に入り來つてそれを操縱するのです。神想觀の精神統一法はさう云ふ精神統一法ではなく、心を充實の極にする。何と云つたら好いか、さうですねえ。心を肉體から脫出せしめると云ふのではなく、わが中に神の靈流れ入り充ちると觀じ、その充ち滿ちた極、その靈の壓倒的存在で肉體が靈化されて了つて、肉體を感じなくなるのであつて、肉體から靈魂が脫出して肉體を感じなくなるのではないのです。さうなると自分と云ふ存在が宇宙を貫く宇宙の中心軸のやうな感じがし、同時に宇宙全體に遍滿する自分を感ずることが出來ます。自分が宇宙に遍滿し同時に宇宙の中心であるのが人間の實相なのです。

南――眞宗に『歎異鈔』でしたか、『善人なほもて救はる況んや惡人をや』と云ふ句があります。

善人でさへ救はれるのだから、惡人なら尚更救はれると云ふのですが、これは何かの間違ぢやありませんか。『惡人ですら救はれるのだから、善人なら尚更救はれる』と云ふ間違ぢやありませんか。

谷口――眞宗は惡人正機の敎へでありまして、その言葉は間違ぢやありません。惡人だから救はれると云ふのではなく、惡人の方が救はれるに相應はしい心になり易いと云ふのです。所謂善人と云ふ自覺のある善人は、自力の善に誇つてゐる、これだけ善行をしたから、その善行の價値によつて自分は救はれるとか、救はれる資格があらうとか、自力の善行に誇りを持つてゐる。ところが、吾々が救はれる――換言すれば『佛』とか『神』とか云ふ無限に善なる者に一致する境地に達するには、一歩一歩一善二善三善と善行を積立てゝ往つた位のことでは到底その『無限の善』即ち『佛』又は『神』のところへ達することは出來ない。『無限の善』は無限歩の彼方にあつて、一善二善を誇つてゐる者は、いつまで經つてもその無限の彼方に近着いて行く事が出來ない。バベルの塔は幾ら積上げても天までとゞかないからです。ところが惡人は自分の善行に誇りが持てない。だから自分の力で『無限の善』まで歩いて行かうなどとしないで、如來の願船の中に身を托して、たゞもう委せ切つて自分が救はれるのは無限の佛力又は神力に

よるのだとする。かうして完全に無限の他力の上に自分を乘せ切り易いのは却つて自分の方に自負を感じてゐないところの、自分位惡いものは無いと思つてゐる者の方が、本當に委せ切りになり易いからです。基督も弟子に對つて譬を以て敎へてゐます。二人の人間が宮の前に往つたが、其の一人は『私は今日は斯う云ふ善いことをしました。昨日はまた斯う云ふ善いことを爲しました。神よ、この善を嘉して我れを救ひ給へ』と祈つた。もう一人は『私は何の善事も爲し得ない惡人です』と云つて髮の毛を引掻つて懺悔して神の救ひを乞うてゐるのです。この二人のうちどちらが早く天國に行くかと問へば、何の善事も爲し得ない惡人の方であるとキリストも云つてゐるのです。これは親鸞聖人の云はれた『善人なほもて救はる、況んや惡人をや』とよく似てゐるのであります。救ひは一つ一つの現象の『善行』によるのではなく、『實相』の善によるのだからです。『實相』の善は形の上での一つ一つの善を無限に積み重ねて往つても得られるものではなく、南泉和尚が猫を斬つて捨てたやうに一切の形を斬り捨てゝ了つた時に得られるのです。現象の善は、現象は本來『實在』ではないのですから幾ら積み重ねても實在の力とはならない。傳敎大師の『末法燈明記』には『この疊のあるによりてこそ、やぶれたるかやぶれざるかと云ふ事はあれ。本來無からん疊をば何とか論ずべき、持戒もなく破戒もなし』

と云つてある。善行を積んでは惡いと云ふのではない、本當の善行は一切の現象の善行、一つ一つの形の上での善行に捉はれなくなつたときに顯はれて出ると云ふのです。それは健康法でも同じことですねえ。一切の健康法を捨てゝ了つたときに、本當に健康法にかなつた生活が出來るのです。『生長の家』には坐禪のやうな神想觀の修行があるから自力門だと思ふ人があるかも知れませぬが、『生長の家』では救ひは一つ一つの善行によるのではなく『實相』による、自力によらず、他力によらず、絶對力によるのです。その『實相』の絶對力はそのまゝ何人にも備はつてゐるのであつて、その『實相』だけが其人自身であるから、本來その人は救はれてゐる。十萬億土の彼方にゐる阿彌陀佛を呼ばなければ救はれないのではない。どうしないでも『實相』卽ち本來相で救はれてゐる。『實相々々』と呼んでゐれば好いのです。吾が實相が阿彌陀佛そのものである。『生長の家』では阿彌陀佛が十萬億土の彼方になくして、自分の『生命の實相』の中にましますのです。至心に實相を招ぶ人は、そのまゝ其の人の本來相があらはれて阿彌陀佛だと云ふ譯です。親鸞聖人もその境地にゐられたと見えまして、その『淨土和讃』の中には『信心よろこぶそのひとを如來とひとしと說き給ふ。大信心は佛性なり。佛性卽ち如來なり』と書いてをられるので『實相々々』と常に招んでをれば、吾が中に如來いまし、佛性

いまし、過去の一切の諸佛もいまし、天照大御神も、キリストもいます譯なのです。我が『實相』の中に一切の諸神諸佛がいます譯なので、何らの附け足しにもよらず、其儘で吾々は救はれてゐるのであります。

有元――私は東京にゐましたとき、日蓮宗の行者、大日本救世團の團長本田仙太郎氏に度々遇ひましたが、中々痛快な快男子です。此頃『國防々々』と云つてゐるが、今頃國防のヘツタクレと云つて何であるか、吾が日本國の國防はそんな生まやさしい國防によつて守られてゐるのではない、吾々が日蓮上人以來唱へて來た『南無妙法蓮華經』と云ふお題目が空中に無數に漂うてゐて、日本國を守護してゐるから、どんなに外國の飛行機が飛んで來ても此の日本國は大丈夫などと云つてゐますが、あの『南無妙法蓮華經』の御題目はどうしてさう云ふ功徳があるのでせうか。あれは經文の名前ぢやありませんか。

谷口――『南無』と云ふのは『歸命する』と云ふことでせう。『法』と云ふのはダルマ即ち『實相』である。『實相』の内容は現象界の言葉で形容することが出來ない。たゞ『妙々』と讃嘆するほかはないから『妙法』と續けたのでせう。『蓮華』と云ふのは泥中にあつても穢れない。『維摩經』の中には『火中生蓮華』とあつて火の中にあつても燒けないのが蓮華とされてゐる。つま

り『蓮華』と云ふのは『至美至妙金剛不壞』と云ふやうな形容詞である。『經』は『經文』即ち言葉である。『至美至妙の實相を讃へた金剛不壞の言葉』と云ふ意味が、『妙法蓮華經』と云ふ意味である。だから『南無妙法蓮華經』の七字を解りやすく云へば、『至美至妙なる生命の實相の言葉に歸命す』と云ふ意味である。日蓮宗が『南無妙法蓮華經』を禮拜の本尊にしてゐるのも『生長の家』が『生命の實相』を禮拜の本尊にしてゐるのも、眞宗が『南無阿彌陀佛』を禮拜の本尊にしてゐるのも、『生長の家』に於てはすべて同じことになるのであります。キリスト教でも『アブラハムの生れぬ前から我はある』と云つたキリスト、『われは生命である、道である眞理である』と云つた永遠實相のキリスト、即ち肉體キリストではなく、眞理そのものを本尊とする段になれば『生長の家』に一つに歸入して了ふのであります。

生命の實相（第五卷完）

昭和十二年六月廿五日印刷納本
昭和十二年七月一日發行

生命の實相（全集豫約）
第五巻（定價二圓 送料・內地十錢）
(停)豫約特價 一圓五十錢

著作者 東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地 谷口雅春
發行者 東京市豐島區千川町三ノ四三三六 服部仁郎
印刷人 東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地 小川新七
印刷所 生長の家印刷所
製本所 東京市神田區三崎町二ノ廿二ノ三 成島製本所

版權登錄

發行所 東京市赤坂區檜町五番地 光明思想普及會
電話赤坂(48)三八二一・二八二三・三八二三
振替東京五五五一九番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03171 4405